△主論文「正中坐骨神經、腰髓及ソレ等ニ含マレタル最大神經纖維ノ横斷面積ノ生後成長ニ關スル兩性ノ比較研究」にして、參考論文なし。其他内外にて發表せる論著夥多。

△博士の出身地は長野縣南佐久郡川上村にして、明治二十一年井出喜重の三男に生る、竹内茂代博士の實弟にして竹内甲平博士の義弟たり、大正九年ひろ博士と結婚す。一家より二組の夫婦博士を出だせるは我國最初の事にして、立志傳的篤學者揃ひの餘慶ある家柄として表彰に値す。博士は學究的溫厚の紳士にして、學者タイプの風貌は凛々として威嚴を存し、溫容の裡に謹厚そのものゝ性格を包み、高邁なる品格を備ふ。年齒今や不惑に入る七、年壯氣鋭にして研究心に燃え、學識、手腕、人格共に益々圓熟の佳境に入り最も活躍の全盛時に在り。而かも猶春秋豐かにして拮据黽勉、精研に餘念なき前途は洋々として更に博士の將來を語るに餘裕綽々たり。切に自重加餐を祈ると共に益々奮盡活躍あつて、日米親善上、日米醫學の提携發展に一層の努力あらんことを望む。　No. 519 Main St, Seattle, Wash., U. S. A. に住む。

◇

中野秀孝

△福井縣坂井郡高椋村一本田福町に病室十八其他諸般の設備全く整ひ、外科、産婦人科を以て著聞する中野醫院あり、院長中野秀孝博士の經營也。博士は京都府立醫專出身の外科學者にして、母校の恩師藤井猪十郎教授に藥物學を、望月成人教授に外科學の指導を受け、京都府立醫大より學位を得たる少壯醫博也。既にして開業以來多年の聲望を扶植し、圓熟せる手腕は鋭利なるメスの好評と相俟つて遠近に喧傳し、歳と共に益々繁榮を持續しつゝあるは、地方治療界の爲め欣幸とす。

△博士は福井縣立福井中學校を經て、大正六年京都府立醫專を卒へ、直ちに福井縣立病院外科勤務、八年四月辭職、以降本籍地にて開業、昭和三年六月京都府立醫大選科入學、四年七月研究科入學、藥物學及び外科學を專攻、七年二月學位を受領す。

△主論文は『牛精蟲ノ「メチーレンブラウ」ニ及ボス作用』にして、(1)牛精蟲ノ「デヒドロゲナーゼ」ニ就テ、(2)「イヲン」ノ影響、(3)諸種藥物ノ影響の三篇より成る。參考論文は、(1)「テトラヒドロ、ベータ、ナフチールアミン」ノ循環系統ニ及ボス作用及ビ其ノ血壓下降作用ノ本態ニ就テ、(2)二三痙攣毒素ニ對スル肝臓ノ解毒現象ニ就テ、(3)「アセトントログルコーゼ」ノ藥理作用の三篇なり。

△博士曰く「今回再び鄕里に歸つて開業し痛感したことは、以前とは著しく開業醫の數が增加したる爲めつまらぬ競爭をやつてゐることである。例へば醫師會の規約を無視して往診料を取らずに押賣的に盛んに往診をしてゐる、それも眞に患者の負擔を輕くする意味ならば容赦すべきであるが、一方に於て不必要なる注射を盛んにやつたり、五十錢にてすむ注射を一圓も二圓もとつたり、又手術料を非常に高くとつたりして却つて患者の負擔を重くしてゐる。弱き者は患者である、何も知らずに有難く思つてゐる、實に氣の毒な次第である。醫師はよろしく親切と熱心とを以て治療に當り出來得る限り患者の負擔を輕くすべきであると思ふ」云々と、感想の一片を吐露せり。

△博士は福井縣坂井郡高椋村の人にして、明治二十七年生る、當年四十有二歳也。年壯氣鋭、平生刀圭甚だ多忙なるに拘らず、精力主義をモットーとして、熱心甚だ力め、誠實と親切とを以て終始す、其の態度の賢明にして眞摯なるは、學究的臨床家たる人格の尊重を高調するの今日甚だ多とす。

◇

吉葉庄作

△日本醫科大學助教授兼日本醫大第二醫院外科部長として、母校の爲めに新勢の氣焰を揚げつゝあるは醫博吉葉庄作なり。日本醫大系に屬し醫專時代の出身にして、學位は東京帝大より獲得せる少壯醫博なるが、東京帝大の重鎭鹽田廣重博士門弟中の新智識と知られ、且つ母校出身者中最初の外科主任として其の手腕を認めら

る。學位主論文は「急性十二指腸閉塞時並ニ急性廣汎性穿孔性腹膜炎時ニ於ケル腎臓機能ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文なし。

△博士は大正十一年日本醫專を卒へ、直ちに東京帝大醫學部外科教室に入り、鹽田教授指導の下に實地外科學の研究中、昭和四年十月日本醫大講師を命ぜられ、翌五年一月日本醫大第二醫院外科部長を命ぜられ、次で日本醫大助教授となり今日に至る、七年三月學位を受領す。

△茨城縣猿島郡八俣村東山田の人にして、明治三十三年吉葉安藏の四男に生る、當年三十有六歳也。少壯氣鋭、學究的篤學の士にして、志操堅實、今猶孜々として研究に餘念なし、猶その洋々たる前途は更に大に期待せらる。魚釣を趣味とし、時に太公望を極め込むことありと。醫師會等に對する感想としては、勤務病院の性質上、直接醫師會等と接觸する機會少きため格別有せざるが如し。性格より打診すれば速刻決斷の勇に乏しく、從つて熟考の後に非ざれば速答等を欲せざる性質なり。又人と接するに國訛りを頻發して往々言語の明瞭を缺ぐの癖あるが如し、而かも何等人格に及ぼす關係毫もなし、博士たるもの聊かも之を氣にするほどのことなからん。前途有爲の士、幸に健康と共に自重を祈り、輝しき將來の向上發展に向つて邁進あらん事を望む。本郷區西須賀町一〇に住す。

◇

遠藤正人　△廣島縣比婆郡東城町に細川病院あり、遠藤正人博士の兄細川省三經營の私立病院にして、各科の完備と共に内容充實し、評判極めて高く、近郷よりの外來患者常に輻輳す。遠藤博士は外科方面を擔任し、外科部長として人望を集め、獨特の手腕を發揮しつゝあるは、地方治療界の爲め幸福とす。

△博士は鳥取縣日野郡江尾村遠藤正陽の長男にして、明治三十四年生る。鳥取縣立米子中學校を經て、昭和三年東京慈惠會醫科大學卒業後、岡山醫大副手として衞生學教室に勤め、血清學の研究に從事し、同五年津田外科教室に轉勤し、同七年三月岡山醫大にて學位を得、同年四月より現職に就任す。指導教授は岡山醫大外科主任津田誠次教授にして外科一般を專攻す、又血清學に多大の興味を以て造詣する所深し。

△主論文「微量抗原反覆注射ニ依ル沈降素產生」二篇、參考論文、(1)局所過敏症ニ就テ、(2)臓器免疫血清ノ特異性及ビ其ノ作用ニ就テ、(3)大腸菌「アンチヴイルヌ」研究補遺、(4)所謂「ボトリオミコーゼ」ニ就テ。

△博士曰く「信念のある醫者でありたいことだ。信念の無い醫療は世を毒する。保守的主張でもよい、新進的主義でもよい、要は眞の自己の信念によつて働くことだ。御互に徒な鬪爭を止める事だ、吾々は人類幸福に關する事の大なるを知らねばならぬ信念に生きよだ」云々とは、現代醫療界に對する博士の懷抱する感想の一片なり。以て他山の戒とすべき乎。

△讀書家にして文雅の嗜しみ深く、殊に短歌を能くす、香蘭同人は其の號なり。年齒未だ少壯にして研究心に富み、忙中閑を得れば努力研鑽克く究はむる所あり。人と爲り謹厚篤實、信念に强き人にして、自己の信念によつて親切能く患者に臨み、又能く人に接して好感を抱かしむ。岡山醫大教授遠藤中節及び伏見病院長安藤克巳の兩博士は從兄の間柄なり。

◇

富士原誠一　△京都府福知山町字東長一二に在る富士原醫院は、外科專門にて、院長は富士原誠一博士也。博士は大正十四年大阪醫大出身の外科學者にして、恩師岩永仁雄博士に就きて病理學を研鑽し、昭和七年三月母校より學位を獲得せる少壯醫博也。新進にして獨特の新手腕を有し、昭和七年十月より獨立開業せり、日尙淺きも勵精其の業務に勵み、日增盛況を呈しつゝある前途は頗る囑目に値す。

△學位主論文は「副睾丸結核ノ發生ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)坐骨神經痛ノ注射療法、外六篇あ

り。出身地は京都府福地山町にして、明治三十三年生る、年齒漸く三十有六歳也。猶春秋頗る豐富にして、拮据黽勉精研に餘念なきが如し、折角の自重奮勵を祈る。

◇

山川忠雄　△桐生市永樂町一ノ一二八五に於て、外科專門を以て開業せる山川忠雄博士は、豫備陸軍三等軍醫正の印綬を帶び、學系は東京帝大の出身にて、學位は九州帝大より獲得せる名醫博たる一人物也。專門は外科學にして東大教授臨田廣重博士、秋山軍醫總監、九州帝大教授後藤七郎博士等に師事せり。

△主論文は「皮下並ニ腹腔内ニ流出シタル血液ノ性狀特ニ外科的意義ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)陰囊内容タル腸管ノ外傷性損傷ノ一例、(2)顏面ノ上皮癌ヲ併發シタル色素性乾皮症ノ一例、(3)若年者胃癌二五例ノ統計的觀察の三篇なり。

△博士は大正三年東京帝大醫科大學を卒へ、四年任陸軍二等軍醫、五年より七年に亘り二年間、東京帝大附屬醫院分院に於て外科專攻、七年任一等軍醫、十三年任三等軍醫正、昭和二年依願豫備役被仰付、三年より七年迄四年間九州帝大醫學部にて研究、七年學位を得、八年五月桐生市に於て開業。

△博士の感想に就て聞けば、謙遜なる博士は「淺才微力何等爲すなきを耻づるのみ」云々と。博士の出身地は東京市神田區橋本町にして、明治二十年生る、當年四十有九歳也。賦性敦厚、謙和にして、溫良親切なり。

◇

福島正　△東京市技師にして、廣尾健康相談所長として内外の信望を博し、斯道の爲め盡瘁努力しつゝあるは福島正博士也。博士は東大出身の整形外科學者にして、斯科界現代の權威たる恩師高木憲次教授に就きて斯學の蘊奥を究め、母校より學位を獲得せる少壯醫博也。未だ少壯にして精研に餘念なき前途は、新進有爲の學究として更に大に期待せらる。

△博士は前橋中學校、水戸高校を經て、昭和二年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部整形外科教室副手、同三年九月同教室助手拜命、同四年十月依願免官と同時に東京市衞生試驗所レントゲン主任拜命、同七年四月學位受領、同年五月任東京市技師、廣尾健康相談所長拜命、現在に及ぶ。

△主論文は「麻痺性下腿捻轉症」にして、參考論文は、(1)バロー氏麻痺、(2)「クリュツペル」「ツエールング」（群馬縣下小學校）（相川博士共著）、(3)小兒麻痺患者ニ見タル下腿捻轉ニ就テ、(4)小學兒童下腿捻轉度ニ就テの三篇なり。

△前橋市南曲輪町福島元一郎の長男にして、明治三十五年生る。學究的少壯の紳士、熱心なる研究家として知られ、事に當るや眞劍にして、至誠一貫、克く機敏に處理するの人たるは人皆稱する處也。今や其の蘊蓄を傾倒して東京市の健康、保健、衞生上の指導啓發に務めつゝあるは、適所に適材を得たりと言ふべき也。年齒漸く三十有四歳にして猶頗る春秋に富む前途は洋々たり。澁谷區伊達町一八に住む。

◇

仙波嘉清　△松山市二番町に著名なる仙波外科病院あり、外科の大家仙波嘉清博士の經營にして、當地診療界に於ける一流に在り。氏は愛媛縣溫泉郡小野村の人、明治二十一年生にして、大正三年長崎醫專を卒へ、同年十一月より五年十月迄九州帝大醫科大學第一外科教室在勤、同年十一月小倉市に於て開業、十三年醫業休止、九大三宅外科教室並に解剖學教室に入り、三宅（速）教授、進藤教授、田原教授の指導を受く、昭和二年四月九州帝大にて學位受領、引續き三宅外科教室にて研究を爲し、其後現住地にて開業今日に至る。讀書家にして、劇、圍碁を趣味す。

△學位主論文『淋巴管系統ニ關スル研究、第一篇直腸淋巴管系統ニ關スル解剖學的研究、附直腸癌ノ轉移ニ就テ、第二篇、肝臟淋巴管系統ニ關スル解剖學的研究』參考論文、(1)外科的療法ヲ施セシ蟲樣突起炎四百三十例ノ成績ニ就テ

(2)膽囊ノ淋巴管ニ就テ。

◇

田平榮造　△九州醫學專門學校整形外科學教授にして、兼ねて九州帝大醫學部講師たる田平榮造博士は、九州帝大系整形外科界の泰斗神中正一教授の愛弟子にして、恩師の親しき指導の許にて研究の結果、母校より學位を得たる少壯醫博也。專門は整形外科學にして該博なる智識を有し、教壇に立つや熱誠克く學生の提撕に努む。外に日本整形外科學會評議員として斯道の爲め盡瘁する所あり。年齒未だ少壯にして、研學に餘念なき瀑刺たる前途は更に大に期待せらる。

△博士は鹿兒島二中、七高を經て、昭和二年九州帝大醫學部卒業、引續き整形外科教室に勤務、神中教授指導の許にて研究、昭和七年五月學位受領、豫備役陸軍三等軍醫の印綬を帶び、現在頭書の要職に在り。

△主論文は「ローゼル氏骨改質層ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)上膊骨野球骨折ノ四例並ニ其成立機轉ニ就テ、(2)腸「チフス」ノ經過中ニ於ケル特發性股關節脫臼ニ就テ、(3)畸形性股關節炎ノ改造手術遠隔成績、(4)關節「オステオヒョンドロマトージス」ニ就テ、(5)足關節制動手術ニ就テ等なり。

△博士の感想に曰く「世人が我整形外科を非常に狹義に解してゐるが甚だ廣い範圍に伸ぶべき學問である事を知らしむべく努力したいものです」云々。博士は鹿兒島市外中郡宇村宇宿田平畝助二男にして、明治三十四年生る、當年三十有五歳也。少壯氣鋭にして熱心なる研究家を以て知らる、志操堅實にして高潔、識見あり思慮に富む、平生人と接するに快活にして人を愛し、又た能く學生を愛撫す、其の態度の眞摯にして溫情の掬すべきものあるは、博士に對する人格の尊重を高調するの今日甚だ多とす。運動好にして殊に野球、テニス、ピンポンを趣味し、又た寫眞を好む。博士や春秋猶頗る豐富にして、輝しき前途は益々有爲多望也。幸に健康と共に將來の大成を翹望して止まず。久留米市南薫町一五五九に住す。

◇

野副道彦　△陸軍一等軍醫正にして、先年來支那天津に於て活躍せる野副道彦博士は、東大系大正三年組の一人物にして、秋山陸軍々醫總監、岩崎陸軍々醫總監、後藤七郎教授指導の下に研究の結果、主論文「神經病性關節症ノ成因ニ關スル實驗的研究」及び參考論文「デーキン氏液研究」その他五篇を完成して、九州帝大より學位を獲得せる外科界の名醫博也。

△博士は一高を經て、大正三年東京帝大醫科大學を卒業す、翌四年任陸軍二等軍醫、同七年任一等軍醫、同十二年任陸軍三等軍醫正、昭和四年陸軍二等軍醫正に累進し、同七年五月學位を得、同八年三月陸軍一等軍醫正に任ぜらる。正六位勳三等なり。

△感想に曰く「醫師の使命が現代に於ては專ら疾病を對照としてのみ進行しつゝあるのは醫學其ものゝ對人類價値を損するものと思考す、須く將來の醫師は肉體的生命の良醫師たると共に半面に於て心靈的醫術卽ち宗教的觀念の修養に勉め其の昔釋尊やキリストが不幸の病者を見舞つて、肉體的に又心靈的に並び施術して絶對的の信頼を受け醫術の完璧を期し得たる底の人格者たるべきものとの理想を有す」云々と氣を吐けり。博士の言や眞なり、希くば博士の理想とせるところ普く醫療界に實施せられんことを祈る。

△博士は佐賀市松原町の人、野副本太郎の長男にして、明治二十一年生る、年齒漸く四十有八歳の年壯、圓熟の期に入りて益々博士のメス冴ゆ。恬淡にして潔白、接する者をして好感を抱かしむ、又、應答の禮儀厚く、尊敬せらる德多分なり。猶春秋豐富なれば、斯道に益々精進して明日の外科を把握せられんことを望んで止まず。福岡市大圓寺町二十二に住す。

◇

佐々木　猛次　△多士濟々たる浪速醫博界を一瞥して玆に品隲せんとする佐々木猛次博士は、大阪市西成區橘通三丁目阪南病院に、外科部長として日々診療に精勵し、今や獨特の新手腕を發揮して益々好評を博し、多大の信望と尊敬とを其の一身に集めつゝあるは心强し。博士は金澤醫大系の錚々たる外科專門醫にして、京都帝大より學位を得たる新進の名博士として其の手腕を認められ、近年大阪診療界に精進躍如たるの概あり。たま／＼著者に感想の一片を寄せて曰く『貴家の如き燃ゆる熱意を以て如斯「ツースタンド」に迄自己養成に精進可仕候』云々。健實なる臨床醫家として立つ博士の心境も亦察せらる。

△博士は大正十四年金澤醫大專門部を卒へ、昭和四年二月より七年五月迄、京都帝大醫學部整形外科教室にて、斯科の泰斗伊藤弘博士に師事し、同七年五月學位を受領せり。

△學位主論文は「血清沃度酸反應物質及血糖ニ對スル肝臓ノ意義」と題し四篇より成り、外に參考論文八篇あり。

△博士の出身地は島根縣穩地郡都萬村にして、明治三十五年生る、同地方醫界の長老佐々木友太郎の二男也。年齒未だ三十有四歳、少壯の意氣に燃え、學究的臨床家として今は手腕漸く壯熟の域に入り、診療に臨むや甚だ熱心にして、其の眞摯なる態度は、將來ある博士をして大ならしむる所以、前途益々有爲多望也。幸に健康と共に治療界淨化の爲一層の發奮活躍あらん事を祈るや切也。住居は大阪市住吉區住吉町二七二、即、帝塚山の丘陵地、灣頭の風光を一望し得るの地なり。

◇

黑田　倭民　△大阪市今福町三〇七に新興の黑田醫院あり、外科及び產婦人科專門を以て著聞す、院長黑田倭民博士の經營にして、新裝せる諸般の設備整ひ內容充實す。博士は大阪醫大の出身にて、學位は京都帝大より獲得せる名醫博として其の存在を認められ、久しく三菱系筑豐鑛業所に於て醫務主任として活躍し、醫務、診療の兩方面を擔當主管し、筑豐炭田の診療界の爲め努力貢獻する所ありしが、退職後再び學究生活に入り、大阪帝大產婦人科教室にて研究の後、今や診療界に躍進して獨自の地盤を開拓するに餘念なく、開業日猶淺きも、手腕、聲望相俟つて益々人氣を集め、近時著るしく發展隆盛の好況を呈しつゝあり。

△博士は大正十三年大阪醫大卒業、直ちに岩永外科教室に入り大正十五年一月助手となり、昭和三年四月秋田縣公立北浦病院長に就任し、昭和四年十月三菱鑛業株式會社に入り筑豐鑛業所飯田炭坑醫師となり、同五年八月同炭坑醫務主任となり、同七年六月學位を受領し、翌八年三月筑豐鑛業所醫務主任となり、四ケ病院を統括し醫務職員八十人あり、炭坑に赴任するや診療のみを職務とする炭坑醫師の從來の陋習を破り、產業醫學に沒頭し衞生設備の改善、衞生志想の鼓吹に努力し、炭坑醫師の面目、炭坑醫局の面目を一新するに至れり、翌九年二月三菱鑛業株式會社筑豐鑛業所を辭し、大阪帝大醫學部產婦人科教室に勤務す、次で前記現住所に於て開業一般診療に從事しつゝあり。

△學位主論文は「非特異性抗原ノ研究」にして、外に參考論文九篇あり。氏が學究の跡を顧みて、たま／＼感想の一片を寄せて曰く「研究は大阪大學でやり引續き秋田の病院で研究し更に飯田炭坑醫局に於て多忙中の寸暇を研究にさき而も社交方面の事柄に欠席することなく人一倍の努力をつづけて完成したる研究で、之れは自活の傍の研究實に苦しかつた」云々、斯くありてこそ光る學位は尊し。

△出身地は廣島縣比婆郡山內北村にして、明治三十年生る、當年三十有九歳也。年壯銳氣、學究的臨床家として熱意あるところに極めて人望あり。居常人と接するに快活にして、敢て學者として尊大振なく、能く愛し能く談ず、また應答禮を以てし時務に怠ることなし。

◇

林　文

△福井縣敦賀町北澤内に獨立し、林醫院長として躍進せる林文博士は、其の專門とせる外科を標榜して堂々の陣を張り、新裝せる内部の設備と相俟つて日々診療に臨み、拮据勤勉、孜々として獨自の地盤を開拓するに餘念なし。博士は福井縣武生町に在る歴史あり著名なる林病院長林一治博士の令弟にして、學系は京都府立醫大系に屬し、學位は京都帝大より獲得せる名醫博として其の存在を認めらる。

△博士は明治四十三年京都府立醫專を卒へ、同年八月より大正元年十月迄同校附屬療病院醫員奉職、大正元年十一月より翌年十一月迄京都帝大附屬病院に見學、大正二年十一月より昭和三年十月迄林病院にて診療に從事、同年十月より京都帝國大學醫學部專修科に入學、外科學教授鳥潟隆三博士指導の下に研究に從事し、昭和七年四月歸院、同年七月京都帝大にて學位を授與せらる、次で前記の現住地にて獨立開業せり。

△主論文は『赤痢本型菌「アチワクチン」ノ免疫學的研究』にして、參考論文は、(1)赤痢本型菌「アナワクチン」ノ含有スル「イムペヂン」ノ立證、(2)赤痢本型菌「アナワクチン」ノ含有スル「イムペヂン」ヲ破却スルニ必要ナル好適煮沸時間ニ就テ、(2)傳研製赤痢「ワクチン」中ノ菌體ハ「イムペヂン」ヲ含有スルの三篇なり。

△博士曰く「現今の醫學は既に治療醫學の範圍を脱し豫防醫學の道程にあり、其我國の實施に當りては軈て官營に移管するやの傾向を示す、即ち當該施設に健康保險あり、簡易保險相談所あり殊に後者にありては醫業分業の前哨線をなす甚だ快とすべきなり。さは言へ醫師當今の生活線上より之れを觀れば、醫師自體の其對策を要するや言を俟たざるなり。該傾向の死活は一つに專ら醫師會員の双肩に擔るや明かにして、衆知をして醫師會の人格を認めしむるに吝かならざるものあり、轉た其責めの重きを覺ゆ。尚傳染病豫防の如きも直接醫師自體に委するの妥當なる余の年餘の主張にして、醫師會の發奮醫權の發動を促して止まざる亦久しきものなり」云々。以て博士の感想の一片を窺はる。

△出身地は福井縣南條郡南日野村島の人、林一治博士の弟にして、明治二十年生る、當年四十有九歳也。賦性謙和にして誠實、清淡にして名聞を求めず、只管診療界の爲め精進して仁術を以て任ず、其の眞摯篤厚なる態度は、茲に實兄林一治博士の人格と相俟つて、兄弟兩博士の健康を祝すると共にその德を彰し、併せて診療界淨化の爲め益々奮鬪盡力あらん事を翹望して止まず。趣味は謠曲、銃獵、刀劍等なり。

◇

菊地正三

△南滿醫學堂出身の錚々たる外科醫にして、九州帝大派の名醫博たる菊地正三博士は、在奉天滿洲醫大城内分院長として滿洲診療界の爲め拮据精進しつゝあり。

△博士は、大正六年南滿醫學堂を卒へ、直に同校外科學教室に入り、其後新京滿鐵醫院、關東廳旅順醫院、樺太廳眞岡醫院等の外科を擔任し、昭和二年滿洲醫科大學病理學教室に入る、昭和六年城内分院長拜命今日に至る。斯間昭和七年七月學位を授與せらる。

△主論文は「膽汁性肝硬變症ノ成因ニ關スル實驗的研究、特ニ所謂綱狀壊死竈ノ運命ニ就テ」にして、參考論文は、「汞毒性大腸炎ノ成因ニ關スル實驗的研究特ニ肝臓ノ意義ニ就テ」なり。

△博士曰く「滿洲國其後順調なる發展慶賀に不堪、非常時日本徒なる空理空論を排し醫學の立場より心からなる日滿融和の實を擧げたし」云々。至言にして博士の熱誠努力に待つや切也。博士は山形縣東置賜郡小松町の人、明治廿九年生る、當年四十歳也。學究的溫厚なる紳士にして、恪勤勵精の人也。其の診療に臨むや熱心にして眞摯なるは人皆稱する處、また人に接するに敢て域壁を設けず、恬澹として能く附合ひ、世務に對しては應答禮を以てす。博士に對する人格の尊重を高調するの今日甚だ多とすべき也。滿洲奉天彌生町二五に住す。

◇

大井不二夫

△大井不二夫博士の經營する大井病院は福島縣雙葉郡浪江町に在り、外に昭和八年四月より本縣相馬郡中村町に分院を置けり。外科一般を專門とし、特に甲狀腺外科を最も得意とす。但診療科目は內臟外科、一般外科、整形外科、內科、小兒科、レントゲン科に別れ、醫員二名、レントゲン技師一名、ベツト十三を有し、內容充實す、博士自ら日々臨床に勵しみ、各科擔當醫員を督勵し、協力して地方診療界の爲め努力貢獻する所あり。名實相伴ふ私立病院として當地方を風靡する盛況を呈す、蓋し成功と云はざるを得ず。

△學歷よりすれば、大正十一年愛知醫專卒業後、同年六月より十一月迄愛知醫大杉外科教室勤務、同年十二月より一年志願兵として步兵第二十九聯隊に入隊、同十三年一月より同年十二月迄東北帝大關口外科教室勤務、同十四年一月より昭和四年二月迄現住所に開業病院經營、大正十四年四月任陸軍三等軍醫、昭和四年三月より同七年六月迄東北帝大關口外科教室勤務、昭和七年六月以來現住所に開業、同年八月東北帝大に於て學位を授與せられ今日に至る。斯間外科を專攻し特に甲狀腺外科を最も得意とし、指導教授は關口蕃樹教授なり。

△主論文は「腹腔內輸血ノ諸種血液性狀ニ及ボス影響ニ就テ」(獨文)、參考論文は、(1)腹腔內輸血ノ總血液像ニ及ボス影響（獨文）(2)手術前後ニ於ケルバセドウ氏病患者ノ基礎新陳代謝ニ及ボス「レントゲン」線並ニ二、三藥物ノ影響(3)バセドウ氏病患者ノ諸種血液性狀ニ就テ、(4)甲狀腺「レントゲン」線放射ノ赤血球抵抗度並ニ赤血球沈降速度ニ及ボス影響、(5)腸管囊腫樣氣腫ニ關スル知見補遺等なり。他の論著中、(1)投球ニ因スル上膊骨骨折ノ一例並ニ其ノ成立機轉ニ就テ、(2)急性扁桃腺炎並ニ扁桃腺周圍膿瘍ニ對スル「トリバフラビン」注射療法、(3)火傷ニ對スル「ブナノール」療法ニ就テ等、最も重要なるものとして擧ぐべく、其他枚擧の遑なし。

△感想に曰く『余は必ずしも急速なる實現は期待し居らざるも、醫業は須く國營とすべきものなりと信ずる、之れにより現今叫ばれつゝある醫育統制問題、醫藥分業問題、輕費診療問題、或は群雄割據的に散在する大小病醫院の競爭的暗鬪、又は經營困難の悲鳴等は直ちに消失解決するならん、種々なる事情に餘儀なくさるゝ對症療法必ずしも不可ならざるも時期到來せば斷乎として根治的の「メス」を加へられん事を爲政者に希望するものなり』云々。

△現住地の出身にして、明治三十三年生る、當年未だ三十有六歲、努力主義の人にして、少壯の意氣益壯也。平生德操の堅持を志し、終生自己完成の爲め努力して精神の修養を怠らざるの概あり。多趣味の人にしてスポーツ、音樂、文學、洋畫、釣り、カメラ、俳句等を好む。春秋猶頗る豐富なるの秋、折角の自重加餐を祈る。

◇

西郷一惠

△熊本市縣廳前通りに西郷外科病院あり、院長西郷一惠博士は、熊本醫大系の學流を汲む少壯醫博にして、外科專門醫として錚々たるもの也。大正十二年熊本醫專を卒ゆるや、東京市御茶の水順天堂病院外科並に東京警視廳醫務課に勤め、大正十四年三月熊本醫科大學萩原外科教室に入り、昭和七年八月同大學にて學位を受領し、翌八年五月同教室を辭し熊本市水道町三七番地に於て開業、今日に至る。

△主論文は『本邦人ノ上肢諸關節ニ於ケル化骨機轉ニ就テノ「レントゲン」解剖學トソノ臨床的意義」にして、參考論文は、(1)自家考案ニヨル口角、開唇鉤ニ就テ、(2)熊本地方在住者血液型ノ統計的觀察、(3)本邦人肩峰突起化骨機轉ニ就テノ「レ」線的檢索、(4)煮沸免疫ノ療法ニ依リ治癒シタル「チフス」性尺骨々膜炎ノ一例等其他二編あり。

△博士の出身地は鹿兒島縣川邊郡知覽町にして、明治三十一年西郷惠の二男に生る、當年三十有八歲也。少壯にして潑剌たる研究心を有し、學究生活より診療界に躍進して以來、日尙淺少なれども、拮据黽勉、孜々營々として診療に勵みつゝある前途は大に期待せらる。折角の努力奮鬪を望むや切也。

◇

大園正人

△九州診療界に於ける小倉記念病院は、私立病院に對する一大敵國の偉觀を呈す。玆に品隲せん

とする大園正人博士は、外科部長にして小倉記念病院の中堅たり。熊本醫專大正九年の出身にして、小倉市記念病院副島博士の指導を受け、昭和四年より京都帝大醫學部の外科研究室に於て磯部、伊藤兩教授指導の下に研究、同七年八月京都帝大より學位を受領せり。主論文は『中樞神經ノ被刺戟性ニ對スル酸及ビ「アルカリ」ノ影響ニ就テ』にして外に參考論文十部あり。

△佐賀縣神埼郡蓮池村の人、明治三十年生る、當年三十有九歳也。勵精恪勤の人にして、少壯の意氣と共に熱誠克く院是に從ひ努力精進する所あり、賦性敦厚にして人に篤く、淸淡にして功名榮達を意に介せず、其の態度の眞摯にして親切なるは、內外の評判良好なりと聽く。小倉市紺屋町七丁目二一一に住す。

◇

宮崎松記　△我邦癩療養界の中堅として九州癩療養所長に新進の宮崎松記博士あり。京都帝大系近來の名醫博にして、明日の癩療養界に囑目さる新人物なり。學歷より觀れば大正十三年京都帝大醫學部を卒へ、爾後母校の外科教室に止まり副手、助手を歷任して勤務の傍ら研究を積み、同十五年より日赤大阪支部病院醫長として外科を擔任し、最近現職に就きて今日に至れり。斯間昭和七年八月京都帝大にて學位を授與せらる。專攻は外科學にして、母校恩師鳥潟教授、磯部教授、伊藤教授並びに日赤大阪支部病院前外科醫長澤村榮美博士等の指導を受けたり。

△學位主論文は「肋軟骨外科ノ解剖學的病理學的及ビ臨床學的研究」にして、參考論文は、(1)胸骨化骨ノ「レントゲン」學的研究、(2)肋軟骨化骨ノ「レントゲン」學的研究、(3)一種ノ非炎症性肋軟骨疾患ニ就テ、(4)先天性胸骨破　症ノ一例、(5)稀有ナル肋膜腔內異物例及ビ平壓開胸術追加、等五編なり。

△博士の感想に曰く『疾病の診斷は所詮一種の鑑定なり。書畫骨董の鑑定は理論に非ず、一つにても多くの物に接して眞物に對する眼識を養ひて、以て眞僞の判別をなす。机上の空論紙上の知識は要をなさず、吾人の疾病の診斷に當りても理論を超越したる所謂「曰く言ひ難し」の點あるを覺ゆ。これは一人にても多くの症例に接し、周到なる注意と鋭敏なる觀察の結果を以てして、はじめて悟了し得らるゝものなり。現代の醫人には實驗的の研究理論的の考察に於て缺ぐるところなしとするも、臨床家に最緊要なるこの醫學的眼識の獲得に對する努力に於て缺ぐる所なきか』云々。

△博士は熊本縣八代郡八代町の人宮崎好德の養嗣子にして、明治三十三年生る、年齒未だ三十有六歳の少壯也。新進の意氣に燃ゆる學究的溫厚の紳士にして、診療に臨むや熱心甚だ力め、能く誠實と親切とを盡す、人に接するに快活にして溫情あり同情に富む。春秋頗る豐富にして、光る學位の前途は猶洋々として賴もし、幸に健康と共に、爲斯界益々發奮盡力あらむ事を切望して止まず。熊本市外淸水村寶園二九五ノ四に住む。

◇

後藤覺平　△東京市豐島區西巢鴨二丁目一八九〇に堂々の陣を張り、外科を以て斷然頭角を拔き、著名なる宮仲病院あり、院長後藤覺平博士の經營する私立病院にして、鐵骨コンクリートの建坪二百五十坪を有する洋風の建物嚴かめしく、病床二〇、レントゲン室、手術室、研究室、病室等々、充實せる內部の設備整ひ間然する所なし。博士は外科の大家として旣に斯界に定評ある如く、嘗て獨、瑞に留學するやフライブルグ大學にてはマイエンブルグ教授に師事し、チューリッヒ大學にてはクレーモント教授の指導を受け病理學及び外科學を研究し、歸朝後は慈惠醫大教授木村哲二博士指導の許にて病理學研究の結果、慈惠醫大より學位を得たる近來の名醫博にして、圓熟せる手腕は益々其の特技を發揮して餘す所なく、玲瓏たる診療、手術の好評は、和氣靄々たる博士の性格と相俟つて益々遠近の人氣を集中し、日々向上發展の盛況を呈しつゝあるは成功と云はざるを得ず、祝福すべき也。

△博士は東京醫專卒業後、順天堂醫院外科に勤務、昭和二年一月渡歐、主として前記獨、瑞の兩大學にて外科、病理

學を研究す、同四年六月歸朝後、直ちに東京慈惠醫大病理學教室研究科入學、木村教授の下に病理學研究、同七年八月同大學より學位を受領せり。

△主論文は「皮膚、腱及ビ關節嚢ニ實驗的ニ發生セシメタル異物性肉芽腫ニ就テ(キサントーム性肉芽腫實驗的研究)」にして、參考論文は、(1)先天性肝臓製溝ノ發現頻度ト或種ノ疾患ニ對スル關係ニ就テノ研究、(2)肝臓製溝ノ發現頻度ト二三ノ疾患ニ對スル關係ニ就テ、(3)男子ノ肝臓ニ原發セル惡性脈絡膜上皮細胞腫ニ就テ、(4)腸原發性結核ニ續發セル興味アル肝臓結核症ノ剖檢例ニ就テ等なり。就中「キサントーム」性肉芽腫ニ就テは博士會心の論文と見るべし。

△博士の感想に曰く「醫學雜誌の統一を望む、例へば病理學方面の業績などは、各大學で發行する雜誌に發表するよりも二三の機關雜誌を通じ各大學の論文を發表する樣にしたら文獻を見る上に於ても多大の便利あらんと思ふ。醫師界方面の感想としては、醫者は全部國家試驗に依ることが統一されて良いと思ふ、近頃流行しておる實費診療と云ふ樣な名稱は無くして貰ひたいと思ふ、而して醫業類似業者を充分に取締つて貰ひたい、醫師に非ざる者には醫業行爲は禁止したら良いと思ふ。それから醫藥分業を希望す」云々。參考とすべき也。

△博士は東京市現住地の人、後藤二三郎の長男にして、明治三十一年生る、當年三十有八歳也。少壯にして今日の成功ある輝しき閲歴は當世博士界に異彩を放ち見ゆ、頂門の一針として可也。勵精家にして努力主義を以て起ち、不撓不屈の精神に富む。今は最も得意時代にして、少壯の意氣と共に日夜倦むことを知らず、患者を待つに眞摯にして誠實と親切とを以てす。やゝもすれば少々短氣の方なれども、務めて自ら抑制することに修養努力する風あるを見る。讀書家にして書見を業餘の樂しみとし、又た圍碁を趣味すと云ふ。

◇

福島慶之助

△多年錬磨せる獨特の手腕と、堅き自信とを以て、競爭激甚なる帝都治療界に躍進せる、慈惠派の新人福島慶之助博士は、瀧野川區田端一七三に外科專門を以て獨立開業して以來、日尚淺きも、拮据黽勉、日夜倦むことなく孜々營々として診療に勵しみ、誠實と親切とをモットーとして努力精進せる結果、的確にして鋭利なるメスの好評と相俟つて、年次牢固たる地盤を開拓して門前常に賑ひ、今や堅實なる發展振りを示しつゝあるを見る。

△博士は大正十三年慈惠醫大卒業後、同年四月同大學附屬東京病院外科勤務、昭和五年十二月同大學外科講師となる同六年四月外科學見學の爲め歐米に留學、同七年八月歸朝、同年同月母校より學位を得、同年十一月現住所に外科一般にて開業今日に至る。斯間主として指導を受けたるは母校の恩師男爵高木喜寛教授と、獨逸伯林大學外科ザウエルブルフ教授なり。

△學位主論文は『溫浴並ニ溫泉浴ノ生體ニ及ボス影響ニ關スル研究』にして、外に參考論文二篇あり。本論文に對する學問的批判は既に學界に定評あれば、贅言の要なしと雖も、學究生活中の努力研鑽の跡を物語るものとして、氏の面目の躍如たるものあるを窺はる。氏の出身地は埼玉縣北埼玉郡騎西町にして、明治三十四年生る、年齒未だ三十有五歳也。少壯の意氣を以て診療に一路邁進しつゝある前途は、潑剌として將來の大成を期待せらる。賦性溫厚にして穩健を以て自ら持し、居常能く禮節を尚び、患者に對し人と接するに親切あり同情ある、其の紳士的態度と、其の人格の美なるとは、良醫としての將來を大ならしむる所以かと推奬するに吝ならず。趣味はスポーツなりと聽く。

◇

佐藤義房

△千葉醫大派の學流を汲み、外科學を專修して巢立せし壯少醫博佐藤義房は、曩に教室を勇退して今は八戸市八戸病院に在りて外科を擔任し、手腕、聲望相俟つて、其の熱心なる診療振は躍如として新進の氣鋭を示せり。學系よりすれば大正十二年千葉醫大前身醫專を卒業し、直ちに岩手縣花卷共立病院外科へ勤め、昭和三年十月以來、東北帝大醫學部副手となり外科教室に勤務す、同七年九月東北帝大より學位を得て後研究を續け、現職に赴

任せり。指導教授は東北帝大外科學教授關口蕃樹博士、同病理學教授木村男也博士にして外科學を專攻せり。

△主論文は「腹腔內吸收ニ就テ」にして原著は獨逸文なり。外に參考論文として、(1)蟲樣突起內神經節細胞並ニ其ノ配列ニ就テ(獨文)、(2)諸種痲醉藥ノ腹腔內吸收ニ及ボス影響ニ就テ、(3)諸種痲醉藥ノ腎臟排泄器能ニ及ボス影響ニ就テ、(4)蟲樣突起靜脈內淋巴球充實ニ就テ、の四篇あり。

△博士の出身地は栃木縣那須郡那須村湯本にして、明治三十二年佐藤房之助の二男に生る、當年三十有七歲也。花卷共立病院長たる佐藤隆房博士の弟にして、兄弟兩醫博の前途や多望なり。賦性溫厚にして篤實、謙和にして克く自抑し人に厚く、人に對するに應答禮を以てし時務を缺ぐことなし、其の眞摯にして寬量なる態度は、人をして好感を覺えしむる德を有す。著者玆に東北醫療界兄弟兩博士の健康を祝すと共に、自重加餐あつて、暗澹たる治療界淨化の爲め益々發奮努力あらん事を祈るや切也。青森縣八戶市吹上に住む。

◇

根岸喜代助　△京都衞戍病院長にして、陸軍一等軍醫正たる根岸喜代助博士は、東京帝大系の外科學者にして北海道帝大より學位を得たる年壯醫博として錚々たるもの也。多年陸軍々醫界に活躍して功績を擧げ、今猶至誠奉公を念として國家の爲め奮盡努力し、新銳の英氣と獨特の手腕を發揮して、大に將來に待つあらんとする所に、博士の大なる存在を認めらる。

△博士は大正元年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに陸軍々醫を奉職し、後陸軍々醫總監岩崎小四郎博士の薫陶を受け、次で病理學の權威福士政一博士に師事し血液病理學を修め、引續き陸軍にありて、札幌衞戍病院長、陸軍航空本部員を歷任して今日に及べり、斯間、學位論文を北海道帝大醫學部へ提出して、昭和七年九月學位を受領せり。

△主論文は「白血球像ヨリ觀タル蟲樣突起炎」にして、外に參考論文八編あり。出身地は埼玉縣北埼玉郡牛子林村にして、明治十八年生る、當年五十有一歲、年壯銳氣にして元氣益々旺盛也。至誠奉公の念に燃え、勵精恪勤の人にして潑剌たる前途は、猶洋々として更に大に期待せらる。賦性謹厚にして高潔、謙抑にして能く人を愛す、恬澹として功名榮達を求めず、專念職務に忠勤を盡し以て自ら樂しむの概あり。京都市伏見區深草芳水町六六六に住す。

◇

松尾弘　△尾道市立診療所外科主任として活躍し、地方診療界の爲め努力貢獻しつゝある松尾弘博士は、長崎醫專の出身にして、外科を標榜して立ち、母校の恩師林郁彥博士に親炙して病理學を專攻し、長崎醫大より學位を得たる篤學の名醫博也。專門的學識と相俟つて多年の經驗に富み、今や獨特の手腕を發揮する立場に在りて、內外の信望を博す。

△博士は鹿兒島縣第一中學校出身にして、大正九年長崎醫專を卒へ、直ちに佐賀縣立病院好生館外科へ勤務、在職二年半にして、高松市日本赤十字社香川支部病院に轉じ在勤三年餘、次で神戶市私立津田病院の招聘を受け赴任、在職三年餘の後、昭和四年八月母校長崎醫科大學病理學教室に入り、林博士指導の下に地方病「フイラリア」に就て研究し後同大學外科學教室に勤務す、昭和七年九月學位を授與せられ、翌八年一月現尾道市立診療所外科主任として赴任今日に至る。

△主論文は『「フイラリア」性淋巴腺炎ニ就テ』にして、參考論文は、(1)諸毒物ニヨル淋巴腺ノ組織反應ニ就テ、二篇、(2)淋巴腺浸出液ニ關スル實驗的研究、二篇、(3)心臟破裂ヲ來タセル心臟瘤ノ一剖檢例、(4)腸「チフス」病ノ經過中ニ小舞踏病樣運動ヲ伴ヒシ症例及其病理ニ就テ、(5)諸所ニ轉移セル放線狀菌病ノ一例等なり。

△感想に曰く、(1)近時世人の醫師觀必ずしも昔日と同一ならず。これ社會狀態變遷の然らしむる所とは云へ亦その責の一半は醫家の負ふべきものなるを思はしむ、巧利のみに走り宣傳これ事とする一部の士に災さるゝ事大なり、各自

反省すべきの要あるを痛感す。(2)醫學就中臨床醫學の如く經驗を至上とするものにありては高齡卽ち博識なる場合多し、惜むらくは現今の狀態にては醫家一般不規則なる業務に餘暇少く新知識獲得の餘裕乏し。何等かの制度改善によりて醫家の研究餘暇と併せて休養の時間を設くる事は必須事たり』云々。

△長崎縣南高來郡の人、明治二十八年生る、當年四十有一歲也。少壯の意氣益壯にして、壯熟せる手腕と相俟つて今は最も活躍の時代に入り、潑剌たる前途の飛躍は更に大に待望せらる。賦性溫厚にして謙和、人に對し患者を待つに親切なり、同情と理解とを以てす。尾道市十四日町一六七に住す。

◇

成松清敏　△福岡縣嘉穗郡桂川村平山鑛業所病院院長兼外科部長たる成松清敏博士は、大阪醫大出身の外科學者にして、慶大醫學部に於て茂木教授の指導を受くること二ケ年餘、最近九大整形外科神中教授の指導を受けて、斯學の蘊奧を究め、外傷特に骨折を最も得意とする、九州帝大派の名醫博として其存在を認めらる。研鑽多年の學殖と共に外傷臨床の經驗に富み、今や獨特の手腕を發揮して餘す所なく、當地方診療界に最も囑望せらるゝ一人物たるは、博士界の爲め大に人意を强からしむるに足る。

△博士は大正八年大阪醫大卒業後、一時大阪府警察部衞生課に勤務、大正九年五月より同十一年六月迄慶應義塾大學醫學部助手拜命、外科學教室にて茂木教授指導の下に勤務す、その後福島縣白河町白河病院外科部長に就任す、大正十三年四月以來福岡縣下の安川家經營の炭坑病院院長に就任し今日に至る。その間昭和六年六月より二ケ年九州帝國大學醫學部專攻生入學、主として下田及神中兩教授の指導を受け、同九年一月同大學にて學位を授與せらる。

△主論文は『末梢神經「レチチン」ニ就テ』にして、外に參考論文として、(1)「ミエログラム」ニ現ハレタル正常硬膜終末囊ノ形狀及ビ高程ニ就テ、(2)外傷性神經症患者ノ病前性格ニ就テ、(3)限局性脊髓膜炎ニヨル坐骨神經痛二例ノ追加、(4)丹毒ノ「レントゲン」線療法ニ就テ、(5)肺臟ニ穿孔セル横隔膜下濃瘍ノ一例等あり。

△博士の感想に曰く「災害醫學の勃興、殊に醫科大學の講座に災害醫學を加ふることを待望す」云々と。軈て災害醫學の實現を見るの日も近からんか。

△佐賀縣佐賀郡東川副村成松清三郎の二男にして、明治二十六年生る。賦性篤實敦厚、學識、手腕、人格共に愈々圓熟の佳境に入りて今は最も得意時代に在り。性來短氣にして偏執的なるは、或は後者が氏の長所であり、且短所でもあらんかと思はしむ。研究以外、美術趣味豐かにして殊に西洋畫を好み、登山、園藝にも親しむ。福岡縣嘉穗郡桂川村平山鑛業所社宅に住む。

◇

大槻正路　△帝國女子醫藥專教授團に大槻正路博士あり、錚々たる新進の外科學者にして、專ら女子醫育界に盡瘁しつゝある近代的活動家也。而して又教鞭を取る傍ら自宅蒲田區新宿町三六九に小醫院（X光線、太陽燈の設備あり）を開業して外科一般の診療に從事しつゝあり。日夜繁忙を極め、殆ど席暖まるの暇なきもその意氣益々旺盛にして、孜々營々として倦むことなき元氣は敬服に値する。其卓越せる手腕の好評は既に巷街に嘖々たるを聞く。

△博士は明治四十五年東京學院中學部卒業、大正五年東北帝大醫學專門部卒業、自大正十年至十四年慶應義塾大學醫學部外科教室助手勤務、大正十四年より現職に在り、昭和七年十一月東京帝大より學位を受領せり。斯間の指導教授は慶大外科學の重鎭茂木藏之助博士、帝國女子醫專校長內科の泰斗額田晋博士にして專攻は外科學なり。

△學位主論文は「細菌性發熱並ニ該發熱時ニ於ケル尿中窒素排出量ニ對スル微量異種細菌ノ影響ニ就テ」にして、參考論文獨文二篇あり、(1)Ueber die Schuankungen der Resistenz gegen Stseptokokkeninfestion nesh Immunisiering mit Heterobakterien. (2)Experimentelle untersuchungen über die Einfliusse minimaler menge von

Heterobakterien auf das Fieber durch Pneumokokken。

△博士は宮城縣伊具郡金山町の人、大槻精の三男にして、明治二十五年生る、當年不惑に入る四歳、學究的溫厚の紳士にして情誼篤し。令兄に東京帝大助教授大槻菊男博士あり、令弟に京都帝大教授大槻正男、及び東京女子高師教授大槻虎男あり、共に俱に現代學界に異彩を放つ兄弟として羨望さる。博士は運動家にしてスケート、ゴルフを能くすと聞く。猶洋々たる前途、益々自重して加餐あらんことを望んで止まず。自宅は東京市蒲田區新宿町三六九なり。

◇

李　祖　蔚　△中華民國の代表的學者にして、廣西省政府衞生委員會委員たる醫學博士李祖蔚は、現に廣西省南寧廣西省立醫學院外科教授として勵精活躍し、嘖々たる名聲と共に日本醫學の爲め氣を吐きつゝあるは、醫博界の爲め大に人意を强からしむるに足る。博士は千葉醫大出身の外科學者にして、斯科界の泰斗恩師瀨尾貞信博士に就きて斯學の蘊奥を究め、母校より學位を獲得せる篤學の少壯名醫博也。新進にして其の蘊蓄を披瀝し、以て祖國學生の指導に務め、一面には又獨特の新手腕を發揮して外科治療界の爲め盡し、診療手術の好評と共に兩々相俟つて、益々內外の信望を博す。最近第九回（昭和九年）日本醫學會會頭入澤達吉博士の招電により上海の來賓として列席し、今や中民醫界に於ける新進大家として、大衆より多大の信賴と尊敬とを受けつゝあるは中日の親善上欣幸とする處也。

△博士は中華民國の出身にして、昭和二年千葉醫大卒業後、直に千葉醫大研究科入學、外科學研究、同七年十一月同大學より學位受領、中華民國二十年九月上海東南醫學院教務長兼上海東南醫院外科主任として赴任し、昭和九年八月現職に轉任今日に至る。

△主論文は、(1)「膵臟縫合ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)腸「チフス」ノ外科的合併症、(2)釀母菌ノ外科的意義、(3)胃癌早期診斷研究殊ニ胃液內ノ脂肪含有細胞ノ證明ニ就テ等三篇なり。論文中「膵臟切除後ニ於ケル縫合法」は博士の最も得意とせるものとして特筆すべきを要す。

△感想の一片を寄せて曰く「人間の生命は無限に非ず研究に從事する私共は出來るならば、最も人類生死問題に密接なる關係ある重要問題に向つて努力すべきと思ふ。難易及び成敗とは恐るゝに足らず」云々。此の意氣や壯とすべきも。博士は中華民國福建省莆田縣人李樹棠長男、光緒二十一年生る。學究的溫厚の紳士にして、少壯の意氣に燃え、熱心なる研究家として知らる。而かも謙遜家にして志有餘力不足を以て自任し、人と接するに恬淡として敢て衒はず、寬厚克く人を容れ、部下を愛し能く學生を指導す、又應答禮を厚うして、尺牘溫雅甚た親しむべき也。趣味としては音樂を愛し、運動を好む。幸に健康と共に民國醫界の爲め、益々活躍盡力あらん事を遙に翹望して止まず。

◇

中村友輔　△京城帝大派の新興勢力の一人物たる中村友輔博士は、朝鮮平壤鐵道病院外科醫長として精勤數年に及び、半島診療界に於ける重要人物たる存在を認めらる。學系は昭和二年東京帝大醫學部の出身にして、京城帝大外科松井博士に師事す、昭和六年現職に就任し、同七年十二月京城帝大にて學位を受領せり。

△主論文は「家兎腎臟分泌面縮少後ニ於ケル水分代謝ニ就テ」にして、外に參考論文三篇あり。

△出身地は新潟縣古志郡十日町村にして、明治三十四年生る、當年三十有五歳也。少壯なる學究的臨床家としての意氣を以て起ち、學を錬り腕を磨くに餘念なき前途は、向後の活躍と相俟つて、博士の將來を語るに綽々として餘裕あり。朝鮮平壤竹園町一に住す。

◇

松波賢吾　△岐阜縣羽島郡笠松町にて獨立開業せる、松波外科醫院長松波賢吾博士は、岡山醫大系の新進、泉外科を巢立ちて學位を獲得せる少壯の名醫博にして、其の最も得意とする內臟外科の大家として特に著聞す。同病

院は內臟外科、其他外科一般に適切なるレントゲン科、物理診療科等の裝置並に入院の設備等完成す。博士の專門的學識は言はずもがな、圓熟せる手腕の好評は益々遠近の人氣を吸收し、今や牢乎たる地盤の上に日增堅實なる發展を遂げ、當地方診療界に頭角を拔きつゝあり。

△博士は昭和三年岡山醫大を卒へ、引續き助手として泉外科教室に勤め、泉教授指導の下に研究を續け、同七年十二月岡山醫大にて學位を得、同八年三月以降現住地にて開業、松波外科醫院を經營今日に至る。主論文は『副腎ノ「コレステリン」代謝機能ニ就テ』にして、外に參考論文「急性膽囊炎ノ早期手術ニ就テ」外七篇あり。

△博士の感想に曰く「田舍で開業してみると、一般開業醫の無責任と、そして一般人の醫學常識缺乏と無理解とに驚かざるを得ない」云々と。以て博士の責任感に强き人たると同時に、診療に臨む態度の如何に眞摯にして誠實なるかを窺はる。好箇の臨床家として、更に洋々たる前途を期待して止まず、折角の努力奮鬪を望むや切也。

△出身地は岐阜縣稻葉郡加納町にして、明治三十六年松波與太郎の長男に生る。亡父與太郎は三高醫學部の出身にて岡山醫大より醫學博士の學位を得、獨逸グライスフルド大學に留學すること二回、ドクトルの學位を得、外科の大家として仰がれたる學者なりしが、昭和三年九月二十六日逝く、惜むべき也。賢吾博士は、當年三十有三歲、年齒未だ少壯にして覇氣に富み、嚴父の遺鉢を享けて、溫良謹嚴、極めて眞面目にして正直すぎる方也。

◇

安田陸郎　△東北帝大醫學部講師より轉任して秋田縣大館町公立病院外科に勤務中の安田陸郎博士は、東北帝大派の新進にして、恩師杉村七太郎教授に就きて外科學一般を專攻し、母校より學位を得たる手腕家として認められ、今や其の職務に勵精努力して、自由に其の手腕を發揮し得るの立場に在り、向後の活躍と相俟つて、潑剌たる前途の發展大に期待せらる。

△學歷及び閱歷を概括すれば、宮城縣立佐沼中學校より、二高を經て、昭和三年東北帝大醫學部を卒へ、翌四年六月より六年六月迄東北帝大大學院に在學す、同七年七月東北帝大醫學部講師となり、同年十二月學位を授與せられ、次で現職に赴任し今日に至る。

△主論文は「腎臟結石ノ化學的及鑛物學的研究並ニ其ノ成因ニ就テ」にして原著は獨逸文なり。參考論文としては、(1)結核患者ノ血液及尿中「リパーゼ」量ニ就テ（獨文）(2)腎牀「プノイモラジヲグラフイー」ニ就テ、(3)外科的腎疾患ニ對スル靜脈內性腎、腎盂、輸尿管撮影法ノ經驗等あり。

△仙臺市國分町の人、明治三十六年生る、現釜山府榮町八丁目開業醫（前朝鮮慶尙北道道立金泉醫院長）佐藤千三郎博士の實弟也。年華未だ三十有三歲の少壯にして、覇氣滿々たる書生氣質の人也。兄弟兩博士の輝しき前途は祝福すべく、幸ひ健康にして、折角の努力奮勵を望むや切也。秋田縣大館町三九に住む。

◇

石川昇　△現代外科界の權威たる石川昇博士は、世人周知の如く、金澤醫大教授にして兼ねて附屬醫院長として、最高學府に重きを爲す純眞の學者にして、特に內臟外科を最も得意とする外科學者たり。學系よりすれば九大系にして、恩師三宅速教授に就て外科、內臟外科を、同板垣政參教授に就て自律神經に關する生理を、同進藤篤一教授に就て自律神經に關する解剖を專攻し、又嘗て文部省在外研究員として海外留學中、ザウアーブルツフ教授に就て肺臟外科を、エンデルレン教授に就て內臟外科を、ゴツセ教授に就て內臟外科を、キユネオ教授に就て一般外科を研究せり、而して最近再度の歐米視察より歸朝後の博士は、更に日新月步の新知見を齎らして教室の改善、學生の指導、其他最も新らしき一生面を啓發する上に最善の努力を拂ひつゝあり。

△更に博士の學歷より概括して見れば、大正六年九州帝大醫科大學卒業後、直ちに同學三宅外科教室副手、次で助手

として勤務、同十二年七月母校にて學位授與せられ、同十三年一月文部省在外研究員として獨、佛、英、米各國へ留學を被命、同十四年四月任金澤醫大教授、昭和六年歐米を視察せり、以て今日に及べり。

△學位主論文は「大腸殊ニ下半部ノ神經支配ニ關スル實驗的研究」歐文「Experimentelle Untersuchung über die Dickdarminnervation, insbesondere Colon descendens et Sigmoideam」にして、參考論文は、(1)結腸巨大症ノ發生原因ニ關スル實驗的並ニ臨床的研究（歐文）、(2)蛔蟲卵膵臓炎並ニ蛔蟲卵性大網膜肺腫瘍ノ組織的變化等ニ就テなり。他の論著中、(1)肺結核外科（學會宿題報告）、(2)肺結核ノ外科的療法、(3)腹部内臓外科ニ於ケル局所痲醉法並ニ内臓ノ痛覺ニ關スル研究、(4)胃癌ノ診斷並ニ療法、(5)移動性内臓疾患ノ外科等は博士會心の作にして、最も重要なるものとして見るべき也。

△感想に曰く「學閥の弊は眞の學問技術の進歩發達を妨げる。競爭は一面には進歩發達の刺戟となるが、現在の事實は寧ろ弊害多し。專門の弊また擡頭せるに非るか、殊に内科、外科、レントゲン科の領域に於て。醫學に著しく進歩せるの觀あるも果して醫術はこれに相當した進歩發達を遂げてゐるであらうか。尙一層の研磨努力と熟慮を要すると思ふ、殊に學界と醫師界との連絡の密なるを要すると思ふ」云々。

△博士の本籍は大分縣宇佐郡安心院村字原にして、明治二十六年生れ、石川喜十郎の養子也。純學者肌の年壯の紳士耶生は其號にして、俳句を能くす、又旅行好きなり。性格は正直にして、勤勉努力主義の人、常に德操を堅持して克く自ら修養に務む、毀譽褒貶など毫も意に介せざれば、强ゐて言へば或は社交には下手の方ならんか、また游泳術の駄目なるを御當人はいやに氣にして居らるゝが如し。人格者として著者更めて敬意を表す。博士の年齒今や不惑に入る三歳、前途洋々たるの秋、幸ひ健康にして、爲學界折角の自重加餐を祈るや切也。

◇

齋藤　眞

△名古屋醫大教授にして外科學を擔任し、齋藤外科の今日をあらしめたる外科界現代の一權威たる齋藤眞博士は、東大系大正四年組にて、近藤外科門弟中の一秀才として知られ、大正十二年四月母校より學位を獲得せる所謂東大派の名醫博中、最も將來を囑望せらるる最高學府中の少壯教授たるを至囑す。氏の學位論文は『「プレキサス、ヒオリオイデウス」ノ病理』にして原著は獨逸文なり、本論文の學問的價値は既に其の當時の學界に認められ、嘖々たる批判あれば敢て玆に贅言を要せざるまでも、氏が努力研鑽の跡を物語るに足る。其後發表せる論著素より夥多にして枚擧の遑なしと雖も、嘗て（昭和四年の春）日本外科學總會が仙臺に開かれたる時、氏は宿題たる「腦及ビ頭蓋外科」に就き報告を擔任し、外科の新領域を開拓したるものとして滿場の賞讃を博し、日本のクツシグとまで呼ばれたるは特筆に値し、氏の業績中に見逃すべからざるもの也。

△博士は仙臺市名門の出身にして一流の素封家を以て知らる、明治二十二年生にして當年正に不惑に入る七歳、學者肌にして、年壯の紳士としての人格者也。本來名門育ちの苦勞知らずにして鷹揚の所あり、又學界に於ても順調であつただけにこせつく所なく、寛厚にして融和性に富み、能く人を容れ後進を愛し、學生を指導するに篤く、名古屋醫大に於ける中堅として厚き人望あるも亦偶然ならざるを思ふ。春秋猶豐富にして、前途洋々たるの秋、幸に健康にして、爲學界益々精研奮盡あらん事を祈るや切也。名古屋市東區千種町元古井に住む。

◇

野谷昌臣

△東京市麴町富士見町一丁目九段坂病院に外科醫長として多年の聲望を博し、民衆診療界の爲め努力貢獻しつゝある野谷昌臣博士は、東大系の外科臨床家として錚々たる名醫博也。氏は鳥取縣の出身にして、明治十七年生る。明治四十三年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに同大學近藤外科に勤め、恩師指導の下に研究すること多年、大正十二年四月母校より學位を授與せられ、震災後三番町日本赤十字社支部病院々長として就任、同十五年十月

より現病院に勤務、外科醫長として今日に至る。

△學位主論文は「脾臓ヲ摘出セル家兎ニ於ケル血清學的研究」にして原著は獨逸文なり、其他論著夥多あり。愛書家にして業餘能く讀書精研修養に勉む、尙ほ趣味としては演劇、義太夫、野球等を好む。壯齡今や知命に入る二歳、益々元氣にして其の職務に勵精努力するの仁也。牛込區拂方町二七に住す。

◇

鳥居武雄　△東京市淺草區須賀町に在る明治病院は歷史あり、帝都診療界に於ける私立病院中重要の位地を占め、依然として拔くべからざる繁榮を持續しつゝあり。院長は鳥居武雄博士にして、博士經營の下に主宰し自ら外科の診療に起ち、他科の擔當醫を督勵協力して院務に勵精努力しつゝあり。博士は東京高師附屬小中學校より四高を經て、大正五年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに同大學副手囑託、同七年八月任同大學助手、同十年十一月同附屬醫院醫員を被命、同十一年四月依願助手及び醫員を被免、同年五月歐米へ私費留學、獨逸國グライフスワルド大學フリードベルゲル教授の教室に入る、業績三篇を發表、次でミュンヘン大學ザウエルブルフ教授、ベルリン大學ケールテ教授及び米國メヨークリニツク等にて見學し、翌十二年歸朝す、同年六月九州帝大にて學位を授與せられ、爾來現明治病院副院長として診療に從事す、震災にて全燒當時、百餘名の患者と職員、附添等を合して三百五十餘名中一名の負傷者もなく無事避難し、大正十二年九月二十三日より再び診療に從事し、同院長として今日に至る。

△學位主論文は「輸血ニ關スル實驗的及臨床的研究」にして、原著は獨逸文なり。參考論文としては、(1)腎石症ノ臨床的並ニ病理解剖的所見ニ就テ、(2)人血ト獸血トノ鑑別法、(3)輸血ノ際實地醫家ニ必要ナル注意事項ニ就テ等なり。其他論著夥多。

△出身地は山形縣山形市香澄町字大寶寺にして、明治二十二年生れ、鳥居文雄博士の兄也。學究的溫厚の紳士にして壯齡今や不惑に入る七歳、臨床家としては最も腕の冴え盛にて、學識、手腕、識見共に愈よ圓熟の域に達して一段の貫祿を有す。其の今日あるもの、病院經營の才と臨床的手腕の卓越せるものに非ざれば其の繁榮を見る能はず、此の意味に於て博士の評價は定まり批判の餘地なし。

◇

尹治衡　△京城府寬勳洞一九七回生病院長尹治衡博士は、京城醫專出身の篤學者にして、朝鮮出身者中醫學博士の學位を獲得せる先驅者として、代表的名譽を負ふ初代の醫博也。學系よりすれば大正七年京城醫專卒業後、直ちに朝鮮總督府官費留學生を被命、九州帝大醫科大學に於て外科學專攻、後藤七郎教授に師事すると共に、附屬醫院第二外科教室に勤務すること二ケ年、同九年五月カナダ宣教會城津濟東病院外科々長として勤め、旁々同九年十月より京城外科病院を經營し同十一年三月之を廢す、同十一年五月私費獨逸國に留學し、主としてプレスラウ大學病理學教室及び外科學教室にて研究、同十三年正月歸朝、直ちに九大醫學部第二外科教室に入り、再び後藤教授に師事すると同時に附屬病院第二外科に勤務す、同十三年七月九州帝大にて學位を授與せられ、同年四月京城醫專囑託となり外科解剖學を分擔し傍ら回春醫院長を勤む、同十四年十月新設京城回生病院經營今日に至る。外科を專門として殊に結核病科を得意とす。

△學位主論文は「健康肺並ニ結核肺ニ對スル人工氣胸ノ作用」にして原著は獨逸文、參考論文としては、(1)部分的肝切除例、(2)外科的疾患ニ於ケル血清蛋白ノ定性的及定量的檢査ニ就テ、(3)胃腸管內ニ於ケル原發性肉腫ニ就テ、外に獨逸文原著一篇あり。明治二十九年朝鮮咸鏡南道長津郡に生る、兩班尹應觀の長男也。篤學者にして、特に結核病治療法の研究に對して多大の興味を有し、讀書精研相俟つて今猶孜々として研鑽に餘念なきが如し。學者としての該博なる學識並びに不斷の努力に對しては、著者は敬意を表するに敢て吝なる者に非らざれども、學者を氣取りて餘りに

自惚强く、學者たるの美名に隱れて信義に缺げ、己に厚うして人に薄く、甚だ得手勝手なる振舞なきや、著者の體驗より其の人格を疑ふ者也、將來ある博士の爲め甚だ惜まざるを得ず。

◇

松井權平　△京城帝大教授として外科學を擔任し、兼ねて附屬醫院長たる松井權平博士は、東大系の外科學者にして名醫博たるに耻ぢず、朝鮮醫學界に於ける重鎭たるのみならず、現代日本外科學界に於ける一權威たるべし。氏の學歷より觀れば、獨逸協會中學より一高を經て、明治四十三年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに同大學外科學教室副手として勤務、大正二年五月任同大學助手同六年五月迄勤務、同八年より十二年迄東大法醫學教室にて三田教授指導の下に血淸化學を研究し傍ら私立醫學專門學校講義をなす、同十三年十二月東京帝大にて學位を授與せられ次で京城醫學專門學校教授並に朝鮮總督醫院醫員を歷て現職に就き今日に至る。

△學位主論文は『腸管ノ種々ノ部位ニ於ケル蛋白質及一二含水炭素吸收ニ關スル血淸學的研究』にして、參考論文は(1)腸瘍殊ニ癌腫ノ酵素ニ就テ(2)「クロロホルム」麻醉後發死等なり。其後「クロロホルム」麻醉ノ後發死症例、同實驗的研究其他發表せる論著夥多あり。出身地は東京府西多摩郡平井村にして、明治十七年生る。壯齡知命に入る二歲學究的純眞なる學者にして、元氣益々旺盛、帝大教授として今や一段の貫祿を備え最も重望せらる。無趣味にして醫育と研究とを終生の天職として亦他事を顧みず、至誠以て公に奉ずる熱誠の士にして人格高潔也。京城府苑南洞六六に住む。

◇

上田溫良　△滋賀縣彥根町字一番にて外科を標榜して開業せる上田溫良博士は、大阪醫大系の外科學者にして、學位は京都帝大より獲得せる名醫博として其の手腕を稱せられ、今や牢固たる地盤を有して一流に在り。學歷より觀れば、滋賀縣立第一中學校を經て、大正三年大阪府立高醫を卒へ、直ちに同校助手を命せられ附屬病院外科教室勤務、次で同病院醫員兼務拜命、同八年十一月大阪醫大助手に被任、同九年四月秋田縣扇田公立病院長として赴任、同年九月之を辭し京都帝大醫學部專修科入學、鳥潟教授指導の下に外科學一般專攻、同十四年一月鳥取縣米子町博愛病院外科部長に就任、次で大阪府堺市立公民病院外科部長より臺灣總督府臺中醫院外科部長として赴任す、其間大正十三年十二月京都帝大にて學位受領、其後辭職歸鄉、現住地にて開業今日に至る。

△學位主論文は「細菌性特殊沈澱子ノ血淸學的性質ニ就テ　附抗體一元說及ビ抗體元一元說」にして、參考論文は、(1)容量的補體結合反應檢査方法及容量的補體結合反應微量檢査方法並ニ補體結合反應基礎的所見、(2)補體結合反應ヲ指標トセル虎列拉抗原ノ研究、(3)「コレラ」孤菌ニ關スル「イムペド、ン」現象の外三篇あり、其他論著夥多。出身地は現住地たる彥根町にして、士族上田安常の長男、明治二十一年生る。壯齡今や不惑に入る八歲、學究的溫厚の紳士、益々元氣にして診療に餘念なく、至誠以て仁術の爲め最善を盡し、其の天職なるを樂しむの士也。業餘の趣味としては遠足を好み、又植物栽培を道樂とす。

◇

若山要二　△東京市小石川區新諏訪町一三に外科、X線科を專門とせる若山病院あり、院長若山要二博士の經營にして、開業拮据十有餘年、今や牢固たる地盤を有し、嘖々たる好評を博す。氏の學歷より觀れば、山口縣立山口中學校より山口高等學校を經て、明治四十二年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに同大學佐藤外科教室助手勤務、次で麴町區木澤病院副院長として數年勤務の後、久原鑛業株式會社日立鑛山病院長として赴任、文部省醫師試驗委員拜命、大正二年日赤神奈川支部病院外科醫長就任、同十三年十二月東京帝大にて學位を授與せられ、大正十四年より現住所にて開業今日に至る。學位論文は「化膿性筋炎ノ發生ニ就テ」にして、他に論著夥多あり。遞信省囑託醫、區醫

師會理事たり。

△山口縣萩市の出身、舊藩士宇野弘義の二男にして、明治十四年生る、壯齡當に知命に入る五歳、元氣旺盛今や老大家として一段の貫祿を備ふ。性來學者肌の人にして、所謂血液O型の性格の持主として長短あるにあらざるか、圍碁と運動を趣味す。

◇

飯島清　△茨城縣土浦町に外科內科を專門とする霞浦病院あり、院長飯島清博士經營の私立病院なり。氏は茨城縣の出身、明治二十年生にして、京都帝大醫科大學を大正四年卒業し、學位論文「神經切斷後ト腱切斷後トニ起ル筋萎縮ノ比較研究」を提出して、大正十四年一月京都帝大より學位を獲得せる整形外科學者として錚々たる者也壯齡今や四十有九歳にして、學識、手腕相俟つて圓熟の域に達し最も重望せらるゝ時に在り。

◇

村上德治　△東京第一衞戍病院附にして外科診療主任たる陸軍二等軍醫正、村上德治博士は、京都帝大系の外科學者にして、陸軍々醫界に最も囑望せらるゝ一人物として玆に推奬す。博士は新潟縣立柏崎中學校 七高を經て、大正八年京都帝大醫學部を卒へ、直ちに陸軍見習醫官を命ぜられ、近衞步兵第二聯隊に配賦せらる、九年六月任二等軍醫、補京都衞戍病院附、十一年十二月任一等軍醫、十二年四月京大大學院へ入學を被命、故伊藤隼三教授、鳥潟隆三教授、伊藤弘教授等指導の下に外科學を專攻す、十四年四月京都衞戍病院外科及騎兵第二十聯隊附に補せらる、十五年一月京都帝大にて學位を授與せられ、陸軍々醫學校教官を經て現職に在り。

△學位主論文は「關節遊體ノ成因ニ關スル實驗的研究」にして、外傷論及び炎衝論の二篇より成る。參考論文は、(1)內臟神經節刺戟ニ由ル實驗的糖尿、(2)象皮腫ニ對スルコンドレオン氏手術ノ治療的價値、附所謂「ビツチン」病ニ就テ、(3)鼠蹊ノ睾丸ノ手術ニ就テ、(4)ホヂキン氏病ノ原因ニ就テ、(5)腹壁ニ發生セル畸形腫ニ就テ等なり。

△博士は新潟縣刈羽郡刈羽村字刈羽小林平次郎の三男にして、明治二十六年生る。潮水は其號にして、俳句(層雲派)を能くし、文藝趣味豐か也。壯齡漸く不惑に入る三歳、意氣益壯にして意志强固、研究心旺盛にして精研に今猶餘念なし、學究的有爲の資に富む前途や洋々たり、切に自重加餐を祈る。麻布區富士見町四三に住む。

◇

西田次磨　△名古屋市中區長池町一ノ一七にて外科專門を以て開業せる西田次磨博士は、長崎醫專出身の外科學者にして、特に內臟外科を得意とし、學位は慶大より獲得せる名醫博として其の手腕を稱せらる。學歷より見れば大正三年長崎醫專を卒業し、同年十一月より京都帝大衞生學教室に入り、細菌學及び免疫學を研究し、同四年八月同教室を辭し、同年九月より九州帝大病理學教室に轉じ、病理學及び病理解剖學を研究す、同五年三月同教室を辭して東上、同年四月より東京外國語學校選修科に入り獨逸語を修め同七年三月退學す、同年四月九州帝大三宅外科教室勤務を被命、同八年八月迄勤務、同年九月より九年三月迄東京濟生會病院に勤務し、同九年四月慶大醫學部外科教室助手拜命、同十三年四月同學部講師となり、同十四年二月學位受領、爾來四谷區愛住町にて開業、四谷簡易療養所醫長囑託、其後釧路市浦見町にて開業の後、現住所に移轉開業今日に至る。

△學位主論文は「藥劑ノ創傷ニ對スル生物學的研究」にして、參考論文は、(1)胃ノ殺菌作用本態ニ關スル實驗的研究(2)癆孔ノX線檢査並ニ其造影劑ニ就テ、(3)創傷療法ニ於ケルデーキン氏液ニ就テ、(4)腹腔內寄生蟲性膿瘍ニ就テ等なり他に論著夥多。氏は福岡市下洲崎町の出身、士族西田熊吉の嗣子にして、明治二十四年生る。年壯の紳士にして、壯齡今や不惑に入る五歳、臨床家としては最も腕の冴え盛にて篤き信望を博す。多趣味の人にして、運動殊に柔道、水泳を好み、音樂を愛し、又時に旅行を樂しむ。

◇

角田博　△千葉縣北條町北條病院に在る角田博博士は外科を擔任す。博士は九大系三宅教授の門弟にして所謂九大派の名醫博たる外科臨床家として錚々たるもの也。氏は、一高を經て、大正十年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部助手に任ぜられ生理學教室勤務、同十二年三月より同學部三宅外科教室に轉勤す、昭和二年九月學位を授與せらる、其後大阪市大野病院を經て北條病院に就職今日に至る。

△學位主論文は「氣胸ニ關スル實驗的研究」にして、(1)一側外科的氣胸ノ家兎ト犬トノ間ニ危險度ノ差異ヲ生ズル條件、(2)氣胸ノ大循環系統血統血壓ニ及ボス影響ニ就テの二篇より成る。參考論文は、(1)腸結核ニ關スル統計的觀察、(2)牡蠣ノ心臟ニ對スル「アドレナリン」ノ作用ニ就テ等なり。出身地は千葉縣北條町にして、明治二十八年生る、年齒漸く不惑に入る一歳、學究的溫厚の紳士也。手腕壯熟の域に入り、臨床家としては最も活躍を要するの時にあり。診療と研究との外何等の趣味を有せず、一意專心、唯だ孜々として其の職務に勵精し、以て仁術に最善を盡すを唯一の樂しみとする熱誠の士也。猶前途洋々、折角の努力奮盡を望むや切也。千葉縣北條町北條に住む。

◇

桐原眞一　△名古屋醫大教授として桐原外科の今日あらしめたるは桐原眞一博士也。獨り學內の重鎭たるのみならず、外科界現代の一權威たるべし。氏は大阪府の出身、明治二十二年生にして、大正四年東京帝大醫科大學を卒へ、學位論文「人類血液ニ於ケル同種血液反應ニ就テ」(獨逸文)を提出して、大正十四年二月東京帝大にて學位を受領せり、其の今日あるもの博士の面目を語るに充分也。學究的純正なる學者肌の人にして、有爲の將來を最も囑望せらるゝ最高學府の一人物として敬意を表し、玆に推奬す。名古屋市中區御器所町稗田甲六一に住む。

◇

岩田清臣　△埼玉縣比企郡唐子村上唐子に著名なる岩田病院あり、院長岩田清臣博士の經營にして、外科、整形外科を專門とし、博士獨特の手腕は、犀利にして鋭敏なるメスの評判と相俟つて、益々近鄕の人氣を焙り、開業日尙淺きにも拘はらず、近來著るしく發展の盛況を現はし居れり。氏は千葉醫專の出身にして、京大教授故伊藤博士同鳥潟教授、同磯部教授等指導の下に研究の結果、京都帝大より學位を獲得せる少壯醫博として名聲を馳せ、今や氏の獻身的努力と其の手腕に對し、大衆より多大の信賴と尊敬とを受けつゝあるは、地方診療界の爲め大に人意を强からしむ。

△更に氏の略歷を概括すれば、大正十年千葉醫專卒業後、日赤群馬支部病院外科勤務(醫長桑原政榮博士)、同十二年十一月より京都帝大醫學部整形外科教室にて伊藤教授の指導を受く、昭和二年十月日赤京都支部療院外科擔任、同年十二月京都帝大醫學部講師囑託、在職のまゝ大阪市財團法人北野病院整形外科々長を被命、同三年二月京都帝大にて學位受領、同年九月長岡市長岡病院外科醫長を被命、同六年五月日赤新潟支部病院副院長兼外科醫長を被命、同九年六月退職、歸鄕開業今日に至る。

△學位主論文は「固定繃帶ニ因スル筋攣縮並ニ筋萎縮ニ關スル實驗的研究第一回報告、(2)同第二回報告、(3)固定繃帶ニ因スル筋萎縮ノ成因ニ關スル實驗的研究、(4)固定繃帶ニ因スル筋萎縮ニ對スル交感神經切除ノ影響ニ就テの四篇より成り、參考論文は、(1)骨折ノ觀血的手術ニ際シ骨端固定ニ使用セラル可キ諸種異物殊ニ金屬ノ比較研究第一報筋肉內異物挿入實驗、(2)同上第二報骨膜上異物移植實驗、(3)同上第三報假骨形成ニ及ボス異物ノ影響、(4)同上第四報骨髓內異物挿入實驗、(5)關節疾患ニ因スル筋萎縮ノ成因ニ關スル實驗的研究、(6)筋ノ異常固定ニ際スル筋「クレアチン」消長ニ就テ、(7)去腦硬直ニ就テ等なり。著書「實用看護學教科書」(上下二卷、吐堂屋發行)。

△埼玉縣比企郡唐子村上唐子岩田六郎の長男、明治三十二年生る、年齒未だ三十有七歲也。臨床家として多年の經驗を積み、少壯の意氣と共に今や手腕漸く壯熟して最も多量の分別を有す。讀書家にして研究と醫療そのものに趣味を集中して今猶卷を放たず、拮据黽勉、精研修養相俟つて、仁術の爲め一路邁進しつゝある前途は益々輝かし。

◇

熊埜御堂 進　△熊埜御堂外科の今日あらしめたる金澤醫大教授熊埜御堂進博士は、東京帝大系の外科學者として錚々たるものにして、嘗て獨逸に留學し、學位論文「胃ニ至ル神經ト胃潰瘍治癒トノ關係」を完成、北海道帝大醫學部へ提出して、大正十四年二月學位を得、其の今日ある位地と名望を博せるもの、名醫博として其の大なる存在を認められ、今や學內に最も囑望せらる中堅たるのみならず、外科界に逸すべからざる現代の一權威として玆に推奬し、敬意を表す。氏は大分縣の出身にして、明治二十四年生れ、當年四十有五歲の働盛也。愼重なる學者肌の仁也。金澤市下本多町二番町一二に住む。

◇

加藤 清一郎　△大連市三河町四に新興せる外科專門の加藤病院あり、院長加藤清一郎博士の新設せる診療所にして、外科一般及び整形外科を專門とし、特に運動器（主として四肢脊柱）外科を最も得意として內部の設備を整へ博士自ら診療に當面して獨特の手腕を揮ひ、圓熟練達せる手術の好評は、篤實溫厚なる氏が性格と相俟つて益々人氣を獲得し、開業日尙淺きにも拘はらず、近時著るしく醫務の繁忙を極め、遠近よりの外來患者日々輻輳して門前常に市をなすの盛況を呈しつゝありと聽く。

△博士は三高を經て、大正十三年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部助手に任ぜられ整形外科學教室勤務を命ぜらる、同十五年三月同助手を免ぜられ、直ちに福岡市外科補仁堂病院勤務、昭和二年二月同病院を辭し大阪市外科住田病院（院長住田正雄博士）に勤務す、同四年六月より六年四月迄大阪帝大專攻生として病理學教室に於て主に骨病理學を專攻し、昭和七年八月大阪帝大にて學位を授與せらる、其後住田病院を辭し現住地にて開業今日に至る。斯間、恩師住田正雄教授及び大阪帝大片瀨淡教授に師事して整形外科及び病理學を專攻せり。

△學位主論文は『「アチドージス」性骨病犬ニ於ケル胸廓ノ變化並ニ「ローゼンクランツ」ノ發生ニ關スル實驗的研究』にして、參考論文は、(1)シュラツテル氏病ニ就テ、(2)同上追加、(3)人工的關節長軸固定ノ關節體特ニ骨端線及ビ關節頭骨ニ及ボス影響、並ニ其ノ臨床方面ニ就テ、(4)胸骨並ニ椎體長徑成長ニ就テ（及ビ蔗糖或ハ Ca 鹽ノ其等化骨作用ニ及ボス影響）、(5)異常體質ト骨折治療現象、(6)九大整形外科教室開講以來約十二ケ年間ニ於ケル觀血的骨縫合ノ治驗等なり。就中「シュラツテル氏病ニ就テ」及び「同上追加」は博士の會心の著作にして、氏の論文中の最も得意のものとして特筆すべき也。

△博士の感想に曰く『學界に於ける力量評價は一つに「アルバイト」如何による可くして、政略、情實、宣傳、廣告によるべからず』云々。至言なる哉の感を深うす。氏は京都市下京區西院土居ノ內町加藤清七の長男にして、明治二十九年生る、當年漸く不惑に達す、學究的少壯の紳士也。臨床家としての手腕技倆は、旣に多年の經驗と相俟つて多量に有し、今や學識、手腕、人格共に圓熟の域に入り、愈よ獨立の舞臺に躍進せる向後の活躍は、多大の期待を以て大に囑望せらる。進取的氣象に富み、快活にして人に厚く、親切にして同情あり、又能く公共の事に盡す。趣味としては戶外運動及び音樂を好む。京都帝大經濟學部教授小島昌太郎博士とは近親の間柄なり。折角の努力奮勵を望む。

◇

志村國作　△水戶市日赤茨城支部病院副院長兼外科部長としての志村國作博士の名聲は、旣に其の地方の診療界に喧傳して餘す所なし。氏は神奈川縣立第三中學校より七高を經て、大正七年東京帝大醫科大學を卒へ、引續き

同大學病理學教室に入り、同九年四月近藤外科教室に轉じ、同十一年四月衞生細菌學教室に移り、同年七月歐米留學の途に就き、獨逸伯林大學病理學教室ルバルシュ教授の下にて研究し、同時に外科學教室オーガストビール教授に師事し、大正十三年歸朝後直ちに東大近藤外科教室に入り、同十四年三月東大にて學位を得、同年四月より現職に就き今日に至れり。

△學位主論文は「腦內水腫ノ實驗的研究」にして、原著は獨逸文なり。參考論文は、(1)炎性ニ及ボス中樞及ビ末梢神經ノ影響ニ就テ、(2)生物體內ニ於ケル血色素ノ沈着、排出及再吸收ニ就キテ及ビ其鐵色素沈着トノ關係ニ就キテノ實驗的研究等、何れも獨逸文なり。其他論著夥多。出身地は神奈川縣中郡大根村北矢名にして、明治二十五年生る、志村宗平博士の弟也。年齒今や不惑に入る四歳、年壯にて學識、手腕、人格共に圓熟して最も得意の時代に在り。勵精恪勤、稀に見る至誠の士也。水戸市下川崎町三五一に住む。

◇

新藤輝雄　△山口市新道に新裝せる外科新藤病院あり、院長新藤輝雄博士の經營にして病床數十八、レントゲン其他理學的療法及び一般の設備を完備す。患者には大概自炊の方法を採らせて時代の要望に應ぜんとする主義也。博士獨特の手腕は既に一般に認められ、特に其の最も得意とする內臟外科に至りては他の追隨を許さず、簡易化せる經營の好評と相俟つて益々近鄕の人氣に投じ、開業日尙淺少なるにも拘はらず、近時著しく醫院の發展を實現化して盛況を極めつゝあり。

△博士は大正九年岡山醫專卒業後、同年六月より廣島縣立病院勤務、同十年八月より大阪回生病院勤務、同十五年七月より大阪市港區南境川町にて外科開業、昭和三年七月より岡山醫大泉外科教室專攻生として外科學專攻、同六年四月同大學にて學位受領、同六年四月より山口縣三田尻弘中病院副院長兼外科部長就職、同七年五月より現地にて外科病院開業今日に至る。斯間主として母校の恩師故泉五朗教授に就て研究し、特に內臟外部に長ず。

△學位主論文は『「ビリルビン」腸管循環ニ關スル實驗的研究』にして、參考論文に、(1)肝機能判定ニ對スル血清及十二指腸膽汁「ビリルビン」ノ意義ニ就テ、(2)諸種肝臟疾患ニ於ケル十二指腸膽汁、膽汁酸ト「ビリルビン」反應トノ關係、(3)肝臟膽汁採取法ノ一新術式ニ就テ（榊原亨、內田卜共著）(4)副腎移植を併用セシアヂソン氏病ノ治驗例（榊原亨共著）、(5)興味アル腎臟水腫ノ一例等あり。

△山口縣豐浦郡豐田下村大字中村の人、明治二十五年生る、當年不惑に入る四歳也。年壯にして多年の經驗と共に、今や學識、手腕、人格相俟つて愈よ圓熟の域に達し、多大の信望を博す。讀書家にして精研修養克く勉め、書見を業餘唯一の樂しみとし、又時に圍碁に親しみて其の日の勞を慰す。學究的溫厚の紳士にして、有爲の臨床家としての人格を尊重す。

◇

片山國幸　△慈惠會醫大教授にして得意の整形外科を擔任し、傍ら東京市牛込區東五軒町五一に整形外科、接骨科、X線科を標榜して獨立開業せる片山國幸博士は、世人周知の如く、我邦法醫學の先覺者にして、精神病學の初期に與つて功勞あり、又禁酒家で著名なりし故片山國嘉博士の嗣子にして、東大系の田代整形外科を巢立ちたる名醫博として整形外科を以て立ち、今や斯科の大家として日本醫學の功勞者たる國嘉亡翁の後を恥づかしめぬ、良教授たり又良醫たるの貫祿を備ふ。

△博士は明治四十三年東大醫科の出身にして、傳研の宮川、東大の增田、前名古屋醫大の藤井、千葉の高橋等々の諸博士と同期生也。卒業後整形外科を志して母校の田代教室に入り、後ち轉じて和泉橋病院に入りて研究を積み、學位主論文「坐骨神經切斷家兎ノ血液並ニソノ下肢筋肉ノ血清化學的研究」を完成、母校に提出して大正十四年七月學位

を受領せり、その前後より慈惠會醫院に迎へられ、同校の昇格と共に慈惠醫大教授となり今日に及べり、その傍ら自宅にて開業一般の診療に從事し居れり。明治十七年の生にして、壯齡今や知命に入る二歳、元氣旺盛にして今猶精研に餘念なく、醫育と實地診療とに趣味を集中して亦他に道樂を需めず、至誠公に奉ずるの信念を以て唯だ其の天職なるを樂しむの概あり。性格は外科特有の男性的にして快活なり、思慮あり識見に富み、學士會などにても大に氣焰を昂げ中堅振りを見せて居るとの評判也。春秋猶豐かにして、前途洋々たるの秋、切に自重加餐を祈ると共に益々努力奮盡あらん事を望む。

◇

小田敬進　△岡山縣後月郡井原町一〇七四に外科專門を以て開業せる小田敬進博士あり、岡山醫大派の新人として最も囑望せられ、學位獲得後引續き泉外科にて研究中なりしが、教室を巣立ちて診療界に躍進して以來日尚淺きも、多年蘊蓄せる獨特の手腕を發揮せんとする前途の展開や頗る囑目に値す。

△博士の略歴より見れば、岡山縣興讓館中學校、松江高等學校を經て、昭和四年三月岡山醫大卒業、同六年九月廣島市內海病院外科醫長に就任、同年十二月同院辭任、直ちに岡山醫大泉外科助手として同教室に勤務の傍ら研究に從事し、同七年十月同大學にて學位を授與せられ、同八年九月開業す。斯間故泉伍朗教授指導の下に外科學一般を專攻せり。

△學位主論文は『「コレステリン」新陳代謝ニ關スル知見補遺並ニ實驗的研究』にして、參考論文は、(1)脾臟「ホルモン」ノ「コレステリン」新陳代謝ニ對スル影響、(2)單開胸術ニ據ル外科的肺結核療法ニ就テ、(3)後腹膜腔ヨリ發生セル交感神經形成細胞腫ノ一例、(4)非器質性成人幽門痙攣症ノ治驗例、(5)「メツケル」氏憩室ヲ內容トセル嵌頓「ヘルニヤ」ノ治驗、(6)野球ニ據ル肩胛骨々折ノ治驗例等なり。

△博士の感想に曰く、(一)醫育施設增設過多、(二)學位を研究方面に依り區別し、專攻科目修業年限の最少限を規定し、以て世人を學位崇拜より技術本意に甦らしめること、(三)非醫者を徹底的に掃蕩し之に體刑を附し、社會の誤れる偶像崇拜を覺醒せしむること、(四)醫藥分業に反對云々。

△博士は岡山縣後月郡芳井町大字梶江の人、小田寅の男にして、明治三十五年生る、年齒未だ三十有四歳、學究的少壯の紳士也。意志强固にして研究心に富み、切磋卓勵甚だ勉むる所あり。趣味としては洋畫、音樂、釣を好む。岡山縣後月郡芳井町大字梶江に私邸あり。

◇

江守彌次郎　△東京市豊島區池袋町池袋病院外科醫長として江守彌次郎博士あり。氏は福井縣の出身、明治十八年生にして、東大醫科大正三年の出身也、卒業後引續近藤外科教室勤務、同七年七月日赤富山支部病院外科醫長として赴任、同十年十二月之を辭して直ちに東大大學院入學、同十三年卒業、同年七月日本醫專教授兼外科醫長就任、同十四年十二月東大より學位受領、同十五年十一月より現職に就任今日に至る。學位主論文は『骨組織再生現象ニ及ボス「ヴイタミン」Aノ影響ノ實驗的研究』にして、他に論著夥多あり。運動と圍碁とを趣味す。好箇の臨床家として敬意を表す。自宅は淀橋區戸塚町二ノ七三に在り。

◇

伊東一生　△愛媛縣吉田町公立吉田病院長としての伊東一生博士の名聲は、既に其の地方の診療界に喧傳して餘す所なし。當病院は吉田町外五ケ村衞生組合立病院にして、內科、外科、產婦人科、小兒科、眼科を有する綜合病院として、當地診療界に於ける公共的最高の診療機關たり。同病院長としての博士の責任や決して輕からず、日々自ら率先して臨床に勵しみ、外科を擔任して獨特の手腕を揮ひ、併せて他科の擔當醫を督勵協力して益々院務の發展を圖り、診療手術の好評は氏が德望と相俟つて益々遠近の人望を博し、名實相伴ふ名病院長として大衆より多大の信

賴と尊敬とを受けつゝあり、地方診療界の爲め大に人意を强からしむるに足る。

△博士の學歴より見れば、大正十二年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部近藤外科副手となり、近藤教授退職後引續き青山外科に助手として勤務、同十五年四月愛媛縣吉田町公立吉田病院外科醫長として赴任、昭和五年四月内地留學として同病院より岡山醫大にて研究に從事せしめられ、同七年五月滿期歸院し、同年十月岡山醫大より學位を授與せられ、同年十二月より同病院々長に就任し現在に至れり。斯間、主として東大名譽教授近藤次繁博士、東大教授青山徹藏博士、岡山醫大教授緒方益雄博士等に師事して外科學を專攻せり。

△學位主論文は「過敏症ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は「過敏症抑制作用ニ關スル實驗的研究」の外三篇あり。氏の出身地は長崎縣南高來郡土黑村にして、明治三十二年生る。學究的溫厚の紳士にして、篤學者としての閲歴は氏が面目を物語り、同時に精勵恪勤、至誠の士として推奬に値す。年齒未だ三十有七歳、少壯の意氣と共に研究心に燃え、診療と研究とに趣味を集中して亦他事を顧みず、至誠以て公に奉じ「醫は仁術也」をモットーとす。賦性謹直にして寛厚能く人を容れ、後進を愛撫し指導に務む。將來有爲の臨床家として敬意を表し、茲に推奬す。愛媛縣吉田町北小路に住む。

◇

三村忠雄　△前長崎醫大助教授にして整形外科學擔任たりし三村忠雄博士は、姫路市光源寺前町二番地をトして、近く外科病院を新築、昭和十年九月落成と共に開業、外科一般の診療を開始せり。博士は京都帝大系新進の外科學及び整形外科學者にして、大學院在學中、專ら伊藤教授の親しき指導を受け、京都帝大より學位を得たる斯科界近來の名醫博也。軈て展開せんとする博士の將來は茲に獨立の基礎を確立し、洋々たる前途を語るに餘裕綽々たるものあり。

△博士は六高を經て、大正十四年京都帝大醫學部を卒へ、直ちに外科教室に勤め外科並に整形學を專攻す、十五年十二月三重縣志摩郡鵜方高砂病院に奉職、副院長に任ぜられ外科を擔任す（同病院初代外科醫長）、昭和三年十月同病院辭職、同年十二月京大大學院入學、整形外科學專攻、六年十二月退學、引續き整形外科教室に勤務す、七年八月任長崎醫大助教授、同年十月學位を受領す、同九年十二月辭職、同十年九月現住所に病院新築開業す。

△學位主論文は「固定繃帶ニヨル筋攣縮ト壞疽トノ關係ニ就テ」にして五篇より成る。參考論文は、(1)交感神經ト迷走神經ノ接合ニ就テ實驗的研究（三篇）、(2)「ミエログラフイー」ノ實驗的研究（二篇）、(3)オスグート、シュラツテル氏病ノ原因ニ就テ、(4)黑色肉腫ノ一例ニ就テ等なり。

△博士は兵庫縣明石郡垂水町鹽屋に本籍を有し、同縣飾磨郡四郷村見野赤藤多一郎の三男、明治三十二年生れ、昭和五年三村に改姓す。年齒未だ三十有七歳にして意氣潑剌たり、學究的溫厚の紳士にして、志操堅實、柔道五段にして剛健の氣象に富む、平生の趣味としては柔道以外研究に熱心甚だ務め、今は開業勿々診療に余念なく大に將來に待つあらんとす。賦性穩健篤實、謙遜克く自抑して衒はず、恬澹として功名榮達を意に介せず、人と接するに親切にして能く愛し、己を虛うする態度の奥床しさは人に敬慕せらる。

◇

中村喜重　△前の陸軍歩兵學校附兼同校研究部々員より昇進して、現在にては陸軍大學校附兼陸軍々醫學校部員として在勤中の中村喜重博士は、千葉醫大派の名醫博中の錚々たる外科學者にして、今や陸軍々醫界に於ける新進教授として、最も囑望せらるゝ新人物也。氏の學位論文は「三叉神經（節前）切斷ノ該神經領域ニ及ボス影響ニ就テ」が主論文にして、外に參考論文として、(1)胃切除術式ノ檢討、(7)胃骼筋ニ多發セル癌腫ニ就テ、(3)「マクロシクマ」ニ因ル「イレウス」ノ治療法、(4)診斷困難ナリシ胃、十二指腸癌ニ就テ等あり。本論文に對する學問的批判は既に學界に定評あり。

△博士の學歷より見れば、昭和二年三月千葉醫大卒業、同年六月任陸軍二等軍醫、補近衞步兵第四聯隊附、同年八月陸軍々醫學校入學、同三年七月同校卒業、同年十月補千葉衞戍病院附、同五年四月千葉醫大研究科入學、同七年三月同科修業、同年四月補陸軍步兵學校附兼同校研究部々員、同年十一月千葉醫大にて學位を授與せられ、同九年三月補仙臺衞戍病院附、同十年八月現職に補せられ今日に至る。斯間主として母校の恩師高橋信美及び伊東彌惠治兩教授指導の下に研究せり。

△博士は千葉縣山武郡豐海村眞龜の人、中村吉德の三男にして、明治二十八年生る。學者肌の人にして物に動せず、名利に恬澹にして自信に强く、少壯の意氣益壯にして研究心潑剌たるものあり、今は醫育と研究とに趣味を集中して亦他を顧みず、一意專心、至誠奉公の念に燃ゆる純潔の學者たり。而かも春秋猶頗る豐富にして、洋々たる前途は益々有爲多望なるの秋、幸ひ健康にして、軍醫界の爲め折角の精研努力あらん事を望むや切也。

◇

田中義憲　△競爭激烈なる浪速診療界に割據して以來、東淀川區國次町二九八に自己經營の第一診療所を設け、內容の充實と相俟つて、外科を標榜して躍進的に發奮勵精しつゝあるは田中義憲博士也。開業日尙淺くも、博士獨特のメスの好評と、至誠以て公に奉ぜんとする熱誠努力とは、漸次獨自の地盤を獲得して堅實なる發展振りを示し今や拔くべからざる繁榮を實現しつゝあり。學系は慈惠醫專出身の外科學者にして藥理學の造詣深く、大阪帝大より學位を受領せる名醫博たる一人物也。

△更に學歷より概括して見れば、大正九年慈惠醫專卒業後入隊、補近衞步兵第三聯隊、野戰重砲兵第六聯附隊を經て大正十二年任陸軍二等軍醫、依願豫備役に編入せらる、同十三年より城南病院副院長として勤務の傍ら、大阪帝大へルテル外科にて研究、昭和三年末より大阪帝大藥理學教室にて研究を續行す、同七年十二月學位受領、爾來現住所にて開業今日に至る。斯間恩師長崎仙太郎教授に就て藥理學を專攻せり。

△學位主論文は「中間代謝ニ及ボス諸種痲醉劑ノ影響ニ就テ」にして、參考論文としては、(1)「ノイリン」ノ蛋白質新陳代謝ニ及ボス影響ニ就テ、(2)「バラオシ、フエテルーブレンツートラウベン」酸並ニ dl「オキシフエテル」乳酸ノ灌流臺肝出糖及ビ家兎血糖ニ及ボス影響、(3)健常及飢餓家兎ノ血淸沃度酸値ト殘餘窒素並ニ一二單糖類ノ輸入ニ因スル其變化、(4)血淸沃度酸値及殘餘窒素ニ及ボス二、三內分泌臟器劑ノ影響ニ就テ、(5)右旋性「アルギニンメチールエステル」ノ作用ニ就テ等あり。

△出身地は島根縣八束郡津田村大字西津田にして、明治二十五年田中龜太郎の二男に生る。當年漸く不惑有四歲にして、年壯銳氣、臨床に多年の經驗を有し、今や手腕、學識、人格共に圓熟の域に入る。不斷の勵精努力は、軈て成功の大なるものを嚮らすべき前途あるを期待せらる。居常の趣味としては、研究と醫療そのものの外特筆すべきものなきが如し。將來有爲の資に富む臨床家としての前途を期待すると共に、折角の努力奮鬪を望むや切也。

◇

今牧甲子男　△前の津市館病院長として活躍し、嘖々たる名聲と共に其の玲瓏たる手腕を稱せられ、外科の大家として仰がれたる今牧甲子男博士は、現在松坂市魚町に於て獨立開業し、其の專門とする外科領域に獨特の手腕を發揮し、孜々營々として獨自の地盤を開拓しつゝあり。學系は新潟醫大專門部の出身にて、母校より學位を得たる篤學の名醫博也。研學多年の結果、專門的智識の堪能なるは言はずもがな、臨床的經驗に富み卓越せる手腕を有す。今や獨立の活舞臺に躍進して堅實なる發展を遂げつゝあるは刮目に値す。感想に曰く「人として此世に生を受けたる以上此世に何等かの足跡を印して人生を終りたいと云ふのが私の念願である醫者として立つた私は此世に百萬の富を殘す事も高貴なる名譽を殘す事も不朽の藝術品を殘す事も出來ない、そこでせめて醫學の研究に進み多少とも業績を殘

し微かながらも世界醫學文獻に自分の名を留むると云ふ事が無力なる私に出來る唯一と考へた、之が私の學位論文完成の動機である」云々。

△博士の學歴及び閲歴を顧みて、之を公開すれば博士は大正十一年新潟醫大專門部を卒へ、同大學外科學教室に入り助手として故池田教授及本島、中田教授に師事する事四年、大正十四年十一月三重縣桑名病院副院長に就任し專ら外科を擔任し、昭和四年三月辭して二度母校に歸り、川村、中田兩教授の指導の許に腫瘍學の研究に從事し、昭和七年七月三重縣津市館病院長に就任せり、同年十二月新潟醫大にて學位を受領し、退職後現住地に開業今日に至る。

△主論文は「可移植性內被細胞腫ニ關スル實驗的研究及組織培養ニ據ル內被細胞腫ノ研究」にして、外に參考論文としては、「犬腫瘍ノ比較病理」外三篇あり。

△博士は長野縣下伊那郡伊賀良村の人、明治三十一年生る、當年三十有八歳也。學究的溫厚の紳士にして、其の閲歴は博士の前半生史に精彩を放ちて見ゆ、手腕漸く壯熟して最も得意の時代に在り。勵精家にして其の診療に臨むや熱心甚だ力め、誠意親切を以て終始し、患者をして信頼と敬慕の念を起さしむる德を有す。賦性篤實溫厚、臨床家としての特徴を具備するを多幸とす。趣味としては、スポーツ、洋畫、讀書を好む。今猶臨床の餘暇研究を捨てず、讀書精研修養相俟つて、研學切磋甚だ勉むる所あり。人格の尊重を高調するの今日、博士の如きは學德兼備せる人物として推奬するを慶ぶ。

◇

大武　喜代治　△多士濟々たる海軍々醫界に於ける少壯醫博にして、錚々たる外科學者として最も嘱目せられつゝある海軍々醫少佐大武喜代治博士は、現在横須賀海軍病院に於ける中堅にして、外科長として活躍し、內外相呼應して多大の信望を博しつゝあり。學系よりすれば、氏は金澤醫大に屬し、海軍々醫學校出身の恩賜銀時計組の秀才にして、專攻は外科の外、耳鼻科及び婦人科にも長ず、斯間の指導教授は主として東大の竹內教授、海軍の石原、長田比企、三島の各博士にして、學位は東京帝大より獲得せる新進人物也。

△更に氏の略歴を概括して公開すれば、大正七年六月金澤醫專卒業直ちに海軍入籍、同九年任海軍々醫中尉、同十二年任海軍々醫大尉、昭和三年海軍々醫學校高等科卒業の時、成績優等に付銀時計下賜せらる、同年十二月任海軍々醫少佐、同時に横須賀海軍病院外科長に任ぜられ、同年同月東京帝大にて學位を授與せられ、現今に至る。

△學位主論文は「葡萄狀球菌ノ生物學的性狀研究」にして三篇より成る。參考論文としては、(1)一種ノA型「バラチフス」菌ニ就テ、(2)酵素ヲ應用セル寒天培養基ノ再製法ニ就テ、等あり。

△感態の二、三を披瀝して曰く(一)政黨政治の傀儡に依る醫學校設立を絶對に反對し、醫師の人口增加と不平均なる過剩を防止せんとす。(二)如何はしき醫育機關の現存する今日は、新卒業生に對し當分の間、嚴正なる國家試驗に合格せるものに限り醫師たるの資格を與ふる事最も緊要なり。(三)非醫者の根絶を期する事急務とす（柔道技師に接骨術の開業權を附與するが如きは言語同斷なり）。

△博士の出身地は福井市佐佳枝上町にして、明治二十八年生る、當年漸く不惑有一歳也。少壯の意氣益壯にして研究心潑剌たるものあり、研究と醫療そのものに對しては多大の興味を有し、熱心と誠實とを以て診療に臨むの餘暇、孜々として精研修養相俟つて研學切磋甚だ勉むる所あり。賦性謹直にして、至誠公に奉ずるの念に篤く、勵精努力主義をモットーとする概あるを觀る。平生人に接し後進を待つに、懇切にして寛容なるは、將來を大ならしむる人格者たるの感を深からしむ。業餘の趣味としては庭球と麻雀なりと聽く。春秋猶豊富なるの秋、幸に健康にして、爲國家益々努力奮盡あらん事を望むや切也。横濱市外金澤八景聚綠庵に住む。

◇

安達安

△陸軍一等軍醫安達安博士は現に歩兵第六十一聯隊に在り。大阪醫大出身の外科學者にして、卒業後陸軍々醫界に出仕して以來、外科修學の傍ら專ら觸接免疫に關する研究を進め、學位論文は主として夜間祭日休日を利用して、恩師現堺市民病院長武鈕宜博士指導の下に實施せしものにして、之を大阪帝大醫學部へ提出、恰も興安嶺作戰に齊々哈爾出發の前夜教授會を通過せる結果同大學より學位を受領せり。要するに氏の此の研究は、氏が軍務に奉職の餘暇に許可を得て、職に忠實を盡しながら靜かに日毎夜毎に眞劍に努力研鑽せるありのまゝ發表せるものにして、その獨學不覇の精神と、不撓不屈の努力とは、立志傳的篤學の士としての範を示すに足り、斯間氏の面目を語るに充分なり。たま〳〵氏の感想を聽くに、博士曰く「いづれの世界も然あらんも、活動舞臺に人數が多くなりますと各自の本分と不知不識の間に遠ざかる樣な氣がいたします、醫界もどうもさうなりつゝあるのではないかしらと思はれます醫術國營もさけばれてゐますよいことでありますが、いかに組織を改變いたしましても各自が靜かに反照しつゝ進むのでなければ一妄去り一妄現で何の効もありませんし」云々。氏の眞面目さを語りて餘蘊なし。

△博士は大正十四年大阪醫大卒業後、見習醫官として歩兵第三十七聯隊に入隊、同年六月二等軍醫に任官し、善通寺衞戍病院附となる、昭和四年三月一等軍醫に進級、同年四月大阪醫科大學研究科に入學を命ぜらる、ヘルテル、小澤凱夫教授及び武鈕宜博士の指導を受け、外科修學の傍免疫に關する研究をなす、昭和六年騎兵第四聯隊附となり、七年八月鐵嶺衞戍病院附として出征し、同年十月關東軍野戰病院長として野戰勤務に從事し東邊道興安嶺吉林東境に流轉す、翌八年二月公主嶺陸軍病院長に轉じ、九年八月歩兵第六十一聯隊附となり歸還す。斯間、學位主論文「觸接免疫知見補遺」及び參考論文「觸接免疫ニ關スル研究」十篇を大阪帝大に提出して、昭和八年一月學位を受領せり。

△博士は茨城縣稻敷郡大須賀村脇川靑野敬三郎五男にして、長村長竿安達仙太郎（叔父）の養子となる、明治二十八年生也。眞面目なる學究的好學の士にして、年齒漸く四十有一歲、少壯の意氣に燃え興學心に富む。勵精恪勤、至誠以て國家に奉じ、熱心克く忠實を盡し以て天職と爲すの概あり。而かも性來謙讓にして自己の識學を衒はず、偏に恩師先輩の助力を感謝し、淡々として己れを薄うし、寛厚克く同僚に親しみ、又能く後輩を愛撫す。强ゐて言へば可なり短氣の方なれど、數年來禪書を愛讀して自抑するに勉めつゝあり。趣味としては擊劍を好み心身を鍛錬す。家庭には妻いしとの間に三男一女あり。横須賀海軍共濟組合病院婦人科、根本衞博士とは親戚なり。和歌山市西濱一一五に住む。

◇

長井忠

△大阪市東區北久大郎町一丁目に、外科界の泰斗住田正雄博士の經營する外科住田病院あり、浪速診療界に頭角を拔き關西外科界の一勢力たり。新進の長井忠博士は副院長として克く院長を輔佐し、博士獨特の新手腕を發揮して餘す所なく、殊に其の最も得意とする整形外科、寧ろ運動器外科及び畸形の外科領域に就ての犀利なるメスの評判は嘖々たるものあり。博士は九大系の外科學者にして、恩師住田正雄博士に多年師事して整形外科を、又大阪帝大教授片瀨淡博士に就きて病理學を專攻し、大阪帝大より學位を獲得せる近來の名醫博也。學位論文は既に學界に定評あれば贅せずもがな、研鑽多年、學理と共に實地の經驗に富み卓越せる手腕を有す、其の今日ある博士の面目を語るに充分なり。感想に曰く「四方八面ドツチを見ても、しかつめらしく一人前の大人の樣な顏をしてゐるのが面白く、我々中々大人になれない者からすれば羨ましい樣でもあるけれ共、皆が皆モツトこの童心に歸つて、每日小學校へ通つてゐるやうな心算になつたら、世の中の進歩も多少早からうし一緒に遊んでも愉快だらうと思ふ」云々。博士の心境を物語りて痛快を覺えしむ。

△博士は大正十四年九州帝大醫學部卒業後、整形外科教室に入りて住田博士に從ひ、間もなく住田博士に從つて大阪外科住田病院に來り現在に及ぶ、その間阪大醫學部病理學教室片瀨教授に師事すること二ケ年、昭和八年三月大阪帝大より學位を授與せらる。

△主論文は「榮養ノ創傷治癒ニ及ボス影響ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)各種養素ト實驗的バロー氏論、(2)各種養素ト胸腺トノ相關ニ就テ、(3)骨肉腫剔出後ノ廣汎ナル骨移植ニ就テ、(4)大腿骨頸部骨折ノ治療法トソノ治驗、(5)大陽光線ト創傷治癒、(6)血液ノ「アナドージス」ト「アルカロイド」ニヨル副腎內「アドレナリン」含有量ノ消長、(7)頸肋骨ニ就テ等なり。著書には、(1)浪華名醫列傳、(2)日本整形外科疾病史（一部發表）等最も著はる。

△博士は靜岡縣周智郡城西村奥領家長井米吉の長男にして、明治三十三年生る。年齒未だ三十有六歳、少壯の意氣に燃え、研究心潑剌たるものあり。其の今日ある閲歷は博士の前半生史これを語りて餘蘊なく、今は腕の冴え盛りにて最も得意の時代に入る。殊に勵精恪勤の士にして、學究的溫厚の少壯紳士たる氣品を備え、又眞面目なる臨床家としての特徴を具備す。其の患者に對する態度の熱心忠實にして親切なるは評判にて、篤き信望を博する所以かと思はる。性格より見たる長所としては、純眞にして物に熱し易く、何でも彼でもうんと遣る主義にて、徹底的に成し遂げる熱と力とにあるが如し。研究以外に古典籍の聚集に興味を有し、日本醫典特に外科に關する古典の聚集は關西にその右に出づるものなし。閒說、北海道の關場博士とは常に交歡文通あり、殊に外科に關する限り東の關場、西の長井と自他共に許す評判なりと。南涯、醉堂、亞米齊等を號とす、又スポーツ、長唄等を好み、酒を嗜好す。大阪市住吉區昭和町東四丁目三四に住む。

◇

岩藤良秋

△住友別子鑛山株式會社醫務職員たる岩藤良秋博士は、現在別子住友病院山根分院外科勤務、博士獨特の手腕、聲望は、不斷の勵精努力と相俟つて內外の信用を博す。學系は岡山醫大派にして、恩師津田誠次教授に就て外科學を專攻せり。特に內臟外科及び外傷外科を最も得意とし自信を有す。住友病院は別子鑛山株式會社、住友化學工業株式會社、住友機械製作株式會社、水力發電株式會社、アルミニユウム株式會社等の住友連系會社職員、勞働者の診療を主とし、併せて外部患者の診療を行ふ當地方診療界に於ける最高の診療機關たり。住友病院本院（新居濱所在）及び同山根分院は各科を有し、地方赤十字社病院又は縣立病院に比し、內容設備に於て優るとも劣ることなし。

△更に學歷より見たる博士は、岡山縣立一中より松江高校を經て、昭和三年三月岡山醫大を卒へ、直ちに日赤香川支部病院に奉職、同四年九月迄勤務、それより直ちに岡山醫大津田外科教室副手、同七年十一月同大學助手となり、同年同月より現在に至る迄現職にて別子住友病院勤務、斯間昭和八年四月岡山醫大にて學位を授與せらる。

△學位主論文は「實驗的急性腹膜炎ト肝臟病理組織學的所見」にして五篇より成る。參考論文は、(1)慢性炎症性網膜腫瘍ニ就テ、(2)正中神經ニ發生セル巨大惡性神經腫瘍及レツクリングハウガン氏病ニ就テ、(3)側頸部血囊腫ニ就テ、(4)脊椎「カリエス」及其他二、三外科的疾患ニ於ケル腦脊髓液高田、荒氏「フクシン」昇汞反應ニ就テ、(5)再ビ「ノイタノーム」ニ就テ、(6)同種血球凝集現象ヨリ見タル腫瘍細胞に就テ、(7)先天性胸骨破裂症ノ一例ニ就テ等なり。

△感想に曰く「實地醫家は何と云つても患者の病を治すのが目的だから腕を常に磨がいてゐなければならぬかと存じます、かくせば自然非醫者の横行も少くなる道理です。そしてもつと醫業を高尚にし、又醫師自身の人格を陶冶し他より輕侮されない樣にしなければならぬ」云々。氏は岡山縣上道郡古都村藤井堀野孫三の二男にして、明治三十六年生れ、現在本籍地たる岡山縣上道郡高島村國府市場岩藤丑衛の養子となる、年齒未だ三十有三歳の少壯紳士也。學究生活より診療界に躍進して以來、日尚淺くも、孜々として倦まざる努力勵精振りは、光る學位の前途を益々大ならしむる所以と見るべく、博士の將來を語るに餘裕綽々たり。有爲の資に富む臨床家としての博士や、幸に健康にして益々精研活躍あらん事を望む。讀書家にして書見を樂しみ、又將棋を趣味す。現住所愛媛郡新居郡角野村山根。

◇

竹村文祥　△札幌市カトリック天使院經營札幌天使病院に外科、婦人科部長として竹村文祥博士あり。本病院はベット百三十、醫師六人、他に北廣島分院、無料診療所、社會事業部、幼稚園、附屬印刷所の附帶事業を行ひ社會救濟事業の急先鋒として堂々たるものなり。博士は北海道帝大出身の新進にして、大學院在學中、恩師柳博士指導の下に外科學を、同今裕博士に就て病理學を專攻し、大學院を卒業して母校より學位を獲得せる少壯の名醫博として知られ、專門は婦人科及び外科特に內臟外科を最も得意とす。學位論文は既に學界に定評あれば贅せずもがな、如何に學究の該博なるかを語るに足る。而かも年齒未だ少壯にして研究心に富み、今や新手腕を發揮して獨特の領域に精進し、學を錬り腕を磨くに餘念なき前途は、洋々として博士の將來を語るに餘裕綽々たるものあり。

△博士は北海道帝大豫科を經て、昭和三年北海道帝大醫學部を卒へ、直ちに柳外科教室に入局し、研究の傍ら家計困難の故を以て札幌遞信診療所外科に隔日通勤す、而かも生計日に非なるを以て、同年七月鄕里に開業せるは實に同氏が、學生時代つとに精勵を怠らず「卒業したら獨り立ちが出來る」との信念を全ふせるものと云ふべし。昭和五年一月歸局し、大學院學生として診療の傍ら專ら腸閉塞の研究を行ひ、二ケ年にして大學院卒業、七年八月札幌市天使病院外科婦人科部長として就任、八年五月學位授與、以て現在に至る。

△主論文は「實驗的腸閉塞論」にして七篇より成る。外に參考論文としては、(1)唾石ノ臨床的知見補遺、(2)「ショック」ノ成因ニ關スル知見概觀、(3)メツケル氏憩室炎ニヨル絞扼性腸閉塞症例補遺、(4)外科的疾患ト沃度酸値、(5)本邦ニ於ケル外傷性腸管皮下破裂ノ統計的觀察、(6)「ヌペルカイン」腰髓麻痺ノ一年、(7)自家體驗蟲樣突起症例補遺、(8)「レントゲン」線放射ト血淸「クロール」、(9)氣管支喘息患者ノ血淸無機「イオン」ニ就テ、其他數篇あり。單行本として發表せるもの、(1)趣味の生體科學（誠文堂版絕版）(2)圖說小外科學（南江堂版）(3)人體遍路（平凡社版）(4)人體九ミリ半（最近刊）等。

△博士が目下執筆中の斷層を探るの一節を借りて氏の感想に代えんとす「醫師は唯物主義者であるか?。否、藥品が唯物主義なのである。どんな病氣でも藥とメスの對象になり得ると思ふ所に唯物主義といふ生活の剝製品が生れる。醫學的安心立命とは何か?。それは、人の問題であつて藥の問題ではない。病と藥とは對立しない。對立するのは人と人である。この故に醫師は病を慰すのみならず病める魂をも慰さねばならない。病めるが故にその人は健常のカテゴリーを脫却して心理的平衡を缺いて居る。醫師の患者に對する第一の認識はこゝから出發せねばならない。ダイナミカルな肉體の甦生に鞭うつマテリアリズムの擡頭は潛れたる心理的殺人を敢てするものと云へやう」云々。

△靑森縣南津輕郡町居村竹村由雄の次男にして、明治三十五年生る。年齒未だ三十有四歲、少壯の意氣に燃え、向學の精神鬱勃として禁ぜざるものあり。研究室を離れて診療界に進出するや、拮据黽勉、熱心克く誠意誠實を以てし、患者に對するに飽迄親切を盡す點は、博士の特徵として傳へられ評判極めて良し。賦性溫厚篤實、人と接するに快活にして懇篤なる一面には、謙讓にして恩師先輩の助力を說き、克く自抑して自己の才學を衒はず、淡々として己れを虛うする態度の奧床しき所に、高邁なる人格を窺はれ、人に敬慕せらるゝ德を有す。研究は博士の最も趣味とする所にして、業餘猶精研に餘念なく、其の最も得意とする生物學的外科領域に一路邁進しつゝあり。春秋猶頗る豐富なれば、向後の活躍と相俟つて前途の大成大に期待せらる。なほ氏は生來文筆に長じ所謂口も八丁、手も八丁、大學時代は北大辯論部主任、醫學部學友會主任として活躍し、現時寧日なき診療の餘暇幾多の著書あり、その一代の念願は綜合醫學の大乘的著述にありといふ、以てその意氣を知るべし。札幌市北十一條三丁目に住む。

◇

長峰恒信　△大分縣中津市殿町長峰外科醫院長長峰恒信博士は、長崎醫專出身銀時計組の秀才にして外科を以て起ち、九大教授石原誠博士に就て生理學を專攻し、九州帝大より學位を獲得せる名醫博中の篤學者也。殊に特筆

すべきは、氏が幼時家運沒落の後を承けて備さに辛酸を嘗めたるも、天資英才にして興學心に燃ゆる此の天才兒を空しく鄉里に埋れしむるに忍びずと、伯父竹尾文四郎氏の厚意により、小學校卒業後壹岐中學に進むに至り、其學資を補助されて在學中常に首席を以て終始し、第一回の卒業生として同校を卒ゆるや、壹岐の醫師井手康治氏の後援により更に進んで長崎醫專に入學するを得、同校も優等の成績を以て卒業するや、直ちに聘せられて小倉記念病院に外科擔任として赴任し、精勤十一年に及ぶや、時の院長副島博士の特志により九大醫學部に內地留學として入り研究する事を得、滿三星霜に亘る努力研鑽の結果、美事學位を得、多年の宿志を茲に始めて貫行し得たる厚志篤學の美點にあり。斯くて現住地に開業以來、日尙淺くも、十四名迄の入院設備と併せて診療室、手術室其他の設備成り、多年鍛へ上げたる博士獨特の手腕の好評は、美德に富む氏が聲望と相俟つて、益々遠近の人望を吸收し、近時著るしく發展の進境に向ひ、門前常に市をなすの盛況を呈しつゝありと云ふ。

△更に氏が學歷より概括して見れば、壹岐中學校を經て、大正七年長崎醫專卒業（銀時計授與）、同年より昭和三年迄滿十ヶ年、小倉記念病院外科奉職、院長副島豫四郎博士の特志に依り九大醫學部に內地留學研究、昭和八年五月學位受領、爾來現住地にて開業今日に至る。

△主論文は「保生液酸素量ノ小腸ニ對スル影響ニ就テ」にして、參考論文は、(1)先天性膀胱破裂症ニ對スル觀血的療法ニ就テ（副島博士共著）、(2)海猥小腸ニ對スル「アドレナリン」作用ニ就テ等の二篇なり。特に內臟外科に興味を有し、主として腸の研究に沒頭せり。

△博士の感想に曰く「每朝合掌向佛、世の恩人の有難さに泌々泣く。學界にも一般社會にも何一つ不平は無い、唯有難いばかりである。相當額の診療費ふみ倒しにも時に逢ふが、貧乏の味を十分に知る自分には、何もかも貧故のことゝ同情して請求等はしない。副島博士と言ひ石原教授といひ何も日本一の大家、自分は實に師匠運がよかつた、迚もあんな偉い大家學者には成れない、その點は全くあきらめて居る。自分は貧乏人の味方となり親切な涙もろい點では誰にも負けない日本一の仁の實地家となつて世、人、師匠達にせめてもの御恩返しを仕度い念願で一杯である」云々

以て博士の心境を物語り、博士の美德を察せらる。氏は長崎縣壹岐郡沼津村士族戶主長峰要助の長男にして、明治二十七年生る。學究的溫厚の紳士にして、篤學者として輝しき閱歷は燦として氏の仁術に一段の光彩を放ちて見ゆ。趣味は語學、麻雀、筑前琵琶を好む風あり。性來短氣にして潔癖の癖あるも、快活能く人に接し、同情あり溫情に富む殊に報恩謝恩の念に深く、氏を今日あらしめたる先輩恩人諸氏の肖像を壁間に揭げて、其溫容に接し「今日獨立して門戶を張り得たるは皆是等の恩人の餘澤のみ、故に一身の富貴を願はず、之等恩人への報恩として生涯を天職に奉仕したい、而して誠心誠意、愚直で働くのを見て下さい」と、日夕修養に努めつゝあるは誠に床しき限りにて、氏の云ふ愚直とは此の意味にありと云ふ、澆季の世稀に見る德操の士と言はざるを得ず。一面又氏は頗る教育に關心を持ち且つは母校へ報恩の一端として鄉里の小學校其他へ高價なる圖書、學校用品等絕へず寄贈しつゝあり、浮華輕薄の士への一服の淸凉劑として可也。家庭には多津子との間に四男一女あり。阪大耳鼻科教授山川强四郎博士及び廣島中央病院松尾信吉博士とは從兄弟半に當る。

◇

金澤哲郎

△廣島遞信診療所に於て、外科、整形外科を擔當しつゝある金澤哲郎博士は、熊本醫專の出身にて、九州帝大より學位を獲得せる少壯醫博として其の手腕を認めらる。斯間の指導教授は九大教授神中正一博士にして、整形外科を專攻せり。學位主論文は「脊椎椎體發育層ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文として、(1)大腿骨頸部內側骨折後ニ於ケル骨頭ノ組織學的研究、(2)脊椎々體骨折ト橫突起骨折トノ頻度ニ就テノ小統計等あり。本論文に對しての學問的批評は既に學界に定評あれば贅せずもがな、多年努力研鑽の跡を物語るに充分也。今や其の蘊蓄せ

る學識と經驗とを以て、獨特の手腕を自由に發揮し得るの立場に在り、氏の得意や想ふべく、同時に又向後の活躍を期待すべき也。

△更に學歷より見たる博士は、大正十一年五月熊本醫專卒業後、直ちに熊本市片岡病院外科勤務、同年十二月一年志願兵として熊本歩兵第十三聯隊入隊、除隊後引續き片岡病院勤務、同十四年十一月縣立鹿兒島病院副院醫長（レントゲン科主任）を被命、同十五年四月任陸軍三等軍醫、昭和三年九月鹿兒島病院辭職、直ちに九大醫學部附屬醫院醫員囑託となり整形外科教室勤務、同八年二月依願醫員解囑、同年三月熊本醫大副手として東外科勤務、同年五月九州帝大にて學位授與、同年八月副手辭任、直ちに福岡縣筑紫郡朔病院外科勤務、昭和八年十二月廣島遞信局局醫囑託、廣島遞信診療所外科整形外科擔當今日に至る。

△熊本市春日町士族故金澤武源太の五男にして、明治三十三年生る、當年漸く三十有六歲也。少壯氣鋭に富む學究的臨床家にして、至誠以て公に奉ずる熱誠の士也。多趣味の人にして音樂（洋樂）、寫眞、スポーツ（特に野球、水泳）釣等を最も好む。前途洋々たるの秋、折角の自重加餐を祈る。廣島市牛田町南區一六に住む。

◇

篠原一幸

△德山海軍共濟組合病院外科醫長篠原一幸博士は、岡山醫專出身の外科學者にして、北海道帝大教授西川義英博士に就て外科學を專攻し、北海道帝大より學位を得たる名醫博として其の手腕を認めらる。學歷より見れば大正八年岡山醫專卒業後、引續き同校西川教授に就き外科學一般專攻、同十五年より北海道帝大醫學部西川外科教室に勤務の傍ら研究を續け、昭和八年七月學位を授與せらる、同九年現職に就き今日に至る。學究生活より離れ實地診療界に進出して以來、未だ其の過去を語るに餘り日尙淺少なれども、今や博士獨特の手腕を發揮するに自由の立場に在り、孜々として勵精し不斷の精進を續けつゝある前途は益々有爲多望にして、博士の將來を語るに餘裕綽々たり。

△學位主論文は「遊離骨膜移植ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文として、(1)橫隔膜下膿瘍、(2)ペルテス氏病特ニ組織學的知見補遺、(3)大轉子結核、(4)大腿圓靱帶切斷ノ大腿骨々頭ニ及ボス影響等あり、就中「ペルテス氏病特ニ組織學的知見補遺」は氏の會心の著作にて、博士の最も得意とせるものと見るべき也。

△感想に曰く「學界!!學閥或は情實に依て教授を選擇するを止め、人材を天下に求めること、醫師界!!革新日本の姿を凝視し、徒に現狀維持に踟躕せざること」云々。出身地は金澤市彥三一番丁にして、篠原謙吉の長男、明治二十九年生る、年齒漸く不惑に達する少壯の紳士也。篤學者にして、其の今日あるは既に氏が閱歷に燦として輝き、今は壯熟せる手腕と共に最も活躍時代に入る。讀書家にして書見を唯一の樂しみとし、精研修養相俟つて甚だ勉むる所あり又散歩を趣味す。「イデオロギー」に執着することが長所にして、且短所と見るべきか。居常應答禮を重んずる人たるは、又以て其の爲人を窺はれ人格を尊重す。故上坂熊勝博士は伯父に當る。山口縣德山町浦石病院舍宅に住む。

◇

葛原輝

△東京市大森區入新井六丁目一二一に新設せる葛原外科病院あり、院長葛原輝博士の經營にして外科、內臟外科、レントゲン科を專門とし、病床數二十六、其他新裝せる內部の設備完備す。開業早々刀圭多忙を極め、博士獨特の手腕はメスの好評と相俟つて益々人氣を吸收し、遠近よりの外來患者日々輻輳するの活氣を呈しつゝあり。氏は千葉醫大出身の新進にして、九大教授赤岩八郎博士に就て外科學を專攻し、特に內臟外科の造詣深く、九州帝大より學位を獲得せる少壯醫博として、向後其の新手腕を發揮せんとする前途の發展や頗る囑目に値す。

△更に學歷より見たる博士の年歷を概括すれば、昭和三年三月千葉醫大卒業後、直ちに同大學第一外科教室入局、同四年三月辭職、同年四月より九州帝大醫學部赤岩外科教室入局、同八年九月學位受領、同九年三月辭職、同十年四月

より現住所にて開業今日に至る。

△學位主論文は「外科的內臟疾患（特ニ胃癌）ノ肝臟機能ニ就テ」にして、參考論文として、(1)Ueber die Beziehungen Zwis hen der Magenkrebsresektion und der Leberfunktion (2)胃癌切除術後ノ死因ニ關スル二、三ノ考察、(3)我教室ニ於ケル最近五ケ年半間ノ胃癌手術患者五二五名ノ統計的觀察、(4)我教室ニ於テ最近五ケ年半間ニ施セル直腸癌手術七三例ノ統計的觀察等あり。氏は東京市京橋區新佃島東町一丁目三葛原彈司の三男にして、明治三十七年生る、年齒未だ三十二歳の少壯紳士也。學究生活を巢立ちたる博士の向後の躍進は、學究的有爲の臨床家として最も囑望せらる。切に自重加餐を祈ると共に、希望ある治療界の爲め益々努力奮盡あらん事を。

◇

行岡忠雄　△大阪市北區浮田町六に片岡外科病院及び大阪接骨學校あり、接骨術の學究的新進大家として躍進せる行岡忠雄博士の經營にして、前者の病院長並に後者の學校長として活躍し、接骨、脫臼、及び理學的療法一般に就き、又外傷外科を標榜して一生面を展開せんとする所に、博士獨特の手腕は愈々其の精彩を發揮せんとす。博士は大阪醫大系に屬し、大阪帝大より學位を獲得せる少壯醫博にして、外科一般並に接骨術を專門とせる學究的臨床家として名聲を馳せ、特に整骨一般を最も得意とする所に一段の貫祿を備ふ、向後の活躍と相俟つて前途の發展や頗る囑目に値す。

△博士は大正十四年大阪醫大の出身にして、卒業後同大學附屬病院ヘルテル外科勤務、後ち東北帝大醫學部杉村外科教室にて研究、次で大阪高等醫學專門學校教授に任命せらる、昭和八年十一月大阪帝大にて學位を授與せられ、大阪接骨學校創立及同校長、行岡外科病院經營同院長として今日に至る。斯間主として古武教授、フリツ、ヘルテル教授小澤凱夫教授、杉村教授、勝呂博士等指導の下に研究せり。

△學位主論文は『「ペプトン分解產物ノ血清沃度酸値ニ及ボス影響ニ就テ』にして、參考論文は、(1)拇指脫臼ノ整復法、(2)丹毒療法ノ比較研究、(3)「フロリジント」血清沃度酸値、(4)小兒皮下外傷ニ就テ、(5)膀胱腫瘍ニ就テ、(6)肋骨々折ニ就テ等なり。

△博士は三重縣一志郡倭村中村醫師行岡宗郎の長男にして、明治三十四年生る。年齒未だ三十有五歳の少壯紳士也。學究生活を巢立ちて、接骨治療界に一生面を展開すべく躍進せる有爲の臨床家にして、至誠以て仁術に盡さんとする熱心と、奮鬪的努力を傾倒して大に將來に俟つあらんとする熱誠の士也。研究以外、政治に趣味を有す。爲斯界、折角の努力奮盡を望むや切也。自宅は大阪市東淀川區國次町三五一に在り。

◇

中根太郎　△三重縣三重郡羽津村羽津病院長として中根太郎博士の名聲は既に江湖に著聞す。歷史ある同病院は、地方稀に見る名病院として名高く、現在にては醫員五名、藥劑師二名、事務員三名ありて、外科、內科、小兒科を診療科として內部の設備を整へ、附屬看護婦養成所(公認)あり。同病院長及び同養成所長としての博士は診療と併せて經營及び統率の任に當り、博士獨特の手腕は愈々其の特技を發揮して餘す所なく、犀利なるメスの好評は他科擔當醫の手腕と相俟つて益々近鄕の人氣を吸收し、依然として拔くべからざる繁榮を持續しつゝあるもの、博士の責任の重大なると同時に亦與つて力あるを想ふべき也。

△博士は愛知醫大の出身にして、昭和三年卒業後引續き同大學桐原外科教室に勤務の傍ら、同八年五月迄外科學を專攻し、同八年六月より現職に就き、同年十二月名古屋醫大より學位受領今日に至る。斯間主として桐原眞一教授の指導を受く、特に輸血を最も得意とす。

△學位主論文は「人同種血球凝集反應ノ消長」にして、(1)同種血球凝集素ノ年齡並ニ型的差異、(2)同種血球凝集原ノ

年齡並ニ型的差異、(3)輸血並ニ瀉血ニヨリ血清凝集質ノ消長、(4)同種血球凝集反應ヨリ看タル人血液型ノ安定性ニ就テの四篇より成る。參考論文は、(1)愛知縣島嶼及ビ二、三町村ニ於ケル血液型分布狀態ニ就テ、(2)「グツタデイアフオート」ニヨル給血者貧血ノ恢復狀態、(3)瀉血並ニ輸血ニヨル正常溶血價ノ消長、(4)外傷性棱骨神經完全麻痺ニ於ケル手術的治驗例、(5)棱骨ニ骨頭全脫臼ノ二例等なり。

△出身地は愛知縣豐橋市西八町にして、明治三十六年生る、兄弟共に醫博也。博士の年齡未だ三十三歲、學究的少壯の紳士にして、研究室を巢立ちて以來、診療界に躍進して誠意誠實を以て努力精進しつゝあり、洋々たる前途は向後の活躍と相俟つて大に期待せらる。踏石は其號にして文才あり、趣味としては旅行と圍碁とを好む。將來有爲の資に富むの士、好箇の臨床家として、治療界淨化の爲め益々精研奮盡あらん事を望むや切也。

◇

渡邊一九　△神戸市灘區德井四〇三に渡邊一九博士の經營する渡邊外科病院あり。外科一般の治療に關する內部の設備を整へ、專門は外科一般特に博士の最も得意とする內臟外科及び肛門病科を以て著聞す。開業日尙淺くも博士獨特の手腕の好評は、氏が熱誠努力と相俟つて益々人氣を集め、漸次堅實なる地盤を開拓して日增盛況にあり。博士は大阪醫大系に屬し、大阪帝大より學位を獲得せる少壯醫博にして、斯科の新進大家としての手腕を認められ、今や神戸診療界に重きを爲す新人たり。斯間、阪大教授岩永仁雄博士の指導を受くる所厚く、學術の研究と共に臨床の經驗に富む、潑剌たる前途の發展や更に大に期待せらる。

△學歷より見れば、昭和二年大阪醫大卒業後、直ちに同大學岩永外科教室に入局、勤務の傍ら昭和九年八月迄外科學一般の研究に從事し、斯間昭和九年二月學位を受領す、爾來現住所に開業今日に至る。

△學位主論文は「運動カ實驗的バーロー氏病性骨變化ニ及ボス影響ニ就テ」にして二篇より成る。參考論文は、(1)結核性乳腺炎ニ就テ、(2)後腹膜淋巴囊腫ノ有柄療法ニ就テ、(3)消化管內異物ニ因ル穿孔性腹膜炎、(4)生體血管「レ」線撮影法應用ニ依ル四肢異物摘出法ニ就テ、(5)副乳腺癌腫ニ就テ、(6)尿道裂傷ノ診斷ニ對スル「レントゲン」映像法ノ應用、(7)種々ナル藥液注入ニ對スル皮下組織ノ態度ニ就テ等なり。

△感想の一片を寄せて曰く「自己の專門科なる外科を心からたのしく日々實施してゐるのみ」云々と、博士の熱心振りを察せらる。氏は廣島縣高田郡用立町五〇八渡邊茂作の長男にして、明治三十四年生る、年齡未だ三十有五歲也。研究と醫療そのものに多大の興味を持ち、殊に其の專門領域に懸命の努力精進を續け、以て其の天職とせる仁術の爲め最善を盡さんとする熱心の臨床家たり。翠園は其號にして文才あり、研究以外の趣味としては音樂、觀劇（歌舞伎劇）輕き運動を好み、嗜好としては支那料理を好む。將來有爲の臨床家として、切に自重加餐を祈ると共に、益々精研奮闘あらん事を。

◇

角田英　△京都府立醫科大學醫員として外科教室に新進の角田英博士あり。京都府立醫大出身の外科學者にして、恩師望月成人博士に就きて斯學の蘊奧を究め、母校より學位を獲得せる、少壯醫博としての將來を期待せらる。今猶恩師中村登教授指導の下に學理と共に臨床に精進して精研に餘念なし。博士の感想に曰く「今更　過去の業の績貧弱なるを痛感する次第である。事情の許す限り將來之を補足し度き希望なれど、將來の研究費迄も父兄の出資に俟つに忍びない。現代の學徒は自家の生活費を充たし、且研究費としての剩餘を得ると云ふ事は至難である。日本にも米國のロツクフエラーの如き學術研究に理解ある出資者の續出を望む次第である。特に京都府立醫科大學の如き公立大學に於ては他の官立大學に於るよりも研究費の捻出は將來の難問題たるを免れない。國家的健康の增進と、衞生施設の完備は醫師の責務であるが、之に對する社會的理解と協力とを俟つ可きや當然と云ふ可きである」云々。

△博士は昭和四年京都府立醫科大學卒業後、望月成人博士並に横田浩吉博士兩少壯學者の膝下に在りて、外科學臨床の實地に就て指導を受くる事滿五年有半、傍ら剩餘の時間を利して直接臨牀の實際に觸れたる諸問題をテーマとして檢討するの便宜を與へられ着々研鑽を進め、昭和九年二月母校より學位を獲得せり。更に臨牀の見地を擴大し且綜合的ならしめん目的の下に同大學中村登博士臨牀に於て目下耳鼻咽喉科學を修得しつゝあり。外科、耳鼻咽喉科學を專攻し、特に化學に興味を有す。

△主論文は『「アニリン色素の毒物學的竝ニ外科臨牀的考察』にして、第一回報告より第五回報告まであり。參考論文は、(1)二三「アニリン」色素ニヨル局所的竝ニ全身的制腐處置ニ就テ、(2)余ノレーン氏骨接合法ノ變法、其他七篇あり。就中主論文及び參考論文の外「別腐の組合せに關する余等の見解」並に「腸管運動に及ぼす有機色素の影響の研究補遺」等は博士の最も得意とする論著と見るべき也。

△京都市の人京都府立醫大教授角田隆博士の長男にして、明治三十六年生る。年齒未だ三十有三の若年にして少壯の意氣に燃え、研究心潑剌たるものあり。「科學に根底を有する事、之實に現代醫學の特徴にして今日の醫師は確かに昔の醫師と性質を異にせるものである。此の認識を自他共に堅固にする必要があると思ふ。醫師は基礎醫學者たると臨床醫家たるを問はず、寸時も自己は一介の科學者であると云ふ感を念頭から離す可きでないと思ふ。世に生物現象程複雜なるものは他に無いと云ふも過言でない。從つてこの生物現象を對象とせる醫學程至難なる學科は他に見出し得ない、生物現象は魏然として總ての物理的化學的研索を後に瞠若せるの觀がある。其れだけ醫學の前途は益々多事多端なる理であると惟ふ」云々。との持論者にして、流石少壯學者としての清新なる識見を窺はる。頭腦明晰、志操堅實、研究に對する態度眞劍にして熱あり力あるは言はずもがな、他に從順ならざる性質の持主たるは見逃すべからず、强ゐて言へば或はそれが少壯醫博の短所とも云へよう。趣味としては工場見學、ラヂオの聽取、嗜好としては、スキー、テニス、旅行位の所か、公道學人は其の雅號也。角田俊吉醫博は伯父にして、上田寛醫博は叔父なり。京都市上京區幸町廣小路下に私邸あり。

◇

佐藤秋義　△千葉縣野田町北總病院に新進の佐藤秋義博士あり、外科、耳鼻咽喉科醫長として活躍し內外の聲望を博す。院長張谷倜一郎博士は內科、小兒科を、稻葉勤博士は產婦人科を擔當す。病室（普通）十八、傳染病室七、レントゲン設備等々ありて內部諸般の施設完備す。佐藤博士は新潟醫大專門部出身の篤學者にして、外科、整形外科、耳鼻咽喉科を專門とし、特に內臟外科の領域に就て獨特の手腕を有す。斯間、母校の恩師池田廉一郎及び中田瑞穗兩博士に外科、同本島一郎博士に整形外科、同鳥居惠二博士に耳鼻咽喉科、同川村麟也博士に就て病理學を研鑽し、新潟醫大より學位を獲得せり。年齒未だ少壯にして、潑剌たる前途は向後の精研活躍と相俟つて、更に將來の大成を期待せらる。

△博士は大正十一年新潟醫大專門部卒業、同年六月同大學附屬醫院外科、整形外科勤務、副手囑託、同十三年六月任同大學助手、同十四年一月宮城縣古川町片倉病院外科、皮梅科醫長として赴任、昭和四年九月同大學病理學教室に入り副手囑託、後研究科學生となり病理學研究、同八年八月頭書の病院に外科、耳鼻咽喉科醫長として赴任今日に至る同九年二月新潟醫大にて學位受領。主論文は「昇汞中毒症ニ關スル實驗的研究」にして、(1)機械的外傷ニ關スル陰莖皮膚全缺損ノ一例、(2)葡萄狀及連鎖狀球菌性敗血濃毒症屍ノ網狀織內皮系統ノ起因菌分佈ニ就テ、(3)人體ノ昇汞中毒ノ二例の三篇より成る。從來昇汞性大腸炎の成因は該部に排泄せらるゝ水銀化合物の直接の影響に依りて起るものとされたるが、實驗犬數十頭を使ひ、種々なる腸管手術を施したる犬に昇汞中毒を起さしめ、昇汞大腸炎は主として上部消化管、特に膽汁中に排泄せられたる水銀化合物が大腸に至り、大腸の水分吸收作用に依り濃縮せられ、特有なる

懐死性大腸炎を起すものなることを實證したり。

△感想に曰く「現代の醫界の最高の表徴たる醫博が、實地經驗及び實地醫家としての識見歴史に乏しき者多き事が最も醫博を世間が輕視する所以と思ふ、故に實地經驗に乏しき者の學位は文部省に於て或は各大學に於て許可せざる事を希望す」云々。出身地は大分縣玖珠郡南山田村大字菅原にして、明治三十一年佐藤幸市の三男に生る。學究的溫厚の紳士にして、臨床家として實地の經驗に富み、卓越せる手腕を有す。其の今日ある閲歴と其の篤學は、既にして博士の面目を語るに充分なり。殊に勵精恪勤の士にして、熱心克く誠意誠實を以て診療に臨み、飽迄親切を盡す點は篤き聲望を博する所以と見らる。趣味としては油繪、圍碁、魚釣などを好む、殊に洋畫に於ては精致なる技工と豊なる天分は優に專門家をも肯定せしむるものありと聽く。近親中には義兄關西學院大學教授法學士松澤兼人、義弟朝鮮公州判事法學士豊島正巳、義弟北海道廳士木課工學士小川讓二等々あり、其他略。千葉縣野田町中野臺四〇七に住む。

◇

櫻井芳香　△朝鮮道立醫院醫官にして、黄海道立海洲醫院外科長として活躍しつゝある櫻井芳香博士は、愛知醫大系に屬し、名古屋醫大より學位を獲得せる外科界近來の少壯醫博也。指導教授は名古屋醫大教授齋藤眞博士にして、外科學を專攻し學位論文を完成せり。主論文は「四肢動脈結紮後ノ側副血行新生ニ就キテノ實驗的研究」第一篇「下肢動脈結紮後ノ側副血行新生ニ就キテ」にして、參考論文は、(1)同前篇二篇上肢動脈結紮後ノ側副血行新生ニ就キテ、(2)「ガスフレグモーネ」ノ二例なり。研鑽多年、學理と共に臨床の經驗に富み、今や獨特の手腕を發揮するに自由の立場に在り、前途の發展や大に囑目せらる。

△學歴より見れば、大正十五年愛知醫大卒業後、直ちに同大學齋藤外科教室に入る、昭和二年十月長野縣大町公立大町病院外科部長、同五年五月同病院長となる、同七年四月名古屋醫大齋藤外科教室に入る、同八年十一月現職に就き同九年二月學位を受領し今日に至る。出身地は靜岡縣榛原郡勝間田村勝間にして、明治三十二年生る、年齒未だ三十有七歳、學究的少壯の紳士也。臨床家としては多年の經驗を有し、今は光る學位に氏の仁術は一段の光彩を副ふ。勵精恪勤の人にして、至誠以て公に奉じ治療界の爲め努力奮闘する熱誠の士也。朝鮮黄海道中町一二四に住む。

◇

村田文雄　△豫備海軍々醫中佐にして、久しく病臥靜養中の村田文雄博士は、慈惠醫專出身の外科學者にして、慈惠醫大研究科に在學中、恩師永山教授指導の下に生化學を研究し、同大學より學位を獲得せる斯學界の名醫博として其の存在を認めらる。學位論文に對する學問的價値は既に學界に定評あれば贅せずもがな、生化學的領域に於ける學識の該博なるかを語るに足る。聞説、三四年來健康を害し、靜に病臥中にて專ら靜養に力めつゝあり。たまゝ感想の一片を寄せて曰く「近來病弱殊に齡不惑に達し今更學位でも有ませんが海軍現役中生體臓器のOxydationに付少しく仕事した關係上生化學方面より研究をしたに過ぎません健康が許すならば尚ほ研究を持續したいと思居ります」云々。折角の自重加餐を祈り、軈て恢復後の展開活躍や大に期待せらる。

△博士は明治四十二年東京慈惠醫專卒業後、海軍々醫少尉に任官、爾來累進して海軍々醫中佐となり、大正十三年病氣の爲め依願豫備役編入せらる、翌十四年九月日本海員拔濟會横濱病院副院長兼外科部長に就任、昭和五年研究の爲め辭任、直ちに母校研究科に入り、永山教授指導の下に學位論文を完成し、同八年三月卒業後同大學教授會へ提出の結果、翌九年三月學位を授與せらる。斯間、高木兼寛、本多忠夫兩博士に外科學を、永山武美博士に生化學を、矢部軍醫總監に內科學を研究せり。

△主論文は、(1)動動體內ニ於ケル還元「グルタチヲン」生成ニ關スル生化學的研究、(2)鷄卵孵化ト還元「グルタチヲン」量ノ消長及ビ之ニ對スル「グルタミン」酸「ナトリウム」ノ影響ニ就テ、(3)無機硫黄及ビ有機硫黄化合體投與ニ

依ル家兎各臓器組織竝ニ血液ノ還元「グルタチヲン」量ノ消化、(4)血液還元「グルタチヲン」測定法ニ就テ、(5)窒扶斯菌免疫家兎ノ臓器組織還元「グルタチヲン」ノ消化の五篇より成り、外に參考論文として、(1)窒息死ト組織還元「グルタチヲン」(2)幼若並ニ成長家兎ノ胸腺及睾丸ノ還元「グルタチヲン」量ニ就テの二篇あり。

△出生地は東京市日本橋區瀬戸物町四番地にして、明治十七年村田竹次郎の長男に生る。學究的溫厚の紳士にして篤學者たり、其の今日ある閲歴は博士の前半生史に盡きて光彩陸離たるものあり。年齒知命に入る二歳、今は病臥中にて現職を有せずと雖も、學識、手腕、人格共に益々圓熟の佳境に入りて一段の貫祿を加ふ。人と爲り敦厚篤實、眞面目にして志操堅實、人に對するに親切にして溫情に富む。業餘の趣味としては旅行、園藝、水泳、ヨット等を好む。家庭には良妻ユキとの間に一男あり。東京市目黒區自由ケ丘一六六に住む。

◇

金澤　信太郎　△舞鶴海軍共濟組合病院長として重大なる責任を負ひ、至誠以て公に奉ずるの熱誠と不斷の努力を傾倒して勵精活躍しつゝあるは海軍々醫中佐金澤信太郎博士也。學系は東北帝大（專門部出身）系に屬し、熊本醫大にて學位を獲得せる少壯醫博として、其の學問及び手腕を認めらる。嘗て歐洲各國を視察し、歸朝後熊本醫大外科學教室にて研究の結果、學位論文を完成せり。本論文の學問的批判は既に學界に定評あれば、敢て贅言を要せざる迄も、氏が斯間の努力研鑽の跡を物語るに足る。拮据黽勉、職に忠なると共に精研に餘念なき前途は猶洋々たり。

△學歴より見たる博士は、大正五年東北帝國大學醫學專門部卒業、直に海軍々醫として海軍に入り、その間歐洲各國を視察す、目下軍醫中佐の印綬を帶び現職に在り、昭和九年四月學位を授與せられ今日に至る。斯間主として東北帝大各教授の指導を受け外科學を專攻せり、特に外科手術を得意とす。

△學位主論文は「急性蟲樣突起炎ノ臨床的、細菌學的並ニ病理學的觀察」にして、參考論文は「惡性腫瘍並淋巴腺結核ニ對スル「レントゲン」線深部治療成績ニ就テ」外八篇あり。感想に曰く「臨床の研究に對し學生時代より更に醫師になつても努力され度い、指導さるゝ側でも一層御骨折り下され度い」云々。

△博士の出身地は宮城縣仙臺市二日町にして、明治二十七年生る。年齒漸く不惑有二歳、意氣旺盛にして研究心に富み、熱心なる臨床家にして、研究と醫療そのものに趣味を集中し、日常患者の診療に精進するを趣味とし唯一の道樂とす。性格は眞面目にして正直なれば、或は短氣の嫌なしとせず、而かも能く自覺して克く自ら之れが修養に力むる風あり。親戚中には六七名の博士ありと聽く。京都府新舞鶴町海軍共濟組合病院長官舍に住む。

◇

中島　定次　△九州帝大派の一勢力たる新人にして、外科特に內臓外科を最も得意とする中島定次博士は、臺灣總督府基隆醫院外科醫長として在勤中也。氏の學歴より見れば、長崎縣立大村中學校、佐賀高等學校を經て、大正十四年九州帝大醫學部へ入學、昭和四年三月卒業後、直ちに同學部附屬醫院第一外科教室入局、同九年五月學位受領同年七月同教室を辭し、現職に就き今日に至れり。斯間恩師赤岩八郎教授、兒玉桂三教授其他に就き外科學を專攻せり、特に內臓外科に長ず。學究生活を巢立ちて診療界に躍進せる氏が向後の活躍は頗る矚目に値す。

△學位主論文は『「ナフタリン」白內障成因ニ關スル化學的研究』にして、參考論文は、(1)總輸膽管結紮ノ血液表面張力及ビ血中膽汁酸ノ消長ニ及ボス影響並ニ胃腸膜淡瘍形成ノ統計的觀察ニ就テ、(2)消毒性關節炎ニ對スル「レントゲン」線放射療法ニ就テ、(3)「ポリープ」性く字結腸炎ノ一例、(4)化膿性骨盤炎ニ對スル「レントゲン」線放射療法ノ治驗ニ就テ等なり。氏は長崎縣西彼杵郡瀬川村中島銀太郎の長男にして、明治三十七年生る、年齒未だ三十有二歳の少壯也、學生氣質の人にして快活なり、診療に臨むや熱誠克く親切を以てす。硬式庭球を業餘の趣味とす。有爲の資に富む臨床家としての前途洋々たるの秋、切に自重加餐を祈ると共に、診療界淨化の爲め、益々努力奮鬪あらん事

を。基隆市壽町一丁目三〇に住む。

◇

朝比奈 德一　△名古屋醫大派の新醫博にして、一般外科特に内臓外科を最も得意とする朝比奈德一博士は、學究生活を奠立ちて診療界に躍進し、現在兵庫縣洲本町に在る洲本病院外科に勤務中也。本病院はベット數四十、診療科は内科、小兒科、X線科（博士）、産婦人科（學士）、耳鼻咽喉科（博士）、外科の四科を有する綜合病院にして當地方診療界に於ける私立病院中の一勢力たり。博士は即ち其の得意とする外科を擔任して内外の信望を博す。

△更に學歴より見たる博士の年歴を概括すれば、昭和四年愛知醫大卒業後、直ちに同大學桐原外科學教室に入りて研究、同八年九月現職に就き、同九年五月名古屋醫大にて學位を授與せられ今日に至る。斯間恩師桐原眞一教授に就て外科學を專攻せり、特に内臓外科に就ての造詣深し。主論文は『「バブロフ」小胃々液分泌ニ及ボス胃ノ手術々式ノ影響』にして、參考論文は、(1)惡性化セル尾骶骨部畸形腫ノ一例、(2)各種胃疾患及手術胃ノ胃曲線ニ關スル研究なり。

△醫界に對する博士の感想に曰く「今の醫者は昔のまゝにかたつむり様だ。もつと〳〵我利々々の自己を捨てゝ大局に着目し團結してやつて行つたらよからうが。職業が一人でやつてゆける（或はごまかして）せいからかも知れないが何とか自覺してよき斯界の指導者を得ぬ限り醫者がゆきつまるのは當然だ」云々。博士の出身地は埼玉縣熊谷市大字熊谷にして、明治三十年生れの少壯也。年齒未だ三十有九歳にして、覇氣あり研究心に富む、日常患者の診療に精進するを樂しみ、研究と醫療とに趣味を集中して亦他を顧みず、時に太公望を極め込みて一日の勞を慰することあり有爲の臨床家としての前途は洋々たり、折角の活躍と相俟つて益々精研努力あらん事を望む。兵庫縣洲本町常盤町乙四四二に住む。

◇

吉田 定男　△福井市佐久良中町に堂々たる陣容を構えたる、富田病院に外科醫長として吉田定男博士あり。本病院は當市隨一の私立大病院にして内科、外科、産婦人科、耳鼻咽喉科、皮膚泌尿器科を有し、各種の理學的設備を完備し、各科專門醫師分擔し、病室三十五を有す、尙附屬として産婆看護婦養成所あり。博士は外科一般を擔任し、特に其の最も得意とする内臓外科に至りては他の追隨を許さず、嘖々たる好評を博し、内外の信望を其の一身に蒐む。

△博士は長崎市鎭西學院より、五高を經て、大正十四年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部第一外科に入局、三宅教授に師事す、同十五年夏より宮崎縣都農町都農病院に勤務、次で昭和六年春九大へ歸學、更に大學院にて研究、同九年春現職に就き、同年七月大學院卒業に依り學位を受領し今日に至る。斯間恩師三宅速教授、赤岩八郎教授、進藤篤一教授及び石澤政男教授の指導を受けて研究せり。

△學位主論文は『小腸ノ「リポイド」吸收ニ關スル研究』にして、參考論文は、(1)「ミトコンドリア」染色法、(2)胃組織ノ細胞學的研究、(3)放線狀菌病ノ治驗例等なり。殊に『「ミトコンドリア」ノ改良簡易染色法』は博士の最も得意とせる論著と見るべき也。吉田寅太郎の養子にして、長崎縣西彼杵郡面高村天久保郷に本籍を有し、明治三十一年生る。年齒三十有八歳、少壯にして多量の分別を有し、手腕漸く壯熟の域に入り、好箇の臨床家として最も囑望せらる。研究以外の趣味としては謠曲（梅若流）を好む。春秋猶頗る豐富にして、前途益々努力を要するの秋、折角の自重加餐を祈る。福井市外木田村山ノ奥五二ノ一三に住む。

◇

三宅 坦　△大阪市東區北濱三ノ四三外科松岡病院に三宅坦博士あり。博士は愛知醫專出身の外科學者にして、松岡病院長元京大教授松岡道治博士に師事して指導を受け、齋藤眞博士の了解を得て論文を名古屋醫大に提出し

て、學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。學位論文は、既に學界に定評あれば贅せずもがな、研鑽多年、既にして其の蘊蓄せる學殖の豐富なるを語るに足る。殊に又臨床に多年の經驗を有し、今や獨特の手腕を發揮して能く院長を補佐し、其の犀利なるメスの好評は院長の聲望と相俟つて益々人氣を博する所に、博士の面目の躍如たるものあるを窺はる。松岡外科病院は院長松岡博士外醫員五名、同院に內務省指定松岡外科病院看護婦學校ありて看護婦を養成する事十數年間、大阪に於ても著明なる外科病院にて、外來患者も多く、入院も常に滿員の盛況を呈す。

△博士は大正二年愛知醫專卒業後、愛知病院皮膚花柳病科に見學、同年十一月京都帝國大學病院整形外科に研究、大正四年四月京都帝國大學整形外科教授松岡道治博士大阪北濱三丁目に病院開設に付、同院に副院長として赴任し現在に至る、斯間昭和九年八月名古屋醫大より學位を受領せり。主なる指導教授は松岡道治博士及び林喜作博士にして外科學特に整形外科學を專攻せり。主論文は『先天性股關節脱臼ノ骨盤骨ニ就キテ「レントゲン」像ノ研究』にして原著は獨逸文なり、參考論文は、(1)下駄履キノタメニ屢々起ル第五蹠骨凸起部並ニ基底部骨折ニ就キテ（和文）、(2)薦骨ノ腰椎骨化セル「レントゲン」線ノ所見（獨文）の二篇なり。本籍香川縣丸龜市風袋町にして、明治二十三年生る。學究的溫厚の紳士にして篤學者たり。正義に立脚して萬事を處する故に時に融通のきかぬ事あり、而かも其の今日あるまでに學を練り腕を磨くに餘念なかりしは言はずもがな、人格者たる院長松岡博士に私淑して自ら克く品性の陶冶に怠らざる事實は見逃すべからず。殊に博士の特徴として傳へらるゝ所は、診療に臨むや熱心忠實にして飽迄親切を盡す點にあるが如し、其の眞面目にして誠意誠實なる態度は、賢明なる臨床家として執るべき道にして最も尊ぶべきも也。趣味としては繪畫、音樂、寫眞、旅行等、然し終日終夜多忙のため趣味に親しむ暇なきが如し。兵庫縣武庫郡住吉村字花田一四一四に住む。

◇

沖井磯吉

△岡山醫大派の新博士中の一勢力と見るべき沖井磯吉博士は、外科學者にして現に岡山縣矢掛町町立矢掛病院長として活躍し內外の信望を博す。本病院は病室十二室、醫師三名、內部の設備と相俟つて當地方診療界に於ける唯一の治療機關たり。氏の學歷より見れば、大正十年岡山醫專卒業後、同年青島守備軍民政部醫務囑託坊子醫院勤務、同十二年同濟南醫院勤務、同十五年同醫院同仁會に移管、昭和六年同醫院を辭し岡山醫大專攻生として入學、同九年岡山醫大副手を經て現職に就き、同年八月學位を授與せられ今日に至る。斯間恩師清水教授及び津田教授に就て生化學及び外科學を專攻せり。學究生活を巢立ちて診療界に躍進せる氏の向後の活躍は大に期待せらる。

△學位主論文は『「カルシューム」及ビ燐新陳代謝ニ及ボス膽汁酸ノ影響』にして、參考論文は、(1)脂肪酸ヨリ肝臟糖原質生成ニ及ボス膽汁酸ノ影響、(2)動物體內「フェノール」硫酸合成ニ及ボス膽汁酸ノ影響、(3)不飽和脂肪酸投與ト尿沃度散値ニ及ボス「ホルモン」ノ影響等なり。他に「石灰及ビ燐出納平衡ニ及ボス膽汁酸ノ影響」と題する一篇は氏の會心の作と見るべき也。

△感想の一片に曰く「醫師諸賢の人格の向上を痛感する」云々、以て氏の爲人を窺はる。氏は廣島縣佐伯郡深江村沖井吉次の三男にして、明治二十九年生る、當年漸く不惑に達し、學究的溫厚の紳士也。勵精恪勤の士にして、診療に誠意誠實を以てし、眞摯にして親切なる臨床家としての聞え高く、診斷手術の好評と相俟つて多大の信望を博す、蓋し氏が人格の尊重を自覺して自ら品性の陶冶に力むる修養の反映に歸する處あるべし。一面人と接するに磊落にして快活なるは、人に親しまるゝ所以ならん。業餘の趣味としてはスポーツ特に庭球を好み、嗜好としては酒を嗜しむ。前途洋々たるの秋、折角の努力奮鬪を望む。岡山縣小田郡矢掛町大字矢掛に住む。

◇

住田立

△富山縣西礦波郡松澤村鷲島に外科、耳鼻咽喉科を以て其の地方を風靡し、名聲嘖々たる住田醫

院あり。院長住田立博士は金澤醫專出身の篤學者にして、恩師中村八太郎博士指導の下に病理學を專攻し、金澤醫大より學位を獲得せる近來の名聲博也。學位論文は既に學界に定評あれば贅せずもがな、如何に學殖の豐富なるかを語るに足る。殊に臨床方面にては多年の經驗に富み、其の最も得意とせる領域に努力精進を續け、今や獨特の手腕を發揮して餘す所なく、打診の好評は多年の聲望と相俟つて遠近の人氣を吸收し、既にして牢乎拔くべからざる地盤を有す。感想に曰く「醫がその業とする處により社會にその存在の意義を發揮し得るは幾多先進の苦心研究の結果を利用するに依る事多し、されば自らも亦何等かの新知見を斯學に加ふるべく努力するは先進に對する報恩の意味よりするも必要なる事なるべし、さり乍ら吾不敏にして事志に副はざるを憾とするものなり」云々。博士の心境を物語りて餘蘊なし。

△博士は明治四十四年金澤醫專卒業後、母校に於て宮田篤郎教授指導の下に外科學及耳鼻咽喉科學を修め、大正三年六月鄉里に歸り父喜正の經營せる醫院に外科及耳鼻咽喉科の診療を擔任し、その後父君が宿痾の爲休養せらるゝや代つて醫院の經營に當れり、昭和六年五月より金澤醫科大學專攻生として病理學教室に入り、昭和九年十一月より副手として同大學石川外科教室に轉じたり、同年十二月同大學にて學位を授與せらる。主論文は、「結核症ニ於ケル脾臟ノ病理解剖學的並ニ組織學的研究」にして、參考論文は、(1)「腸チフス」脾ノ病理解剖學的並に組織學的研究、(2)男子孔腺癌ノ症例、(3)限局性臀血硬化脾等。

△富山縣平民醫師住田喜正の長男にして、明治二十二年生る。學究的溫厚の臨床家としての特徴を具へ、高邁なる人格を備ふ。其の今日ある閲歷は博士の前半生史これを語りて餘蘊なく、殊に開業の傍ら幾星霜かの間、常に學を錬り腕を磨くに孜々として倦まず、研學切磋、終に克く學位を獲得せる篤學は立志傳的にして特筆に値し、博士の面目の躍如たるものあるを覩はる。今は腕の冴え盛りにて、年齒不惑に入る七歳、年壯の意氣と共に學識、手腕益々圓熟の域に達して一段の貫祿を加ふ。熱心克く診療に誠意誠實を以て當り、患者に對するに飽迄親切を盡す點は、博士の長所として傳へられ篤き信望を博す。一面に人と接するに快活にして懇篤、謙遜自抑して自己の識學を衒はず、淡々として己れを虚うする態度の奥床しき所に其の人と爲りを敬慕せらる。家庭には妻とみとの間に四男三女あり。

◇

大野捷助　△伊豆下田町長田病院に勤務中の大野捷助博士は、東大系の一勢力たる新博士中の最少年にして外科の新手腕家として最も囑望せらるゝ新智識也。氏の學歷より見れば、昭和五年東京帝大醫學部卒業後、直ちに同學部鹽田外科教室に勤務の傍ら、鹽田廣重教授指導の下に專ら外科學の研究に從事す、同八年八月現職に就き、同十年一月東京帝大にて學位を授與せられ今日に至る。鹽田外科を巢立ちて實地治療界に躍進して以來、日尚淺くも、博士獨特の新手腕と、氏が熱心にして眞摯なる診療振りとは、益々遠近の人望を集め、大衆より多大の信頼と尊敬とを受けつゝあるは、長田病院の隆盛を祝すると共に、半島治療界の爲め欣幸とする處也。

△學位主論文は『急性腸管閉塞時ニ於ケル尿ニ關スル實驗的研究並ニ組織水素「イオン」濃度ノ實驗的研究』にして參考論文は、(1)十二指腸瘻時ニ於ケル組織水素「イオン」濃度ノ實驗的研究、(2)火傷患者五十二例ニ於ケル臨床的並ニ尿所見等なり。氏は埼玉縣北足立郡大宮町大字大宮大野專助の長男にして、明治三十八年生る、年齒未だ三十有一歳の少壯也。潑剌たる意氣と共に臨床に熱心にして、患者に對する態度の親切なると、學生氣質の朗快さとは好感を抱かしめ、評判極めて良好なりと聽く。猶氏は研究心旺盛にして意志强く、診療と研究とに趣味を集中して物に動せず、拮据黽勉、精研に餘念なき前途は洋々として輝かし、向後の活躍と相俟つて益々努力を要するの秋、切に自重加餐を祈ると共に一層の奮鬪あらん事を。靜岡縣賀茂郡下田町大安寺前に住む。

◇

林　堅藏

△外科特に腎臓外科を最も得意とせる林堅藏博士は、南滿醫學堂及び日本醫專出身の篤學者にして外科を以て起ち、多年地方の診療界に活躍し、或は教授として醫專の教壇に立ち、學生の指導に盡力する所ありしが、最近退官後名古屋診療界に躍進すべく、目下開業の準備中にありと聽く。多年蘊蓄せる學識と經驗とを以て、驍て展開せんとする博士の仁術や刮目を以て大に待望せらる。

△略歴より見たる氏は、南滿醫學堂の出にして、大正五年日本醫專を卒業して、醫術開業試驗に合格し、縣立鹿兒島病院外科勤務の後ち、三菱鑛業株式會社社員となり、大正九年より十三年迄東北帝大醫學部外科教室に勤務の傍ら研究に從事し、同十五年臺北醫專外科講師となり、次で助教授を經て教授に任命せらる、昭和十年一月東北帝大にて學位を授與せられ、同年八月依願退官、目下開業準備中なり。斯間、鹿兒島にて汲田元之丞博士及び東北帝大教授杉村七太郎博士に就て外科學を專攻し、特に腎臓外科の造詣深し。

△學位主論文は「外科的腎疾患ニ於ケル分取腎尿尿素定量ニ就テ」にして原著は獨逸文なり。參考論文は、(1)井上氏法ニヨル尿及血清「アミラーゼ」ノ定量殊ニ其外科的腎機能檢査上ノ應用ニ就テ、外十篇あり、全部臨床成績なり。就中「お粗末な脈」（追付印刷公表）は博士の會心の作と見らる。

△感想に曰く「臨床家は患者が一日も早く自ら働いて喰へる樣にしてやるべきである」云々、以て博士の診療に對する態度の誠實と眞摯なるを察せらる。氏の本籍地は岐阜縣大野郡高山町字三町にして、明治二十年古橋清吉の五男に生れ、高山町雲龍寺（和尚）林孝道の養子となる。當年當に不惑に入る九歳、學究的溫厚の紳士にして、其の今日ある閲歴は篤學者として光彩陸離たるものあり、今は年壯の意氣と共に、臨床家として最も重望せらるゝ時代に入り、學識、手腕、人格共に圓熟の域に達して一段の貫祿を備ふ。愚卿は其號にして、尺八を愛好す、本來多趣味の人にして常識に富み、社交上に惠まるゝこと尠しとせず。東大法科教授牧野英一博士とは親戚の間柄なり。假住居名古屋市外庄内町岡崎勝一方氣附。

◇

三藤　寛

△東京女子醫專に外科學教授として三藤寛博士あり。附屬醫院には世人周知の如く内、外、小兒産婦人、耳鼻咽喉、眼、X線科等各科の整備あり、綜合病院としての本質を具備す。女子醫學獨特の領域有りや否やは別問題として、女醫發展の可能性に就ては有望なること既に識者一般の認識する處にして、東京女子醫專は、斯界の第一線に起ちてリードする最高機關として推すべき也。博士は該校の教壇と併せて臨床に立ち、其の蘊蓄せる學識と獨特の手腕を揮ひ、熱誠にして諄々と學生指導の任に當り、至誠以て女子醫育の爲め懸命の努力精進を續けつゝあり、斯界の振興發展上大に多とすべき也。

△學歴より見れば、博士は六高を經て、東北帝大醫學部を卒へ、昭和二年四月より東京帝大醫學部鹽田外科教室に入局、同九年五月現職に就き、同十年一月東京帝大にて學位を授與せられ今日に至る。斯間鹽田廣重教授に師事して外科學を專攻し、特に恩師の亞流を汲みて腹部内臓外科に興味を有す。

△學位主論文は「實驗的十二指腸塞時ニ於ケル形態學的研究特ニ其時間的推移ニ就テ」にして、參考論文は、(1)外科的腹部内臓疾患特ニ膵臓疾患時ニ於ケル尿「ヂヤスターゼ」ニ就テ、(2)特發性脱疽ノ腰薦部深部照射療法、(3)實驗的十二指腸閉塞症ニ於ケル鹽素ノ血球血漿間移動ニ就テ等なり。就中急性腸管閉塞症に關するものは博士の最も得意とする論著と見るべき也。

△感想に曰く、學界に對しては「現代學界に就て遺憾なるは露骨なる學閥的分野の對立なるべし、之を抹消せしむるを得ば、更に明朗なる學究の世界を現し得らるべし。又學界の老大家の出席し果敢なる討論を行はれて後進を刺戟されんことを希望し居れり」醫師界に對しては「醫師界に對しては深刻なる體驗なきも、醫師全體として餘りにも他を

言ひて自らを顧ることなきの缺なきや、之生活擁護のために出づる所あるも、今少しく寛容にして相克することなくば醫師の品位を高め得べしと嘆ずるものなり」云々、同感に堪えざる也。氏は愛媛縣今治市末屋町三藤猛の長男にして明治三十六年生る、年齒未だ三十有三歳也。少壯の意氣益壯にして、清濁併せ呑むの氣慨を養ひつゝあり、嚴肅主義の人にして徳義的には或はピュリタンに過ぐる嫌なきかと思はる、而かも人に對しては親切あり同情に富む。愛讀家にして精研修養相俟つて克く讀書す、時に圍碁に親しみ、又散歩を好む。今治市開業の三藤香吉博士は義兄に當る。東京市本郷區駒込千駄木町五七に住む。

◇

岡崎卓一　△岡山市八番町十三に新裝せる堂々の陣を張り、外科專門を以て嶄然頭角を拔きつゝある岡崎外科病院あり、院長は斯科の新進大家を以て著名なる岡崎卓一博士にして、博士の經營主宰の下に先年新築成る、總建坪百五十五坪、病院敷地面積二百餘坪、病室數十五、ベット數二十五、診療室、準備室、手術室、レントゲン室、(紫外線、赤外線、X光線)等外科病院としての設備を遺憾なく整へ、今や當地私立病院中の一流を占む。博士は岡山醫大派の一勢力と見るべき名醫博にして、當地診療界に於ける重鎭として、最も囑望せらるゝ新進人物也。

△大正六年五月岡山醫學專門學校卒業、同年六月より昭和六年三月迄岡山市石本外科病院に就職、專ら外科臨床實地研究、昭和四年八月岡山醫科大學專攻科學生として衞生學教室に入學、同六年九月より岡山醫科大學津田外科教室見學、傍ら岡山市八番町十三番地に於て病院新築、外科開業今日に至る。斯間、昭和八年一月岡山醫大にて學位を授與せらる。斯間主として指導を受けたるは緒方教授、及び津田教授にして、外科及血清學を專攻、外科を以て起てり。

△學位主論文は「諸臓器內各種杭體ニ就キテノ研究」にして、(1)臓器杭體抽出法ノ比較研究、(2)能働免疫動物ニ於ケル血液並ニ諸臓器越幾斯中ノ免疫體量的關係ニ就キ（特ニ沈降素ニ就キテ）、(3)被働性免疫動動ノ血液並ニ諸臓器越幾斯中ニ於ケル免疫體量的關係ニ就キテの三篇より成る。參考論文は、(1)免疫體臓器移行ニ及ボス墨汁塡塞並ニ過敏症ノ影響、(2)脾臓局所免疫ニ就キテ、(3)動物體ニ於ケル皮膚水疱形成並ニ水疱液中ノ免疫體量ニ就キテ（歐文）等なり、其他論著夥多。

△感想に曰く「患者に對して親切に何處までも相談相手となり、眞面目に成るべく患者の負擔を輕減ならしめ、不必要なる手術、注射、其他施術を行はざる樣、常に考慮し診療したならば醫業難をかこつ事はないと思ふ。尙ほ日進月歩の醫學の事なれば常に新刊の雜誌等に目を通して時代におくれぬ樣心懸くべきである」云々。博士の診療に對する態度の眞摯にして熱情あると、同時に精研に餘念なき熱心振りを窺はる。

△博士の本籍地は岡山縣吉備郡富山村大字延原にして、岡崎誕一郎の四男、明治二十七年生る。學究的臨床家としてその今日あるは、輝しき氏が前半生史これを語りて餘蘊なく、殊に特筆すべきは、身體頑健、努力主義をモットーとして、朝から晩まで一意專心、唯だ醫業そのものと研究との他に特別の道樂を求めず、不斷の活動を續けて倦むことなき點にあり、强ひて言へば生來眞面目にして生一本正直の方なれば、短氣にして僅かの事が氣になり、直ちに癇癪玉を破裂することあり、若し短所を指摘すれば或はそれならんか。而かも患者に對し人に接するに親切にして、同情あり熱情に富み、人に親しまるゝの徳を有す。研究以外にはスポーツに趣味を有す、但し觀る方にて野球、庭球、柔道、劍道等を好む、嗜好にては茶を好み、酒を嫌はず。博士の年齒今や不惑に入る二歳、最も活躍時代にて、頗る春秋に富む、前途洋々たるの秋、折角の自重加餐を祈るや切也。

◇

日域旭丸　△廣島縣吳市外大柿町柿浦に內科及び外科を以て著聞する、藝南病院及び內外結核の療養所たる附屬松ノ濱療養所あり、院長日域旭丸博士の獨力經營せる私立病院にして、俱に內部の設備整ひ、患者をして快朗の

念を抱かしむる特徴を有す。博士は院務を主宰し日々診療に直面して外科を擔任す、博士獨特の診療手術の好評は益々遠近に喧傳し、内外の患者は門前常に輻輳する盛況を呈し居れりと聽く。氏は岡山醫大派の少壯醫博にして、臨床の經驗に富み、今は腕の冴え盛にて最も得意の時代に在り、その今日の繁榮を見るもの、近來の成功と云ふべき乎。

△博士は縣立岩國中學校を經て、大正七年岡山醫專を卒へ、開業の傍ら岡山醫大にて研究を爲し、昭和十年一月同大學より學位を受領せり、斯間主として恩師故泉伍朗教授及び石山福次郎教授指導の下に外科學を專攻せり。

△學位主論文は「含水炭素新沈代射障碍時ノ血糖調整ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)肝臓ノ血液凝固血中「フイブリノゲーン」並ニ補體ノ消長ニ及ボス影響ニ關スル實驗的研究、(2)腸疊積症（特ニ其ノ疊積程度ト腫瘤ノ形狀トノ關係）ニ就テ、(3)頸動脈腺腫瘍ニ就テ、(4)肋骨ヨリ發生セル軟骨腫ノ一例、(5)比較的早期ノ結核性膝關節强直ニ對スルバイヤー氏手術法ノ應用等なり。

△氏は廣島縣佐伯郡大竹町、日域顯尊の三男にして、明治二十八年生る。學究的臨床家としてその今日あるは、燦として既に氏の閲歴に輝き博士の面目を語るに充分なるが、殊に氏が開業の傍ら學術の研究を志して、努力研鑽、終に克く其の宿望を貫徹して學位論文を完成せる篤學は特筆に値し、光る學位は氏が仁術に一段の光彩を放てるを見る。博士の年齢漸く不惑に入る一歳、少壯の意氣益々旺盛にして今猶研究を捨てず、一意專念、唯だ仁術を以て任じ、醫療と研究とに努力精勵するの他に何等の趣味なく、誠意誠實を盡して天職たるを樂しむ熱誠の士也。

産婦人科

福井正(政)憑　△帝都診療界の一部、醫師群集の環境たる赤坂區青山北町四の一〇六に福井産婦人科及び附屬福井産婆養成所あり、猶外に分院として京橋區京橋三ノ四（京橋際）に福井不姙症診療所あり。何れも斯科の大家として現代診療界に其名を謳はるゝ福井正憑博士に依りて經營せらる。本院は現代式洋風の陣容結構にして、大ならずと雖も感じ好き玄關に次で應接室、待合室、診察室、手術室、階上及び後庭には産室及び病室等々、婦人に相應しき設備に最善を盡して係員看護婦等の待遇と相待つて頗る好感を覺えしむ。博士は千葉醫大系の一先輩として錚々たる專門家にして、産婦人科界の耆宿後藤自助教授並に故望月寛一博士に師事する外多年獨學造詣する所大なり。特に其の最も得意とする不姙症及び月經異常の診療は、博士の獨創にして博士獨特の手腕を有し又た自信を持す。加ふるに副院長として博士の令弟にして、斯科の新進手腕家中井卓次郎博士（日醫大・京大系）あり。倶にその圓熟せる手術の評判は、兄弟兩博士の德望と相俟つて、益々人氣を集中し國内は勿論、遠く殖民地まで喧傳す。今や私立病院中斷然頭角を拔き、日々遠近より外來患者の輻輳するもの多く殷盛を極む。

△博士は獨逸協會中學並に二松學舍（夜學）を經て、大正三年千葉醫專を卒へ、直ちに母校の助手として病理學並に生理衞生學を專攻すると共に、縣立千葉病院醫員として勤務の傍ら三輪德寛（外科）、井上善次郎（内科）兩博士に就て内、外科學一般を實地習得す。更に五年五月より東京帝大醫學部介補並に東京市醫員として、同大學及び東京市養育院に於て、内科を碓居龍太博士に、物理的療法科を眞鍋講師（現教授）に、外科を井上善吉學士（現醫博）に、

眼科を河本博士に就て夫れ〳〵指導を受けつゝ實地習得す、尙勤務の傍ら、私立望月產婦人科院（院長故望月寬一博士）に於て同科の實地習得。七年春右職務を辭して歸鄉、本籍地に於て私立福井療病院を創設し、後更に三重縣名張町に名張病院を設け、兩院の長として診療に從事せしが、十二年十二月再び上京、慶大醫學部助手に任用せられ、藤浪剛一、草間滋、小泉丹各敎授に師事、レントゲン學、病理學及び生物學特に生殖生理を研究、兼ねて產婦人科學を專攻す。十五年十一月醫博の學位を受領。昭和二年鄉地病院を閉ぢ、引續き滯京、研究の傍ら假診療所を麴町區富士見町二ノ三五に設け診療に從事し居りしが、三年三月故望月博士の創立經營せる望月產婦人科病院を繼承し、之れに改修を加へなほ病產室を完備し、福井產婦人科と改稱、同時に前記假診療所を閉鎖。次で福井產婦人科分院不姙症診療所を京橋に增設。爾來專ら產婦人科並に婦人內科の一般診療に從事し今日に至る。特に不姙症治療の第一人者として盛名あると共に、兼て優生學的見地より民族の優化を目的とする「母性保健協會」を創設して、處女に對する保健敎育、結婚改良の補導、母性に對する健康相談、姙產婦に對する保護、產婆の改善とその普及等に、あらゆる方面より努力し、これ等に關する著書も亦尠からず。夙に「お產の家」、「產婆養成所」等を設けて、着々その實蹟をあげつゝあり。猶同協會は、畏くも　皇儲殿下の御降誕奉祝記念事業として、思想善導の根源に資する目的に、「お產の家」を更に擴張し、理想的なものを、赤坂區靑山五丁目電車通（靑山師範の側）の地をトして近く新築する計畫あり。

△學位主論文は『「レントゲン」去勢ニ關スル研究』にして、副論文は、(1)「レントゲン」線ニヨル血液像ノ變化ニ就テ、(2)幽門狹窄ト誤診サレ易キ高度ノ胃擴張ヲ伴フ十二指腸狹窄ノ一例、(3)「レントゲン」診斷ヲ迷ハシメタル膽囊疾患ニ因ル幽門部陰影に就テの三篇なり。著書としては、(1)「レントゲン」去勢ニ關スル研究、(2)最新姙娠調節の實際、(3)花柳病の新智識、(4)夫婦愛の破綻を防ぐ性の衞生、(5)最近生理衞生敎科書、(6)最新姙娠より育兒までと胎敎(7)貞操破壞と結婚淨化、(8)實踐家事新敎本、(9)最近博物概論、(10)敎範生理衞生、(11)中等博物（生理衞生篇）、(12)敎範女子生理衞生、(13)實業生理衞生綱要、(14)婦人性典、(15)性病寶鑑、(16)千の庫より子は寶、(17)實驗產婆學等あり。

△專門は產婦人科（特に不姙症月經異常）なれど、博士の特徵とするは千葉醫專卒業後、內科、外科、物理的療法科、眼科、耳鼻科、レントゲン科、病理學、生理衞生學等、その全般に涉り各科の究理と實習とを續け、綜合的臨床の經驗を有する點に大に强味あるを想はしむ。會々博士の感想を聽けば、曰く『現今の若い醫者には眼かくしされた馬車馬のやうに自分の專門以外の診斷がつかぬ人が多くて困る。例へば內科のある友人が一患者を診察して胃潰瘍として治療したところ依然として治らず、自分に依賴されてそれが惡阻であつたことなど、すべて自分の專門科に何んでもかんでも引き入れて治療を誤ることが隨分あるのだ』云々と、その一片を吐露せり。一般臨床家にとりては、亦以て他山の石とすべき乎。

△博士の抱負として聽くに、又曰く「自分はある目的のために產婦人科をやつて居る、これを最後にもつて來るまでには外科もやり眼科も心得えて居る。だが本來開業が目的ではなく、結局は私の主宰する母性保健協會の目的達成、卽ち結婚淨化、民族の優化改良が、私の生命である。萬病と云つても花柳病、癲病、不良兒の撲滅が何年後かに於て表はれることを確信して社會的救濟事業の一として「福井××××」と云つたものを建てたいのが多年の宿望であるが、唯だ資金が無いので開業して居るのである』云々。著者曰く、社會事業の急先鋒として富豪階級の反省と考慮とを煩はし、軈て如斯救濟機關の實現を待望して止まず。また博士は、最近醫療方面と併せ、宗敎方面よりも、思想の動搖を救ひ、時弊を矯めんと努めつゝありと傳聞す。斯の如く獨り醫業のみに止らず、多方面に活動しつゝある博士が、期待する理想の實現は、必ずや刮目に値するものあるべきを信じ、敢て宿願成就の爲に、益々加餐自重あらん事を祈る者也。

△博士は奈良縣宇陀郡三本松村大野の人、福井義成長男、政憑、正憑は同人なり。明治二十二年生れにして、當年四十有七歳也。愈よ圓熟の期に入りて元氣益々旺盛、その今日あるは素より其の玲瓏たる手腕と、努力主義の發現に主因するものなれども、又一つには患者に對する親切本位をモットーとせる、博士の天資溫厚篤實なる性格の反映と見るべき點尠しとせず。要するに、その今日までに成業せる閲歴は、燦として輝き成功と云はざるべからず。又博士が外國人の診療にも特種の信頼と技能とを有することは、曩時國際愛破綻をもつて有名となれる南歐の美人フェリシタ夫人も亦、博士の産室において一貫三百餘のカルメン孃を安産したるをもつて知るに足る。一度び其の醫咳に接せんか、如何なる場合と雖も決して城壁を設けず、雄々しき風貌には威權を具へ溫容を以て人を迎ふ、その態度悠揚として迫らず、話題豊かにしてユウモアに富み談快活なり。清淡寡慾にして人を愛することは診療室壁間に掲ぐる、『見利思義、見危授命』の扁額を觀ても知るべく、又謙和にして物と爭はず、然も世に阿らず人に求めず、自己宣傳的行爲を絶對に嫌ひ、獨力貫行、一意その信ずる所を守つて動かざる處に其の人物の大なるを見、益々敬慕の念を深からしめたり。また醫師會方面にも、その要職を占め、現に赤坂區醫師會事務所が病院内に置かれ、博士これを管掌しつゝあるを見ても、同業者間における信望亦薄からざるを知るに足るべし。

△學生時代よりの讀書家にして學力の優秀なることは、五年制の中學を拔擢せられて四ヶ年にて卒業し、又醫學校において試驗答案に獨逸文を用ひて大澤岳太郎博士の賞嘆するところとなりたる等の事實が證するところなり。殊に心理學修身上に就て明治三十九年以來高島平三郎翁に師事し、その高弟たること、周知に屬す。別名を富久居正寄と號す。また醫家稀に見る常識の持主にして、その所説文章優に一家をなすをもつて、醫家中有數の評論家として、各方面よりその意見を徵せられ、常に新聞、雜誌の座談會や記事にその顔を見ざるものなく、頗にその名喧傳さる。其の筆墨亦雅健にして曲折に富む、たま〳〵或宴會の席上に於て隱し藝を望まれて疊拾疊敷の紙に筯を以て壽と云ふ字を左文字にて紙一杯に鮮やかに書いて一同を驚かしめたと云ふ事は一つの挿話とし、今猶同僚の間に囃さる。又未だ全く世に知られざる博士の趣味の文字と篆刻とは、これ亦天下一品にして、その典雅實に愛好するに足る。著者に與へられる盆額に曰く『重義避濁富、醫心貴清瘦』と、又以つて博士の人格を知るべし。

△尚聞説、博士の父は、往年、文部内務の兩省より第一回の選奬を受けたる模範青年團の創設者にして、教壇に立ちし人、後、郡政に參與し或は村政を統率したることもあり、今尚鄕黨の先覺長老として古稀を迎へて愈々壯健なりと。而して母も亦健在にして孝養を盡され孝行博士を以て知らる。獸醫福井駿太郎及び醫博中井卓次郎は實弟にして、京大教授岡林秀一博士は義兄（博士の夫人靜子は岡林博士の妹）に當り、猶醫博高橋正義、醫博釜本四郎とは親戚の間柄なりと、餘慶ある家柄と云ふべし。博士人物として學德兼備せる人格者たるを尊び、其の精神氣慨は世の臨床家たる人の採つて以て學ぶ處少しとせず。私宅は澁谷區原宿二丁目一七〇ノ一〇に、本邸は出生地に在り。

◇

太田鑒吉　△多士濟々たる帝都醫博界に割據して、江戸川區東小松川町二ノ四〇七四に外來診療室、手術室、内診室、手術準備室、應接室、病室（六室）等々新裝せる陣容を構へ、産婦人科を標榜して昭和四年以來開業せる太田醫院あり。院長太田鑒吉博士は、京大系の少壯學者、産婦人科界現代の權威たる恩師岡林秀一博士の指導を受けて斯學の蘊奥を究め、微生物學は清野謙次教授に就て專攻し、母校より學位を獲得せる斯科界の名醫博也。

△「現代多數の醫學者が各自獨特の研究に絶えざる努力を續けらるゝ點は大に敬意を拂ふ。邦家の爲め否世界の爲に益々奮鬪努力あらん事を偏に希望して止まぬ」云々とは、博士の著者に寄せられたる感想の一片なり。又た醫師に對する感想に就ては「輓近往々にして醫師諸君の心事が甚しく狹少にして只自己の利益を計る事にのみ汲々として他を顧みざる傾向の少からざるものあるは余の大に遺憾とする所なり。今少しく度量を廣大にし一般民衆の健康上の苦惱

を癒す事は、即ち自己を利する點なりと考へ互に連絡して業務に精勵せられん事を希望する」云々と、同感に堪えず、一服の清涼劑たるべし。

△東京市の人、明治二十七年生れにして、東京府立三中、二高を經て、大正八年京都帝大醫科大學を卒へ、直に副手として産婦人科教室に勤め、同十年大學院入學、岡林、清野兩教授指導の下に研究、同十四年二月學位受領、同年朝鮮釜山鐵道病院産婦人科部長兼副院長就任、同十五年之を辭し堺市堺病院産婦人科醫長就任、昭和四年依願辭職上京して開業今日に至る。

△主論文は『「ディアテルミー」ニ因ル雌性生殖器脂肪ノ消長ニ就テ』にして、參考論文は、(1)諸種細菌體及ビ其ノ毒素ニ因ル姙娠時卵巣及ビ子宮ノ形態學的研究、第一、二、三回報告、(2)諸種細菌毒素ニ因ル心筋ノ變化ニ就テ、(3)卵巣及ビ子宮殊ニ産褥粘膜ニ於ケル糖原質ニ就テ、(4)子宮腟部ニ生ジタル「ポリープ」様筋纖維腫ニ就テ、(5)種々ナル下熱劑ノ溶血作用ニ及ボス影響ニ就テの五篇なり。

△性來卒直、人に對するに眞摯にして熱情あり、誠實にして溫情の掬すべきものあるは敬慕の念を深からしむ。たゞ短氣にしてよく怒ることあり、强ゐて言はしむれば、或は之れが短所ならん乎、然しこの點は手術方面を主とする醫師の共通性と見るべき弱點には非ざるかとも考へらる。趣味としては音樂を愛好し、殊に尺八を能くす、鸞雪は尺八に於ての號とす、又克く讀書して精研に今猶餘念なし。春秋豐富、潑剌たる前途や益々輝かし。

◇

山田一夫　△京都府立醫科大學産科婦人科學教授山田一夫博士は、獨り學内に重きを爲す重鎭たるのみならず、斯科界現代の權威たる一人物たるを失はず。博士は京大系大正五年組の一異彩にして、大學院在學中、恩師高山尙平博士指導の下に産科婦人科學の蘊奥を究め、岡林秀一博士教授となるや其後任として助教授に擧げられ、後に母校より學位を獲得せる斯科界の新進教授也。

△學位論文は家兎に就き痲醉の經過に及ぼす出血の影響を研究し、次で痲醉經過中に於ける出血時の救急處置に關する實驗を行ひ、以下必要なる各項に就き夫れ々々經過を觀察し且其が考察を附し、出血時に於ける痲醉の警戒すべきを研究せるもの也。即ち主論文は「痲醉ニ關スル知見補遺、殊ニ出血時ニ於ケル研究」これなり、參考論文は、(1)「ラヂウム」照射ニ因ル腫瘍ノ運命並ニ其移植ニ及ボス影響ニ就テ、(2)「ラヂウム」ノ殺菌作用ニ對スル小實驗就中大腸菌ニ就テ、(3)子宮癌腫組織學的檢索補遺、(4)子宮頸腟部癌患者ノ生命持續ニ就テ　附其保存的處置ノ價値ヲ論ズ、(5)執拗ナル子宮出血症例附輓近ニ於ケル該治療ノ二三、(6)畸形兒、(7)假性半陰陽、(8)第七頸推附近ノ高サニ表ハル、可透視性毛細血管ニ就テ、(9)喇叭管姙娠病理知見補遺、(10)臍帶ノ統計的觀臍、(11)臍帶ノ組織學的檢索補遺附彈力纖維並格子狀纖維ニ就テ等なり。「畸形兒圖譜」の著書あり。

△博士は愛知縣立一中、八高を經て、大正五年京都帝大醫科大學を卒へ、同六年一月同學大學院入學、同時に産婦人科教室副手囑託、同八年四月同學醫學部産婆養成所講師囑託、同九年九月大學院退學、同時に同學醫學部講師囑託、同十一年十月任京都帝大助教授、同十四年三月學位受領、同年十一月任公立大學教授、補京都府立醫大教授、産科婦人科擔任を以て今日に至れり。

△博士は名古屋市東區清水町山田直臣二男、明治二十三年生れにして、當年不惑に入る五歲。學者タイプの風貌に威嚴を存し、溫容の裡に謹嚴そのものの性格を表はす。其の蘊蓄を披瀝して教壇に起つや、諄々說くところに熱あり力あり、學生間に篤き信望を博す。而かも猶春秋豐かにして精研に餘念なき前途は、洋々たる博士の將來を語るに餘裕綽々たり。讀書家にして和歌の嗜みあり、園藝を好む。靄々たる家庭には妻さく子との間に一子文夫あり、京都市出町桝形上ル東入に住む。

◇

山崎義男　△松本市蟻ケ崎に山崎病院あり、産婦人科專門を以て著聞し、私立病院中嶄然其地方に一頭地を拔く。院長山崎義男博士は千葉醫專系の一異彩にして、嘗て獨逸に留學し、伯林大學實驗的生物學教室にてビツケル教授に師事し、次で伯林ウイルヒヨウ、クランケンハウス醫化學部長ヴオールゲムート教授指導の下にて研鑽せり。其今日の聲望と成功とを贏ち得たるもの、遠く其由つて來る所以あるを想はしむ。

△博士は明治四十四年千葉醫專を卒へ、直ちに東京順天堂病院産婦人科部長吾妻勝剛博士の助手となり、大正三年一月まで實地研究、次で同年滿鐵營口醫院産婦人科主任として赴任、同六年大連滿鐵醫院婦人科へ轉勤、同八年奉天南滿醫學堂産婦人科講師となる、同十一年滿鐵より滿二ケ年間歐米留學を命ぜられ、主として獨逸にて研究の後歐米各地の大學を見學し、同十三年歸朝す、爾來引續き滿洲醫大講師として婦人科學を講じ、同十四年四月學位を受領す、同十五年滿洲醫大を辭し、鄕里松本市に私立山崎病院を開設今日に至る。

△主論文は『「ヴイタミン」及ビ無機鹽類缺乏ノ生殖腺ニ及ボス影響ニ就テ』と題する獨逸文の原著なり。參考論文は、(1)二三藥物ノ輸送ニヨル家兎卵巢變化ノ組織學的研究、(2)胎盤脂肪含有量ノ性的差異、(3)家兎ノ胎兒及胎盤ニ於ケル糖原質含有量ノ性的差異、(4)家兎胎盤ニ於ケル窒素含有量ノ性的差異、(5)皮膚ノ酵素ニ就テ（獨文）、(6)子宮筋腫ニ對スル「レントゲン」線ノ作用ニ就テ（獨文）、(7)人類胎盤ニハ「ヒスチヂン」ヲ「ヒスタミン」ニ變化セシムル作用アリヤ（獨文）、(8)家兎ニ於ケル特發性肝硬變ノ一例（獨文）、の八篇なり。

△感想に曰く「醫は仁術なり、金儲けには非ざるなり、醫師に必要缺く可からざるは金錢にあらずして道德なり、就中溫情信義の美德なり。然るに近時開業と云へば直ちに金儲けを想像せらるるものの如く、所謂開業醫の成功者とは專ら金儲けに成功せる人物をのみ云ふものの如し。甚だしきに至りては醫師にして高利貸等を成し蓄財に汲々たる者有りと聞く。斯かる貪慾下劣の輩等には義理も無く人情も無く仁術もへチマもあつたものに非ざるべく一にも金二にも金三にも亦金なるべし。嗚呼淺ましき限りならずや。世の開業醫諸氏よ希くば卿等は徒らに金錢のみを欲せず、私利私慾に耽らず、貧者も卑しめず富者にも諛はず、造次顚沛も人格の修養を忽せにせず以て眞の國手として天職を辱しめざらん事を」云々。學位に伴ふ人格の向上尊重を高調絕叫するの秋、自省の淸凉劑として三思傾聽に値す。

△博士は長野縣北安曇郡七貴村山崎延次長男、明治二十一年生れにして當年四十有八歲也。年壯銳氣、研鑽多年の經驗と共に手腕今や圓熟の域に入り、臨床家としては最も重望せらるゝ腕盛にして一段の貫祿を加ふ、博士の得意や想ふに餘りありと云ふべし。業餘能く讀書精研して新智識の吸收に力め、又た克く自ら陶冶して品性を養ふ。而して居常人に對するに禮儀に嫺ひ、眞摯にして親切あり、溫情に富む博士の態度は歡迎すべき也。

◇

北井幾八　△東京市の中樞、日本橋區濱町二ノ一七に在る北井産婦人科病院は、院長北井幾八（通稱成憲）博士の診療所也。附近は著名なる開業醫の群集せる環境にして、博士は櫛比する此の群雄割據の間に獨立して以來、拮据勤勉、十年有餘にして既に拔くべからざる地盤を築き、産婦人科とさへ云へば北井を聯想せしめ、今日の隆盛あらしめたり、蓋しその過去奮鬪の歷史を顧みれば、立志傳的成功の篤學者として、筆者は推奬するに吝ならざる者也

博士は醫術開業試驗出身とはいへ、天資學究的向學心に燃え、東大教授佐藤外科を振出に三浦内科に次で、諸所病院に於て多年實地の經驗を積み、後ち私費を以て歐洲に遊び、獨逸伯林大學産婦人科教室にてはエルストブンム教授に師事し、同科病理學教室にてはローベルト、マイヤー教授の指導を受けて研究する所あり、歸朝後は慶大の長老川添教授の下に斯學の研究を續け、慶大より學位を得たる篤學の名醫博として其の學識手腕を認めらる。既にして其の今日ある輝しき閱歷は博士の面目を語るに充分也。

△更に其の學歴及び閲歴を公開すれば、明治四十五年東京市私立日本醫學校を卒ゆ、在學中同四十三年既にして內務省醫術開業前期試驗に合格し、卒業後其年後期學說試驗に、翌大正二年後期實地試驗に合格して醫師免許證を下附せらる、同年東大醫科大學佐藤外科教室に於て約六ヶ月間見學、次で三浦內科に轉じ約二ヶ年間研究、同五年順天堂醫院に入局、約九ヶ月間X光線學研究、同六年日本橋區濱町山村外科病院に勤め一ヶ年間實地研究、同七年日本橋區矢ノ倉町櫻井產婦人科病院に轉じ、同十五年まで勤續、此間同十二年私費歐洲留學、主として獨逸伯林大學にて研究し同十四年歸朝す、次で慶大醫學部產婦人科教室にて研究を續け、同十五年七月學位を受領す、爾來獨立して現住所に私立病院を開設經營今日に至る。

△學位主論文は、(1)子宮內膜ニ基因スル「アデノミオージス」ノ解剖及發生ノ論文、(2)外性子宮腺筋增生「アデノミオージス」及卵巢ノ「テール」囊腫ニ就テの二篇より成り原著は獨逸文なり。參考論文は、(1)內性「アデノミオージス」ノ解剖的關係殊ニ細胞異常位置增殖ノ組織學的作用ニ就テノ豫告　附サンプソン氏學說ノ簡單ナル觀察、(2)子宮ト癒着セル卵巢假性粘液囊腫ノ細胞位置異常ヨリ發生セル子宮體部「アデノミオージス」ノ一例ニ就テ、(3)女性生殖器ノ「アデノミオージス」及「アデノフイブロージス」ノ論說、(4)喇叭管ニ於ケル閉鎖及上皮細胞位置異常增殖ノ炎症性原因ニ就テの四篇にして何れも獨逸文の原著なり。

△感想に曰く、(一)將來開業醫たらんとする者は專門的に醫學を修めなければならぬ、一人で二三の科目を無缺に完ふする事は不可能である宜敷學校卒業後一定期間學校又は病院で專門的實地研究をなし專門醫的國家試驗即開業試驗を受け皆一定せる開業資格を得る樣になす可きである。然し開業せざる人は開業試驗を受けると否とは自由である。(二)現代日本の醫學界は世界に對し遜色は無いと思ふ。誠に立派なものである。然し各大學で博士を御手盛りで造る事は如何なものでせうか、之れからは醫博の權威を保つ爲には少なくとも其の提出論文に對し日本中の大學專門教授の贊否を問ふ位の必要は有りはせぬかと思はれる同一「アルバイト」で甲の大學で否決され乙の大學で可決された等と云ふ事を耳にして居る。(三)醫者は何處へ行く勢の趣く所仕方が無いと云つても今の醫師界の現狀を見るに常識では判斷出來ぬ程の泥試合か勢力爭ひである、吾醫會を醫師會幹部達が玩弄物の如く考へて居る樣である。然しながら幹部連のみを責める理けには行かぬ一般會員の放任主義及び不明も亦責めなければならぬ。(四)今の樣な醫界の狀態では是れから新らしく卒業する過剩の醫者はどうなるか雇はれたくも雇ひ手が無い開業しても患者は來ない然し醫者も生きなければならぬ上に住まはなければならぬ着なければならぬ、之れでは多少赤くなるかも知れぬ醫者が赤くなつたら大變な事だ、それよりも大なる希望があれば日本の勢力範圍にある新興滿洲國への進出がより多くの光明を齎すであらう。醫者も人間である以上餘暇が必要である四六時中夜の夜中まで診療せねばならぬと云ふ法律は改制すべきである。(五)今までの開業醫制度を是とする人と非とする人とあるが、僕は日本の開業醫制度は外國に比較して誠に結構であると思ふ。(六)醫藥分業問題も贊成者と否贊成者とあるが、今迄の日本の開業醫制度に照して醫者が診療して自ら投藥する事は誠に贊成であるのみならず患者は大いに得策である。(七)醫師法の改正は結構の所もあるが惡い所も有る。患者の秘密までも發くのは如何なものでせうかそれよりも醫業類似業者及藥劑師の問診投藥を取締る法律が出來なければならぬ。(八)內務省では醫業國營論を稱へる人もあると聞いて居るが中々困難の事である第一政府で其れだけの金が無いではないか露西亞の前例等も良く考慮せなければならぬ、醫者の中でも政府で生活を保證して呉れるなら月給取りでも結構である等と云ふ人もある月給取りも無くては困るだらうが、實に數かはしい次第である意氣も人間味も失せてしまふ。(九)今は以前とは多少異つて居るでせうが醫者の經濟思想の乏しい事はお話しにならぬ。昔から傳統的に甚だ良くない習慣がついたものだ今になつて眠氣の醒めた連中も隨分あるだらう。(十)思ふに之等は皆不景氣と人心の變化が持つて來た產物である僕等が醫者になつた頃は醫者が困つた等と云ふ事は藥にしたくも聞け

なかつた將來一番吾等の醫界を改革善處すべきであると同時に來る可き好景氣に備へ腕を研く必要がある一方社會學も充分會得す可きである。

△神奈川縣鎌倉郡中川村の人、北井喜代松の二男、明治二十四年生る。年齒不惑に入る六歳、年壯の意氣益旺也。學究的溫厚の紳士にして、福德圓滿なる風貌を備へ、崇高なる人格を敬慕せしむるの德を有す。博士の最も特徴とするところは、其の壯熟卓越せる手腕と相俟つて其の診療に臨むや甚だ熱心にして、終始患者本位を主義として克く誠實と親切とを盡す點にあり。其の眞摯にして熱情あり溫味ある態度は、博士の篤き聲望を博する所以にして其の今日あるも亦た偶然ならざるを首肯せしむ。研究以外、業餘の趣味としては音樂を好み、又た圍碁に親しみ、日常多忙の裡に清遊して心身の疲れを休養す、春秋猶豐かにして潑剌たる前途は益々多望也。

◇

山田康　△東京市、省線中野驛南口前（中野區宮園通五ノ二）に產婦人科山田病院あり、院長山田康博士の經營する所、新裝の陣容結構にして、外觀の美と併せて、診察室、手術室、病室、院長室等々內部の設備整ひ好感を與ふ。入院患者の如きは常に滿員の有樣にて、門前は日々外來患者を以て賑ひ、活氣橫溢して頗る盛況を呈す。博士は東大系大正七年組の出身にして、母校の恩師磐瀨雄一教授の指導を受けて、產科婦人科學を造詣する所深く、又醫化學は等しく東大教授柿內三郎博士に就て研鑽する所あり。その學術の蘊蓄は言はずもがな、多年の經驗と相俟つて實際的手腕の圓熟せる點と、天資溫厚にして眞摯なる態度とは、その今日の成功を贏得たるものと云ふべく、此の實際を目擊したる筆者は改めて敬意を表するもの也。

△博士は福岡縣山門郡柳河町南長柄町の人、明治二十五年生にして、大正十年蔣原姓より山田家に入籍す。縣立熊本中學校、五高を經て、大正七年東京帝大醫科を卒へ、直ちに醫化學教室に入り柿內教授に師事し、更に神田駿河臺產婦人科濱田病院に入局す、同八年一月一年志願兵として入營、同十二年任陸軍三等軍醫（同十四年後備役編入）同十二年東大醫學部副手として產婦人科醫局に勤め磐瀨教授の指導を受く、同十四年濱田病院副院長となり、同年六月東京帝大より學位受領、同十五年木下正中教授の推薦により大分市犬塚病院の招聘に應じ同病院長として赴任、產婦人科の診療を司る、次で昭和二年山形市立病院濟生館產婦人科醫長の囑託を受け、同五年迄勤續す、爾來頭書の地に產婦人科山田病院を新築開設して一般の診療に從事、日本婦人科學會評議員として今日に至る。

△學位主論文は「姙娠時ニ於ケル腎臟機能ニ就テ」にして英文の原著なり、參考論文なし、他に、(1)姙、產、褥婦ノ血液及ビ尿中窒素配分率ニ就テ、(2)子癇患者ノ血液及ビ尿中ニ於ケル窒素配分率ニ就テ、(3)姙娠腎患者ノ腎臟機能ニ就テ、(4)產婦人科領域ニ於ケル血壓動態ニ就テ、(5)姙娠時各種臟器內ノ酵素活能量ニ就テ、(6)新生兒ノ臍帶切斷ノ極機ニ就テ、(7)柔道活法ト假死新生兒ノ人工蘇生術法トノ比較並ニソノ處置ニ就テ、(8)姙娠時腎臟機能失調ニ對スル治療方針ニ就テ、其他論著澤山あり。

△博士の趣味とする柔道は講道館五段にして、その柔道界に於ける業績は、大正五年東龍柔道會を、同十一年濟美柔道會を組織し、昭和七年來東京柔道有段者會豐多摩郡支部長たり、更に講道館柔道醫事研究會委員、講道館文化會發行雜誌「作興」の編輯部相談役として今日に及べる等なり。年齒不惑に入る漸く四、引締りたる體格の持主にして意氣潑剌たるものあり、その日常は醫務頗る多忙殆ど席を暖むるの暇なしと雖も、孜々として倦まざる熱心と、不斷の努力とは甚だ多とすべし。其學殖、經驗は向後の活躍と相俟つて、猶春秋に富む前途の大成を期待す。

◇

德橋豐信　△高松市江ノ口町産科婦人科德橋醫院長、德橋豐信博士は愛知醫專の出身にして、愛知醫大教授山崎正董博士に就きて産科婦人科學を專攻し、東京帝大より學位を獲得せる篤學の士也。主論文は齡五十九歳より八十九歳に至る老人子宮の體部十五個、頸部十個に就きて精細なる組織學的檢索を行ひたるものにして、其の學問的價値は既に學界に定評あれば贅せずもがな、學殖と共に臨床に多年の經驗を有し、今や獨特の手腕を發揮して克く今日の成功を贏ち得たるもの、博士の得意や想ふべき也。

△高知縣長岡郡久禮田村の人、明治二十四年生れにして、高知縣立第一中學校を經て、大正三年愛知醫專卒業、在學中特待生を被命、同年一年志願兵として歩兵第四十三聯隊に入隊、同五年五月現役滿期後引續き第一次及第二次勤務を終へ召集解除、同年十月縣立愛知病院診察醫補を被命、同六年五月愛知醫專囑託教員を被命、同七年三月任豫備陸軍三等軍醫、同年十二月縣立愛知病院診察醫を被命、同八年四月愛知縣産婆試驗委員囑託、同年九月愛知醫專助教授心得を被命、同九年十一月任同校助教授、同十二年三月同校廢校に付廢職となり同時に愛知醫大講師を囑託せらる、同十四年十月學位受領、爾來現住地にて開業今日に至る。

△學位主論文は「老人子宮ノ組織學的研究」と題し「一般觀察並ニ彈力組織ニ就テ」及び「脂肪ニ就テ」の二篇より成り、參考論文なし。他にも論著夥多あり。

△感想に曰く『諺に曰く「過ぎたるは及ばざるが如し」實に千古の名言なり、現代醫師の過剩は之れを如實に證するものなり、今日醫業を志す者にして救濟を目的とせる者果して幾人ありや、殆ど皆無と云つても過言ならず、其目的の生活の資を得んとするにあるや、果して然りとせば自己の生活の爲には他人の迷惑をも顧ざるは今日の狀勢なれば、茲に始めて醫業の正實を缺き不必要なる治療をも自己の收入を計る爲には敢て辭せざるべし、恐るべきは醫業の頽廢なり』云々、一服の清涼劑とすべき乎。

△學者タイプの風貌凛々として威嚴を有し、溫容乎として愛想を包む。研究以外、武術に多大の趣味を有し弓術、劍道、柔道、馬術、槍術等々一として可ならざるなし、嗜好としては酒、煙草共に好まず。

◇

佐藤美實　△東京市電氣局病院（大久保）産科婦人科醫長佐藤美實博士は、岡山醫專の出身にして、東大系の着宿近藤次繁（外科）博士、永井潛（生理）博士、竹内松次郎（細菌學血淸學）博士、磐瀨雄一（産婦人科）博士及び木下産婦人科病院長木下正中博士等々、何れも斯學の權威たる恩師に親炙して研鑽大に得る所あり、東京帝大より學位を獲得せる篤學の士也。既にしてその今日ある學殖、手腕、聲望と相俟つて嘖々たる評判あるも亦偶然ならざるを想ふ。

△博士は山口縣立豐浦中學校を經て、大正七年岡山醫專を卒へ、同年五月より八年三月迄東大教授近藤次繁博士の下に外科學を專攻し、同八年四月日本橋區濱町産科婦人科病院に勤務し院長木下博士に師事す、同十一年一月同病院を辭し東大生理學教室研究生となり永井教授の下に研究、傍ら同微菌學教室に於て竹内教授の指導を受く、同十四年十一月産科婦人科教室に轉じ、副手として附屬醫院産科婦人科に勤務し磐瀨教授の指導を受く、同年十月學位受領、爾來東京市技師に任じ東京市電氣局病院産科婦人科醫長となる、昭和三年四月休職フランス留學、次いで歐洲諸國北米合衆國に遊び、六年六月歸朝今日に至る。

△主論文は「淋巴管内接種ニ據ル抗體産生ニ就テ」にして英文の原著なり。參考論文は、(1)淋巴腺ノ細菌ニ及ボス影響ニ就テ殊ニ細菌ノ形態學的變化ニ就テ、(2)淋巴腺ノ細菌濾過能力ニ就テ、(3)眼前房接種腫ニヨル脾脱疽傳染ニ就テ附マンフデイ氏論文ニ對スル疑義の三篇なるが、他にも論著夥多あり。

△博士は廣島縣安佐郡安村淵吾四男、明治二十八年生る。學究的溫厚の紳士にして、其の今日ある篤學は燦として既に博士の前半生史に輝く。年齒漸く不惑に達し、少壯の意氣益々壯んにして研究心に富む。眞面目にして熱心、親切なる臨床家としての評判高し。人に接するに快活にして、平生應答の禮を重んず、讀書家にして、研究以外、克く精神の修養に勉むる風あり、時に暇を得れば旅行に出かくるを樂しむ。東京市麻布區森元町二ノ一九に住む。

◇

二宮亮吉

△京城府壽町に斷然群を拔き、評判嘖々たる二宮産科婦人科病院あり、斯科界現代の大家二宮亮吉博士の經營にして、創業古く、宏壯なる結構と相俟つて內部の設備整ひ、今や牢乎として拔くべからざる地盤を有し、繁榮歲と共に成功の域に在り。博士は九大系の産科婦人科學者にして、嘗て獨逸に留學するや、グライフスワルド大學にてはフリードベルゲン教授、ブラウスニツツ教授に師事し、伯林ロベルトコツホ研究所にてはシュナーベル教授に、又伯林ダーレム、ゲズンドハイツ、アムトにてはマントイフエル博士に就きて細菌學及び血淸學を研究し大に得る所あり、歸朝後九大細菌學教室にて研究を續け、母校より學位を獲得せる斯科界の名醫博也。既にして該博なる學識は言はずもがな、研鑽多年の經驗と共に今や獨特の手腕を發揮して餘す所なし、その隆盛なる今日の成功を贏ち得たるもの亦偶然ならざるを想ふ。

△博士は明治四十二年京都帝大福岡醫科大學を卒へ、直ちに同學産科婦人科副手囑託、同四十四年七月同教室を辭し京城漢城病院婦人科長として赴任、大正二年二月之を辭し京城府壽町に醫院を開業、同十一年に至る、同年六月閉院私費にて獨逸に遊學す、同十三年十一月歸朝、九大細菌學教室にて研究を續け、同十四年十月學位を受領す、先是同年七月より再び壽町に於て病院開設今日に至る。

△學位主論文は『肺炎球菌ニヨル「メトヘモグロビン」生成ノ本性及其「メハニスムス」』、參考論文は(1)細菌ノ燐光生物學的機能ニ及ボス抗體及ビ補體ノ影響、(2)夜光菌ノ燐光能力ノ上ニ特殊ナル「アンボチエプトン」、(3)細菌代謝物ノ赤血球沈降速度ノ上ニ及ボス影響、他に論著夥多。

△「感想とては別に無之候へ共人物批判に於ける讃辭は本者とは少々釣合はぬ感あり然し苟も公開せられたる以上は之にそむかざるよう努力精進を誓ひ併せて貴下の御精進御努力に滿腔の敬意を表し申候」云々とは、博士の寄せられたる書簡の一片なり。博士は愛媛縣西宇和郡三机村の出身、明治十五年生る。當年知命に入る四歲、精力家にして元氣甚だ旺盛、壯齡と共に學識、手腕、人格愈々圓熟して一段の貫祿を加ふ、殊に臨床家としての特徵を具備し、今は最も重望せらるゝ年輩に在り。想ふに博士の今日あるは、日夜倦むことを知らず懸命の努力精進を續け、學を錬り腕を磨くに餘念なかりしは言はずもがな、常に德操を堅持して精神の修養に怠らざりし事實の見逃すべからざるものあり其の篤き聲望を博せるも亦以て人格の反映なるを首肯せしむ。研究以外、業餘の趣味としては乘馬を好む風あり。

◇

玉川和

△釜山鐵道病院に副院長兼産婦人科部長として玉川和博士あり。其の嘖々たる名聲を開くや既に久しく、勵精恪勤、十年一日の如く至誠以て當地診療界の爲め奮盡活躍し、今や斯科界現代の大家として、民衆より多大の信賴と尊敬とを受けつゝあるは、博士界の爲め大に人意を强からしむるに足る。博士は京都醫專出身の篤學者にして、京大教授岡林秀一博士に就きて産婦人科學の蘊奧を究め、京都帝大より學位を獲得せる少壯の名醫博也。

△千葉縣安房郡瀧田村下瀧田玉川石藏の長男、明治二十六年生る。千葉縣立安房中學校を經て、大正四年京都府立醫專を卒へ、直ちに京都帝大産婦人科教室に入りて研究、同五年三月同大學介補を被命、同六年一月任朝鮮總督府道慈惠醫院醫員、黃海道在勤産婦人科主任を被命、同八年一月三菱製鐵所病院産婦人科部長就任、同十一年十一月辭職、

同十二年六月任金澤醫大助手、同十五年一月京都帝大にて學位を授與せらる、同年二月釜山鐵道病院副院長兼產婦人科部長に就任今日に至る。

△主論文は、(1)腦下垂體越幾斯ノ乳腺ニ及ボス組織學的影響ニ就テ並ニ家兎乳腺ノ組織學的研究、(2)乳腺ノ週期性變化ニ就テの二編より成り、從來誤られたる乳腺の所見に關して意見を述べ、並せて人體材料を用ひて乳腺の週期性組織學的研究を施行し、ローゼンブルグ氏、ボラノー氏の認めたる所見の誤りなることを論述せるもの也。參考論文は、(1)子宮癌腫並ニ癌腫子宮ニ於ケル脂肪ノ研究、(2)人胎兒及初生兒子宮ニ於ケル脂肪ニ就テ、(4)人及ビ數種哺乳動物臍帶ニ於ケル糖原質發現ニ就テ、(5)子宮癌腫組織間質ニ於ケル彈力纖維ニ就テの五篇なり、他に論著夥多。

△學究的溫厚の紳士にして篤學者也、其の今日ある閱歷は既に博士の前半生史に盡きて餘蘊なし。當年漸く不惑に入る二歳、福德圓滿なる風貌の持主にして愛想よく、殊に患者に對する態度の眞摯にして熱誠なる點は評判也。讀書家にして文筆に趣味あり、雅趣豐富にして墨痕鮮かなる尺牘は頗る好感を與ふ、平生又應答の禮意缺ぐことなく、人に對するに禮節を重んずるところ、高邁なる其の人格を尊ぶ。釜山府大廳町三ノ一三に住む。

◇

櫻林格造　△横濱市不老町一ノ七一に著名なる櫻林產婦人科醫院あり、斯科界現代の老大家櫻林格造博士の診療所也。開業古く既に二十年餘に垂んとす、繁榮歳と共に牢乎として拔くべからざる地盤を築き、今や横濱診療界に於ける私立病院中、斯科を以て斷然頭角を顯はし成功の域に在り。博士は東大出身の產婦人科學者にして、東大教授木下正中博士に就きて斯學の蘊奥を究め、後東北帝大大學院を卒業して東北帝大より學位を獲得せる斯科界の名醫博也。博士は「ヘパトトキシン」に特異性あり、當該臓器卽ち肝臓に官能障害を來すものなることを推定し、實驗によりて之を證明せんと試みたるもの、卽ち氏の學位論文の主旨なりとす。卽ち主論文は『「ヘパトトキシン」ノ肝臓機能ニ及ボス影響並ニ肝臓及腎臓「チトトキシン」相互間ノ關係ニ就テ』にして、外に參考論文として、獨逸文の原著二篇及び佛文の原著一篇あり。他にも論著夥多あり。

△博士は明治三十八年東京帝大醫科大學卒業後、直ちに同學產科婦人科に入りて研究、同四十年より三ケ年半、日赤富山支部病院婦人科長勤務、大正五年より横濱市にて開業、同十二年東北帝大大學院に入り、同十五年大學院卒業に依り二月學位受領、引續開業に從事し今日に至る。

△博士は山梨縣中巨摩郡大鎌田の出身、明治十二年生る。學究的溫厚の紳士にして、其の今日ある閱歷は博士の前半生史に盡きて躍如たるものあり。當年知命に入る七歳、精力家にして元氣甚だ旺盛、其の專門に涉る學問の深遠と、經驗豐富にして臨床に堪能なるとは言ふに及ばず、今や學識、手腕、人格共に益々老熟の佳境に達して一段の貫祿を加え、最も重望せらるる年輩にして老大家たるの權威を有す。加ふるに天賦篤實敦厚にして、學究的臨床家としての素質を具備し、診療に臨むや甚だ熱心にして、「醫は仁術也」をモットーとす、蓋し其の篤き今日の聲望を博し、多大の信頼と尊敬とを受けつゝあるも亦實に玆に存す。

◇

中本完二　△高田市高田病院長にして產婦人科を擔任せる中本完二博士は、多年地方診療界の爲め努力貢獻する所あり、斯科の大家として多大の信頼と尊敬とを受け、至誠以て不斷の精進を續けつゝあるは大に人意を强からしむ。博士は熊本醫大系醫專時代の出身にして、京都帝大に次で京都府立醫大にて研鑽多年、學位は京都帝大より獲得せるが、日本病理學會よりは第四回「ウイルヒョウ」賞を受領せる篤學者也。若し夫れ其臨床的手術に至りては獨特の手腕を有し、名醫博としての大なる存在を認めらる。

△博士は奈良縣立五條中學を經て、大正五年熊本醫專を卒へ、直ちに日赤和歌山支部病院に勤め、六年和歌山市山縣病院へ轉勤、同七年京都帝大產婦人科教室に入りて研究、同八年奈良縣下市町に開業、同十一年京都府立醫大病理學教室に於て角田教授指導の下に研究、同十五年四月學位受領、同年京都帝大產婦人科勤務、昭和三年辭して高田病院產科婦人科部長に就任し、次で同病院長として今日に至る。

△主論文は「末梢神經終末ノ病理學的研究、就中、鳩白米病ニ於ケル下肢筋分佈神經終末ノ新知見」にして、參考論文は(1)腫瘍ト神經第一、良性、(一、筋腫)及惡性腫瘍ニ於ケル神經、良性及惡性腫瘍ト神經トノ相互的關係、(2)腫瘍ト神經其二、前編追加觀察セル良性及惡性腫瘍數種類ニ於ケル神經ニ就テ、後編、畸形腫殊ニ卵巢皮樣囊腫壁膨隆部ニ於ケル神經、特ニ其等神經纖維ノ腫瘍狀增生ニ就テ、(3)神經切斷ト移植腫瘍ノ發育增殖トノ關係、(4)人ノ正常卵巢ニ分佈スル神經ニ就テ、外十篇あり。他にも論著夥多。

△感想に曰く「徒らに仁術を强ゐられぬ様にしたい、內省の餘裕もある可く、一言にして謂へば技術者たり、然かも尊ばる可き氣節が欲しい」云々。

△奈良縣吉野郡下市町阿智賀の人、中本岩太郎の長男、明治二十七年生る、當年不惑に入る二歲也。漸く年壯に達して手腕益々圓熟す、臨床家としての腕のゆえは、最も重望せらる、得意時代に入る。恪勤勵精の人にして、言はゞ今日一日一日の努力を積んで大道を步む體の精力家を以て聞え、謙和にして克く己を低ふし人を厚くす、また人に對する應答の禮を重んじ時務を缺ぐ事なし、其の態度の眞摯にして紳士的なるは甚だ多とすべく、又高邁なる其人格を尊ぶ。高田市西城町一丁目に住す。

◇

增本誠一郎

△大阪府池田町室町六番町に假診療所を設け、產科婦人科の診療に精勵しつゝある增本誠一郎博士は、大阪高醫の出身にして、恩師たる現大阪帝大教授緒方十右衞門博士に就きて產科婦人科學を研究し、主論文「レントゲン」線の遠達作用に關する實驗的研究、外參考論文四篇を提出して、大阪醫大より學位を獲得せる篤學の士也。

△更に顧みれば、明治四十二年大阪高等醫學校卒業後、直ちに母校產婦人科教室に勤め、十一年間勤務の傍ら研究に從事し、在職中附屬產婆養成所講師を兼任せるが、大正十年血緣のものの經營に成る大阪府下池田町增本婦人科病院に院長として勤務せるも、昭和八年二月經營者死亡の爲めに解散せるを以て、直ちに同町に假診療所を設け今日に至れり。生來博士は病弱の故を以て凡て積極的なる方法に依り開業し居らず、昭和三年以來兵庫縣川邊郡川西町に住宅を移轉して自宅開業はせず、前記池田町の假診療所にては每日午前九時より午後二時迄診療に從事しつゝあるも業務方針は寧ろ消極的卽ち漸くに生活を保つ程度にて健康を保特する上に留意しつゝあり、幸に健康と共に切角の自重加餐を祈るや切也。

△大阪市北區曾根崎永樂町の人、明治十九年生れなれば當年知命に達す、眞面目なる學究的溫厚の紳士也。其の今日ある閱歷は博士の面目を語るに足る、但だ病弱の故を以つて積極的活動の激務に堪えざるは同情に堪えざる也。人と爲り篤實穩健、躬行實踐主義の人にして溫情に富み、「醫は仁術也」を以てモットーとして、熱心深く誠意誠實を盡す、其の高邁なる人格は尊ぶべき也。兵庫縣川邊郡川西町花屋敷に住む。

◇

松本操一

△縣立廣島病院に婦人科部長として松本操一博士あり。東大系の產婦人科學者にして、母校より學位を得たる近來の名醫博たるに恥ぢず、其の名聲既に關西に著聞す。

△博士は六高を經て、大正九年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに副手として產婦人科教室に勤め、同十年九月牛込區下

宮比町私立吾妻病院に就職、同十一年七月東京帝大醫學部法醫學教室に入り教授三田博士指導の下に研究、同十三年七月再び東京帝大醫學部副手、同十四年一月南滿安東醫院婦人科醫長となり、同年二月關東廳醫務囑託、同十五年四月學位受領、同年六月現職に任ぜられて赴任今日に至る、其間廣島縣產婆試驗委員を命ぜらる。

△學位主論文は「產褥時竝ニ卵巢及ビ子宮血管結紮後ニ於ケル血糖及ビ血液含窒素物質ノ比較研究及ビ其ノ耐糖能力ニ就キテ」にして參考論文なし、外に、(1)在滿內地婦人ノ姙娠持續日數ニ就キテ、(2)饑餓ノ初生兒含水炭素ニ及ボス影響、其他に尠からざる論著あり。

△博士は岡山縣吉備郡新本村の士族松本蟠三郎長男、明治二十七年生る、當年四十有二歳にして少壯の意氣益旺也。博く學識を有し多年の經驗に富み、手腕漸く壯熟の域に入る。而かも春秋猶豐かなれば、博士の前途や洋々たり。廣島市國泰寺町八に住む。

◇

鈴木甚吉　△東京市芝區琴平町四〇（虎ノ門金比羅社隣）鈴木產人科院長鈴木甚吉博士は、千葉醫專の出身にして、大正八年同校卒業後、同年十二月まで小石川區鶴岡病院醫員兼和泉橋慈善病院研究生として產婦人科學研究に從事す、同九年一月より十年八月まで芝區產婦人科樋口病院勤務、同年九月慶大醫學部醫化學教室に入り照內教授及び末吉助教授指導の下に專ら產婦人科的生化學の研究に從事す、同十一年九月慶大醫學部助手に任ぜらる、同十五年五月慶大より學位受領、同時に慶大醫學部產婦人科教室勤務となり川添、川上兩博士指導の下に產婦人科的病理學を專攻す、昭和三年春慶大を辭し現住所に開業今日に至る。

△主論文は「胎生初生兩期ニ於ケル肝臟ノ生化學的研究（肝臟ヲ中心トシテ見タル胎兒ノ物質代謝）」にして、參考論文は、(1)姙娠及ビ產褥各期ニ於ケル子宮卵巢及ビ胎盤ノ中性脂肪及ビ「コレステリン」含有量ニ就テ、(2)胎兒諸臟器ノ脂肪量ニ就テ、(3)姙娠家兎血液ノ中性脂肪及ビ「コレステリン」含有量ニ就テ、(4)胎盤「リパーゼ」ニ關スル研究の四篇なり。其後發表せる論著亦尠からず。

△博士は神奈川縣浦賀町の人、明治二十七年生る、當年漸く不惑有二にして意氣益旺也。多年研鑽の結果、其の專門に亘る學識は言はずもがな、經驗豐富にして獨特の手腕を有し、今は働き盛にして最も得意の時代に在り。既にして多年扶殖せる聲望は、圓熟せる診斷手術の好評と相俟つて、堅實なる獨自の地盤を築き、繁榮歳と共に拔くべからざる盛況を特續しつゝあるを見る。刀圭多忙の裡にて各種のスポーツ及び通俗雜誌への寄稿等を趣味とす。

◇

石原俊士　△高松市天神前舊師範學校跡に個人の病院を新築開業せる石原俊士博士は、大正十二年以來倉紡經營の倉敷中央病院、竝に高松病院に產婦人科醫長として昭和九年六月同病院の廢止解散さるゝまで勤務し、多年大衆の聲望を負ひ當地診療界の爲め活躍する所ありしが、爾來獨立經營の下に新病院を新設し一般診療に從事し居れり。

博士は京都府立醫專の出身にて京都帝大より學位を獲得せる篤學の士なるが、產婦人科學は京都帝大教授故高山尙平博士の指導を受け恩師の薫陶に負ふ所多し。曩に大阪に於ける日本醫學會（昭和五年四月）に於て博士の發表せる「膵帶ノ內分泌ト癌腫治療」なる論題は中外學界に一大センセイションを與へ、爾來此新學說と治療法とは世界的に學界の問題となるに至れるは識者の既に周知せるが如し、博士は以來引續今猶本問題の研究に沒頭し、學說の確保に治療例の發表に孜々として精進しつゝあるは、學界の爲め大に人意を强からしめ軈て其完結を期待せらる。

△更に博士の學歷より概說すれば、岡山縣立津山中學校を經て、大正六年京都府立醫專を卒へ、直ちに京都帝大醫學部產婦人科教室に入り高山博士の指導を受け、同七年產婦人科選科に入學す、滿三ケ年にして同教室を辭し、同九年

京都府立醫大微生物學教室に入り常岡博士に就き細菌血清學を修むること三ケ年、次で同十二年岡山縣倉敷中央病院創立に際し聘せられて婦人科に勤め傍ら研究を續け、同十五年七月學位を受領す、先是婦人科醫長本多博士洋行の後を襲ひ中央病院婦人科醫長となる、昭和二年二月轉じて高松病院婦人科醫長となり、昭和九年六月同病院の廢止解散と共に之を辭し現住地にて開業今日に至る。同三年四月より研究中の子宮癌腫に就いての研究は今猶續行中。

△學位主論文は「赤血球沈下反應ノ本態ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)沈降反應ニ於ケル沈降曲線ニ就テ、(2)抗「トリプシン」作用ト赤血球沈下反應、(3)內分泌ト免疫體發生ノ關係、外六篇あり。

△現在の學界に對しては「現代までに既にあらゆる方面の研究が出來て居る、而して研究業績は續出して山積して最早堀出すのに困難を感ずる今後は識者が各種問題を分擔し一度綜合的に研究叙述する必要がある」云々との感想の一片を吐露せり、至極同感也。

△博士は岡山縣赤磐郡鴻瀨村江尻の醫師石原富三郎の長男、明治二十四年生る、當年四十有五歳也。熱心なる研究家にして殊に殘されたる癌腫の研究に對しては、畢生の事業として之が完成を期して今猶努力中なり、その意氣を壯として成功の日を待望すべき也。讀書家にして文才あり、鐵海を號とす、外にテニス、撞球を好み業餘の趣味とす。賦性謹直にして敦厚、人に對する答禮を忘らず、尺牘優雅にして溫情の掬すべきものあるは其の人格を敬慕せしむ。强ゐて其人の癖を言はしむれば、机の上を片付けないことが或は短所かともいふべきか。高松市宮脇町三八二に住す。

◇

堺　純　雄

△宮崎縣都城市都城本驛前堺純雄博士の經營に產婦人科堺醫院あり、博士自ら日々臨床に勵み、博士獨特の手腕は診療手術の好評と相俟つて益々遠近の人望を吸收し、既に牢乎たる獨自の地盤を築き、當地方診療界に卓然として頭角を拔き盛況を極む。博士は長崎醫專出身の產婦人科學者にして、京都帝大教授木村廉博士に就きて血清學を、同小南又一郎博士に就きて法醫學を專攻し、京都帝大より學位を獲得せる篤學の士也。學位論文は藥劑の墮胎作用と其身體重要臟器に及ぼす影響を研究せるものにして、諸種藥物の墮胎作用を檢し、同時に他の重要臟器に及ぼす障害程度を研索し、尙ほ民間通經藥の分析及び其の家兎子宮筋に及ぼす作用を「ベロナール」が墮胎に使用せられたる場合腐敗に對する抵抗を檢せるもの、卽ち本論文の骨子なりとす。

△博士は大正五年長崎醫專卒業後、直ちに同附屬醫院產婦人科へ勤務、同十一年南滿醫學堂附屬奉天醫院產婦人科へ轉勤、同九年五月滿鐵營口醫院產婦人科主任を被命、同十一年九月京都帝大醫學部微生物學教室に入り血清學專攻、同十二年二月任同學部法醫學教室助手、同十四年十一月同學部講師囑託、同十五年十月依願解囑、同年十二月學位受領、昭和二年五月下關市にて開業、其後現住地に轉住開業今日に至る。

△學位主論文は「藥劑ノ墮胎作用ト其身體重要臟器ニ及ボス影響」にして、(1)蘆薈ト硫酸鐵、(2)「キニーネ」ト「アンチヘブリン」、(3)「サビナ」油、(4)「ベロナール」ノ毒物學研究の三篇より成れり。參考論文は、(1)硝子片ニヨル刺傷ニ就テ、(2)孵化ノ進行ト「ヱムブリヲ」心臟及ビ肝臟ノ重量上ノ關係、(3)烟草ニヨル火藥ノ鑑別、(4)初生兒ノ急死の四篇なり、他にも少からざる論著あり。

△感想に曰く「生產者より消費者へのモットーの下に農、工業者の形成するブロック外に置かれたる醫師は健康保險簡易保險と壓迫を受け、辛ふじて餘喘を保ち居りしものの產業組合病院の設立に依り自由開業者は最後のとゞめを刺さるゝ事と存ずる」云々。

△博士は長崎市岩瀨道町の出身、明治二十三年生る。學究的溫厚の紳士にして、篤學の士なり、其の今日ある篤學は立志傳的異彩に富み特筆に値す。今は分別盛にて年齒漸く不惑有六、年壯の意氣と共に、學識、手腕、人格愈々琢磨して圓熟の域に入る。學者タイプの風貌の持主にして、凜々たる溫容の裡に威嚴を存し愛嬌を包む、殊に臨床家とし

ての態度の眞面目にして熱誠なるは、博士の長所として傳へられ評判極めて良好也。思ふに氏が今日の聲望を博せるは、氏が常に精神の修養を怠らざりし事實は見逃すべからず。家庭には妻クニとの間に二男一女あり。

◇

忽滑谷　精一　△東京慈惠會醫院產婦人科副部長にして、慈惠會醫大助教授たる忽滑谷精一博士は、慈惠醫專の出身にして、卒業以來常に婦人科の權威者たる樋口博士の指導を受け、又嘗て瑞、獨に遊學して研鑽大に得る所あり、歸朝後慈惠醫大より學位を獲得せる產婦人科界の名醫博也。而かも猶春秋に富む博士は、拮据勵精、孜々として精研に餘念なく、將來有爲の學究の士として、學園に最も囑望せらるゝ一人物たるを待望すべき也。

△博士は大正五年東京慈惠醫專卒業後、直ちに慈惠會醫院產婦人科當直醫勤務、同七年三月之を辭し私立東京病院產婦人科勤務、同年七月同病院を辭し埼玉縣入間郡三芳村にて開業、同十二年八月渡歐、瑞西ベルン大學生理學教室アツシヤー教授、次でプラーグ獨逸大學組織學教室コーン教授及び生理學教室チェルマツク教授の下にて研究、同十四年十月歸朝、同十五年四月慈惠會醫院產婦人科當直醫として勤務の傍ら慈惠醫大研究科學生として生理學教室に入り、同十五年十一月學位を受領す、昭和二年一月慈惠會醫大講師となり同年四月慈惠會醫院醫員となる、同五年十一月更に慈惠醫大助教授となり今日に至る。

△學位主論文は「滑平筋ニ於ケル溫度刺戟並ニ順應ニ就テ」なる獨逸文の原著なり。參考論文は、(1)交感神經並ニ副交感神經毒及ビ「アミノ」酸ノ影響ノモトニ於ケル哺乳動物生活肝臟ノ酸素消費ニ關スル研究、(2)精糸吸收ノ意義並ニ早期去勢白色「ラツテ」ニ於ケル腦下垂體ノ組織的變化に就ての二篇にして何れも原著は獨逸文なり、其他の論著亦枚擧の遑なし。

△博士は埼玉縣入間郡三芳村忽滑谷平三郎次男、明治二十四年生る、眞面目なる學究的年壯の紳士にして、溫厚篤實年齒不惑に入る五歳、該博なる學識を有し、臨床に堪能にして今は最も腕の冴えたる全盛時に在り。熱誠克く學生を指導し、診療に臨むや誠實と親切とを以て一貫す。居常人と接するに恬澹として尊大振らず、凛々としたる風貌は豐頤の裡に愛想を藏す。趣味としては園藝に親しみて業餘の道樂とす。東京市淀橋區下落合一ノ五三五に住む。

◇

堤　庸　三　△東京市蒲田區新宿町四一八に小兒科、婦人科を以て著聞する堤醫院あり、院長堤庸三博士は、長崎醫專の出身、慶大より學位を獲得せる篤學の名醫博にして、研鑽多年、博く學識を有し、臨床の經驗に富みて、今や獨特の手腕を揮ひ、益々遠近の人氣を吸收しつゝあるは頗る囑目に値す。一面には又博士が蒲田にて開業以來、蒲田尋常高等小學校醫、公民學校醫、青年訓練所醫等を囑託せられ、少壯なるに係はらず、蒲田區醫師會理事、蒲田區醫師會醫政調査部幹事等に擧げられ、猶蒲田小學校後援會理事として、終始公共の爲に活躍盡瘁するのみならず、山元オブラート株式會社顧問として產業界にも參與するなど、現代活動家としての表徵たるを失はず、其の熱誠努力や敬服すべき也。

△顧みて博士の今日ある經歷を概說すれば、大分縣立杵築中學校を經て、大正八年長崎醫專を卒へ、直ちに小倉市小倉記念病院產婦人科勤務、同十年十月同院辭職(其間約三ケ月間慶大附屬病院並に京大附屬病院見學)、同十年十一月より十五年十一月迄慶大醫學部助手となり藥物學教室にて研究、同十五年十一月慶大より學位受領、同年同月小石川區原町阿部病院副院長就任、昭和二年末濟生會病院小兒科轉勤、昭和四年七月以來專ら自己醫院の經營診療に從事し今日に至る。

△主論文は「尿毒ニ關スル研究」にして、(1)犬尿ノ毒作用ニ就テ、(2)犬尿ノ毒性ノ本態ニ就テ、(3)犬尿窒素毒ノ毒作用ニ就テの三篇より成れり、參考論文は、(1)血液瓦斯ノ赤血球沈降速度ニ及ボス影響、(2)「ショツク」毒ニヨル赤血

球沈降速度ノ變化ニ就テ、(3)蛋白質並ニ其分解產物ノ赤血球沈降速度ニ及ボス影響ニ就テ、(4)過敏症「ショック」ニ於ケル急性肺氣腫ノ顯微鏡的檢索の四篇にして、其他の論著夥多あり。

△博士は研究と發明とに多分の趣味を有すれ共、開業醫のこととて暇がなく、刀圭多忙の裡に餘暇を見付けては業績發明其他に關する事項を發表するをせめてもの樂しみとせるが如し。最近數年間に於て發表したる原著の中にても、(1)身體各部位ニ於ケル體溫ノ變動ニ就テ、(2)何處デモ測レル接觸式「ツツミ」檢溫器ノ構造ト機能ニ就テ、(3)體溫測定上過誤ヲ來シ易キ理由ト身體各所ニ適スル「ツツミ」檢溫器ノ價値ニ就テ、(4)衣服並ニ寢具ノ溫度ト體溫トノ關係ニ就テ、(5)氷囊ニ依テ溫度冷却ノ爲メ死ニ頻セシ患兒、(6)「オブラート」ニ包ミ服用セル藥物ノ散出時間並ニ「ツツミ」「オブラート」ノ特徵、(7)治療上ニ於ケル「オブラート」ノ價値ニ就テ、(8)小兒デモ山元「オブラート」ヲ用ヒテヨイ、(9)從來ノ吸入器使用ニ依ル病狀惡化ノ原因ト無風性「ツツミ」吸入器ノ構造並ニ價値ニ就テ、(10)吸入ニ依ル災害ト吸入器ノ完成、(11)吸入器ノ選擇、(12)イタヅラツコ璋二ト皮膚檢溫ノ行方、(13)生理的變動並ニ測定誤差ノ範圍ト見做スベキ赤血球數ニ就テ、等々は博士の最も得意とせるものなり。又發明と考案の中には、(1)昭和四年從來の「オブラート」の容易に溶解せざるを實驗し、之に重曹を附加して易溶性「オブラート」の出現に成功せり（特許第八三七三一號）現今山元「オブラート」として發賣せらる、(2)昭和五年身體の何處でも接觸して測定の出來る皮膚檢溫器を發明し、「ツツミ」檢溫器として近々發賣せられる筈（本品は日本は勿論英、米、佛の特許を有す）、(3)昭和六年眞空を利用して藥液を吸ひ上げる現在の吸入器の缺陷（冷風を伴ひ病狀を惡化せしむ）を發見し、特種の吸入器（特許並に新案等十五六種を有す）を創製し、冷風を伴はざる體溫と同溫の散霧を得る完全なる吸入器の發明に成功せり（大學吸入器として販賣せらる）、(4)其他火鉢底用の水蒸氣發生器、蒸氣發生用電燈笠等の實用新案、(5)渦卷寒暖計の登錄、(6)其他數種の發明、考案品あるも猶發表の時機にあらずと云ふ。

△感想の一二を吐露して曰く、(1)醫業は餘りよい家業でない。大病院を經營して居る人は別として、一般開業醫と云ふものは暇がないものである。「私の時間」「眞の意味の自由の時間」と云ふものが無いのである、何時も留守をあけれぼ食へないし、終日醫務を見れば世の中に遲れる、之は他の職業と違つて本人丈に免許されてゐるから本人でなければ家族では全然出來ない爲めである、金があつて食へる人のやる仕事ではない。(2)世の中には數多の發明家が居る、そして數多の發明、考案を出願してゐる、然し餘り度を過すと自ら溺れる結果となる、極局心身並に家財を消費して資本家に食はれる結果となる場合が隨分ある。敢て世の群小發明家に、こんな事のない樣に苦言を呈し度い次第である、云々。

△大分縣杵築町士族石田伯介の三男、明治二十九年生れ、大正十三年愛媛縣八幡濱町（現在大分縣杵築町へ轉籍）ドクトル、メデチーネ、堤聚の養嗣子となる。博士は孝心に富み鄕里に在る七十二歲の老母（キク）の健康と長壽とを祈つて居る。猶、實弟石田四郎（工學博士）は現今東京帝大助教授にして航空研究所員である。博士は少壯の意氣益々壯にして研究心に燃え、醫務の傍ら論著、發明、考案等に多大の趣味を集中して亦他事を顧みざるの概あり。今は分別盛にして手腕、人格共に圓熟の域に達し、最も信賴すべき好箇の臨床家として篤き聲望を博す。殊に精力家にして平生刀圭甚だ多忙にて席を溫むるの暇なしと雖も、熱誠克く公共の爲め盡す所あるは甚だ多とすべき也。

◇

堤　辰　郎

△東京女子醫專教授堤辰郎博士は、長崎醫專出身の銀時計組の一人にして、東京帝大教授山極勝三郎博士に次で慶大教授川添正道及び加藤元一兩博士の指導を受け、慶大より學位を獲得せる新進の產婦人科學者として旣に學界に共の學識手腕を認めらる。

△博士は大正五年長崎醫專首席卒業（銀時計受賞）、同年十二月より翌七年二月まで一年志願兵勤務（任陸軍三等軍

醫）、同年九月より九年八月まで東京帝大醫學部病理學教室にて研究、同九年九月より十四年四月まで慶大醫學部產婦人科教室に勤務、傍ら生理學研究、同十四年一月同學講師に任用、同年二月學位受領、同年五月市立小樽病院產婦人科部長に就任、同十五年九月辭職再び慶大講師に任用、昭和四年四月助教授に任用、同六年四月東京女子醫專教授に就任今日に及べり。

△學位主論文は「痲醉ト神經ノ電氣的抵抗」にして、參考論文は、(1)「ラヂウム」ノ卵巢ニ及ボス作用ノ實驗的究究、(2)姙婦血球沈降現象ノ本態ニ就テ、(3)著明ナル體質異常ヲ呈セシ子癇ノ一例ニ就テ、(4)惡性脉絡膜上皮腫ノ症狀ヲ呈セシ一患者ノ子宮及ビ卵巢ノ病理學的所見並ニ其ノ意義ニ就テ、(5)所謂攝護腺肥大症ノ病理ニ就テ、(6)口蓋扁桃腺結核ニ就テ稀有ナル胃憩室ノ一例ニ就テ、(8)糖尿病ノ二例ニ於ケル殆ト全クランゲルハンス氏島ヲ缺如セル膵臟及ビ副腎ノ病理組織的所見ニ就テなり。(1)婦人科學、(2)人工姙娠中絕ト避姙、(3)姙娠調節の醫學的知識（通俗書）等の著書あり。

△博士は佐賀縣藤津郡吉田村の人、明治二十五年生る。篤學者にして其の今日ある閲歷はこゝにこれを語りて餘蘊なからしむ。今は分別盛にて年齒漸く不惑有四、至誠以て研究と醫育の爲め懸命の努力精進を續けつゝあり。猶洋々たる前途は頗る春秋に富む、折角の自重加餐を祈る。佐賀市にて開業の太田二也醫博は義弟也。東京市牛込區河田町一九に住む。

◇

島田廣　△東京市麻布區北新門前町一〇島田產婦人科病院の院長は島田廣博士也。大阪醫大の出身にして恩師木下東作博士に就きて生理學を、京大教授岡林秀一博士に就きて產科婦人科學を、同松本信一博士に就きて皮膚泌尿科學を研究し、京都帝大より學位を獲得せる篤學の士、開業拮据拾年餘に垂んとし、博士獨特の手腕は診療手術の好評と相俟つて益々人氣を吸收し、今や群雄割據の間に卓然として獨自の地盤を築き成功の位地に在り、博士の得意や想ふべき也。

△博士は長野縣立飯山中學校を經て、大正六年大阪醫大を卒へ、直ちに同大學附屬病院醫員拜命、產婦人科勤務、同八年三月轉じて大阪赤十字社病院醫員被命、產婦人科勤務、翌九年大阪醫大研究科に入學、生理學教室にて研究、同年九月福島病院醫長兼務、同十年十月依願退職、再び大阪市西區南堀江三丁目及南區八幡町に於て病院開設、同十二年二月より京都帝大醫學部產婦人科教室及皮膚科教室にて研究、昭和二年一月學位受領、同時に京都帝大醫學部副手囑託、產婦人科教室勤務、同年六月依願解囑となり爾來東京にて產婦人科病院開設今日に至る。

△學位主論文は「高張葡萄液注射ノ實驗的研究」にして、(1)高張葡萄液注射ノ血液及血淸ニ及ボス影響、(2)高張葡萄液注射後ニ於ケル血中糖量ノ動搖ト喰菌性作用トノ關係、(3)血中糖量ノ動搖ト喰菌性作用トノ關係、(4)經口的葡萄液投與後ニ於ケル血中液量動搖ト喰菌性作用トノ關係、(5)食水炭素液靜脈內注射後ニ於ケル喰菌作用ニ就テの五篇より成り、參考論文としては、(1)姙娠及產褥期就中分娩前後ニ於ケル正常及免疫抗體ノ動搖ニ就テ、(2)高張葡萄液靜脈內注射ノ血管內輸入菌芽ニ及ボス影響等外五篇あり、他に論著夥多。

△博士は長野縣更級郡中津村の出身、明治二十二年生る。資性溫厚篤實、其の平生を見るに日夜孜々として學を錬り腕を磨くに餘念なく、又克く自ら精神の修養に怠らざる事實の見逃すべからざるものあり。年齒今や四十有七歲、益々元氣にして圓熟せる手腕は一段と冴ゆ。讀書家にして書見を樂しみ、桂風を號とす、又スポーツに趣味を有し殊に庭球、野球、ゴルフを最も好む。家庭は妻義子との間に一男一女子あり、靄々として常に朗かなり。

◇

林一治　△福井地方の診療界を俯瞰して、暫く人物を物色するに方り、劈頭に擧ぐべきは福井縣武生町林

病院長林一治博士を推さゞるを得ず。林病院は林博士の經營する所にして輝しき歴史を有し、現在内科、外科、産婦人科を診療し、其規模の雄大壯麗と共に、ベツト數六十を有し、内部の施設又た完備せる點に於て、私立病院中縣下に他の追隨を許さゞる也。加ふるに林博士はその最も得意とする産婦人科を及外科擔任して獨特の手腕を揮ひ、副院長格たる小延俊雄博士は内科を擔任して玲瓏たる手腕を發揮する所あり、その盛大なる今日の成功を贏ち得たるもの、又た偶然ならざるを思ふと同時に、兩博士の美德を禮讃すべき也。

△更に學歴及ひ閲歴を簡單に語らしむれば、福井縣立福井中學及び山口高等學校を經て、明治四十年京都帝大醫科大學を卒へ、同學副手を拜命、同四十二年和歌山縣東牟婁郡那智村天滿病院長として赴任、同四十五年再び京大に副手となり、大正二年現地に林病院を開設なし、大正十三年京都帝大々學院に入學、同十五年在學の儘學術研究の爲歐米見學、昭和二年四月京都帝大より學位受領同年十月歸朝今日に及べり。

△主論文は『「ストロフアンチン」ノ心臟麻痺毒ニ對スル拮抗作用竝ニ其後續作用ニ就テ』にして、參考論文は、(1)「ヂキタリス」簇竝ニ「ヂキタリス」作用ヲ有スル物質ノ後續作用ニ就テ、(2)「サルヴアルサンナトリウム」溶液ノ酸化ニ基ク藥物學的作用ノ移動ニ就テ、(3)靜止蛙心ノ電戟ニ因スル復活ニ就テ、(4)心房並ニ心室ニ於ケル藥物作用ノ比較、(5)血管攣縮殊ニ「ヂキタリス」體ノ血管攣ニ及ボス「カルシウム」ノ影響ニ就テの五篇なり。指導教授は主として母校の森島庫太教授、岡林秀一教授及び尾崎良純教授なるが恩師の薫陶に負ふ所亦大なり。猶他に發表せる論著中、(1)福井縣公娼のマイニツケ氏反應竝に血液型の統計的考察、(2)保健衛生上より觀たるスキー等は博士會心の作と見るべき也、以て學究方面の一班を窺はる。

△博士は福井縣南條郡南日野村島の出身にして、林文博士の兄也、明治十四年生る。眞面目なる學究的溫厚の紳士にして、特筆すべき長所と言へば卒直の點なるべし。又臨床家としてその今日ある成功は言はずもがな、日常刀圭多忙なるにも拘はらず、研究心旺盛にして日進月歩の學術の進歩に後れざるを念として、常に學を錬り腕を磨くに餘念なく、幾多の研究業績を發表するに努力精進を續けつゝあるを見る、又克く德操の堅持を志して自ら精神の修養に務めつゝある事實を見逃すべからざるものあり、甚だ多とすべき也。著者更めて林兄弟兩博士の健康と成功とを祝し、併せて猶春秋に富む兩博士の前途、益々努力奮闘あらんことを祈るや切也。

◇

山崎庄吉

△四國診療界の重鎭山崎庄吉博士の經營する山崎産科婦人科病院は高知市中島町二八六に在り。博士は京大系にして所謂京大派の少壯名醫博なるが、研鑽多年、學理と共に臨床の經驗に富み、今や獨特の手腕を發揮して餘す所なく、開業拮据拾年餘にならんとする今日、既にして牢固たる地盤を獲得して一流の位地に悠々たり。

△博士は大正九年京都帝大醫學部卒業後、直ちに副手として同學部婦人科教室勤務、同十年十月京大大學院入學、同十二年三月大學院在學の儘日赤秋田支部病院婦人科醫長就任、同十四年七月退職の上再び大學院に復歸し研究を續く昭和二年五月學位受領、同年六月より高知市に開業今日に至る。

△學位主論文は「微量炭酸瓦斯産出ノ生物學的研究」にして、(1)神經幹ノ炭酸瓦斯排出量ニ就テ、(2)細菌の炭酸瓦斯排出量ニ及ボス光ノ刺戟作用ニ就テの二篇より成れり。參考論文は、(1)麻醉神經ノ興奮傳導ニ就キテ、(2)青酸化合物ノ神經幹週期的興奮ニ及ボス影響ニ就テ、(3)女性生殖器ノ電氣的痛覺ニ就テ、(4)後腹膜肉腫ニ就テ、(5)破壞性葡萄狀鬼胎ト惡性脈絡膜上皮腫トヲ併發セル一例の五篇なり。

△博士は高知市の出身、明治二十六年生る。其の今日ある博士が懸命の努力精進を續け、學を錬り腕を磨くに餘念なかりしは言はずもがな、今や手腕、人格共に圓熟の域に達し、益々人望を博する所以知るべき也。博士の年齡不惑に入る三歳、益々元氣にして猶頗る春秋に富む、切に自重加餐を祈ると共に一層の活躍あらんことを。

◇

太田耕作　△東京市四谷區新宿武藏野病院に婦人科部長として太田耕作博士あり。學歷より見れば、三高を經て、大正四年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに同大學婦人科醫局に入り同七年九月迄在局し、それより故吾妻勝剛博士の經營せる東京市牛込區吾妻病院に勤務、同十一年一月より在職の儘東大藥物學教室に入り研究に從事す、同十二年九月吾妻博士逝去後四谷區新宿武藏野病院に勤務、婦人科部長として今日に至る、同十五年三月藥物學教室退學昭和二年五月東京帝大より學位を受領せり。

△學位主論文は『「デイオキシフエニール、メチールアミン、エタノール」、(アドレナリン)ノ光學的兩異性體トソノ藥理作用』にして、參考論文は『樟腦ノ光學的兩異性體ガ蛙心臟ニ及ボス作用ニ就テノ知見補遺』なり。其他論著夥多あり。

△博士は山形縣東村山郡長崎町長崎の出身、明治二十一年生る。壯齡今や不惑に入る八歲、臨床家としては最も腕冴え、年壯の意氣と共に努力奮鬪を要するの秋なり。趣味としては研究と醫療そのものに精進する外何等の道樂を有せず、「醫は仁術也」をモットーとして終始し、以て其の天職なるを樂しむの士也。猶洋々たる前途は頗る春秋に富む、幸い健康にして益々活躍あらんことを望む。東京市四谷區花園町一〇九に住む。

◇

森棟賢隆　△東京市芝區田村町五の十四に森棟產科婦人科病院あり、院長森棟賢隆博士の私立院にして、開業既に古く、多年の聲望と相俟つて牢固たる地盤を有し、超然として群雄割據の間に成功の位地を占む。博士は東大系の產婦人科學者にして、學位は母校より獲得せる名醫博たるに恥ぢず、今や帝都診療界に於ける斯科の老大家として重きを爲す一人物也。學究方面にて產婦人科學は木下正中博士に就て、藥理學は林春雄博士に就て指導を受け、日頃研學に余念なかりし當時を追想せば、博士たるもの轉た感慨無量の感なからずとせず。

△顧みて其の今日ある學歷及び閱歷を公開すれば、愛媛縣立中學校、五高を經て、明治三十七年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに同大學副手囑託、產婦人科教室勤務、同三十九年五月任同大學助手、同四十年六月同大學を辭し越後高田病院產婦人科部長として赴任し、同四十一年一月之を辭す、翌四月東京市日本橋區私立日本橋病院副院長兼產婦人科部長となり同四十三年四月まで勤務す、爾來東京市にて開業、大正元年十一月京城朝鮮總督府病院產婦人科醫長となり同三年十一月病氣辭職す、同三年十一月以來再び現住所に開業し、同九年十月以降病院組織となし現在に至る、昭和二年七月學位を受領せり。

△學位主論文は「精糸又ハ睾丸組織注射ニ因ル白鼠生殖腺ノ官能的及組織的變化ニ就テ」にして、參考論文なし。其他論著夥多、枚擧に遑なし。

△感想としては「一個の平凡なる產科婦人科醫師たるのみ、胸裏空々漠々として特記する感想もなし、唯々家庭人としての婦人の健康と幸福を祈るのみ」云々と語れり。

△愛媛縣溫泉縣味生村別府の人、明治十一年生れの學究的溫厚の紳士也。壯齡今や知命に入る八歲、精力旺盛、學識手腕、人格共に練達玉成して老大家の域に入る。人と爲り穩健にして篤實、謙遜自抑して偏に先輩の助力を說き、少しも自己の才學を誇らず、寬厚にして能く人を容れ、和氣溫情に富み、淡々として只管己れを虛うする態度の眞摯にして紳士的なるは、眞に德操の士に非れざればこゝに至るを得ず。趣味としては謠曲に親しみ、又圍碁を愛好す。當世博士界中の中堅にして、好箇の臨床家として玆に推奬す。

◇

近江湖雄三　△東京市杉並區阿佐谷八五六に產科婦人科近江醫院あり、院長は近江湖雄三博士にして、內部の

設備整ひ、博士の創設經營に拮据して以來既に十年餘、時には開業難の辛苦に耐え、終に克く今日の位地と聲望とを贏ち得たるもの成功と言はざるべからず、博士は千葉醫專出身の篤學者にして東大教授木下及び磐瀨兩博士に就きて、産科婦人學科の蘊奥を究め、嘗て獨逸に留學するやミュンヘン大學に、次いでハレー大學にて研鑽、歸朝後又東大教授三田博士の下に血清化學を專攻して、東京帝大より學位を獲得せる近來の名醫博也。

△顧みて博士の學歴及び閲歴を概説すれば、獨逸協會中學校を經て、明治四十三年千葉醫專を卒へ、直ちに東大婦人科教室に入り木下及び磐瀨兩教授の指導を受く、同四十四年十一月渡歐、獨逸ミュンヘン大學に入りデーデルラインバイシュ兩教授に就き産婦人科學を研究し、傍らミュルラー氏の內科、アンゲラー氏の外科、ボルスト氏の病理學、グルーバー氏の細菌學、ロンベルグ、フランク兩氏の生理學を聽講す、同大學にてドクトルの學位を得、次でハレー大學に轉じ、アブデルバルデン教授に就き生化學研究の後佛、英の諸大學を見學し大正三年二月歸朝す、同時に東京市順天堂醫院醫局員となり、故吾妻勝剛博士の下に産婦人科の診療に從事す、同七年十月東京帝大醫學部法醫學教室に入り三田教授の下に血清化學を研究し同十五年に及ぶ、昭和二年七月母校にて學位受領、爾來現住所にて開業今日に至れり。

△主論文は『「メゼイン」ノ生物學的及ビ血清學的研究』にして、參考論文なし。其他論著夥多。

△秋田縣平鹿郡福地村の人、明治十六年生る。學究的溫厚の紳士、篤學者として其の今日ある閲歴は博士の仁術に一段の光彩を放ち見ゆ。壯齡今や知命に入る三歳、元氣益旺盛にして日夜倦むことを知らず、日常刀圭甚だ多忙なるに拘らず、不撓不屈の意氣と不斷の努力とを以て、日々診療に精進して仁術の最善を盡し、以て其の天職なるを樂しむ熱誠の仁也。賦性敦厚、謙讓にして誇らず、淡々として人を愛し、和氣溫情に富む。其の篤き今日の聲望を博せるも蓋し又其の性格の反映なるを見逃すべからず。帝都診療界に逸すべからざる好箇の臨床家として、玆に推奬し、敬意を表す。

◇

伊藤喜平　△東京府下府中町京所に産科婦人科及び內科專門を以て著聞する伊藤療院あり、院長は伊藤喜平博士也。金澤醫專の出身にて、學位は慶大より獲得せる篤學者にして、內科及び産婦人科を專門とする名醫博として其の存在を認めらる。學究方面にては主として母校の婦人科學教室、病理學教室、京大の微生物學教室、北研の生物化學研究室に次で慶大の內科學教室等にて多く研鑽せり。又實際方面にては多年臨床の經驗に富み、今や獨特の手腕を發揮して其の技倆を稱せらる、開業拮据數年にして、既に牢乎たる地盤を築き、好評の裡に繁榮歳と共に拔くべからざる盛況を呈しつゝあるを見る。

△博士は大正七年金澤醫專卒業後、爾來母校婦人科學教室、病理學教室、京都帝大醫學部微生物學教室等を經て、同十一年福島縣衛生技師に任命、同十二年北里研究所に入所して生物化學を專攻し、昭和二年十一月學位を授與せらる同年四月より同五年七月迄慶大醫學部內科學教室勤務、辭職後獨立開業して今日に至る。

△學位主論文は『ザツクス、ゲオルギー氏「アンチゲン」內有効成分ニ付イテ』にして、外に參考論文四篇あり。「まだちつとも偉い人間でない、私、二十歳位の青二才のつもりでゐる、私、少しも名分を求めず、此苦闘の汗の乾く間のないやうに走つて行きたい、私、その間にも時に大きく回顧するチャンスを持ちたい」云々とは、氏の回想の一片なり、其の人と爲りを物語りて餘蘊なきを見る。氏の出身地は新潟縣西蒲原町和納村上和納にして、明治二十四年生る。意氣潑剌として學生氣分未だ去らず、是が非でも所信を曲げず、惡く言へば負惜みの强き方なり。

◇

織田良一　△丸の內報知診療所（省線有樂町驛傍）に於て、日々午前中産婦人科の診療に勵しみつゝある織

田良一博士は、長崎醫專出身の產婦人科學者にして、慶大より學位を獲得せる年壯の名醫博也。

△佐賀縣の出身、明治二十五年生れにして、大正三年長崎醫專を卒へ、長崎縣立病院醫員となり、產婦人科勤務、親しく川添博士の指導を受け、大正七年研學生を命ぜられ東京及京都帝大醫學部にて研學、同八年產婦人科副部長、長崎醫專講師となり、同九年長崎市にて開業、大正十四年慶應醫大產婦人科助手、傍ら法醫學教室にて研究、昭和三年六月慶大より學位を授與せらる。

△主論文は『モンプルヒ氏驅血法ニ依ル止血作用ノ本態ニ關スル實驗的研究』にして、外に、參考論文として『細胞分裂增殖ノ際ニ於ケル「ヴイタミン」ノ任務、鷄卵孵化經過中ニ於ケル「ヴイタミン」B「ヒオス」及Aノ消長半夏ノ藥効的成分ニ就テ』の一篇あり。

△年壯鋭氣、手腕圓熟、臨床家として今は働盛にて、民衆診療界の爲め躍進して日々診療に勵精努力する所あり。其の熱心にして眞摯なる態度と、親切なる應待振りとは評判極めて良好なるを聽く。年齒漸く不惑に入る四歳、前途洋々、猶頗る春秋に富む、幸に健康にして、益々發奮努力あらん事を祈るや切也。東京市麻布區六本木町一番地に住む。

◇

秋葉隆　△日赤岩手支部病院長として令名を博し、多年地方診療界の爲め努力盡瘁しつゝある秋葉隆博士は、千葉縣山武郡豐成村の人、明治二十年生にして、大正二年京都帝大醫科大學を卒へ、直ちに同大學副手として引續產婦人科教室に勤め、同四年助手となる、同六年任樺太廳醫院醫官、同九年依願免本官、同時に日赤岩手支部病院產婦人科醫長を命ぜらる、同十二年同病院より滿二ケ年間新潟醫大に研究を命ぜられ、工藤教授及上野教授指導の下に專ら產婦人科學の研究に從事す、同十四年日赤岩手支部病院に復歸し副院長兼產科婦人科醫長となり、次で同病院長に昇任今日に至る、斯間大正十五年四月新潟醫大より學位を受領せり。

△學位主論文は「內分泌腺ノ姙娠ニ及ボス影響ニ就テ實驗的研究補遺」にして、參考論文は、(1)日本胎兒ノ身體各部間ノ割合ニ就テ（獨文）、(2)日本人ノ中硬腦動脈溝ニ就テ（獨文）なり、他にも論著夥多あり。年齒不惑に入る九歳年齒漸く壯熟して元氣益々旺盛、學識、手腕、人格共に愈々圓熟の域に達して、今は最も重望せらるゝ時代に在り。盛岡市天神町に住む。

◇

柳井昌憲　△鹿兒島縣立鹿兒島病院に副院長兼產婦人科部長として柳井昌憲博士あり、兼ねて當縣產婆試驗委員たり。專門は素より產科婦人科にして特に子宮癌は博士の最も得意とする處也。學系よりすれば九大系にて、大學院在學中、恩師白木正博及び中山平次郎兩博士の指導を受け、學位論文『子宮癌（人類ノ）（子宮頸部及膣部癌）ニ對スル硬「レントゲン」線作用ノ臨床的及ビ組織學的研索』を提出して、母校より學位を得たる所謂九大派の少壯名醫博たるに耻ぢず。其後の論文中にても、(1)女性生殖器結核に就て、(2)子宮癌の「レントゲン」療法等は博士會心の作と見るべく、又當縣社會課主催婦人衞生講話を每年縣下各郡に亘り講演し好評を博す、蓋し通俗講話は氏の最も得意とする處なり。

△更に學歷より見たる博士は、五高を經て、大正十年九州帝大醫學部卒業後、同十二年三月迄九大產婦人科教室（今淵教授）に助手勤務、同時に同大學產婆養成所講師就任、同十二年四月那覇市山城病院長就任、同十四年五月若松市立病院產婦人科部長就任、同十五年五月九大大學院入學（白木教授、中山教授）、昭和三年五月退學と同時に九大講師拜命、更に同大學產婆養成所講師、福岡縣產婆試驗委員、同年七月學位受領、翌四年九月若松市立病院產婦人科部長就任、同五年三月現縣立病院產婦人科部長として就任、更に副院長に就任、當縣產婆試驗委員に擧げらる。「開業醫

中に人格零にして自己の技術を顧みず、且所謂ムンドテラピリーのみを以て患者を治療するもの多く、醫道の頽れたるを悲しむ」云々とは、氏の感想の一片なり。福岡縣築上郡椎田町湊馬場昌夫の三男にして、明治二十七年生る。性來眞面目にして短氣なるも、又一面非常に氣の長き處もあるやうに見受けらる。治療方面に臨むでは非常な熱心家にて、終始患者に對しては自己の力の能ふ限り徹底的に治療に從事して、飽迄親切を盡すことをモットーとして居る處に氏の長所あり。趣味としては油繪を好み、又寶生流謠曲を愛す。現若松市立病院耳鼻科部長粕谷長茂醫博は實弟にして、現九大赤岩外科教室助手爲末博醫博は從弟なり。住宅は鹿兒島市下龍尾町八一に在り。

◇

古田恒二　△岐阜市神田町九丁目に古田産婦人科醫院あり、院長古田恒二博士の診療所にして一流の位地を占む。氏は岐阜縣郡上郡嵩田村の出身、明治二十八年生にして、縣立岐阜中學を經て、大正九年京都府立醫專を卒へ、直ちに同校附屬醫院醫員を命ぜられ、産婦人科教室に勤務す、同十二年辭して、同年京都帝大醫學部專修科生として入り、清野謙次教授並に前田鼎教授の指導の下に微生學並に醫化學一般を修む、同十五年六月京都帝大より學位を受領し、直ちに同附屬醫院副手を囑託され産科婦人科教室岡林秀一教授の下に勤務す、昭和三年副手を辭し、岐阜市に開業今日に至る。經驗豐富にして、手腕圓熟の域に入り、今は最も得意の時代に在り。

△學位主論文は、『「フドステリン」並ニ「ヒヨレステテン」ノ免疫學的意義』にして、參考論文は、(1)松蕈内ニ含有セラルル「フドステリン」ニ就テ、(2)中性鹽類ノ溶血毒ニ及ボス影響、(3)「ヒヨレステリン」飼養家兎血球ノ溶血性ニ就テ、(4)臺灣産毒蛇蛇毒ノ溶血現象ニ對スル「ヒヨレステリン」ノ阻止作用、外三篇あり。其他論著夥多。

◇

井關恒　△東京市世田谷區代田二ノ七〇一に新興の井關産婦人科醫院あり、院長は井關恒博士也。九大系の産婦人科學者にして、嘗て獨逸に留學し、歸朝後慶大醫學部にて研究を重ね、學位論文『「モルヒネ」ニヨル便秘並ニ膀胱内尿停滯ノ藥理ニ就テ』を提出して、慶大より學位をを獲得せる近來の名醫博として其の手腕を認めらる。該博なる學識を有し臨床に堪能にして、今や獨特の手腕を發揮する所あり、開業日尚淺少なるにも拘はらず、診療手術の好評と相俟つて益々獨自の地盤を固め、年次成功の域に發展しつゝあるを觀る。

△和歌山縣の出身にして、明治二十三年生る、大正四年九州帝大醫科大學を卒へ、同大學産婦人科教室に研究を重ね後東大分院にて産婦人科及外科をも合せ研習し、大正十年獨逸に留學、同十三年春歸朝後、慶大病院産婦科教室に入り講師として在職し、昭和八年二月世田谷中原に開業と共に職を辭す、其間昭和三年七月慶大より學位を授與せらる。

△『現代醫師の餘りにも「うそも方便」の範圍を脱し亂用の弊あるを嘆く』云々とは氏の感想の一片なり。熱心なる臨床家にして誠實をモットーとして立ち、飽迄眞摯にして親切を盡すところに、博士の長所を見出さる。敦厚篤實なる性格と相俟つて其の高遇なる人格を尊ぶべき也。趣味としては圍碁を樂しむ。年齒不惑に入る六歳なれば、春秋猶豐富也、切に加餐自重を祈る。

◇

洲崎隆一　△日赤福井支部病院に産婦人科醫長として洲崎隆一博士あり、斯科の大家としての名聲既に江湖に著聞す。氏は富山縣東礪波郡城端町洲崎永之助長男、明治二十年生にして、三高を經て、大正五年京都帝大醫科大學を卒へ、直ちに同大學副手囑託、産科婦人科學教室勤務、同八年四月助手に任ぜらる、同年十月津市立病院産婦人科部長として赴任す、同十二年八月津市より京大醫學部に研學を命ぜられ、直ちに同學大學院に入學し岡林教授指導の下に産科婦人科學の研究に從事す、同十四年八月研學期滿ち大學院在學の儘津市立病院に歸任す、同十五年七月京都帝大にて學位受領、同年八月大學院を退學す、昭和二年津市立病院長に任ぜられ産婦人科部長を兼務す、其後現職に

轉任今日に至る。趣味としては旅行、登山を好み、又た美術を愛好す。年齒漸く四十有九歲、當に爛熟の境に入り、益壯にして多大の信望を博し、奮鬪活躍の全盛時にあり。

△學位主論文は「雌性生殖器ノ食餌性變化及其姙孕ニ及ボス影響ニ關スル實驗的研究」にして、(1)（第一回報告）、「ヴイタミン」A過剩食餌ニ依ル飼養試驗、(2)（第二回報告）部分的不足食餌ニ依ル實驗の二篇より成り、參考論文は、(1)產褥子宮ノ整復機轉ニ就テ、(2)「マウス」產褥子宮整復ニ關スル實驗的研究補遺、(3)初姙期ニ就テ、(4)「レントゲン」寫眞ニヨル產褥子宮復舊作用ニ關スル研究外三篇あり。其他論著夥多。

◇

石川榮助

△慈惠醫大系の錚々たる產科婦人科學者にして、嘗て米歐に留學し、東北帝大より學位を得たる斯科界近來の名醫博として、其の學識手腕を認めらるゝ石川產婦人科醫院長石川榮助博士は、在米多年、現に105 E. Main Street, Stockton, California, U. S. A. にて醫院經營、產婦人科を專門として自ら診療に勵しみ、玲瓏たる診療手術の好評は、圓熟せる獨特の手腕と相俟つて益々內外の人望を博し、繁榮歲と共に獨立の地盤を築き、今や成功の位地を贏ち得て、北米診療界の爲め活躍奮盡しつゝあるは祝福すべき也。博士の如きは當世博士界中異彩に富む活動家として推奬し、日本醫博界の爲め世界的氣を吐けるを壯とす可し。

△博士は栃本縣立栃木中學校を經て、明治四十年東京慈惠會醫院醫學專門學校卒業、同年八月同校附屬東京慈惠會病院醫員を命ぜらる、專ら產婦人科に就て樋口博士の指導を受く、翌年三月同院を辭し同年五月醫學研究の爲め北米合衆國に留學しクーパー、メヂカルカレツヂ及びコレヂウム、サンクチ、フランシスチの研究科に入學特に產婦人科學及び病理學を研究す、大正五年二月歸朝、東京に於て專ら產婦人科を以て醫術開業、同七年十月再び北米合衆國に留學し、同國醫術開業試驗に合格、カリホルニア州スタクトン市に醫術開業、產婦人科一般の診療に從事す、大正十四年一月より同十五年七月迄太平洋大學獨逸語學科に入學獨逸語專修、同十五年七月醫學研究の爲めオーストリア國に留學、ウヰンナ大學醫學部に入學ペーハム及びハルバン教授に就て產婦人科學を、シルベルスタイン教授に就て血清免疫學を研究する傍ら、ビルケー教授に就て小兒科學、マルブルグ教授に就て神經病理學を研究す、猶獨、佛、瑞、白、和、伊、英諸國を見學して、昭和三年七月歸米、再び加州、スタクトン市に於て醫院經營專ら產婦人科一般の診療に從事す、同年十二月東北帝國大學より醫學博士の學位を受領す。現に日本婦人科學會々員、米國醫學協會並に加州醫師會正會員たり。

△主論文は獨逸文の原著にて Immunisierungsversuche mit Fötal-und Placentalipoiden. と題し、三篇より成る。外に參考論文として、(1) Beiträge zum Studium des Stoffwechsels der Placenta. (2) Vergleichende Untersuchungen der Zirbeldrüse bei männlichen und weiblichen Tieren. (3) Zur Frage der spinalen Lokalisation des N. pelvicus und der Nerven des Uterus. (4) Weitere Unte suchungen über die Lokalisation der Zentren für den Uterus. Befunde nach Uterusexstirpation. (5) Zur Pathologie des Conus terminalis の五篇あり、何れも獨逸文の原著也。以て學究方面の一班を窺はる。其他內外にて發表せる論著夥多あり。

△現代醫學界に對する感想を述べて曰く「現代科學中最も長足の進歩を示せるものは醫學なり、然るに其醫學なるものが學理方面に於ては輓近細より微に入り尙其止まる所知られざる迄研究されつゝありと雖、治療及び豫防の兩方面に於ては徒らに消極的方法を講ずるのみの憾みなしとせず、例へ「マラリア」の規尼涅、實扶垤里の實扶垤里血淸及び黴毒の水銀、砒鈆、及び「サルバルサン」等は藥劑が病原物に直接に作用し疾病を夫々根治するものなり然しながら其他の多數の疾病に對しては藥劑なるものは間接に作用を呈し直接に身體の活力を增進し病原を根絕するものに非ず誠に遺憾の極みなり、元來吾人の身體には總ての疾病に對し防禦力及び治癒力とを自然に具有する事を多くの治療

醫家は忘却いたし、總ての殊に內科疾病は尙徒らに藥劑萬能主義の治療法に支配せられつゝあるを如何せん、是れ余の平素慨歎に堪へざる處なり、世の治療醫家たるものは總ての疾病殊に慢性疾患に對しては夫等の治療に先だち肉體的疾患と同時に必ず神經衰弱の如き一種の神經薄弱の狀態に陷れる點あるを能く觀視し以て適當の治療法を講ずる事極めて肝要なり、余は產婦人科專門醫の立場より屢々「ヒステリツク」なる婦人患者を取扱ふ上に於て能く其精神狀態を觀視し以て治療法を講じつゝある爲め比較的良好なる成績を擧げつゝあり。次に現代の豫防醫學なるものも各國共相當に夫々進境を示しつゝありと雖是亦消極的方法を講ずるのみの傾向極めて顯著なり、例へ慢性疾患就中肺結核に對し平素積極的に肉體の健康法を敎ふる衞生學を普及せず徒らに患者に對し肺結核は不治の疾病にして誠に恐ろしき疾病なりといはぬ許りに態と恐怖心を助長さするが如きもの、斯くしては吾人は到底肺結核の治癒など期待する事能はず、却つて其病勢を增進するに至るべし、故に余は一般臨床、治療家と共に人類一般の健康福祉の增進と同時に疾病の治療快復及び豫防上に及ぼす天然力及び自然治癒力の應用法を充分に講ずる事を勉めざる可からずと信ず」云々。

△栃木縣下都賀郡赤津村大字大柿八六番地の人、明治十六年生る、源五郎長男、醫學博士石川九（北海道岩見澤町在住）の兄也。當年五十有三歲にして、年壯氣銳、精力益々旺盛也。其の今日ある閱歷は博士の前半生史に輝きて躍如たるものあるを見る。殊に博士の多年在米奮鬪の跡と、現在の成功に伴ふ活動振りとは、懦夫をして奮起せしむるの概なしとせず。學究的溫厚の紳士にして、今は手腕漸く壯熟して最も得意の時代に入り、臨床に當るや熱心甚だ勉め、日々輻輳する內外の患者を待つに、等しく誠意誠實と親切とを以てす、其の眞摯にして熱情あり溫味ある態度は患者をして信賴と尊敬との念を起さしめ、溫厚篤實なる其の人格を景仰せしむ。賦性高潔にして威嚴を存し、而かも人に接するに尊大振なく、恬澹として頗る快活なり、能く人を愛し理解あり同情に富む、又た應答禮を重んず。殊に博士の長所として特筆すべきは、一度自己の自的に向つてスタートせし事は未だ嘗て中絕したる事なき點にあり。而して其の反面に表はる缺點としては、或は少々自我の念に强過ぎる傾きなきか、强ゐて言へばそれが或は短所ならん。幸に健康と共に、日米醫界の提携と併せて日米親善上、益々發奮盡力あらん事を特に翹望して止まざる也。住宅は2000 S. San Joaqu'n St., Stockton, Calif., U. S. A. に在り。圓滿なる家庭には妻津滿子との間に一男一女あり、靄々として異鄕に團欒の樂しみあり。

◇

大木常松　△名古屋市東區東本重町五ノ三大木產婦人科醫院は、院長大木常松博士の經營也。氏は愛知醫大派の名醫博として其の手腕を稱せられ、多年の聲望と相俟つて旣に牢固たる地盤を有し、好評の裡に門前常に賑ひ盛況を極む。氏は千葉縣香取郡中村の出身、明治二十五年生にして、大正七年愛知縣立醫專を卒へ、直ちに縣立愛知病院診療醫補を被命、產科婦人科に勤務す、同九年同院診療醫を命ぜらる、同十三年任愛知醫大助手產婦人科敎室に勤務す、同十五年同校講師を囑託せらる、同年愛知醫大より學位受領、昭和二年日赤愛知支部產院產科醫長を兼務す、次で現住地にて開業今日に至る。

△學位主論文は「子宮癌ニ於ケル糖原質知見補遺」にして、(1)子宮癌ニ對スル「ラヂウム」療法ノ組織的檢索、(2)子宮頸部ト「グリコゲーン」の二篇より成り、參考論文は、(1)子宮癌ニ對スル「ラヂウム」療法ノ臨床的觀察、(2)臟分泌物內ノ細胞ニ就テ、(3)蛔蟲ノ卵子ニ對スル「ラヂウム」放射線ノ影響等なり、他に論著夥多あり。

◇

福島四郎　△近時帝都醫博界は多士濟々、而かも競爭激烈にして群雄割據の奇觀なしとせず。世田谷區大原町一二六七に新興せる產婦人科及び內科專門の福島醫院あり、院長福島四郎博士自營の診療所にして、創設經營に拮

据奮迅し、博士自ら日々診療に勵しみつゝあり。開業日尚淺少、而かも激烈なる競爭に打勝ちて理想の境に未だ至らざる迄も、博士獨特の手腕、手術は、氏が熱實なる診斷の好評と相俟つて日增人氣を吸收し、漸次堅實なる發展振りを實現しつゝある前途は頗る囑目に値す。學系より見たる博士は長崎醫專出身の產婦人科學者にして、病理學の造詣深く、又た內科にも精通す、慶大派の巨頭川添正道及び川上漸兩博士に就きて斯學の蘊奧を究め、慶大より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博として重きを爲す一人物也。

△更に學歷より博士の略歷を概括すれば、大正三年長崎醫專を卒へ、卒業後同五年迄長崎縣立病院醫員として勤務、次で佐世保海軍共濟會病院產婦人科部長として同八年迄勤務、爾來昭和三年迄慶大附屬病院助手として勤務、同年十一月學位受領、現住所にて開業今日に至る。學位主論文は「海猿子宮上皮細胞ノ異所性增殖ニ就テ」及び「人體喇叭管姙娠ニ於ケル喇叭管ノ變化ニ就テ」にして、參考論文は、『「ヴイタミン」缺乏症ニ於ケル雌性生殖器ノ變化ニ就テ』の一篇なり。

△「學理と經驗は車の兩輪の如し一方を難ずるは我身の不德を示すに似たり、相互に之を進め御互に尊重し度し」云々とは、博士の感想の一片なり。氏は明治二十五年生れにして、現住地に本籍を有す。當年不惑に入る四歲、年壯の意氣益壯んにして精力家たり、學究的好箇の臨床家として、其の今日ある篤學は博士の仁術に一段の光彩を放ちて見ゆ今は活躍の全盛時にて手腕愈々圓熟の域に入り、研究と醫療そのものに趣味を集中して亦他事を顧みず、孜々營々として不倦の努力精進を續け、誠意誠實を盡して「醫は仁術也」の本分を果たさんとするの概あり。拮据勵精、精研に餘念なき前途は頗る春秋に富む。切に自重加餐を祈ると共に、折角の發奮勇躍あらん事を。

◇

竹內信行　△名古屋市中區古澤町六丁目に產婦人科專門を以て獨立開業せる竹內信行博士は、愛知縣海部郡永和村大字善太新田の出身、明治二十八年生にして、大正八年愛知醫專を卒へ、附屬醫院產婦人科勤務、同九年私費を以て歐米留學、同十年歸朝、母校病理學教室にて研究、同十一年同校研究科學生となる、同十五年京都帝大產婦人科教室にて研究、同年京都帝大より學位を受領、昭和二年京大副手囑託、產婦人科勤務、同年秋田縣公立扇田病院產婦人科部長として赴任す、其後職を辭し現住地にて開業今日に至る。年齒漸く四十有一歲、手腕壯熟して今は最も得意の時代に在り、多年の聲望と相俟つて今や堅實なる地盤を有し、悠々たる位地を占む。音樂を趣味す。

△學位主論文は『「ロツキー」山「チツク」熱病ニ關スル研究』にして三篇より成る、參考論文は、(1)「ロツキー」山「チツク」熱病ノ原因的研究、(2)「ロツキー」山「チツク」熱病ノ原因的研究其ノ二、(3)鼻硬結腫ニ就テ、(4)急性黃色肝萎縮症ノ組織學的知見外三篇あり。其他論著夥多。

◇

佐藤登　△高崎市若松町九六に、開業二十有餘年の歷史を有する佐藤醫院あり、院長佐藤登博士の經營にて、產科婦人科を專門として、多年堅實なる地盤の上に繁榮を持續し、好評嘖々の裡に斷然頭角を拔き、當市診療界に於ける一勢力たり。博士は慈惠醫大派の一先輩にして、產婦人科の泰斗故樋口繁次博士、及び慈惠醫大教授永山武美博士に就て醫化學の蘊奧を究め、又嘗て歐米に留學して研學切磋大に得る所あり、學位は慈惠醫大より獲得せる斯科界近來の名醫博たるに耻ぢず、今や斯科の大家と仰がれ、多大の信賴と尊敬とを受けつゝあるは、地方診療界の爲め多幸とする處也。

△博士の學歷及び閱歷を概括すれば、明治四十三年九月東京慈惠會醫專を卒へ直ちに慈惠會病院に勤務、翌四十三年十月東京病院に轉勤し樋口繁次博士の指導を受け產科婦人科を研究し、大正二年正月鄕里高崎市に歸りて佐藤醫院を設立經營す、大正六年七月より八年八月迄滿二ケ年間歐米に留學し、歸朝數年後大正十四年九月より再び慈惠醫大醫

化學教室に入り永山武美教授の指導を受け醫化學を研究すること三ケ年半、昭和四年五月故郷に錦を飾り、爾來再び專門とする產科婦人科の診療に從事し今日に至る。

△主論文は『クレアチン」及ビ「クレアチニン」ノ生化學的研究、其ノ一』にして、參考論文としては同項目の研究を續行せしものにして自其ノ二至其ノ四の三篇あり。其他論著夥多。

△博士は高崎市伊藤有信の二男にして、明治二十一年生る。學究的臨床家としての今日ある閱歷は燦として輝き、今や壯齡四十有八歲にして學識、手腕共に圓熟の佳境に達して、氏が仁術に一段の貫祿を備ふ。スポーツに趣味を有する丈に元氣頗る旺盛にして、體軀强健、常に努力主義をモットーとして診療に勵精拮据倦むことを知らず、誠意誠實と親切とを以て「醫は仁術也」の本分を盡す所に氏の長所あり、多大の信望を博する所以亦玆に存す。猶春秋に富む前途や洋々たるの秋、折角の自重加餐を祈るや切也。

◇

朝岡　稻太郎　△競爭激烈なる帝都診療界に割據して、獨立の地盤を築き一家を成すも亦た容易ならんや。玆に品隲せんとする朝岡稻太郎博士のプロフイルを打診するに、博士の獨立經營する壽泉堂醫院は、神田區小川町三ノ二〇(明治大學脇)に在り、婦人科特に不姙症、並に男女泌尿性病科を標榜して博士自ら診療に立ち、拮据勵精、日々繁忙を極めつゝあり。學系より觀たる博士は、醫術開業試驗出身より奮起して、克く醫業經營の繁忙に堪へながら學究精研幾星霜、嘗て瑞西に留學するやバーゼル大學にてドクトル、メヂチーネの學位を得、研學切磋大に得る所あり、歸朝後尙春風秋雨の研鑽を重ね、終に博士會心の學位論文を完成して大阪醫大より醫博の學位を得たる斯科界近來の名醫博にして、其の立志傳的篤學は學界の美談として傳へられ世人の稱讃する處也。猶博士は刷新聯盟の創設以來、常任委員としてその畫策に參與し盡瘁する處尠からず。旣にして年來築き上げたる獨自の地盤の上に悠々たる今日の位地を贏ち得たるもの、博士も亦京都醫博界に一家を成す異彩人物として推奬すべき乎。

△顧みて博士の今日ある學歷及び閱歷を公開すれば、博士は明治三十七年東京慈惠院醫學校卒業、同年檢定試驗合格同年十二月醫師免許證下附、大正三年渡歐瑞西ベーゼル大學に入學二學期修學、特に病理學をヘーヂンゲル教授、性病をブロツホ教授に就き修學、同四年十二月論文提出ドクトル、メヂチーネの學位受領、同五年ベルン大學に轉じ婦人科をビユルギー教授、性病をヤグツソン教授に就て臨床的研修、同六年一月歸朝す、大正十一年より泉橋病院病理科にて福士博士指導の下に病理學研究、昭和四年六月大阪醫大に論文提出、醫學博士の學位受領、爾來今日に至る迄現地に於て開業す。

△學位主論文は「人胎盤ノ研究」にして三篇より成り、參考論文は「胎生的肺膨脹不全ニ就テ」(獨文)外二篇あり。博士は長野縣飯田町の人にして、明治十四年生る、當年知命に入る五歲、益々元氣にして努力主義の人也。其の今日ある閱歷は旣に博士の前半生史に躍如として輝く。今は手腕愈々圓熟して老大家の域に入る、殊に其の直截明快にして和氣溫味ある性格は、篤き聲望を博する所以にして、其の高邁なる人格を敬慕せしむるの德を有す。

◇

太田　作治郎　△福岡市藥院內に太田產婦人科醫院あり、院長太田作治郎博士の經營にして、內部の設備整ひ、博士獨特の手腕は多年の聲望と相俟つて、好評嘖々裡に日々繁榮を極め一流の位地を占む。氏は大分縣下毛郡中津町の出身、明治十八年生にして、大分縣立中津中學、五高を經て、明治四十三年京都帝大福岡醫大を卒へ、直ちに醫化學教室勤務、同四十五年產科婦人科教室勤務、大正二年任九州帝大醫科大學助手、同年任朝鮮總督府道慈惠醫院醫官全北、全州、平南、平壤の慈惠醫院を經て間島慈惠醫院長、次で咸興慈惠醫院長となり、同十三年依願免本官、同十四年九大大學院に入り、昭和二年六月大學院卒業により同二年十月學位を受領す、引續き九大產婦人科教室にて研究

を續け、後ち現住地に開業今日に至る。多趣味の人にして、古索を號とし、俳句を能くす、謠曲、柔道、ボートを好む。△學位主論文は「姙娠現象ニ關スル婦人血液ノ生化學的研究、特ニ姙娠子宮、胎盤及ビ胎兒ノ物質代謝機能ニ就テ」にして、參考論文は、(1)姙婦ニ現ハル、外肢皮神經領域ニ於ケル知覺異常ニ就テ、(2)雙胎第二兒重折娩出ノ一例等なり。其他論著夥多。

◇

富永謙　△群雄割據の浪速診療界に斷然産科婦人科を以つて頭角を拔き、大阪梅田阪神電車前に堂々たる陣容を構へ、名實共に斯科のリーダーとして著名なる土肥病院あり、院長は斯界の泰斗土肥衛博士なるは既に世人周知の如し。玆に副院長として克く院長を補翼して、土肥病院の今日の盛大あらしめたるもの、富永謙博士の與つて力あるを看過すべからず。氏は熊本醫專の出身にて、學位は大阪醫大より獲得せる篤學の名醫博也。△博士は長崎縣東彼杵郡彼杵村の人、明治二十六年生にして、熊本醫專の出身也、卒業後東北帝國大學熊谷内科教室及京都帝國大學産婦人科教室にて研學後、大正十二年二月渡歐、瑞西國ベルン大學生理學教室、アッシャー教授に就て研學の傍同大學よりドクトル、メヂチーネの學位を受け、更に獨乙、墺地利の大學に於て研究の後、同十四年三月歸朝、同十四年五月大阪醫大醫化學教室に入り專攻生として教授古武彌四郎博士指導の下にて醫化學を研究し、昭和四年六月學位を得、爾來大阪土肥病院に勤務今日に至る。

△主論文は「鐵新陳代謝並ニ實驗的貧血ニ對スル鐵劑效果ト脾臟トノ關係ニ就テ」にして、外に參考論文として、(1)膵臟及副腎内分泌ニ及ボス「鹽化カルシウム」影響附「インスリン」注射時ニ於ケル「アドレナリン」質物ト消長、(2) Untersuchungen über die Beziehungen zwischen gallen absonderung und Eierstöcken, (3) Versuch über Wirkungen von Hormonen auf den Uterus, nach vor heriges Umstimmung des Uteusträgers の三篇あり。

△學究的臨床家としての博士や、當年四十有三歲にして元氣旺盛、努力主義の勤勉家也。其の今日ある篤學は博士の面目を語るに充分にして、今は圓熟せる手腕を發揮するに最も得意の時代に在り、院長土肥博士の聲望と相俟つて篤き人望を博する所以、又以て其の性格を窺知するに足る。大阪北區曾根崎上四丁目一八土肥病院内に住宅あり。

◇

松本清治　△東京市牛込區袋町三に松本産婦人科醫院あり、院長松本清治博士の經營、開業拮据既に拾數年に垂んとし、牢固たる地盤を有し一流の地位を占む。氏は東京市の人、明治十九年生にして、七高を經て、大正二年東京帝大醫科大學を卒へ、翌年同學附屬醫院産婦人科に勤務、同年東京御茶ノ水順天堂醫院婦人科に勤務、同四年鎌倉町吾妻病院分院鎌倉産婦人科病院々長となる、同十一年東京市吾妻病院副院長となる、同十二年自宅開業、同十三年より鎌倉産婦人科病院兼勤、斯間同十一年六月より東京帝大藥物學教室に於て林教授指導の下に研究、昭和二年東京帝大より學位を受領す。年齡知命に達し、益々元氣にして手腕、學識、人格共に圓熟の域に入り一段の貫祿を備ふ、今や成功の裡に多大の信望を博し悠々たる位地に在り。

△學位主論文は「甲狀線中毒ニ因ル雌性生殖腺ノ變化ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文なし。其他論著夥多あり。

◇

針谷武夫　△神奈川縣鎌倉町小町に針谷産科婦人科醫院あり、院長針谷武夫博士は、神奈川縣の人、明治二十六年生にして、大正八年千葉醫專の出身也。卒業後栃木縣防疫醫を經て、同十三年慶大醫學部助手となり研究の結果、昭和四年七月學位を得、現住所に開業今日に至る。主論文は「漫性「モルヒネ」中毒家兎臟器組織ノ試驗管内「モ

ルヒネ」破壞作用ニ就テ』なり。開業拮据數年にして堅實なる地盤を有し、今や當地診療界に於ける名醫博として玲瓏たる手腕を認めらる。氏は性來謙遜家にして自己の存在を紹介せらるゝを好まざる風あり、而かも氏に就ての認識を得んとするは未知の患者の一般に要望する處たるは、臨床家として大に考慮すべき要あらずや、敢て一片の苦言を呈して識者の批判を俟つ。

◇

松浦海三　△帝都診療界に於て歴史ある濱田病院（神田區駿河臺）は、私立病院中產婦人科を以て斷然一偉觀を呈す。院長は斯科の長老小畑惟清博士にして、副院長として松浦海三博士あり。松浦博士は東大大正五年組の錚々たる一人物にして、母校の恩師木下教授、磐瀨教授、三田教授等々に親炙して造詣する所あり、學位は母校より獲得せる所謂東京帝大派の名醫博たるに恥ぢず、又た嘗て歐米に遊學するや、ステツケル教授に師事して研究する所あり。既にして研鑽多年の經驗に富み、手腕今や圓熟して最も得意の時代に在り、其の玲瓏たる手術の評判は既に斯界に定評あれば、敢て玆に贅せず。濱田病院の今日ある博士の力亦與つて大なりと云ふべし。附記す、濱田病院は病床六〇を有し、別に濱田產婆學校を經營す。

△博士は大正五年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに附屬醫院婦人科教室に勤務、次で愛知醫專講師、日赤富山支部病院婦人科部長を經て現職に至る、斯間昭和四年學位を得、五年歐米に遊ぶ。主論文は「惡性腫瘍ノ血清學的研究、附胎生組織、惡性腫瘍並ニ異種動物三者ノ相互關係」にして、參考論文は、(1)「ゲブルチン」ノ姙娠性子宮ニ對スル作用、(2)子癇患者血液ノ凝固性並ニ「カルシヴム」含有量ニ就テ、(3)人類胎兒蛋白ノ進化ニ就テの三篇也。

△博士は熊本縣宇土郡松合町松浦百里次男、壯齡漸く不惑に入る六歳、年齒と共に手腕愈々圓熟し一段の貫祿を加え今は最も重望せらるる年輩に在り。學究的溫厚の紳士として崇高なる人格を具へ、臨床家としては人に敬慕せらるゝ特徴を有す。業餘の趣味としては運動を好み、また謡曲を楽しむ風あり。親戚關係には醫博松浦有志太郎、醫博大森憲太、醫博島信、醫博福田得志等を數へらる。春秋猶豐富にして前途洋々たり、幸に健康と共に、折角の自重加餐を祈る。東京市神田區駿河臺二丁目一番地二〇に私宅あり。

◇

中野理　△高田市知命堂病院婦人科醫長中野理博士は、愛知醫專出身の產婦人科學者にして、新潟醫大教授工藤得安博士に就て解剖學及び組織學を、日赤岩手支部病院長秋葉隆博士に就て婦人科學を研究し、新潟醫大より學位を獲得せる新進の名醫博也。研鑽多年、該博なる學識と共に實地の經驗を積み、今や獨特の新手腕を發揮して內外の信望を博し、地方診療界の爲め奮盡活躍しつゝあるを多とす。

△更に學歴より見たる博士は、東京獨逸協會學校中學を經て、大正十二年愛知縣立醫專を卒へ、直に新潟醫大助手任命、以來昭和四年三月同大學辭任まで引續き研究、同四年四月日赤岩手支部病院醫員任命、同年七月學位受領、同七年二月日赤岩手支部病院副醫長に昇進、同八年五月醫長に昇進、同年八月法人知命堂病院婦產人科醫長に就任今日に至る。

△學位主論文は、獨逸文原著の「Über die Veriteilung des Glykogens bei den zyklischen Veränderungen in den Geschlech sorganen der Flederman3 und über die Nahrungsaufnahme der Spermien in dem weiblichen Geschlechtswege」なり、參考論文としては、(1)生理的狀態ニ於ケル「グリコゲーン」分佈ニ就テ、(2)副腎剔出ニヨル諸臟器「グリコゲーン」ノ分佈變化ニ就テ、(3)死後ニ於ケル「グリコゲーン」消失現象ノ顯微鏡所見、(4)爬虫類ニ於ケル「グリコゲーン」分佈の五篇あり。尙他「女性生殖管內ニ於ケル精子ノ榮養說」を提唱シ、米人フキシヤー教授を始め多數內外學者の贊同を得たり。

△新潟縣中蒲原郡五泉鄉巢本村の人、明治三十一年生る。本來氏は學究肌の人にして學位を得るのが目的でなく、終

始研究に沒頭しつゝある途中、複雜なる家庭の都合上急に臨床家たらんと意を決せる時、自分を殺し心で泣いて過去七年間仕事をまとめたるものこそ、學位論文にして、それが卽ち學位となれるものなるも、而かもその學位授與は氏が三十有二才にして同級卒業中最初の榮冠を得たることは、氏が輝しき前半生史を粉飾するに足り氏の面目を物語るに充分也。今年齒漸く三十有八歲にして少壯の意氣の燃え、研究心潑剌として今猶止まず、尙ほ又學を錬り腕を磨くに餘念なきが如し、又臨床方面にては熱心克く誠實と親切とを盡す點に評判良く、篤實溫厚なる性格と相俟つて其の高邁なる人格を稱せらる。趣味としては戶外運動を好み、乘馬、登山、スキー、釣などを能くす。家には高齡八十有三歲の老父健在にして常に孝養を盡す。姻戚方面には入澤達吉博士を始め多數の醫博あり、亦以て多慶の家柄と云ふべき也。高田市西城町三丁目に住む。

◇

井上秀夫　△靑森縣立靑森病院產科婦人科部長井上秀夫博士は、九州帝大出身の產科婦人科學者にして、大學院在學中、恩師白木正博、石澤政男兩博士指導の下に斯學の蘊奧を究はめ、母校より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。研鑽多年、幾多の業績を發表して學界に其の學究的存在を認められ、臨床にも堪能にして獨特の手腕を有す、今は働盛にて內外の信望と相俟つて名聲嘖々たるを聞く。

△博士は五高を經て、大正九年九州帝大醫學部を卒へ、直に同學部產科婦人科敎室勤務、副手、助手を經て大正十二年十一月靑森縣立靑森病院醫長を拜命し產科婦人科部長を命ぜらる、昭和二年四月靑森縣より九州帝大に留學を命ぜられ、同學大學院に入學、白木、石澤兩敎授の指導を受け、同四年三月歸院し現在に至る、同年七月學位を授與せらる。

△學位主論文は『子宮頸部癌ニ對スル「ラヂウム」作用ノ臨床的並ニ組織學的研究』にして、外に參考論文として、『子宮癌殊に頸部癌ニ對スル「キュリー」療法成績ニ就テ』の一篇あり。他に論文十數篇旣に專門雜誌に發表せらる。著書としては「木下產科婦人科學叢書第一卷」、「子宮癌の「ラヂウチ」療法」（白木正博博士と共著）あり。

△感想としては『小生も四十一才となつた、人生僅に五十年と云ふ、然し人間は確にもつと長命し得るものである。米國のビツトキン敎授は「人生は四十から」と云ふ書を公にし、岡山醫大の安藤敎授はこの書をみて大に朗らかになつたと云つてゐる、腦の重量は九大の平光敎授によれば九州人は四十代で最大重量に達すると云つてゐる。之によれば人間は四十で初めて一人前になり得るのだから、古來四十歲を以て初老と云ふに贊する譯にはまゐらぬ、男子須く四十から努力すべきである。玆に於て小生は自己專門に關係ある婦人の一生を一瞥したい、更年期の婦人よ、實際の婦人としての生活は四十からだ、之迄は母となるべき時であつた、眞の母となつて子女の敎養に沒頭するも之からだ婦人として社會的事業をなすも之からだ、然るに最も生甲斐あるべき更年期に入つて、そこには貴重な生命を奪はんとする陷穽がある、更年期婦人の最も侵され易い子宮癌がそれである。醫學は日に月に進む、現今手術乃至放射線療法によるに非ざれば根治せしめ得ぬ本症に對しては吾人專門家は不斷の鬪爭を續け、懸命の努力を捧げ、眞に婦人として生甲斐あるは四十からだと叫ばせたいものである」云々と。

△博士は大分縣下毛郡和田村田尻の人、明治二十七年生る。少壯氣銳にして年齒漸く不惑に入る二歲、氏が理想とせる男子須らく四十から努力すべきであるとの域に達し、努力主義をモツトーとして愈々活動の時代に入る、洋々たる前途は頗る春秋に富み、向後の活躍こそ氏の將來を大ならしむるものと見るべき也。今は研究と醫療そのものに趣味を集中して努力勵精亦他事を顧みざるが如し。研究以外の趣味としては寶生流謠曲を愛好す。靑森市旭町縣立病院官舍に住む。

◇

橫井鎌吉　△濟々たる中京醫博界の現狀は恰も群雄割據の奇觀なしとせず、而かも各科專門博士に就ての認

識を得んとするも又た容易ならんや。玆に物色打診して聊か品隲を試みんとする横井鍾吉博士のプロフイルは如何。名古屋市西區小鳥町に在る横井産婦人科は卽ち博士の經營する醫院にして、新館落成と共に内部の設備整ひ、附屬として産婆養成所あり。同所卒業者にて各府縣産婆試驗に合格するもの實に八百人を超過す、學系より見たる博士は、卽ち東京帝大系の産婦人科學者にして、母校より學位を得たる近來の名醫博也。今や一流の位地を獲得して、當市診療界の爲に多年活躍盡瘁する處あるのみならず、一面には産婆養成の爲め努力貢獻しつゝある功績は甚だ多とすべき也。

△更に博士の學歴より閲歴を概括すれば、大正六年東京帝大醫科大學校卒業後副手となり、同大學附屬醫院産科婦人科教室に勤務し、磐瀬教授に師事する事數年後、同大學病理學教室に入り、緒方知三郎博士の指導を受け、傍ら東京醫學專門學校の産科教授を兼ぬ、昭和三年六月現在の處に開業、翌四年七月東京帝大より學位を受領せり。

△學位論文は『「ヴイタミン」缺乏食餌ノ家鷄雌性生殖器殊ニ其ノ排卵機能並ニ卵黄「ヴイタミン」含有量ニ及ボス影響ニ就テ』にして、副論文なし。

△博士は愛知縣名古屋市の人、明治二十三年生る。當年不惑に入る六歳、學究的年壯の紳士にして、臨床家として多年の經驗を積み、今や學識、手腕、人格共に圓熟して氏の仁術に一段の異彩を放ち、最も重望せるゝ時代に入り篤き信望を博す。其の臨床に臨むや熱心甚だ力め、誠實と親切とを以てする所に博士の性格を窺はれ、其の高邁なる人格を尊ぶ。拮据勵精、至誠以て氏の貴き使命を盡さんとする前途は猶頗る春秋に富む。切に自重加餐を祈ると共に、診療界淨化の爲め益々努力奮盡あらん事を。

◇

永井力

△福島縣下に永井力博士あり、公立岩瀬病院（福島縣須加川町）院長として活躍し衆望を荷む。同病院は明治五年の創立にして郡制廢止と共に組合立となり、各科綜合病院にして博士は産婦人科を擔當す。普通病床壹百、傳染病床二十あり、歴史ある病院として當地方に於ける最高唯一の治療機關たり、博士の責任も亦重且つ大なりと云ふべし。博士は東大系にして、學位も母校より獲得せる所謂東京帝大派の錚々たる産婦人科專門家として、既に江湖に著聞し、その診斷は的確にして名醫博として嘖々たる評判あるを聞く。

△博士の學歴より觀れば、一高を經て、大正二年東京帝大醫科を卒へ、直に附屬醫院副手となり、三井慈善病院外科醫局に入り、七年五月まで外科、産婦人科を實地研究す、翌月現職の岩瀬病院に赴任し産婦人科醫長となる、十四年一月病院費を以て東京帝大法醫學教室に入り、三田教授指導の下に血清學を研究し、昭和二年十二月病院に歸任す、翌三年九月病院長に就任し、同四年十月學位を受領せり。

△顧みて氏が學究生活時代を回想せば恩師、田代義德、青山徹藏、相馬又次郎、白木正博、三田定則博士等何れも斯學の權威者たる指導教授の膝下にて親しく指導と薫陶とを受け多年研鑽力むる所ありしことは否むべからず。學位主論文は『膠樣銀並ニ「サルワルサン」ノ胎盤透過ニ關スル實驗的研究、兩物質ノ姙娠家兎ニ於ケル血行内ノ消長及ビ諸臓器沈着量ニ就テ』が主論文にて、外に參考論文として、「免疫體、免疫元ノ胎仔、羊水移行ニ就テノ實驗的研究」の一篇あり。

△博士は鹿兒島縣串良町の人、武八郎の長男にして、明治十六年生る、當年五十有三歳。壯齡と共に愈々圓熟の域に入り、益々元氣にして、若輩を凌ぐ快刺たる氣魄に富む。人情味たつぷりある名病院長として多年聲望を扶植し、大衆より多大の信頼と尊敬とを受け、稀に見る至誠高潔の士としての評あるは慶ぶべき也。幸に健康と共に、地方醫療界淨化のため益々精勵盡力あらんことを翹望して止まず。福島縣須賀川町字鹿の出口三三に住す。

◇

早田五助　△臺北醫專教授にして、兼ねて總督府醫院醫長たる早田五助博士は、長崎醫專（明治四十三年卒業）出身の產科婦人科學者にして、主論文「胎盤浸出液ノ免疫機轉ニ及ボス影響ニ關スル實驗的研究」及び數篇の參考論文を提出して、長崎醫大より學位を獲得せる名醫博たる一人物也。曾て歐洲に留學するや、獨逸にて斯學の權威者ストラスブルナン、ワグネル、ビツケル、ビハムケルマン教授等に師事して、學術の蘊奥を究む。歸朝後は益々其の英才を發揮して臺灣醫育界の爲め氣焰を揚げ、治療界にも亦貢獻する處多大なり。

△感想の一片を寄せて曰く「醫育統一の早く實現されんことを望む」云々。長崎縣北高來郡諫早村の人、故早田和次郎の三男、明治二十年生にして當年不惑有九歳也。年壯氣鋭にして多量の分別を有す。研究以外特筆すべき趣味を有せず、寧ろ學者として後進提撕の爲め終始し、以て天職となす篤學の士なりと見るべき歟。其人格の高邁にして禮節の人たるは、人格陶冶の學府に缺くべからざる人物として亦囑望して止む能はざる也。臺北市大正町二ノ五二に住す。

◇

細野尚是　△東京市四谷區愛住町一三細野產婦人科醫院長細野尚是博士は、東大系の產婦人科學者にして、慶大より學位を獲得せる名醫博なるが、學究生活を勇退して診療界に躍進するや、創設經營に拮据勵精、歳と共に獨自の地盤を開拓して多大の聲望を博し、今や門前常に賑ひ盛況に在り。

△更に其の略歴を概括すれば、大正七年東京帝大醫科大學卒業、直に同大學產婦人科學教室に入り、磐瀨教授の指導を受くること年餘にして、吾妻病院に赴任し、軈て故吾妻勝剛博士の信任により、鎌倉產科婦人科病院長の重職を勤めて、大正十二年九月一日に至る。而して關東大震災後は足利市に於て臨床に從事したるも、昭和二年飄然慶大藥物學研究室に入り利尿中樞に關する世界的業績を完成して、同四年十二月學位を受領し以て現在に及ぶ。利尿强心劑「ボリガモール」は實に博士の發見創製に係はるものとして斯界に既に定評あり。

△學位主論文は『「キニーネ」ノ利尿作用機轉ニ就テ（利尿中樞ニ關スル研究）』にして、參考論文は『甲狀腺劑ノ利尿作用機轉ニ關スル研究』以下五篇あり。

△博士は長野縣中野町の人、明治二十五年生る。趣味として繪畫に造詣深し、蓋し京都の菊池契月畫伯は博士の實兄なり。博士の年齒今や不惑に入る四歳、愈々圓熟の時代に入れる前途は頗る刮目に値し、而かも猶春秋に富む、向後の活躍こそ大に期待せらる。

◇

中井卓次郎　△群雄割據の帝都診療界に於て、私立病院中產婦人科を以て嶄然頭角を顯はし、名實共に斯科のリーダーとして著名なる福井產婦人科（本院赤坂區青山北町四ノ一〇六、分院不姙症診療所京橋區京橋三ノ四）に副院長として中井卓次郎博士あり。學系より云へば日本醫大系に屬するも、婦人科領域の研究を京都帝大においてなし且つ同大學にて學位を得たる關係上、京大系とも見做すことを得。氏は院長福井正憑博士の實弟にして、人も羨むばかりの足弟仲好にて、何れも揃つて產婦人科特に博士は產科手術の名博士として既に斯界に定評あり、殊に福井博士の不姙症並に月經異常と相俟つて、中井博士の早期姙娠診斷及び癌腫治療に至つては各々特色を異にし、共に多年研究の結果、其の玉成せる絶對的確信と、其の圓熟せる手術的手腕に對しては世の信用を博し、一般患者より絶大の信賴と尊敬とを受くるに至る。今や福井產婦人科をして今日の隆盛と位地とを築き上げたるもの、素より創立當時院長の苦心努力は追想に餘りありと雖も、副院長としての博士が克く院長を輔翼せるもの與つて力あるは勿論、一に兄弟和合協力の賜物なるに主因するは賞讃に値す。

△博士は獨逸學協會中學校を經て、大正六年三月日本醫專を卒へ、大正六年十一月醫師試驗合格當時拔群の成績にて合格し恩師に認めらる。同年十二月東京帝大醫學部介補として東京市養育院醫局にて碓居龍太博士に就き內科學の指

導をうけ、同時に故望月寛一博士に就き產婦人科學を修む。大正八年十月より同十五年三月迄原籍地に開業、大正十五年四月より昭和四年九月迄愛知醫大勝沼精藏博士の指導をうけ血液學を研究す。次で昭和四年九月より昭和六年五月まで京都帝大醫學部副手として、斯學の權威岡林秀一教授に產婦人科學の指導を受け、特に手術實地に專念研究す。その間同大學にて昭和五年三月學位を得、昭和六年六月上京、爾來福井產婦人科に於て一般診療に從事し、同病院主任として今日に至る。

△主論文は「血液像ト疾病ノ豫後ニ就テ」にして、參考論文は、(1)致死的經過ヲ取レル各種疾患ニ於ケル血小板ノ研究、(2)猫「イラズ」中毒症全經過ノ血液像（臨床的並ニ實驗的研究）、(3)高度ナル「エオヂン」嗜好細胞增多症（八四・七五％）ニ於ケル炎症性核推移ニ就テ、(4)紙樣胎兒稽留性流產ノ一例の四篇なり、其他論著夥多。

△感想としては「現代の日本學界で一番不愉快な事は學閥を云爲したる昔風の餘弊が今猶解消せず盛んに横行して居る事である、獨り醫學のみとは言はず、法學でも工學でもすべてが同じ調子であらうが、殊に醫學に就て言はしむれば官學と私學と殊更に待遇を異にしたり、同じ務先に勤めながら同僚同士で相互に疑視反目したり、甚だしきに至つては同教室で同じく研究に從事して居る仲間同志ですら官學殊に帝大出身者は自ら高慢に振舞ひて私學出を馬鹿にしたり蔑視するの態度に出で其癖實力に至りては私學出は概して眞面目なる丈眞劍味があれば優れるも決して劣ることなきにも拘はらず一舉一動すべてが皮肉に之を見せつけられつゝあるは私學に對する侮辱にて時代錯誤の甚だしきものである、更に又た進んで學位請求論文の審査の如きも斯の如き情弊に囚はるゝ缺點がないとは云へない、要するに最も忌むべき此等の弊風は宜しく學者同士で相互が自己の人格を自覺尊重して愼み合ふ樣に自重して欲しいと思ふ」云々と、此說には共唱同感の士決して尠からずと思ふ。現代學界に對する一服の清涼劑として一部學者の猛省を促して可ならん乎。

△博士は奈良縣宇陀郡三本松村大野の人、福井義成次男、明治二十六年生れにして現姓を冐す、年齒四十有三歲也。少壯鋭氣にして進取の氣象に富む、日常甚だ多忙なるに拘はらず孜々として臨床に精進し、又た研究に餘念なく切磋卓勵の概あるを見る。既にして其學識、經驗は人格と共に漸く圓熟し今は最も得意の時代に入る、而かも春秋なほ遼遠にして、洋々たる前途は更に大に期待せらる。學究的溫厚の紳士として高邁なる其人格を敬ひ、臨床家として天資敦厚なる其性格を尊ぶ。殊に令兄福井博士と相俟つて兄弟博士の美談に漏れず、骨肉の愛情豐かにして人情味の馥郁たる美風と、健かなる兩親に對する餘慶の孝養とは人の皆な稱する處にして特筆に値す。醫博岡林秀一、醫博高橋正義及び醫博釜本四郎とは親戚の關係あり。

◇

飯野憲

△帝都醫博界は近來競爭激烈にして然も群雄割據の奇觀なしとせず。此の間に介在して漸次獨立の地盤を堅め、年次成功の域に向上發展しつゝある飯野憲博士は、其の專門とする產科婦人科を標榜して、麻布區櫻田町九一に於て開業し、飯野產婦人科醫院長として勵精活躍しつゝあり。醫院は堂々たる大規模にあらざるまでも內容充實し、病床七個其他諸種の設備遺憾なく整ふ。博士は慈惠醫專出身の產婦人科學者にして、嘗て瑞西及び獨逸に留學するや、グツキスペルグ教授指導の下に主として產婦人科臨床方面を研究し、慈惠醫大より學位を得たる名醫博たる一人物也。

△博士の今日ある學歷及び閱歷を公開すれば、茨城縣立水海道中學校を經て、大正二年東京慈惠醫專を卒へ、直ちに三井慈善病院病理部（今村博士）に入り病理を研究、同三年一月より三月迄傳研の細菌學講習を受け、同年三月より濱町產婦人科病院にて木下正中博士の指導を受く、同五年八月より東京病院產婦人科に轉じ樋口繁次博士の下に產婦人科研究、次で同七年四月より横須賀海軍共濟組合病院產婦人科部長勤務、同十年末渡歐、瑞西及び獨逸にて研究、

同十二年歸朝、爾來現住所にて產婦人科專門開業、傍ら慈惠醫大細菌血淸學教室にて研究、昭和五年三月慈惠醫大より學位を受領せり。

△學位主論文は「肉腫家兎血液ノ生物理學的及化學研究」にして、參考論文は「麻醉ノ免疫體ニ及ボス影響ニ就テ」外獨逸文原著一篇あり。

△博士は茨城縣結城郡大生村飯野喜太郎の長男にして、明治二十四年生る。當年不惑に入る五歲、健康にして年壯の意氣益壯也。學究的臨床家として今は働盛にして、手腕愈々圓熟の佳境に入りて一段の貫祿を加ふ。博士の進路は誠意、誠實を以て終始し、眞面目にして患者に親切を盡す點に極めて信望を博す。スポーツに趣味を有す。

◇

武田正房

△多士濟々たる朝鮮醫療界に進出して、自己の專門たる產婦人科を以て堂々の陣を張り、今や第一線に立ちて衆望を集めつゝあるは、京城府長谷川町一一六番地武田產科婦人科病院長、附屬產婆看護婦講習所長武田正房博士なり。當院は診察室、手術室、分娩室等の設備萬全を期し、物療室には主としてヂアテルミー療法、熱氣療法、其他水銀壓迫療法等を行ふ設備もあり、收容人員十八名にして常に滿員の盛況を呈す。尙產婆看護婦講習生五十餘名を敎育しつゝあり。

△博士は京城醫專の出身にして、大正十三年卒業後直ちに朝鮮總督府醫院產婦人科副手、翌十四年四月同醫院醫員、七月京城醫專助敎授（婦人科學）となる、昭和二年更に京城帝大醫學部助手として產婦人科敎室に勤務の傍ら研究に從事し、五年七月東京帝大より學位を得、爾來現住所に於て開業今日に至る。專攻は產科婦人科學にして最も得意とするは產科學なるも、主として產婦人科學は高楠榮敎授、藥理學は大澤勝敎授、病理學は福本龜五郎敎授等に師事して造詣する所あり。

△學位主論文は「卵巢及子宮內分泌ノ藥理學的知見補遺」にして、二篇より成る。參考論文は、(1)結核性子宮內膜炎(2)慢性子宮內膜炎及週期的變化ノ知見補遺、(3)不完全流產時ノ遺殘物及子宮內膜ノ組織學的檢索、外六篇あり。要するに卵巢の各細胞の機能に關して研究を一歩進めたるものとして、先年朝鮮醫學會より優秀論文として推賞、奬學賞を授與され、學界に重要せらる。

△博士常に親しき友に語りて曰く「社會一般の不景氣を同じく我等開業醫家も蒙る所大にして將來尙一層經營の不安を感ずる所なるも自己の人格と技術とを以て如何に激烈なる生存競爭にも打ち勝ち得ると自信す」云々と、その意氣や壯んなりと云ふべし、而して又その堅き自信ありてこそ將來ヨリ大なる成功の彼岸に到達すべき强き力となるべし。又た現代醫師界に對しての感想としては「不景氣打破の對策等の如き期待は絕對に有することなし、只々現代醫師法の餘りに現代社會に適合せざる所あるを遺憾とし、これが改正を切望するもの也」云々と、時代が要求する廓淸の叫びとして大に傾聽すべき也。

△博士は高知市潮江町武田雄五郎の七男、明治三十四年生る、年齒未だ三十有五歲也。性格より打診すれば、生來短氣なるも努めて自ら之を抑壓する所に博士の特徵が窺はれる。新進有爲の才にして潑剌たる意氣と、殊に自ら人格尊重の氣風を培ひ、以て大に將來に待つあらんとする氣慨とは、當世博士人物界の爲め大に人意を强からしむるを慶ぶ。讀書家にして書見を業餘の趣味とし、研究以外、品性陶冶の修養に力むる風あり、甚だ多とす。

◇

野木愛三

△大阪市天王寺區茶臼山町に野木婦人科病院あり。院長野木愛三博士は、明治四十四年態本醫專卒業、直ちに樂山堂病院及大阪回生病院外科に勤務、大正八年京都帝大產婦人科敎室にて研究、次で十四年慶大醫學部婦人科助手に轉じ、昭和五年七月慶大より學位を受領す、昭和六年五月辭して大阪市港區九條に開業し、同九年一

月天王寺茶臼山に本院を開業す。

△學位主論文は「腰髓麻醉時血壓下降ノ原因ニ就テ」にして、參考論文は、(1)婦人腎盂炎並膀胱炎ノ細菌學的研究、(2)喇叭管及膀胱炎ヨリ分離シタル「デフテロイド」菌ニ就テ、(3)膀胱炎ニ對スル大腸炎「フアーヂ」ノ臨床的價値、(4)微毒性「サフエナ」靜脉炎ニ就テ、(5)腰髓麻醉時血壓下降ニ對スル諸種藥液ノ拮抗作用ニ就テ等なり。

△博士は岡山縣矢掛町の人、明治二十年生る、學究的濃厚の紳士にして當年不惑に入る九歳也。氏は學究生活に多年の研鑽を積み、出でゝ診療界に躍進するや、拮据奮勉、創設經營に努力精進して獨立の地盤を築き、今や拔くべからざる盛況を呈す。趣味としては研究と醫療そのものにして他に何等の道樂なきが如し。

◇

福田正材　△浪速醫博界は多士濟々として近時頗る人物に富む。大阪市東淀川區國次町一〇九ノ六福田產婦人科醫院長福田正材博士は、金澤醫專出身の產婦人科學者にして、大阪醫大教授村田宮吉博士に就きて病理學の蘊奥を究はめ、大阪醫大より學位を獲得せる斯科界近來の新進醫博として推奬すべき乎。少壯の意氣を以て、至誠仁術の爲め不斷の勵精努力を續け、將來に俟つあらんとする前途は頗る春秋に富み、向後の活躍は大に期待せらる。

△學位主論文は「人工黃體發生時ニ於ケル脫落膜ノ人工發生ニ就テ」にして三篇より成り、參考論文は、(1)人工黃體發生ト人工脫落膜形成、(2)產褥尿ニ於ケル所謂腦下垂體前葉「ホルモン」ノ發現ニ就テなり。

△博士は京都府何鹿郡山家村廣瀨上ノ町福田正己の次男にして、明治三十年生る、年齒三十有九歳の少壯也。

◇

石田嘉四郎　△岐阜縣中津川病院長兼產婦人科部長石田嘉四郎博士は、京都府立醫專出身の產婦人科學者にして、母校の恩師加治安信、山田一夫、後藤基幸三博士等の指導を受くる所厚く、京都府立醫大より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。今や斯科の大家と仰がれ、地方診療界の爲め活躍盡力する所あるは甚だ多とすべき也。

△博士は大正九年京都府立醫專を卒へ、直ちに同附屬病院產婦人科教室醫員に任命さる、同十三年二月京都府立醫大選科入學、翌十四年二月更に同大學研究科入學、產婦人科學及び醫化學研究、昭和五年四月研究科退學後產婦人科教室副手に任命せらる、同年十一月副手を辭し岐阜縣中津川病院產婦人科部長となり今日に至る。

△學位主論文は『デーレルライン氏腟悍菌ノ乳酸並ニ「アセトアルデヒード」成生ニ就テ』にして、參考論文は、(1)氣候ノ白鼠瓦斯新陳代謝ニ及ボス影響ニ就テ、(2)鹽酸「キニーネ」ノ白鼠瓦斯新陳代謝ニ及ボス影響ニ就テ、(3)「アンチピリン」ノ白鼠瓦斯新陳代謝ニ及ボス影響ニ就テの三篇なり。

△博士は京都市中京區兩替町三條上ル石田嘉三郎長男、明治三十年生る、當年三十有九歳、學究的少壯の紳士也。勵精恪勤の人として聞え高く、圓熟せる手腕と自信とを以て日々診療に努力精進し多大の信望を博す。特筆すべき何等の道樂を有せずと雖も研究と醫療に趣味を集中せる人と見らる。春秋猶豐富にして、切磋勵精倦むことなき前途は大に待望せらる。岐阜縣中津町西新町に住む。

◇

物部鞏　△浪速診療界に最も古き歴史を有し、陣容堂々現に大阪市東區今橋五丁目十七番地に結構宏壯なる產婦人科及び內科を專門とする物部病院あり。現院長物部鞏博士の經營にして、院內各室の設備全く充實し、外來患者待合室、診療室、手術室、理學的診療室、藥局、臨床研究室等を有し、就中待合室の如き他の病醫院に見ざる室內裝飾殊に獨逸國を偲ぶに足る材料を以てし、病苦に惱まされる患者をして爽快ならしめ、憂鬱より朗快に導くの感あらしむ。又藥局は採光換氣共によろしきを得、藥品の配列、調劑上の新設備、水劑に使用すべき蒸餾水の獨自の製

法等到底他の病醫院の追從を許さず、日々病院參觀者頗る多く、往年院内改築に際して院長の設計に最も苦心せる所にして今や私立病醫院中、斷然頭角を拔き、好評嘖々たるも亦偶然ならざるを思はしむ。顧みれば明治二十年現院長の祖父初めて東區今橋五丁目現病院の向ひに産婦人科を專門として開業、其後現院長の亡父醫學士物部定曹が分家と同時に現在の地を卜し、産婦人科及び小兒科を專門とする病院を新築、昭和六年一月十四日狹心症の爲逝去するまで、實に四十有餘年、其間院長として交々六人、何れも産婦人科を最も得意とし、傍ら内科及び小兒科の診療に從事せり。

△現院長馨博士も亦亡父に習ひ、産婦人科及び内科を專門とし、就中子宮癌の手術及び心臟病の治療に秀で、産婦人科醫が疾患の診斷並に治療上常に内科的知識の必要なるを認め、産婦人科及び内科の調和的診療の實際後進の考を示し、其治療に於ては博士獨歩の觀あり。昭和七年九月院内改築成り、其記念事業として博士年來の宿望なる純臨床醫學殊に診斷と治療に必要なる研究室を院内に增設し、一般患者の診療の傍ら研究業績を發表し益々臨床醫學の進歩改善に努力し、業績の旣に發表せられたるもの數十種あり。何れも臨床醫家に益すること甚大にして、其意氣や壯とすべく、博士の如き臨床家として學位獲得後、尙も今日學究的に熱心に研究を續くるの士は、誠に稀に見る篤學者と云ふべき也。博士は大阪府立北野中學卒業生にして、京都醫大系の錚々たる實地醫家にして、母校卒業後先づ内科學を修め次で産婦人科の研究に從事し、大正十四年三月より昭和三年十月まで渡歐、主として獨逸國伯林に滯在、伯林醫科大學に留學し、學術の深奥を究め、内科學特に心臟病學並に産婦人科學の研究に從事し、幾多の學位論文（何れも獨逸文）を完成發表せり。

△一面又た社會的には大阪に臨床醫家を中心とする大阪臨床瑣談會を設立して、常任理事兼理事長として努力盡瘁する所あり。本會は事務所を物部内科産婦人科病院に置き、學閥、學位、年齡及び經歷等を全く度外視したる臨床醫家の座談會にして、日々診療に從事する實地醫家の爲め各科臨床に於ける貴重なる研究、殊に疾病の診斷並に治療に關して會員相互の經驗並に意見を披瀝し、現代日本に於ける臨床醫學、就中治療醫學の進歩に寄與するを以て目的とするにあり。此外日獨兩國の親善を圖る爲めに生れたる「槲の會」にも理事として同會成立以前より活動する所あり。今や多年の經驗と相俟つて手腕圓熟の域に入り、名實共に備はる、又其人格の圓滿なる自ら人をして敬服の念を懷かしむ。趣味は音樂、寫眞、園藝等を好み、刀圭多忙の裡にも此の餘裕を有す。

△主論文は、Untersuchungen über den Stoffwechsel des Herzens(III. Mitteilungen) Ueber den Phosphorsäurewechsel des sauerstofflos schlagenden überlebenden Kaltblüterherzens. にして、外に、參考論文として、(1)Untersuchungen über den Stoffwechsel des Herzens (I. Mitteilungen) Ueber den Gehalt des Herzmuskels der Tiere an verschiedenen Phosphaten. (2) Untersuchngen über den Stoffwechsel des Herzens (II. Mitteilungen). Die jahreszeitliche Schwankungen der verschiedenen Phosphatmengen im Herz- und Skelettmuskel der Kröten. (3)Ueber die Wirkungen des β-Tetrahydronaphthylamins auf den Blutkreislauf der Kaltblüter, besonders des Frosches. (4) Ist die Superposition der Extrasystole bei Schädigung des Herzens durch Verkürzung der refraktären Phase bedingt? (5) Die Superposition der Extrasystole beim isolierten Froschherzen infolge von Schädigung durch Narkotica. (6) H. Meltzer u. K. Mononobe: Reversibler Wärmestillstand bes isolierten Warmblüterherzens. (7) H. Meltzer u. K. Mononobe: Die Wärmestarre beim Warmblüterherzen. (8) E. Mangold. Nach Versuchen von H. Meltzer u. K. Mononobe: Die reversible Wärmelähmung des Säugerherzens. の八篇あり何れも原著は獨逸文なり。此他論著夥多、枚擧の遑なし。

◇

櫻井菊三　△櫻井菊三博士は、帝都診療界の中樞、日本橋通二の二及び大森區入新井五ノ一八五に產科婦人科櫻井病院を經營し、附屬として通信健康相談所を設置して一般保健衞生思想の普及並に指導に努力精進しつゝあり。千葉醫專出身の產科婦人科學者にして、慈惠醫大より學位を得たる近來の名醫博也。其の玲瓏たる診療、手術の好評は段一段と人氣を集中し、日々繁榮の盛況を呈す。

△更に其の學歷より今日ある博士の年歷を調べ見るに、博士は大正五年千葉醫專卒業後、直に產婦人科教室に入り後藤教授に產婦人科學を學び、同八年渡米、北米オハイオ洲シンシナチ大學本科入學、傍らマシウス教授並に田代博士に生化學を、フヒツシヤー教授に生理學を學ぶ、同十二年同大學全科卒業ドクトルの學位を受領す、同十二年歸朝、大森區に產科婦人科櫻井病院設立診療に從事す、昭和二年二月慈惠醫大研究科に入り、永山教授に醫化學を學ぶ、同五年五月研究科卒業、同年十月學位受領、目下日本橋區と大森區に於て診療中、區醫師會理事たり。

△學位主論文は「人胎盤浸出液ノ家兎ニ對スル毒性及血液凝固促進作用トノ相互關係並ニ其ノ本態ニ關スル研究」にして、外に參考論文として、(1)胎生期肺臟浸出液ノ毒性並ニ血液凝固促進作用ニ就テ、(2)子癇尿ノ血液凝固促進作用ニ就テ、外二篇あり。

△「開業醫は開業醫として誠心誠意病者の幸福のために働かんとするより他なし」云々とは、披瀝せる氏の感想の一片なり。誠心、誠意、此の精神と意氣とを以て終始せる點より見て、患者をして常に信賴と尊敬の念を起さしむる所以も亦窺はる。氏は千葉縣印旛郡內鄉村の人にして、明治二十五年生る、當年不惑に入る四歲。臨床家として稀に見る活動家にして、謹直至誠の士也。

◇

橋本吉藏　△朝鮮刀圭界に於ける橋本吉藏博士の存在は、產婦人科界に逸すべからざる名醫博たる一人物として認めらる。現に博士の經營する橋本產科婦人科醫院は京城府岡崎町七に在りて、診察室、手術室、入院室其他內部の設備を遺憾なく整へ、博士自ら日々診療に勵しみ玲瓏たる手術の好評は益々人氣を集中し、日增繁榮と共に漸次成功の域に發展しつゝあり。

△千葉縣山武郡丘山村の人、明治二十三年生れにして、大正七年千葉醫專を卒業し、三井慈善病院及び濱町病院を經て、大正八年朝鮮總督府醫院醫員兼京城醫學專門學校助教授となる、同十一年南滿洲鐵道株式會社鐵道醫として京城府龍山鐵道病院產婦人科醫長の職にあり、昭和六年同院を辭し京城府岡崎町七番地に產婦人科醫院を創設し現今に至る。斯間學位論文作製に當りては京城帝大藥理學教室にて大澤教授の懇篤なる指導を受け學位論文「輸卵管ノ藥理」を提出して、昭和六年一月千葉醫大より學位を受領せり。當年不惑に入る六歲、年壯の意氣益々壯にして手腕愈よ圓熟の域に入る。趣味は圍碁及園藝にして又狩獵を好む。

◇

石川治　△東京市王子區稻付町五丁目八〇六に產婦人科石川醫院あり、診察室、手術室、病室（三）其他內部の設備整ひ好感を覺えしむ。院長石川治博士は慈惠醫專出身の產科婦人科學者にして、慈惠醫大より學位を得たる斯科界近來の名醫博也。新進にして獨特の新手腕を有し、的確なる診療手術の好評は益々人望を集め、日增繁榮と共に漸次獨立の地盤を固めつゝある前途は大に待望せらる。

△博士は大年十四年東京慈惠會醫院醫學專門學校卒業後、直ちに慈惠會醫科大學細菌學教室に入り助手拜命、次で昭和四年同大學細菌學講師を託さる、同六年一月學位受領と同時に講師を辭し、直ちに同大學產婦人科教室に入り同八年四月迄勤務す、爾來頭書の現住所にて開業今日に至る。專攻は產婦人科學に次で血淸學、細菌學、膠質化學等にして、慈惠醫大細菌學教授寺田正中博士、同產婦人科教授小島讓博士、同助教授忽滑谷精一博士等の指導を受く。

△主論文は、(1)體外培養組織ノ免疫體產生ニ就テ、(2)組織培養法ニ依ル組織ノ寒冷ニ對スル抵抗力ニ就テ、にして、參考論文は、(1)赤血球ニヨリテ吸着セラルル當該凝集素量ト其ノ濃度トノ關係ニ就テ、(2)血清類脂體ノ免疫原性ニ關スル研究、(3)牛血清ノ諸種免疫反應ニ及ボス影響附所謂各種抗體消長ノ平行性ニ就テ、の三篇なり。

△博士は茨城縣東茨城郡橋村川戸石川鐵之介の次男、明治三十四年生れにして當年三十有五歳の少壯也。資性篤實溫厚、學究的紳士にして、熱心なる臨床家としての聞え高く、醫師會がもう少し强力な團體たらん事を高調する一人者也。熱誠克く患者の心理を洞察して誠意、誠實、親切を盡し、「醫は仁術也」をモットーとす。研究以外の趣味としては手術を第一とし、又た野外運動を樂しむ、嗜好は支那料理。

◇

飯島近治　△大阪市南區長堀橋筋二ノ二二に陣容堂々、結構宏壯にして內部各室の施設、裝り附等遺憾なく充實せる點に於て、他の追隨を許さゞる著名なる飯島產婦人科病院あり。現院長は京大系の新進、所謂京都帝大派の名醫博にして、產婦人科專門醫として名聲を博せる飯島近治博士なる事は既に世人周知の如くなるが、同病院は博士の亡父飯島貫一博士の創設せるものにして、既に二十有餘年の歷史と共に牢乎拔くべからざる地盤を有す。博士は母校の恩師岡林秀一博士の指導を受け造詣する所深く、專門的學識は言はずもがな、經驗豐富、臨床的獨特の手腕を有す、其の玲瓏たる診療手術の好評は益々躍進的發展振を示し、古き地盤の上に繁榮いや增し卓然として頭角を顯しつゝありとの評判也。

△栃木縣下都賀郡栃木町字栃木の出身、明治三十三年生れにして、栃木縣立栃木中學校、六高を經て、大正十四年京都帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部副手囑託として產婦人科教室勤務、翌十五年三月助手に任ぜられ、引續き同教室にて研究、昭和三年一月更に京都帝大醫學部講師（產科婦人科）を囑託せらる、同年二月同大學產婆養成所講師囑託、同五年三月京都府產婆試驗委員囑託、同年五月大阪市北區西扇町財團法人田附興風會北野病院產科婦人科長に任ぜらる、同時に京都帝大產婆養成所講師を辭す、翌六年一月京都帝大醫學部講師並に北野病院產婦人科長を辭す、同年二月京都帝大より學位受領、同年三月私立飯島產婦人科病院（故飯島貫一博士二十年來經營し來れるもの）を繼承今日に至る。卽ち博士は故飯島貫一博士の嗣子にして、斯父にして斯子ありとの感を深からしむ。

△主論文は「惡性腫瘍ノ放射線感受性ニ關スル研究」にして四篇より成る。參考論文としては、(1)所謂卵巢量ニ就テ(2)放射線ニ依ル腫瘍治癒機轉ニ關スル生化學的研究、(3)「X」線放射ノ胃液分泌ニ及ボス影響（實驗的研究）、(4)同（臨床的研究）、(5)Embryological study of the Human Fetus, Part I The cardiac Nervous of the Human Fetus Various Organs of the Human Fetus 第二編　指趾皮膚神經ニ就テ、(6)人胎兒各種臟器神經ノ發生學的研究、(7)子宮癌手術後ノ後療法ニ就テ、(8)子宮癌ト姙娠、(9)左側橫隔膜麻痺弛緩症ト姙娠分娩、(10)正常位置ニ於ケル胎盤早期剝離ニ依ル子宮漿膜下出血例、(11)月經時ニ現ハルル不整脈ニ就テ、の十一篇あり。何れも學界に既に學問的批判あれば贅せざるまでも、學術方面に對する氏の努力研鑽の跡を物語るもの也。

◇

塚田洋　△東京鐵道病院に產婦人科副醫長として塚田洋博士あり。金澤醫大系の產科婦人科學者にして、特に婦人科に關する內分泌學を最も得意とし、愛知醫大より學位を獲得せる新進の名醫博也。指導教授は主として山崎正董博士及熊谷强助博士にして、產婦人科學及び生理學の造詣深く、臨床に堪能にして多年の經驗に富む、少壯篤學の士にして、潑剌たる前途春秋に富む、新人物として刮目に値す。

△博士は大正十一年金澤醫大を卒へ、直ちに愛知醫大產婦人科教室に入り、專ら山崎前學長の薰陶を受け、同十二年八月迄研究に從事す、次で名古屋鐵道病院產婦人科に轉じ昭和七年八月迄在勤す、同年九月東京鐵道病院產婦人科に

轉じ現今に至る。其間大正十四年一月より昭和四年十二月迄勤務の傍ら、愛知醫大生理學教室に通ひ、女性生殖器の生理的機能問題の研究の爲に熊谷教授の指導を受け、同六年二月學位を受領せり。

△主論文は「女性生殖管ノ發育導程ニ關スル機能ノ實驗的研究」にして、第一編及び第二編より成る。他に參考論文六篇あり。主論文内容は女性生殖器に於ける生理的機能の變化を、内分泌の關係より比較驗索せるものにして、幼若成熟姙娠産褥等各階梯を通じての子宮並に卵巣胎盤等の機能的相互關係を鮮明にし、女性生殖器のホルモンの關係を直接間接に研索し、以て生殖器の發育發情問題を窺知せる廣汎の業績なり。

△感想に曰く「産婦人科を訪れる婦人にして性生活の缺陷苦惱を抱き來る者、豫想外に多きに一驚する處にして、而も從來婦人科醫の特種の場合を除きては、餘り此れに觸れざる者あり。而も少しく關心を以て患者に接する時、世相の複雜生計經濟の必迫等より眞摯の態度を以て、之が治療を乞ふ者多き事患者の大件と稱ふも過言にあらざらむか。而して之れが治療に當りて專門醫は、一程の治療方針の下に眞面目なる態度と懇切入念なる努力を以て、經過を追究して加療するの任責を感ず。一面近來漸く燦然として光輝を放つに至りし生殖器ホルモン問題を基準として、之れが治療打開に望む時、其の結果實績に調して、實に愉快なる興味を覺ゆる事同感ならむ。此後婦人科醫の業績中、避姙受胎問題の理想的平易實際化と、性生活問題は重要の領域として並に研鑽解決に向ふに至るものならむ」云々と、專門醫にとりては蓋し絶好の參考として傾聽すべきに値す。

△博士は名古屋市東區東二葉町塚田孫作氏の長男にして、明治三十二年生る。少壯氣鋭にして新進の意氣益壯也。溫厚なる學究的好紳士にして、臨床家としての手腕練熟の域に達し今や最も得意の時代に入る。診療に臨んでは熱心甚だ力め克く誠實と親切とを盡し、其の態度の眞摯にして熱情溫味あるところに博士の特徴を窺はる。研究以外特筆すべき趣味を有せず。眞面目にして自己の職務に專念忠實を盡し以て本分とするの概あり。淀橋區下落合四ノ一六九〇。

三島肅三

△帝都診療界の中心にして醫院割據の環境たる京橋區銀座四ノ五に三島産科婦人科醫院あり、斯科の大家として著名なる三島肅三博士の經營する所、小ざつぱりした陣容結構にして内部の設備整ふ、現在にては博士自ら一般患者に接して診療の傍ら博士は海軍々醫學校に教鞭を執り、又兼ねて東京府醫師會下谷病院産婦人科部長として活動し日夜始んど席を溫むるの暇なきが如し。博士は東京帝大派の名醫博にして、産婦人科專門家として錚々たる一人者たるは既に斯界に定評あるが如し。

△學系よりすれば、博士は東京帝大醫科大學の出身にして、明治四十四年十二月卒業後大正三年八月まで同大學産婦人科教室副手として勤務、同三年九月より同十三年三月まで木下正中博士に師事し、元濱町産科婦人科病院副院長として就任す、先是大正十年一月より東大醫學部法醫學教室に於て研究に從事し、教授三田定則博士の指導を受け、昭和六年四月東京帝大より學位を受領せり。主論文は『母兒血球溶液ノ「アルカリ」ニ對スル抵抗差違ノ本態ニ就テ』にして、參考論文なし。

△博士は廣島縣沼隈郡高須村の人、三島靜の二男にして、明治十六年生る。年齒知命に入る三歲、學究的溫厚の紳士にして、臨床家としては今が圓熟せる腕盛にて最も重望せらるゝ得意の時代に在り、加ふるに天資篤實にして眞摯なる性格と相俟つて厚き聲望を博す。殊に活動家としての博士は、常に堅實なる歩調を踏んで學界又は診療界に勇往邁進し、孜々として倦まざる元氣は甚だ多とす。幸に健康と共に自重加餐を祈るや切也。自宅は下谷區根岸一三一に在り。

◇

小笠原　清

△京都市御幸町御池上ルに産婦人科專門を以て著聞する小笠原病院あり、院長小笠原清博士の經營にして開業古く、依然として繁榮を續け牢固たる地盤を有す。氏は京都市小笠原定治次男、明治二十八年生にして京都府立一中を經て、大正七年京都府立醫專を卒へ、同年九月京都帝大醫學部醫院醫員介補、同九年六月同學部研究

科へ入學森島、岡林、尾崎三教授指導の下に產婦人科及び藥物學專攻、同十四年六月學位受領、先是大正十年九月以來研究の傍ら小笠原病院に於て一般の診療に從事し居れり。近代劇及び小說類を趣味す。

△學位主論文「胎兒ノ子宮內死亡ニ關スル實驗的研究」、參考論文(1)胎兒肝臟ノ解毒能力ニ就テ、(2)「コロイイド」ノ胎盤透過ニ關スル實驗的研究、(3)姙產褥婦並ニ姙娠中毒症患者ノ血壓ニ就テ、(4)產婦人科患婦血淸ノ「アルカリ」度ニ就テ、(5)姙、產、褥婦並ニ初生兒ノ血液脂肪量ニ就テ外十二篇あり。著書、(1)答案式受驗產婆學、(2)產婆學講義錄。

◇

根本豐治　△順天堂病院產婦人科、及び東京醫專教授として多年斯道の爲に努力貢獻しつゝある根本豐治博士は、東大系の產婦人科學者として錚々たるものにして、斯科の大家を以て稱せらるゝ名醫博也。氏は茨城縣行方郡行方村の人にして、錦城中學、六高を經て、大正四年東京帝大醫科を卒へ、直ちに同大學附屬醫院產婦人科へ入局、木下、磐瀨兩教授の指導を受け副手、助手勤務五ケ年二ケ月、更に同大學藥物學教室に轉じ林、田村兩教授に師事する事三ケ年十ケ月、其間大正十一年九月より順天堂病院に於て診療に從事し產婦人科を擔任し今日に至る、大正十三年十二月學位受領、其間には東京府產婆試驗委員、東京市療養所囑託、東京助產女學校、日本大學に講師たり、又東京醫專教授として現任中なり。讀書と旅行を趣味す。主論文『鹽酸「インドール」、ヱチール、アミン」「ルタミン」ノ藥理作用ニ關スル實驗的研究』參考論文、(1)「ルタミン」ノ臨床的實驗其他論著夥多あり。

◇

宮川知平　△帝都診療界は近時頗る醫博人物に富む。玆に品隲せんとする宮川知平博士は、新らしく群雄割據の間に進出して其の專門とする外科及び婦人科を標榜し、新興の宮川病院を淀橋區戸塚町二丁目百九十一番地に建設經營して日々診療に勵み、診療界淨化の先驅者として大いに時代の要望に應ぜんとす。學系は北大系の新進にて、主論文「赤血球膠着現象並ニ此レニ隨伴スル特異溶血ノ本態ニ關スル研究」を完成、北大より學位を獲得せる名醫博として其の存在を認めらる。博く新知識を有し、臨床に堪能にして多年の經驗に富む、今や獨特の新手腕を發揮して餘す所なし。而かも年華未だ壯少なれば向後の活躍を相俟つべく、將來の發展を大いに期待せらる。

△顧みて博士の學歷及び閱歷を概括して紹介せば、大正十五年北海道帝國大學醫學部第一回生として業を卒へ、直ちに同大學第一外科副手となり昭和二年助手に任ぜられ、同四年同大學院に入り、同六年退學、再び同大學附屬醫院第一外科教室に勤務して研究を續け、同六年四月學位を受領す、爾來本所區橫綱町同愛記念病院に勤務、同八年十月辭職す、現住所に病院建設專ら外科及び婦人科の診療を開設せり。

△博士は新潟縣刈羽郡柏崎町、祖父の代より醫家にして、伯父文平氏は中越盲啞學校を起し、父久平氏は明治三十一年柏崎產婆學校を創設し產科衞生智識の普及に力を盡す、今や長兄重平氏父君の業を續く。博士は次男にして、明治三十四年生る、當年三十五歲、少壯にして新鋭の意氣益々盛なり、學究的快活の紳士にして、手腕漸く壯熟の域に入り、今や得意の時代にして臨床に熱心精勵し「醫は仁術也」を「モツトー」として克く誠實と親切とを盡す所に博士の特徵を見出さる。趣味としてはスポーツを好む。

◇

佐久間　兼信　△東京市神田區三崎町三ノ一三八に東京助產女學校あり、校長は佐久間兼信博士にして、明治四十四年氏の設立經營せもものなり。博士は東京市の出身、明治十三年生、明治三十三年東京帝大醫科大學を卒業、後病理學及產婦人科教室に入りて勤務の傍ら研究を續け、後岩佐病院產婦人科主任たりしが、四十三年五月神田三崎町に產婦人科專門醫院を開設、四十四年四月東京助產女學校を設立自から校長として產婆養成に當る、大正十年東大法醫學教室に入りて血淸學研究、十二年十月日赤本鄕臨時產院醫長囑託、十三年四月同院解散と共に解任、十四年六月學

位受領。博士の經營主宰する助産女學校は創立古く、經營監督宜しきを得て斯界の模範を以て稱せらる。
△學位主論文は「生殖細胞ノ沈降反應及性別ニ就テ」なり。本郷區元町二ノ九に住む。

◇

川地義松　△名古屋市東區相生町一ノ九に産科婦人科川地病院及び附屬川地産婆看護婦學校あり、院長兼校長川地義松博士の經營拮据二十年餘に垂んとす、病院は病室二十一室、其他諸般の施設完備す。博士自ら日々診療に勵精し、副院長二名其他を督勵、協力して倶に院務發展に努力精進するの傍ら産婆看護婦の養成に務め、斯界の指導啓發に盡力する所あり。氏は愛知醫專出身の産婦人科學者にして、研鑽多年の後、愛知醫大教授林亥之助博士に就て藥理學を專攻し、愛知醫大より學位を獲得せる名醫博として氏の仁術に一段の光彩を放てり。殊に特筆すべきは、氏が開業の傍ら研學の念に燃え、終に克く其の初志を貫徹して學位を得たる厚志篤學の點にあり、此の向學的精神と不撓不屈の努力とは、頂門の一針として後學の大に學ぶべきを要す。
△氏は大正二年愛知縣立醫學專門學校卒業、同年七月縣立愛知病院産婦人科勤務、同七年七月職を辭して以來現住所にて開業今日に至る、斯間、昭和三年一月より愛知醫大藥理學教室にて研究、同六年四月學位を受領せり。指導教授は主として山崎正董博士、清水由隆博士、林亥之助博士等なり。
△學位主論文は「姙娠、分娩及ビ産褥期ニ於ケル血液像、附授乳ニヨル影響」にして、參考論文は、(1)家兎ニ於ケル姙娠時並ニ産褥時血液「カルシウム」量ノ消長ニ就テ、(2)血糖量ニ及ボス「グアスヂン」ノ影響（共著）、(3)巨大ナル子宮腰部粘膜下筋腫ノ一例、(4)膣及ビ肺ニ轉移ヲ起セル悪性脉絡膜上皮腫ノ一例等なり。
△氏は愛知縣東春日井郡守山町大字幸心の人、川地勇三郎の長男にして、明治二十一年生る。其の今日ある閲歴は既に氏の前半生史に燦として輝き、今は壯齢漸く熟して手腕、人格共に玉成の佳境に入り、既に悠々たる位地を獲得して益々其の特技を發揮する所あり、博士の得意や想ふべき也。讀書家にして書見を唯一の樂しみとし、今猶精研と并せて精神の修養に勉む、道樂としては書畫を鑑賞し少からざる藏品を有す、又盆栽を好む。

◇

堀田四郎　△東京市青山北町六ノ四二に堀田醫院あり、院長堀田四郎博士は大正五年東京帝大醫科大學の出身にして、卒業後東大産婦人科教室に入りて産婦人科を、入澤内科に入りて内科學を研究、大正十四年十二月學位受領、續いて現地に開業せる産婦人科、内科專門の醫博也。
△學位主論文は「胎生期間ノ含水炭素代謝ニ就テ」なり、其他論著夥多あり。滋賀縣の出身、明治二十二年五月生る、圍碁、スポーツを趣味とす。

◇

增原由一　△廣島縣東城町一三〇に增原産婦人科病院あり、院長增原由一博士の經營にして、開業拮据數年結構宏壯にして内容充實し、ベツト參拾個、×光線、ユニヴアーサル、カレンタドール等々、諸般の設備整ひ、當地衆より多大の信望を博しつゝあるは、地方診療界の爲め甚だ多幸とす。
△更に學歴より見たる博士は、大正十二年東京醫專卒業後、大阪博愛病院、大阪市立市民病院産婦人科勤務、昭和三年四月長崎醫大副手囑託、産婦人科勤務、同六年六月學位を得、爾來現住地にて開業今日に至る。專門は産婦人科にして勝矢信司教授、阿部俊男教授に師事して造詣する所あり。
△主論文は「妊娠時ニ於ケル網狀織内被細胞系統ト免疫體産生トノ關係」にして、參考論文は、(1)妊娠時ニ於ケル網

狀織內被細胞系統機能ノ研究特ニ免疫體產生ト血液ノ理化學的性狀ニ就テ、第一編、網狀織內被細胞系統機能ト血液ノ理化學的性狀トノ關係、第二編、網狀織內被細胞系統ノ解毒作用ニ關スル學驗的研究、(2)膠樣物質前注射ノ膠樣物質死ニ及ボス影響、(3)鹽化「アドレナリン」及硫酸「アトロピン」に對スル網狀織內被細胞系統ノ解毒作用ニ關スル實驗的研究、(4)亞砒酸「ナトリウム」及鹽酸「モルフイン」ニ對スル網狀織內被細胞系統ノ解毒作用ニ關スル實驗的研究、(5)卵巢癌腫剔出後接種轉移形成ニ就テ、(6)急性羊水過多症ニ就テ、(7)羊水缺乏症ヲ伴ヘル畸形兒ノ一例ニ就テ、(8)子宮外姙娠ト鑑別困難ナル卵巢囊腫蓮捻轉倒附子宮外姙娠手術時ニ於ケル處置ニ就テ等なり。

△氏は廣島縣比婆郡庄原町の人、明治三十五年生る。學究的少壯の紳士にして、年齒未だ三十有四歳、其の今日ある篤學は氏の診療仁術に一段の光彩を放ちて見ゆ、今は分別盛にして手腕漸く壯熟の域に入り、拮据勵精、打診の好評と相俟つて頗る人氣を博し、多大の信賴と尊敬とを受く。忙中閑を得れば其の趣味とする尺八を樂しみ、業餘克く讀書して精研と幷せて切磋自ら品性の修養に勉む、蓋し其の今日の聲望を博するも亦其の人格の反映なるを見逃すべからず。親戚中には藤田、品川の兩醫博あり。

◇

小島讓　△東京慈惠會醫科大學教授小島讓博士は、明治二十三年生にして、大正四年東京慈惠會醫學專門學校卒業後、母校附屬醫院に勤務すること二ケ年、後一年志願兵として入隊陸軍三等軍醫に任ぜらる、七年芝區田村町樋口產婦人科醫院勤務、後慈惠醫大講師となり續いて助教授、教授に昇進し今日に至る。產婦人科を擔任、併せて慈惠病院及東京病院產婦人科部長たり。斯間大正十五年獨、瑞、墺に留學、昭和三年歸朝す、昭和四年五月醫學博士の學位を授與せらる。

△學位主論文は「脂肪ヨリ糖ガ生成セラル、ヤ否ヤノ疑義ニツイテ」なり、其他論著夥多あり。寫眞と讀書に趣味有りと聞く。東京市赤坂區靑山南町三ノ三六に住す。

◇

竹森啓祐　△大阪市東區東雲町三丁目角に鐵筋三階建の竹森產婦人科病院、及び附屬竹森產婆學校あり、院長及び校長竹森啓祐博士の獨立經營にて、開業古く、既に二十年餘に垂んとする歷史を有し、病室十五、產院三十床其他內部諸般の設備全く成り、診療と幷せて產婆養成の爲め多年努力貢獻する所あり。博士は日本醫大の前身日本醫學校出身の篤學者にして、產婦人科學を以て立ち、細菌及び血淸學の造詣深く、多年研鑽の結果、東京帝大より學位を獲得せる名醫博たるに耻ぢず、氏が開業の傍ら終に克く興學の初志を貫徹して、今日の位地と聲望とを贏ち得たるもの、立志傳的成功の篤學者として推奬すべきに値す。

△更に學歷より氏が年歷を概括すれば、明治四十三年三月日本醫學校卒業、大正二年四月より四年七月迄大阪石神研究所石神亨氏に就て細菌學研究、同四年七月より六年六月迄大阪緒方婦人科病院長緒方正淸博士に就き產婦人科學專攻、大正六年六月現住所に於て、病院及び產婆學校を經營主宰し現在に至る、斯間、大正十二年一月より昭和四年八月迄東京帝大醫學部血淸化學教室、主任教授三田定則博士に就き血淸化學の研究指導を受け、同六年七月學位を授與せらる。

△學位主論文は『子宮及び腟粘膜ノ抗原透過性「慣レ」ニ就テ』にして、參考論文は「分娩發來ノ原因ニ關スル血淸化學的研究」外數篇あり。著書として「竹森助產學」（上、下）あり。分娩生來の原因は氏の最も興味を有せる研究問題にして、多年產婆學校長として此の間に窮せしため、此の大問題を自ら選びて斯界の泰斗東大三田教授の門下に入りて其の指導を受けたるものなり。從つて前記二論文は博士會心の著作にして氏の最も得意とせるものと見るべく、本論文に對する學問的批判は既に學界に定評あれば玆に贅言せず。

△竹森産婆學校は、創立以來既に二千名以上の産婆合格者を出し、全國的に各地に卒業生の活動を見るに至れり。本校は指定學校にあらざるも、關西に於ける此の種の産婆學校としては最も優秀の檢定合格率を示し居る事は、博士の面目を物語るものとして學校の誇とする所なり。更に本校の特色とする所は、毎日缺かさず校長自ら學説及び實地の講義を擔當し居る點にあり。内外幾多の此種の學校あるも、多く校長は名のみにて殆ど自ら教授せず、若し擔當しても時々教壇に立つ位のものが積の山なり。此の點は東京に於ける佐久間博士の東京助産女學校に比すべき特長ならん、佐久間博士は矢張また三田教授の門下生として知られ、竹森博士の先輩なり。

△感想の二三片を寄せて曰く、(1)現代の學界は餘りに妥協性の多きを取らず、學的鬪爭は是れ學者の本領にして學界の進歩である。圭なきツルツルテンの學者多きを悲む。祖述的學問は、學問研究の結果にあらず、宜しく獨創と主張を把持するこそ學問最後の目的である。須く學徒は眞理を熱愛するものたれ。(2)醫師の經濟生活は、剋々不如意に陷つてゐる是れ事實である。其の理由は醫療技能の外に自己の使命本分の天地が擴大してゐることを知らないからだ、即ち必ず多種の投藥をしなければならない樣に、今日の醫師を誤らしめたのは、社會にも罪があるが醫師は之に依つて自ら生命線を異常あらしめてゐる譯だ、投藥中心の醫師生活からエマンシツポされて、豫防醫學の方にも重點を掴まなくてはならない、言ひ換へれば病を醫すことの外に、其れを喰ひ止めることに醫師の作用が强く及ばなければならぬ、斯くして醫業の消極的現在より積極的將來の新天地を占據しないと醫師の生活は益々社會的に影の薄いものとなる、此ことを悟り得ない醫師及び醫師界は啻に自己の無智を表白してゐるばかりでなく、其の禍眞に國家に深剋なる穴をあけてゐるものである。(3)余は妊産褥婦を診療し、又産婆を教育しつゝ此の豫防醫學の普及實施を爲しつゝあるものである、以上。

△氏は福岡縣遠賀縣遠賀村若松の人、竹森惣次郎の三男にして、明治二十年生る、壯齡當に不惑有九、溫厚なる學究的紳士、臨床家として稀に見る活動家也。醫政に興味を有し多大の抱負を持し識見に富む、又書見を唯一の趣味として讀書精研大に修養に勉む、業餘の道樂としては田園趣味に親しむの餘裕あり。英氣潑剌として前途洋々たるの秋、切に自重加餐を祈ると共に、醫師界淨化の爲め益々努力奮盡あらんことを。

◇

保坂孝雄　産科婦人科保坂醫院は、東京市京橋區一丁目十一番地にあり、院長保坂孝雄博士の經營なり。博士は明治三十二年生、大正八年慈惠醫專の出身にして、直ちに外務省囑託としてハルビン總領事附を命ぜらる、八年十一月恩賜財團濟生會病院産婦人科勤務を命ぜられ、十二年一月産婦人科研究の爲歐洲留學、瑞西ベルン大學産婦人科教室ギユギスベルグ教授、獨逸ライプチヒ大學生化學教室トーマス教授指導の下に研究、十三年二月歸朝、同年七月東京一般病院産婦人科部長、十四年慈惠醫大講師並に附屬東京病院産婦人科部長、昭和五年四月學位受領、同年十月慈大辭職、前記に開業今日に及べり。

△學位主論文「被刺戟神經ノ膨脹染色及ビ消滅時間ノ變化ニ就テ」。東京市の人、映畫、スポーツ、讀書に趣味を有す。

◇

山田尚允　△東京市赤坂區田町六ノ六産婦人科山田病院長山田尚允博士は、大正七年千葉醫專の出身にして、卒業後千葉病院、駿東病院(沼津市)に勤務後、伊豆松崎町に開業せしが、大正十四年慈惠醫大研究科に入り病理學教室にて研究、同五年學位受領、六年十一月山田病院經營今日に至れり。尚讀賣新聞社診療所長兼産婦人科部長を兼ぬ。

△學位主論文「種々疾患ニ於ケル睾丸ノ病理組織學的研究」。靜岡縣の人、明治二十八年生にして當年不惑に入る一歳、學究的溫厚の紳士たり。散歩、讀書を趣味とす。

◇

柳　榮　△岡山縣兒島郡味野町に在る柳產婦人科病院は、柳榮博士の經營する所にして、手術に關する一切の器械材料の完備せる點に於て他の追隨を許さず、手腕、聲望兩々相俟つて好評の裡に鄕人より多大の信賴と尊敬を受け、旣にして牢乎たる地盤を獲得して當地方を風靡するの概あり。博士は京城醫專出身の異才にして、產婦人科を以て立ち衞生學の造詣亦深し、學位は岡山醫大より受領せる篤學の名醫博として其の名を恣にす。博士曰く「健康保險診療點數採點に關し當事者の猛反省を求め總てに於て公明正大なるを願ふ事切なり」云々。亦以て博士の抱負の一端をも窺知せらる。蓋しまた一服の淸凉劑として當事者の反省を促すや切なるものあり。

△更に顧みて博士の學歷及び閱歷を公開すれば、博士は大正十三年京城醫專卒業後、直ちに岡山縣倉敷市倉敷中央病院婦人科に勤務の傍ら岡山醫科大學衞生學教室に於て、緒方教授指導のもとに其最も得意とする血淸學の研究に沒頭し、遂に其蘊奧を極め、昭和六年七月岡山醫大より學位を得、同八年三月前記の土地に開業今日に至る。

△學位主論文は「鷄免疫血淸ニ關スル血淸學的研究特ニ被働性過敏症並ニ補體結合反應ニ就テ」(歐文)にして、外參考論文七編あり。

△博士は福岡縣三井郡太刀洗村の人、柳牛の男にして明治三十四年生れなれば、當年漸く三十有五歲也。少壯にして氣銳進取の氣象に富み多量の分別を有す、その今日ある篤學は推奬に値し頂門の一針として可也。勵精家にして精力主義をモットーとし、平生其の診療に臨むや熱心にして自信を以てし、終始誠意と親切とを盡す、臨床家として其の眞摯なる態度は尊重すべき也。趣味としては野球を好む。近時博士の人格に對する世論の紛々たるの秋、世論を正しく導く上に博士の如きは歡迎すべき也。

◇

藤井明人　△東京市の中樞日本橋蠣殼町二ノ六產婦人科甲賀病院に副院長として、多年診療に從事せる藤井明人博士あり。博士は九大醫學部出身（大正十二年）にして、卒業後濱町病院、日赤產院、木下病院等に勤務の後、昭和二年九大大學院に入學、六年二月學位受領、同年四月產婦人科醫長として赴任今日に及べり。

△學位主論文『雌性「ホルモン」ニ關スル實驗的研究』。三重縣の人、明治三十一年生にして當年未だ三十有八歲、學究的少壯の紳士にして、好箇の臨床家たり。東京市日本橋區北新堀町二〇に住む。

◇

加藤秀雄　△函館市立函館病院產婦人科長加藤秀雄博士は、東京帝大醫學部大正十三年の出身にして、直ちに同大學部產婦人科教室に入りて研究、ついで黴菌學教室に入り竹內教授の下にて研究を續け、昭和三年日本大學醫學科助教授兼產婦人科部長として就任、昭和七年八月東京帝大にて學位受領、同八年現職に轉任せり。

△學位主論文「肺炎雙球菌ノ變性ニ就テ」。東京府の人、明治三十年生。函館市本町九〇に住む。

◇

關口三郎　△群雄割據の帝都の中樞、京橋區木挽町四丁目に著名なる池田病院あり、池田淸博士の經營にして、院長と親戚の關係上關口三郎博士は外科及び產婦人科を擔任して院長を輔佐する所あり。博士は東京帝大出の新進にして、外科界の巨擘靑山徹藏教授に師事して多年造詣する所あり、產婦人科學は笠森周護教授の指導を受け、また病理學及び內科學は長與又郎博士及び三田村篤志郎博士に就きて研究せる結果、母校より學位を得、所謂東大派の名醫博として其の手腕を認めらる。今や圓熟せる診療手術の好評は、院長池田博士の聲望と相俟つて、今日の繁盛を見るもの、博士の負ふ所蓋し亦尠しとせず。

△博士は東京府立四中、一高を經て、大正十二年東京帝大醫學部を卒へ、爾後神田區泉橋病院及び傳染病研究所にて研究、昭和四年以來頭書の池田病院にて診療に從事し今日に至る、斯間六年七月母校より學位を受領せり。

△學位論文は「白鼠實驗的佝僂病ニ於ケル內分泌腺ノ變化ニ就テ」にして、參考論文なし。
△博士は福井縣敦賀町、關口平一郎の三男にして、明治二十九年生る、當年四十歳也。溫厚なる少壯紳士にして、學究的臨床家としての特徵を備え、終始親切と同情とを以てす、また人に接するに謙讓にして尊大振なく、應待眞摯にして快活なり。猶洋々たる前途は頗る春秋に富む、幸に健康と共に益々努力奮鬪を祈る。澁谷町幡ケ谷本町二ノ三三一に住す。

◇

下平尙　△東京醫學專門學校教授產婦人科擔任下平尙博士は、東京市の出身、明治十五年生にして、明治四十二年東京帝大醫科大學を卒業す、四十三年駿河臺濱田病院に勤務、次いで順天堂病院に轉じ產婦人科部長に就任す、大正五年東京醫專教授となり今日に至る、其間、昭和六年六月東京帝大にて學位受領。
△學位主論文「非姙娠時及產褥時ニ於ケル糖代謝ノ研究」。運動、讀書に趣味を有す。東京市四谷區大番町四〇に住む。

◇

直江六三郎　△北海道帝國大學助教授として產婦人科學教室に在勤中の直江六三郎博士は、東大系の產婦人科學及び外科學者にして、北海道帝大より學位を獲得、斯科界近來の少壯醫博として最も嘱目せらるゝ新人也。斯間、東大竹內教授及び北大中村教授に就て細菌學を專攻し、外科學は青山徹藏教授、產婦人科學は大野及び笠森兩教授に就て研究せり。今や多年の蘊蓄を披瀝して教壇に起ち、學生指導の傍ら自己專門の領域に就ての研究に沒頭しつゝあり、猶潑剌たる前途は頗る春秋に富む。
△氏は一高を經て、東大醫學部に進み、大正十年七月卒業後、直ちに細菌學教室に入り細菌學一般の指導を受け、泉橋慈善病院にて外科學、產婦人科學を修め、同十三年六月釧路市立釧路病院外科部長として赴任す、昭和二年之を辭して北海道帝大醫學部細菌學教室に入る、同四年產婦人科教室に轉じ、同六年八月學位を授與せられ、助教授として今日に至る。
△學位主論文は「赤血球注射ニヨル家兎急性死ニ際シテ起ル各徵候ニ就テ」にして、參考論文は「凝集血球ノ毛細管通過關係」其他五篇あり。要するに氏の論文全部は輸血に關係あるものなり。
△氏は茨城縣筑波郡旭村大字沼崎の人、直江德三郎の長男にして、明治二十八年生る、年齒漸く不惑に入る一歲、學者肌の少壯紳士也。學生時代より俗稱「萬能運動家」で通つて來た氏は未だスポーツに多大の趣味を有し、寸暇を利用しては學生と共に野球、テニスに興じ、時には魚釣に出かけて太公望と氣取り、冬はスキーに熱を入れて、終始心身の錬磨に意を介すると聞く。札幌市北十四條西三丁目に住む。

◇

川口浩　△平塚市新宿打越四一三に新興せる產婦人科川口醫院あり、院長川口浩博士の創設經營に成り、新裝せる內部の設備を整え、博士自ら診療に勵精、孜々營々として獨自の地盤を開拓しつゝあり、開業日尙淺きも、氏が奮鬪的努力と、博士獨特の診療手術の好評とは兩々相俟つて益々遠近の人望を博し、近時著るしく發展の緒に着き日增盛況を極む。氏は九大系の產婦人科學者にして、千葉醫大より學位を獲得せる少壯醫博として益々其の名聲を馳せ、斯科界近來の新進大家たる一人物也。殊に氏は大正十一年以來引續き東京神田區駿河臺濱田病院に在勤中、多年實地の經驗に富み、臨床的獨特の手腕を有す、好箇の臨床家として向後の活躍は最も嘱望せらる。
△博士は岩手縣立盛岡中學校、一高を經て、大正十一年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに濱田病院に勤務、昭和九年二

月辭職、現住地にて開業今日に至る、斯間、同六年九月千葉醫大にて學位を授與せらる。學位主論文は「姙娠ト血壓反應トノ關係ニ就テ」にして、參考論文は、(1)家兎血壓ノ保存的測定ニ就テ、(2)產婦人科領域ニ於ケル赤血球沈降速度ノ應用、(3)產科領域ニ於ケル血清「ビルリビン」ニ就テ等なり。

△氏は岩手縣の出身、明治三十年生る、年齒漸く三十有九歲、學究的少壯の紳士也。產婦人科醫として立つて以來、臨床的方面の實地研修に沒頭すること多年、今や壯熟せる手腕と相俟つて氏が仁術に一段の光彩を放てり、而かも年華未だ壯少、意氣益々旺にして、潑剌たる前途は遠久の春秋に富む、向後努力を要するや一層切なるを思ふの秋、幸ひ健康にして益々奮鬪あらん事を望む。

◇

森田源平　△京都市東洞院五條上ル森田醫院は產婦人科を專門とす、院長は森田源平博士也。博士は埼玉縣立川越中學を經て、大正十年熊本醫專卒業後、京都帝大產婦人科岡林教授の許にて專ら臨床の研究に從事す。又嘗て歐洲に留學し「ドクトル、メヂチーネ」の學位を得、更に瑞西ベルン大學藥物學ビュルギー教授、並に獨逸フランクフルト大學生理學ベーテ教授に就き研究を遂げ、尙歐米各國を視察し歸朝す、京都帝大解剖學舟岡教授に師事し研究の結果、昭和六年九月京都帝大より學位を得、後現地に於て產婦人科專門にて開業に從事す。

△學位主論文は『種々ナル燐酸「エステル、カルシウム」ニ依ル石灰沈着ノ實驗的研究』にして、參考論文は、(1)六炭糖燐酸「カルシウム」ノ結核性家兎ノ血液像ニ及ボス影響（獨文）、(2)家兎ニ於ケル結核病竈ノ石灰沈着促進ヲ目的トスル六炭糖燐酸「カルシウム」ノ應用（獨文）、(3)燐酸「エステル」鹽ニヨル結核病竈ノ石灰沈着促進ノ續報、（獨文）、(4)橫隔膜神經ノ橫隔膜枝（獨文）、(5)燐酸「エステル」鹽ニヨル結核病竈ノ石灰沈着促進作川ノ機械學、（獨文）、(6)滑平筋ノ溫熱ニヨル死後强直及ビ溫熱强直ノ實驗（獨文）、(7)溫血動物ノ滑平筋ニ於ケル攣縮性物質ノ作用（獨文）、(8)臭素鹽ニヨル「ウレタン」睡眠ノ增加作用（獨文）等なり。他の論文中最も得意とせるものとしては『結核注射藥「ヤトコニン」』の一篇あり。

△氏は埼玉縣入間郡堀兼村大字堀兼の人、明治二十二年生る。學究生活より診療界に躍進して以來、開業拮据數年、創設經營の難關を突破して年次獨自の地盤を固め、今や好評嘖々の裡に悠々たる位地を占む。猶向後の努力奮鬪と相俟つて前途の成功を期待せらる。

◇

馬場武夫　△日赤香川支部病院婦人科に馬場武夫博士あり。岡山醫大系醫專部の出身にして、產婦人科を以て立ち、母校の恩師生沼曹六博士の親しき薫陶指導を受け、研究の結果母校より學位を得たる新進の名醫博也。臨床的經驗に富み圓熟せる手腕を有す、面かも未だ少壯にして精研に餘念なき前途は、綽々として猶餘裕あるを待望して止まず、將來有爲の新人物と爲す。

△博士は香川縣立丸龜中學校を經て、大正十一年岡山醫大附屬醫學專門部を卒へ、直ちに日赤香川支部病院に勤務、其間一年志願兵として步兵第四十三聯隊に入營、滿期退營後も現職に復職して今日に至る。叙正八位、後備役陸軍三等軍醫たり。斯間、昭和六年九月岡山醫大にて學位を授與せらる。

△學位主論文は「天笠鼠ノ精囊攝護腺並ニ輸精管ノ神經分布知見補遺」にして、參考論文は、(1)子宮筋肉ニ及ボス「ヒスタミン」ノ作用並之ヨリ見タル子宮ノ神經支配ニ關スル考察、(2)紫外線ノ「ヒスタミン」に及ボス影響、(3)所謂Histaminase ト二三ノ「ヒスタミン」作用ニ就テ、(4)「エニシダ」有効成分ノ生理的作用ニ就テ、ソノ一、ソノ二(5)「イソゴカイ」ノ生殖細胞ノ發生ニ就テ他二篇あり。

△感想に曰く「衣食足つて禮節を識るとは至言であるが、醫は貧にして健なるを尊しとすと考へる、餘りに衣食を足

らさんとしてあせるよりも、己れの天職を全うする爲めには貧にして健に、よく東奔西走して眞に患者の友となる醫師こそ望ましい。人間の欲望には限りがない。醫たる使命を認識して力の限り働いてこそ醫は仁術也の眞髓に觸れると思ふ。然く私も努めたいと念じてゐる」云々。

△博士は香川縣綾歌郡岡田村大字岡田東馬場貞爾の三男、明治三十一年生る、當年三十有八歳の少壯紳士也。勵精恪勤の人にして臨床に當るや誠意親切を以てす。其の性格より打診すれば生一本の氣性にて餘り遠慮がなさすぎる、從つてある人からはよく認められ、一面ある人からは偏屈と誤解さるゝ嫌なしとせず。讀書家にして書見を業餘の趣味とす。高松市八番町二〇に私宅あり。

◇

井出ひろ

△北米合衆國シヤトル市メーン街に割據して獨立の地盤を築き、外科及び産科婦人科を以て群を抜き、好評嘖々たる井出醫院あり。夫君井出欽一博士及び夫人井出ひろ博士の共營にして、開業拮据拾數年、内部の設備整ひ、夫君は外科を擔當し、ひろ博士は得意の産科婦人科を擔當す。博士獨特の手腕は診療手術の好評と相俟つて益々内外人の人氣を吸收し、繁榮蔵と共に拔くべからざる盛況を呈しつゝあり、吾曹は双手を擧げて其の成功を祝さゞるを得ず。殊に女子にして醫學博士の學位を獲得せる一異彩たると同時に、夫君欽一博士と克く協力一致して、日本人固有の特性を益々發揮しつゝあるは、單に診療界のみと云はず、一面又日米親善上稗益する所甚大なるものあるは大に民意を强からしむるに足り、博士夫婦の勞を多謝すべき也。

△顧みて其の今日ある博士の略歷を打診するに、博士は大正七年東京女子醫學專門學校卒業後、同十一年迄母校に於て基礎醫學及び産婦人科を專攻す、同年十一月夫婦にて渡米、シヤトル市のワシントン大學に入學、同十三年ドクトルを得、夫君と開業し、共にペンシルバニヤ大學に入學し附屬ウィスター研究所にて研究を續け、昭和五年八月和蘭に開催の萬國解剖學會に列席、論文を發表して十一月歸朝す、翌六年十月東北帝大より學位を得、再び渡米今日に至る。

△主論文「末梢神經ノ發育ニ關スル黑白人種ノ比較、男女比較研究」にして、參考論文なし。

△三重縣一志郡川口村眞柄和三郎の三女にして、明治二十九年生れ、大正九年井出欽一博士に嫁す。夫婦にて早く米國に渡り、相和して倶に研學切磋甚だ勉むる所あり、殊に博士は女子にして榮譽ある醫學博士の學位を得たる第五位にして、女醫界の爲め氣を吐けるは表彰に値し、又夫君と相俟つて義兄竹内甲平博士及び同夫人竹内茂代博士と幷せて一家より二組の夫婦博士を出せるは日本での最初にして學界の美談として我博士界を扮飾するに足る。博士の年齒未だ三十有九、元氣益々旺盛にして日々自ら臨床に勵み、一意專念、唯だ天職の爲め仁術の最善を盡し、以て輝しき未來の希望に滿つ所甚だ多とすべき也。研究は博士の最も趣味とする所にして、平生刀圭多忙の餘暇、今猶孜々として精研に餘念なく、洋々たる前途は更に將來の大成を語るに餘裕綽々たるものあり、幸に健康と共に、診療界の爲め將た日米醫學の發展親善の爲め、益々發奮盡力あらん事を望むや切也。No 19 Main Street, Seattle, Wash., U. S. A. に住む。

◇

寺尾敏行

△熊本縣飽託郡川上村字小糸山に在る寺尾産婦人科醫院は、院長寺尾敏行博士經營の診療所にして、開業拮据、創設以來努力奮鬪の効果空しからず、博士獨特の診療手術の好評と相俟つて、年次堅實なる地盤を獲得して今や其の近鄕を風靡するの盛況を呈す。氏は大正七年東京醫專出身の産婦人科學者にして、長崎醫大教授池上五郎、淺田一、勝矢信司等の諸博士に就て研究せる結果、學位主論文「窒息痙攣ニ關スル研究補遺」及び十三篇の參考論文を完成して、昭和六年十月長崎醫大より學位を獲得せり。斯科近來の少壯醫博として其の手腕を認められ、漸次獨特の領域に向つて著しき發展振りを示しつゝあり。

△氏は熊本縣飽託郡川上村小糸山の人、寺尾成章の次男にして、明治二十四年生る。壯齡今や不惑に入る五歳にして圓熟せる手腕と相俟つて益々元氣なれば、今は最も得意時代にして成功の位地に在り。生來謙遜家にして自己の識學と成功とを衒はず、自己の存在さへも紹介せらるゝを好まざる風あり、以て其の嚴肅なる人爲を窺はる。但だ忙中閑を獲れば時に太公望を極込むは唯一の道樂なりと聽く。

◇

古屋　清

△山梨縣立病院長兼産婦人科長たる古屋清博士は、多年地方診療界の爲に努力貢獻する所あり、其の嘖々たる名聲を聞くや既に久矣。學系は東大出身にして、産婦人科界の泰斗、恩師木下及び磐瀨兩教授に就きて斯學の蘊奥を究め、嘗て瑞西に留學するやベルン大學生理學教室にてアツシャー教授に就て內分泌學を研究し、歸朝後母校より學位を獲得せる斯科界の名醫博也。

△更に博士の略歴を一瞥するに、七高造士館を經て、大正元年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに同學病理學教室副手となり山極教授に師事し、同二年四月附屬醫院産婦人科教室勤務となり木下、磐瀨兩教授の指導を受く、同四年十月任同大學助手、同五年五月より傍ら東京女子醫專に於て産科の講義を擔當す、該教室に居ること約四ヶ年にして同五年九月助手を免ぜられ、山梨縣立病院産婦人科部長として赴任す、同十二年四月山梨縣より歐米各國へ留學を命ぜられ、主として瑞西國ベルン大學にて學び、歐米各地の重なる大學を見學し、同十三年六月歸朝復職す、同十四年六月學位受領、同年八月副院長兼任、昭和四年十月同院長兼部長を命ぜられ今日に至る。

△主論文は「內分泌腺ノ發育機能ニ及ボス影響ニ就テノ實驗的研究並ニ體質論補遺」にして獨逸文の原著なり。參考論文は、(1)産科婦人科ニ於ケル溫度的研究、(2)姙婦ノ形態的研究、(3)余ノ姙娠曆速算法式の三篇なり、著書には「婦人科ノ理學的療法」、「古屋助産婦學」其他論著夥多あり。

△博士は山梨縣東八代郡一宮村酒造業古屋端清二男、明治十八年生る。文學趣味豐かにして青水を號とす、寫眞にも興味を有し、時に暇を得れば登山、遠足などを試み悠々として清遊す。博士の年齒今や知命に入る一歳、元氣旺盛にして氏が仁術に一段の貫祿を備ふ。甲府市百石町三三〇に住む。

◇

岩島覺三

△大連市磐城町三九に獨立して婦人科岩島病院を設立以來、自ら院長として孜々營々一般患者の診療に從事しつゝある岩島覺三博士は、愛知醫專出身の産婦人科專門の大家にして、前の財團法人大連聖愛醫院長として既に其の玲瓏たる手腕を認められ、加ふるに其の博愛を主義とせる篤き德望と相俟つて、民衆より多大の信賴と尊敬とをその一身に集め、益々向上發展の進境に向ひつゝあるは頗る刮目に値す。

△博士は明治四十四年愛知醫專卒業、大正十年より十四年迄滿鐵醫院（撫順、遼陽、吉林）に勤め、十四年四月より大連市財團法人大連聖愛醫院長として就任せり、斯間現職の儘昭和二年四月より四年六月迄東京帝大醫學部解剖學研究室にて井上教授指導の下に研究、六年十一月東京帝大より學位受領、七年末前記聖愛醫院長を辭し頭書の現住所地に於て開業今日に至る。

△學位論文は『日本人ノ胎兒ノ上肢皮膚「メラニン」色素ニ就テ研究』にして、參考論文なし。

△博士は岐阜縣土岐郡瑞浪町山田の人、亡加藤佐次右衞門の二男、明治二十一年生る。熱心なる基督教信者にして、常に其の臨床にのぞむや、醫師は物質上に走らず昔の醫師の氣風を尊重して自ら之が勵行に力め、又病氣の大部分が現代にては必ずしも技術によりてのみ治癒するものに非ず、患者の不安を除き滿足を與ふる事が第一にして親切卽ち愛の精神を忘れてはならぬとの信念と態度とを以て患者に接することを主義とせる人なれば、德望の由つて集まる所當然なるを想はしむ。性格もまた自ら肅正にして溫厚、人を愛し同情に富む、極めて慈愛の念に篤く、人類は申すに

及ばず、動物までが不遇の際過度に氣毒でたまらぬほど思ひやり深き博愛の人也。博士の如きは稀に見る德望家にして學德兼備せる人格者として、著者は更めて敬意を表する者也。

◇

新谷二郎　△新進の產科婦人科教授として京城醫學專門學校に新谷二郎博士あり。京城醫專出身の篤學者にして、京大教授戸田正三博士に就き衞生學を、同岡林秀一博士に就きて產科婦人科學を研究し、京都帝大より學位を獲得せる名醫博としての新人也。學位論文は本邦人の體表面積に就て研究せるものにして、其の學問的價値は既に學界に定評あれば贅せず、他に發表せる論著も夥多あり。今や其の蘊蓄を披瀝して母校の教壇に起ち、諄々として說くところ、博士の得意や想ふべき也。

△博士は京城中學校を經て、大正十二年京城醫專を卒へ、卒業後倉敷市倉敷中央病院醫員に就任、昭和三年九月同病院を辭し、京都帝大衞生學教室に專修科生として入學、研究後同六年十二月同大學產科婦人科學教室に入り研究、其間同六年十一月學位受領、同七年十一月任京城醫專教授、以て今日に至る。

△學位主論文は「本邦人ノ體表面積ニ就テ」にして、參考論文は、(1)白人ト邦人トノ體表面積ヨリ觀タル體型ノ比較(2)本邦衣服ノ重量ニ就テ、(3)人類精子ノ實驗的研究、二編、(4)手術中ニ於ケル手術者ノ體重減少ニ就テ、(5)紡績女工手月經ノ統計的觀察、(6)血液型ノ統計的觀察、(7)輸血ニ依リ九死ヨリ一生ヲ救ヒ得タル惡性腫瘍ノ一治驗例なり。他に自著論文中、(1)本邦人ノ體表面積ニ就テ、(2)本邦衣服ノ保溫效果ニ就テ、等々は博士會心の作にして最も得意のものなるべし。

△現代學界に對する博士の感想を聽くに曰く「學會に於て發表される演題が多いから宣敷會期を延長すべきだ。最近の學會を觀るに演題が多いのに多くは一日で濟まさうとするから勢ひ演說時間は極度に制限され聽く方でも高速度で原稿を朗讀してもらつたのではサツパリ分らない。之が學會自體をして甚だ退屈な興味なきものにしてしまうのではなからうか。若し種々なる理由に依つて會期の延長が因難ならば宜敷演題を選拔すべきだ。一教室又は一研究室から二題とか三題とか最も興味あり最も價値ありと認められたるものを選拔して發表せしむべきだ。或は研究室に於ける研究者何人に付一人といふ方法も考へられる。而して發表には十五分とか二十分とか可成多くの時間を與へて內容を十分に聽衆に徹底せしむべきだ。更に總會の如きは會期が數日に亘るから演說は早朝から始めて午前中に行ひ、午後は見學其他に用ひたら出席者も多からうし甚だ能率の擧ることと思ふ。最後の選に漏れた研究發表はどうしたら良いかと云へば各地方に地方部會なるものを設けて其處で發表せしめるといふことにしたら良いと思ふ。何れ印刷となつて發表されるのだから必ずしも醫會に顏を出すといふ程のこともなからう。之に依つて學會の所謂お祭り的氣分が幾らかでも防ぎ得るならば幸だと思ふ」云々。

△博士は岡山縣都窪郡三須村江崎、新谷慶藏の次男、明治三十一年生る。學究的學者タイプの少壯紳士にして、篤學者たり。其の今日ある學歷は博士の前半生史に盡きて餘蘊なく、今は專心醫育の爲め渾身の努力精進を續け、猶孜々として研究に沒頭しつゝあり。殊に博士の長所と見るべきは、友人を大切にすることにあり。性來謙遜にして偏に恩師先輩の助力を說き、自己の才學を誇らず、淡々として己れを虛うする奧床しき態度は、人に親しまるゝ德を有す。若し强ひて缺點を言はしむれば、稍やもすれば、動作のスローモウションに陷り易きは或は短所ともいふべきか。研究以外、多趣味の人にして洋樂、キネマ、小說、旅行等々を好む。京城府昭格洞五一に住む。

◇

鹽野正家　△日赤埼玉支部療院に產科婦人科醫長として鹽野正家博士あり。東京帝大系の產婦人科學者にして、母校の恩師柿內三郎教授及び磐瀨雄一教授の許に於て研究の結果、母校より學位を得たる少壯醫博也。

△顧みてその學歷及び閱歷を考査し見るに、大正十四年東京帝大醫學部卒業後、直ちに生化學教室に於て研究の傍ら內科外科の診療に從事す、昭和六年より東京帝大醫學部附屬醫院產婦人科に勤務して臨床の傍ら斯學の研究に從事し、同年十二月東京帝大に於て學位を授與せらる、其後東京帝大附屬醫院を辭し現職に就任す。

△學位論文は『「タウロコール」酸鹽溶液ノ表面張力ニ對スル鹽類添加ノ影響ノ本性ニ就テ』の一篇なり。

△氏の出身地は三重縣津市南堀端にして、明治三十二年鹽野彦太郎の長男に生る、當年三十有七歲也。年齒未だ少壯にして研學の念に燃ゆ。志操堅實にして功名利祿に恬澹たり、謙遜克く自抑して人に厚く、快活にして人を愛す、其の態度の寬容にして眞面目なるは、博士に對する人格の尊重を高調する今日甚だ多とす。業餘の趣味は繪畫、寫眞なり。勝本勘三郎法博及び勝本正晃法博とは近親の間柄なり。豐島區巢鴨町五ノ一一一一に住す。

◇

莊　寬　△東京市板橋區板橋町一丁目に堂々たる陣容を構へ、產科婦人科、レントゲン科を以て著聞し、入院患者と併せて日々外來患者の輻輳すること私立病院中稀に見る所にして、嘖々たる好評と共に今や動かすべからざる地盤を有するは莊寬博士也。博士は新潟醫大系醫專時代の出身にして、母校の恩師川村麟也教授指導の下に造詣する所深く、學位は慈惠醫大より獲得せる名醫博として著名也。研鑽多年の實驗と共に今や玲瓏たる手腕を有し、天資溫厚篤實なる性格と相俟つて今日の名聲と位地とを贏ち得たるもの、博士界近來の成功者として推奬すべき也。

△博士は埼玉縣北足立郡戸田村の人、明治二十二年生にして、大正五年新潟醫專を卒へ、直ちに順天堂醫院產婦人科に勤め、昭和二年新潟醫大病理學教室にて研究、同六年十二月慈惠醫大より學位を授與せらる、先是大正十年以來現住地にて開業、產婦人科、レントゲン科の一般診療に從事し今日に至る。斯間多年の臨床的實地の經驗と共に學術的研究の玉成せるもの博士の今日あらしめたるを思へば、博士に就ての認識を補足するに難からず。

△學位主論文は『「ツオンデツク」「アツシュハイム」兩氏姙娠診斷法ニ關スル研究』にして、外に參考論文として(1)ツオンデツク、アツシュハイム氏姙、娠診斷法ノ實際的應用ニ就テ、(2)所謂茸狀子宮內膜炎ニ就テ、(3)子宮體部ニ發生シタル黃色肉腫ノ一例、(4)直腸壁ヨリ發生セル巨大ナル硬性纖維腫ノ一例、(5)腦下垂體前葉ホルモントツオンデツク、アツシュハイム氏反應の五篇あり。

△博士の年齒不惑に入る漸く七、手腕圓熟、英氣潑剌として最も得意の時代に入る、其の臨床日々甚だ多忙にして席暖まる暇なく、一意專心仁術を以て天職と爲し自ら樂しみ、孜々として倦まざる氣慨と其不斷の努力とは敬服に値す。學位尊重の美風漸く地に落ち醫博の人格に對する世論紛々たるの秋、世論を正しく導く上に博士の如きあるは大に人意を强からしむ。

◇

水　美登利　△福島縣郡山市壽泉堂病院產科婦人科部長としての水美登利博士の名聲は其地方に喧傳し、嘖々たる評判を聞くや既に年あり、研鑽多年の經驗に富み、產婦人科の新手腕家として囑目せらるゝ新人物なり。博士は金澤醫大派の名醫博たる一人物にして、母校の恩師久慈直太郎博士及び古畑種基博士に親炙して造詣する所深く、學位論文は「血液型ヨリ觀察セル母及胎兒、初生兒ニ就テ」が主論文にして、參考論文として「婦人生殖器結核症ニ就テ」の外十三篇あり。

△博士は大正十四年金澤醫大附屬醫學專門部を卒へ、金澤醫大副手、助手、講師を歷て、郡山市壽泉堂病院產婦人科部長に就任今日に至る、其間昭和七年一月母校より學位を受領せり。博士の出身地は島根縣簸川郡國富村美談にして明治三十六年生る、年齒未だ三十有三歲の少壯也。新銳の意氣益々壯にして今猶研究を捨てず、其の臨床に在るや、熱心にして親切と同情とを以てす、其の眞面目にして誠實なる態度は益々人望を博し、臨床家としての人格を尊ばる。

忙中閑を得れば讀書精研倦むことなく、以て業餘の趣味とし又旅行を好む風あり。春秋綽々として遼遠なれば、洋々たる前途の大成は更に大に期待せらる。幸に健康と共に、治療界將來の爲め益々活躍あらん事を祈るや切也。福島縣郡山市細沼町三に住す。

◇

村上正雄　△愛知縣碧海郡高岡村大字堤字新馬場に於て、其の專門とする産科婦人科を標榜して開業せる村上正雄博士は、金澤醫大系に屬し學位は東北帝大より獲得せる名醫博として其の存在を認められ、名聲既に江湖に著聞す。會々（昭和八年正月）感想を寄せて曰く「開業醫となつて半歲、象牙の塔を見たる社會と初めて知る實社會相との餘りにも懸隔甚だしきに一驚すると共に、世に所謂門前市をなす名醫多しと雖も眞に良醫と申すべき人士の意外に尠きの感亦深し」云々。良醫ならんとするも亦容易ならんや、折角の熱誠、努力を盡して仁術の本分を盡すに一路邁進あらん事を望むや切也。

△博士は大正十一年金澤醫專卒業後、金澤醫科大學並に東北帝國大國醫學部にて産科婦人科學專攻、昭和七年二月東北帝大より學位を受領せり。其間の指導教授は久慈直太郎博士、石川哲郎博士、明城彌三吉博士等にして、主論文は「子癇ノ實驗研究」參考論文は、(1)姙娠時ニ於ケル腎臓機能ニ就テ、(2)子宮癌腫患者ニ於ケル胃機能ノ臨床的觀察、其他三篇あり。愛知縣碧海郡高岡村大字堤字新馬場の出身、明治三十二年生る、年齒未だ三十有七歲、少壯にして新鋭の意氣に燃え、元氣潑剌とし益壯也。開業日尙淺しと雖も、研究室を離れて一度び診療界に起つや「醫は仁術也」を平生のモットーとして臨床に熱心甚だ努め、患者を待つに克く誠實と親切とを盡す、其の眞摯にし熱情あり溫味ある態度は、好箇の臨床家として採るべき賢明なる道たるべし。趣味としてはスポーツ及び演藝に嗜み、又た能く讀書して精研修養に力む。

◇

田中泰作　△臺灣刀圭界に躍進して、激烈なる競爭に打勝ち早くも獨立の地盤を開拓して、今や高雄市堀江町二ノ二三産科婦人科田中病院長として活躍し、嘖々たる名聲と共に悠々たる位地を贏ち得たるは田中泰作博士也。顧みて氏の今日ある奮鬪の跡を反覆して、其の輝しき前半生史を繙けば、轉た感慨無量の感に堪えざるものあり、終始、獨立獨歩を貫行せる厚志篤學は、後進に範を示すに足る誘掖の資料たるを失はず、玆に推奬して聊か品隱を試みんとする所以也。

△氏は明治三十一年長野縣南佐久の山奥の百姓家の三男に生る、八歲の時伯母に子供なき爲、群馬縣高崎市へ養子として伯母の家に行き、高崎にて小學校を（六年）卒業し、以來十六歲まで伯母の家にて家事を手傳ひ居たりしも、向學心に燃ゆるの切なりし故、十七歲の春大正三年伯母の家を無斷家出せり、然して上京後下谷區上根岸の霜田醫院（內科、小兒科）と云ふ醫院に書生として入り、神田の正則英語學校の夜學に通ひ、日夜勉學にいそしみ、十八歲の四月（卽大正四年四月）神田區大手町の商工中學校（現赤坂中學校と改稱）の編入試驗を受けたる所四學年に入學せり、入學はせるものゝ何も解らぬ爲書は中學に、夜は研數學館に一學期通ひ、漸くにして一人前となり大正六年中學を無事卒業せり、（勿論この間伯母家よりも實家よりも金錢を受けず、前記の霜田醫院の書生をつとめ乍ら通學せり）然れども、あくまで獨立獨歩で進むつもりにて、士官學校に入學せんと志し、受驗せる處身體檢査にて不合格になりたるを以て、直ちに出身小學校（高崎市）の代用教員となり、大正六年より大正九年四月臺灣醫專に入學するまで奉職せり。次で大正十三年臺灣醫專を卒業するや、直ちに上京して小石川區原町阿部産婦人科病院に就職し、翌十四年四月慶大藥物學教室に入り研究に從事し、かたわら阿部病院につとめながら實地も研究し、昭和二年九月愈よ學位論文を完成したる後は、專ら阿部病院の副院長として勤務し、昭和四年六月臺灣總督府立高雄醫院産婦人科長として奉

職し、昭和七年七月まで滿三ケ年間つとめ大いに努力し、次で開業今日に至れり、この間殆ど獨立獨歩自ら徐々として運命を開拓せり。開業以來三年半なるも、殆ど常に病室は滿員にて外來患者も相當あり、今や堅實なる地盤を獲得して日々多忙を極め居る狀況なり。

△學位主論文は『心臓ニ對スル「ビロカルピン」ノ逆作用ニ就テ』にして、參考論文は、(1)「キニーネ」の蛙心臓抑制作用に就テ、(2)「カルシユウムイオン」ノ蛙心臓ニ對スル作用ニ就テ、(3)抱水「クロラール」ノ蛙心臓交感神經麻痺作用ニ就テ等なり。斯間主として慶大教授阿部勝馬博士に就て藥物學を、阿部産婦人科病院長阿部喜市郎博士に就て産婦人科學を研究せり。學位は昭和七年二月慶大より受領せり。乘馬とテニスを趣味す。昭和二年博士論文完成後慶大の恩師阿部教授夫妻の世話にて埼玉郡兒玉縣賀美村酒造村上眞作氏の長女千惠と結婚し、一男一女あり至つて幸福に健康に良家庭を爲す、亦以て祝福すべき也。

◇

渡邊達三郎　△宮城縣氣仙沼町公立氣仙沼病院副院長兼産婦人科醫長渡邊達三郎博士は、東大系の新進にして、恩師磐瀨雄一教授及び井上通夫教授に指導を受くる所厚く、母校より學位を得たる名醫博として其の存在を認あらる。未だ少壯にして研學の念今猶鬱勃として禁ぜざるものあり、多年錬磨玉成せる診療手術の好評は益々内外の信望を博し、今や其地方診療界に於ける斯科の新進大家と仰がれつゝあるは多幸とす。

△博士は新潟高等學校を經て、昭和二年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに附屬醫院産婦人科教室副手として勤め、翌三年十一月解剖學教室副手、四年四月現職のまゝ大學院入學、六年三月大學院卒業、引續産婦人科教室副手、七年四月東京帝大にて學位受領、同年十月氣仙沼病院赴任現在に至る。

△學位論文は「哺乳動物ノ受精及ビ之ニ關聯スル諸現象ニ關スル研究」にして、參考論文なし。此の論文中「哺乳動物ノ排卵、受精、卵ノ早期發生ノ形態學」は博士會心の作にして、其の學問的批判は既に學界に定評あり。

△博士は新潟縣西蒲原郡小池村渡邊玄洞の三男にして、明治三十六年生る、年齒末だ三十三歳、少壯氣鋭にして進取の氣象に富み、至誠恪勤の士也。臨床に當面する態度の眞摯にして、熱情あり親切なるは其の爲人を物語りて餘蘊なし。猶春秋頗る豐富にして、光る學位の前途は洋々たり。宮城縣氣仙沼町西風坂に住む。

◇

前田實　△弘前市立弘前病院婦人科部長に前田實博士あり。東北帝大系（專門部出身）の産婦人科學者にして斯科界現代の權威たる恩師明城彌三吉教授に就きて斯學の蘊奥を究め、生理學は恩師藤田敏彦教授の指導を受けて造詣する所あり。研鑽多年、學究と共に臨床の經驗を積み、今や獨特の手腕を發揮して餘す所なく、診療手術の好評と相俟つて益々内外の信望を博す。地方診療界の爲め甚だ人意を强からしむる處、適所に適材を得たりと云ふべし。

△顧みて其の今日ある學歴及び經歴を概説すれば、大正六年東北帝大醫學專門部卒業後、同附屬病院婦人科教室に入り同九年十月迄研究、其後地方病院の婦人科主任（新潟縣村松町樋口病院及び宮城縣古川町片倉病院）を勤め、同十五年四月再び東北帝大醫學部副手、同附屬醫院産婆養成所講師、婦人科勤務、昭和六年九月より毎日午後同大學生理學教室に通ひ藤田教授の指導を受け、同七年四月學位を受領す、爾來現職に在り。

△學位主論文は「輸卵管運動ノ實驗的研究」にして、第一報、第二報、より成る。參考論文は、(1)産褥性子宮内翻症ニ就テ、(2)産婦人科領域ニ於ケル「ビラミドン」反應ノ價値、(3)胎娠數ケ月ノ子宮底部自然性破裂ニ就テ、の三篇なり。輸卵管運動は從來謂はゝゝが如き蠕動に非ずして、分節運動に類するものなることを家兎生體に就き活動寫眞及び「レ」線造影術を應用して證明したるものなり。

△感想に曰く「博士は大嫌いだ、だから僕は名刺にも標札にも新聞にも自分の姓名に稱等を附け又は附けられるのを

快しとしない、今の世間が醫者は博士でなければ相手にしない樣に見えるのは非常によくないことだと思ふ」云々。以て氏の心境を察せらる。

△東京市葛飾區本田四ツ木町に本籍を有し、前田俊雄の長男にして、明治二十七年生る、當年不惑に入る一歳也。意氣益々壯にして手腕、人格共に圓熟の域に入り、今は最も得意時代にして、地方診療界の爲め誠意、誠實を以て盡瘁活躍しつゝあるは甚だ多とす。人と爲り穩健にして篤行、謙遜家にして敢て衒はず、克く己を持して人に厚ふす、功利に恬澹にして信實を主義とす、以て其の性格の一端を窺はれ、其の人格の高潔なるを知るに足る。研究以外の趣味としては寫眞、魚釣り、浪花節等を好む。弘前市品川町一〇〇に住む。

◇

田口熊雄　△東北帝大系の產婦人科學者にして新智識の一人者たる田口熊雄博士は、母校より學位を得たる少壯醫博にして、現に盛岡市盛岡病院に在りて得意の產婦人科を擔任す。氏は先是講師として母校の敎壇に起ち、專念學生の指導に盡力しつゝありしも、一度び象牙の塔を勇退し診療界に躍進するや、日尙淺くも拮据勵精、至誠以て公に奉ずるの信念の下に努力奮盡しつゝあるは壯とすべく、潑剌たる前途の活躍を大に期待せらる。

△博士は先きに南米發展を志し、大正六年北海道帝大農學部豫科に入り、大正九年本科に進み大正十二年卒業す、其間發生學の權威、北大名譽敎授、八田三郎博士の指導を受け、將來、大に爲すあらむとするに際し、兩親相次いで逝く、玆に於て翻然意を決し兩親生前の意を嗣いで醫學に轉じ、同拾二年東北帝大醫學部に入り、昭和二年卒業、直ちに產婦人科敎室に入り、明城彌三吉博士の元に研鑽之れ勉め今日に及ぶ。學位は昭和七年四月東北帝大より受領せり。

△學位主論文は、(1)臍帶纏絡ノ統計的觀察、(2)臍帶纏絡ノ診斷の三編より成る。參考論文としては、(1)姙娠性外肢皮神經障害、(2)東北婦人ノ初經年齡、(3)姙娠腫ト黃色腫トニ就イテ、(4)マノイロフ氏姙娠反應ノ臨床的價値等の四篇あり。

△感想に曰く「人間が自己の過去をかへりみ、ありし其當時の眞相を思ふ時程我ながら敢果ない感に打たるゝ事は無い、思へば世界に雄飛などゝ空想を描いて札幌にクラークの訓を慕つて、行つたまではいゝが、何時の間にかまだ定まらぬ若者の心は、目前の誘惑に亂れ遂ひ飛込んだところが、年中顯微鏡をのぞく、餓鬼と化してしまつた、何が僕をこうさせたかと思ふと東北理學部敎授野村益太郎博士が當時北大に敎鞭をとられ、たま〳〵僕が動物の試驗に萬點を取つたと云ふ實に一些事に始つたのである。扨て農學士には成つたが、野心勃々として憧憬の的はロツクフエーラーにある野口英世博士、其下に走る可く、野口博士の芋食書生仲間の一人、笹川爲平氏の紹介で北里老博士を訪れたところ「三年位、研究後にすべし」と云ふ餘り有難くない御托宜を傳へて呉れたのが宮島幹之助博士である、今思へば愚にもつかぬ無謀な考であるが、大いに落膽し、この三年を如何にせんと思ひ惱める最後が父母の念願たる醫學轉向となつた。そこで赤門に入る可く受驗したが、其結果敎授會議に上り飽く迄で僕を落したのは柿間博士だつたそうだ、其時態々御自分の室に僕を呼んで恰も我子の樣になだめてくれたのが入澤達吉博士だつた。然し氣の毒の一言に終り遂に仙臺に落付く事になつた。思へば北里博士と云ひ、入澤博士といひ靑二才の僕に、やさしい言葉をかけてくれる事は一方有難い樣な氣もしたが、他方憾みを呑んでいはれたものだつた。こんなに敢果な凡ては過ぎてしまつたが、兎に角醫者にもなつたが然し之れから先きが又何うなる可きが眞の運命か人も不識、我も不識」云々。

△氏の出身地は秋田縣仙北縣横澤村にして、明治三十一年生る、當年三十有八歳也。學究的少壯の紳士として高邁なる品格を備へ、志操堅實、淸淡にして功名利祿を求めず、只管診療と研究とに趣味を集中して亦他を顧みざるの概あり。春秋猶豐富にして、前途益々有爲多望の秋なれば、折角の發奮活躍を望むや切也。

◇

村松正雄　△秋田縣花輪病院長として嘖々たる名聲を博し、當地方診療界の爲め努力奮盡しつゝあるは村松正雄博士なり。千葉醫專出身の內科及び婦人科學者にして、特に婦人科手術を最も得意とし、北海道帝大より學位を獲得せる斯科界の少壯醫博也。今や院長として院務を統率する傍ら得意の產婦人科を擔任し、診療手術の好評は嘖々として遠近に喧傳す。當院は三町七ケ村の醫療組合病院にして花農町に在り、由來北大出身の醫學士各科を擔任す、外科（第一期出身の加藤博士）、耳鼻科（第三期の今井學士）、內科（第三期の大貫學士）、眼科（第五期の須田學士）の設備あり、何れも新進の學士之を分擔す、最近齒科（日大齒科の池田齒科學士）の增設あり、他に光線療法科、研究室等完備す。博士の責任や重且つ大なりと云ふべし。

△博士は神奈川縣立橫須賀中學校を經て、大正八年千葉醫專卒業、直に古河鑛業株式會社足尾銅山病院勤務、同十年同所本山病院外科產婦人科主任、同十二年一月陸軍省囑託、千住製絨所病院勤務、產婦人科主任、同十四年樺太知取町株式會社知取病院長就任、昭和二年北海道帝大醫學部生理學教室第一講座勤務、教授宮崎彪之助博士の指導を受く同五年同大學附屬醫院中川內科勤務、教授中川諭博士に師事す、傍ら產婦人科教授大野精七博士に就きて研究し、同七年五月北海道帝大にて學位を受領す、同年六月花輪病院長に就任今日に至る。

△學位主論文は『胃液分泌機能ト血液「クロール」及「ナトリウム」トノ相互關係ニ就テ並ニ葡萄糖ノ胃液分泌抑制作用ニ對スル疑義』にして、參考論文は、(1)胃液分泌時ニ於ケル溫熱發生ニ關スル研究、(2)胃液分泌機能ト其酸素消長ニ就テ、(3)家兎盲腸ノ生理的意義ニ就テ（石川房吉共著）なり。參考論文中の、(2)は博士快心の著にして最も得意のものなり。

△感想の一片を寄せて曰く「學者は學者としての學問に精進する事、臨床家は今少し眞面目に臨床的技術の練磨を必要とする事」云々。博士は千葉縣千葉郡蘇我町曾我野村松正一長男にして、明治二十八年生る、當年漸く不惑に入る一歲、今は最も得意時代にて拮据黽勉、診療に誠意、誠實を以てし、傍ら學を錬り腕を磨くに餘念なし。一面又人と接するに恬淡として衒はず、公平無私を主義とし、穩健にして能く人を容れ、克く部下を愛撫す、其の紳士的態度は人に親しまるる德を有す。若し强ひて言はしむれば、短氣なるが故に動もすれば誤解を招くことなきか、或はそれが博士の缺點とも見るべきか。多趣味の人にして劍道、柔道、スキー、テニス及ピンポン等、總ての運動に親しみ又圍碁、映畫を好む。秋田縣花輪町下花輪に住む。

◇

中村みかゑ　△帝都醫博界に近來異彩を添えたるは中村みかゑ博士なるか、女子にして醫學博士の學位を獲得して、女醫界の爲め萬丈の氣焰を揚げたるは學界の美談と爲す。博士は東京女子醫專出身の產婦人科專門女醫にして慶大教授川添正道博士に師事して造詣する所深く、慶大より學位を得たる篤學の名醫博として其の存在を認めれる。現に大森區田園調布都市六七（田園調布驛下車西一丁）に產婦人科を專門として開業し、自ら日々診療に勵しみ、堅實なる地盤の上に盛況を極めつゝあり。

△博士は大正十三年東京女子醫專卒業後、翌十四年五月慶大醫學部產婦人科に入局、教授川添博士の指導を受けて研究に從事し、昭和二年六月產婦人科助手に任ぜられ、七年五月學位を受領す、爾來現住地に於て開業今日に至る。

△學位論文は『卵巢「ホルモン」及ビ所謂腦下垂體前葉「ホルモン」ト子宮運動（月經來潮、姙娠持續調節、分娩發來ノ機轉）』、と題する一篇なり。

△博士は高知縣の人、明治二十九年生れにして當年四十歲也。學究的溫良貞淑なる淑女にして、其の輝しき閱歷は光彩陸離として、常世博士界中に異彩を放てり。熱心なる臨床家にして「醫は仁術也」を以て木分と爲し、平生其の診療に臨むや、熱情と誠實とを以て親切を盡すとの評判也、其の態度の眞面目にして靄々たる溫味あるは、患者に一段

の好感を與へ、信賴と尊敬との念を一層强からしむるの德を有す。

◇

岡村舜三　△岡山縣淺口郡金光町に院長岡村舜三博士の經營せる岡村病院あり、產婦人科、內科、性病科、耳鼻咽喉科を專門とし博士は產婦人科を擔任し、他の各科は夫れ〳〵主任醫學士之を分擔す。博士は岡山醫大派の名醫博たる一人物にして、錚々たる產婦人科專門醫としてその名聲を馳せ、今や斯科の大家と仰がれ、古き歷史と共に遠近の患者日々輻輳し益々盛況を呈す。

△博士は明治四十四年岡山醫專卒業後、岡山縣病院產婦人科勤務、次で京大岡林秀一敎授（岡山醫專敎授時代）の指導を受く、大正三年二月現地開業、昭和四年五月岡山醫大專攻生として入學、生理學淸水多榮敎授の許に研究す、同七年六月岡山醫大にて學位を授與せらる。

△主論文は「欝水黃病ニ於ケル含水炭素ノ同化作用ニツキテ」にして三篇より成り、參考論文としては、(1)欝積黃疸ニ於ケル「クレ、アチニン」ノ排出ニツキテ、(2)欝積黃疸ノ尿中ニ於ケル膽汁酸ニツキテ、(3)家兎ノ膽汁酸ニツキテ、(4)膽汁酸ノ糖尿病ノ血糖糖尿糖排泄ニ及ボス影響ニツキテ、の四篇あり、何れも原著は獨逸文なり。就中「含水炭素ノ病體ニ於ケル同化作用」は博士快心の作として特筆すべきに値す。

△博士は岡山縣淺口郡金光町岡村梶太の長男にして、明治二十二年生る、當年四十有七歲也。學究的溫厚の紳士、年壯氣銳にして手腕愈々圓熟し一段の重望を加ふ。而かも其の今日あるまでに開業の傍ら幾星霜かの間に努力研鑽の結果、刻苦克く學位を獲得せる興學心と不撓不屈の精力とは、立志傳的篤學の士として氏の面目を物語り、氏が輝しき前半生史に一段の光彩を添えたり。平生診療に臨むや、「醫は仁術也」を以て任じ熱心克く誠實と親切とを盡す。研究の副產物としてガロフオズなる未だ世界に認められたることなき糖尿病內服特効劑を三共會社をして發賣せしめ、世の同病患者の渴仰を受けつゝあり。業餘の趣味としては義太夫を好み、南畫を能くす、翠凌は其の雅號なり。神戶市兵庫區西柳原町開業岡村鼎二醫博は實弟にして、尼ケ崎市渡邊廉次醫博は義弟也。其他醫師五六名親戚中にあり。

◇

柴生田鐵策　△福島市公立福島病院に產婦人科醫長として柴生田鐵策博士あり。博士は東大系の錚々たる產婦人科專門醫にして、母校より學位を得たる近來の名醫博として學界に其の存在を認らる。母校の恩師磐瀨敎授指導の下にて研鑽多年、博く學識を備へ、臨床にも堪能にして今や獨特の手腕を發揮して餘す所なし。適材適所にありとの好評も亦た偶然ならざるを思ふ。

△顧みて博士の今日ある學歷及び閱歷を公開すれば、博士は埼玉縣立川越中學校、二高を經て、大正九年東京帝大醫學部卒業、東京帝大產婦人科敎室に入り、大正十一年十一月公立福島病院に赴任、昭和四年四月內地留學を命ぜられ東京帝大藥理學敎室に入り昭和六年四月まで恩師林、田村兩敎授の下にて研究し、翌七年六月東京帝大より學位を受領せり。

△學位論文は『「2メチール、5エチールアミノ、イミドアツオール」ノ藥理學的研究、附二三ノ「イミドアツオール」誘導體ノ別出家兎子宮ニ對スル作用ニ就テ』の一篇なり。

△臨床醫家としての博士の心境を聽くに、其の一片を吐露して曰く「名醫たるより良醫たれ。然らば現今醫界に對する囂々たる非難も緩和されん」云々、三思傾聽すべき也。博士は埼玉縣比企郡野本村大字下押垂柴生田忠三郎の長男にして、明治二十五年生る、當年不惑に入る四歲也。名醫たるより良醫たれとの理想と信念とを以て、至誠仁術の爲め畢生の熱と力とを注ぎ、又常に德操の堅持を心掛けて克く精神の修養に勉む、其の熱心にして眞摯なる態度は、良醫たる臨床家として採るべき賢明なる醫道たるを尊重すべき也。スポーツに多大の趣味を有し、殊に登山及びスキーを

好む、又た謠曲を愛好して時に其の日の勞を忘る。

◇

屋代周二　△前の道立平壤醫院產婦人科長にして、兼ねて平壤醫學專門學校教授たりし屋代周二博士は、昭和十年七月横濱出帆、歐米視察の途に上れり。東大系の產婦人學者にして、恩師磐瀨雄一博士、白木正博博士、井上通夫博士等に就きて造詣する所深く、母校より學位を獲得せる少壯醫博として、その前途を囑目せらる新智識也。久しく樺太及び朝鮮診療界乃至學界の爲め力を盡し、內外の信望を博すると共に大に其名聲を馳せたり。而かも年齒未だ少壯なれば、精研に餘念なき前途は、軈て歸朝と共に歐米の最新なる知見を齎らすべく大に期待せらる。

△博士は群馬縣立師範附屬小學校、群馬縣立前橋中學校、二高を經て、大正十四年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに產婦人科教室副手、次で樺太廳立豐原醫院產婦人科長より再び母校の解剖學教室研究生となり、昭和六年五月母校へ論文提出、前記道立平壤醫院產婦人科長兼平壤醫專教授として在勤中、同七年六月學位を受領し、同十年七月歐米視察の途に就けり。

△學位主論文は「女性生殖器及ビ其ノ周圍ノ淋巴系統ニ就テ」にして、參考論文なし。

△產婦人科といふ專門科名に就て、博士の感想を述べて曰く「私の知人で開業された某氏は產婦人科を看板を出したけれど患者が少ないので間もなく產婦人科、婦人內科、婦人外科、婦人泌尿器、花柳病科と改めた。事程左樣に大衆は產婦人科に對して認識不足である。私は大分以前から思案して居るのだが、內分泌學の進歩した今日、產婦人科と呼ぶよりも女性科と名づけるのが適當であり、又その專門領域も女性に特有なる疾患の診療又は女性の生理及び病理の研究と規定する方が便宜であると信ずる」云々。

△博士は群馬縣前橋市堀川町一番地醫學士故屋代善夫氏次男、分家して本籍を東京府北多摩郡砧村字成城に定む。明治三十三年生れにして、年齒漸く三十有五歲也。溫厚なる學究的紳士にして、新進の意氣に燃え、研究心に富む、殊に博士の主義は博く求むる方にて、業餘運動に娛樂に孜々として精研甚だ勉むる所あり。春秋猶頗る豐富なれば前途洋々たり。因に藥博富田眞雄氏は從弟なりと。留守宅は東京市麻布區我善坊町三七にあり。

◇

田所豐　△青森縣八戶市に在る八戶病院產婦人科主任たる田所豐博士は、大正十三年熊本醫專を卒へ、翌年一月より昭和二年九月迄熊本醫大產婦人科教室にて池上教授の指導を受け、更らに同年十月より昭和七年九月迄同校解剖學教室に於て佐々木教授の指導を受く、其の間同年七月同大學にて學位を得て講師を囑託せられしが、同年十月之を辭して熊本市谷口病院副院長として赴任し、次で現職に轉任す。

△學位主論文は「日本人女性胎兒骨盤內臟器ノ局所解剖學的研究」にして、外參考論文七篇あり。

△博士は高知縣長岡郡三里村仁井田の人、明治三十年生る、當年三十有九歲也。其の今日ある閱歷は博士の面目を語るに充分也。殊にその厚志篤學は特筆に値す。溫厚篤實、學究的少壯の紳士として、高邁なる人格を備ふ、診療に對する熱心且つ摯なる態度は、臨床家としての性格と相俟つて評判極めて良し。居常又た應答禮を重んじ、人は好感を與ふ、甚だ多とすべき也。青森縣八戶市八幡町三に住す。

◇

立石彌七郎　△朝鮮道立醫院醫官、現に咸鏡北道立羅南醫院產婦人科醫長として內外の信望を博しつゝある立石彌七郎博士は、九大系の產婦人科學者にして、斯科界現代の權威たる恩師白木正博博士に就きて斯學の蘊奧を究め又特に放射線病理學を得意として、母校より學位を獲得せる新進の名醫博也。年齒未だ少壯、教室を離れて年月尙淺少なれども、今や獨特の新手腕を發揮して、拮据黽勉、朝鮮診療界の爲め奮鬪盡瘁しつゝあるは大に人意を强からし

むるに足る。

△博士は長崎縣立大村中學校（四年修了）、佐賀高校を經て、昭和二年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部附屬醫院醫員、並に副手囑託となり産婦人科教室に勤務の傍ら研究に從事す、同七年四月朝鮮道立醫院醫官に任ぜらる、同年七月學位を受領し以て今日に至る。

△學位主論文は「手術不可能性子宮頸部癌ニ對スル硬放射線療法ノ臨床的並ニ組織化學的研究」にして、參考論文は、「卵巣癌、附クルーケンベルグ氏腫瘍」なり。著書「子宮癌ノ放射療法」其他。

△博士は長崎縣南高來郡神代村立石松太郎長男、明治三十五年生れにして、年齒漸く三十有四歳也。研究と醫療とに趣味を集中して一路邁進し、「現醫學によりよき發展を只希ふ」てふ抱負の下に自彊相誡め克く勵精する所あり。若し其の性格より言はしむれば單純にして、直情徑行の人と云ふべきか、隨つて短氣なれば動もすれば時に或は誤解を招くことなきにしもあらずとせん、而かも恬淡として衒はず、快活にして人を愛し能く人に親しまるゝ德を有す。研究以外の趣味としては劍道を能くし、現に大日本武德會四段たり。春秋猶頗る豐富にして、少壯の意氣に燃え、潑剌たる前途は洋々として益々輝かし、幸に健康と共に、一層の發奮活躍あらん事を望むや切也。朝鮮咸鏡北道羅南醫院宮舍に住む。

◇

小屋經雄　△西宮市本町一九に小屋醫院あり、院長小屋經雄博士の經營にして、婦人科專門を以て卓然として群を拔き、充實せる內部の設備と相俟つて、院內常に賑ふ。博士は京大系の婦人科臨床醫としての錚々たるもの、恩師高山教授（婦人科）、和辻教授（耳鼻科）、石川教授（生理學）、小南教授（法醫學）等に就き研鑽の結果、母校より學位を獲得し名醫博たるの精彩を添ふ。今や明快なる診療手術の好評は、永年の聲望と相俟つて健實なる地盤を築き、繁榮歳と共に成功の域に在るは頗る囑目に値す。

△博士は大分中學校、五高を經て、明治四十一年京都帝大醫科大醫を卒へ、直に任海軍々醫中尉、同四十三年十二月迄軍醫勤務、同四十四年一月より十二月迄京都帝大耳鼻科勤務、同四十五年七月より大正三年十月迄西宮回生病院勤務、同四年三月より六年八月迄京都帝大にて婦人科專攻（副手）、同六年八月より西宮市に於て開業、昭和四年十月京都帝大大學院入學、神經生理學專攻、同七年八月學位受領、同年九月大學院退學、爾來再び現住地にて開業に從事し今日に至る。

△學位主論文は、(1)家兎ノ肝臟、膽囊ノ求心性自律神經纖維所屬骨髓斷區並ニ分布濃度ニ關スル實驗的研究、(2)體腔各臟器ノ求心性自律神經侵害反射兩中樞ノ「ロカリザチオレ」ニ關スル實驗的研究其一大動脈起始部ニ就テ、(3)同上其二胃噴門ニ就テ、(4)同上其三腎臟ニ就テ、(5)同上其四膀胱ニ就テ、(6)墓ノ末梢血管知覺ノ二重神經司配ニ就テ(7)家兎血管知覺ノ二重神經主配ニ關スル實驗的研究其一體腔血管ニ就テ、(8)同上其二體腔外末梢血管知覺ニ就テ、(9)家兎ノ横紋筋侵害感覺ニ關スル神經二重主配ニ就テの九篇より成る。參考論文は、(1)「ヒステリー」ト婦人萬引及ビ刑法上ノ責任、(2)自爲ニヨル外傷性腦出血ト誤診サレタル他爲ニヨル外傷性腦膜炎、(3)腎靜脈一時性結紮ニヨル腎臟組織變化ニ就テ、(4)腎靜脈持續性結紮ニヨル腎臟組織變化ニ關スル實驗等なり。

△感想の一片を寄せて曰く「曩に余は京大生理學石川教授の門に遊べり、先生博學にして邊幅を飾らず、只是眞理の研究のみ、人を待つや溫情、玲瓏玉の如く、研究室に入るに余に左の肉筆の名句を賜はる、凡そ研究室に出入するものは五ンを肝要とす、運、金、鈍、根、賢、是なり、感情は鋭なる事勿れ、鈍ならば欺かず、難易によつて移らず、また些の不平なし、根は興味と責任と大望と方康とによりて生ず、賢は小なる可からず、大賢は愚に似たり、他力も亦自力なり、金は足るを知る、運は天と我とに在り、至誠以て之を貫く可し……余は是を心の掟とし、毀譽褒貶を名

外に虚名榮達の俗界を解脱し、無我無慾の心境にありて師事する事三年、至誠一貫、研鑽の一端を窺ひ得たり、今や貴下が學界に貢獻せらるゝ秋に當り、聊か敬意を表するの意味に於て、恩師の名句を余自己の私するに忍びず感想の代句にかへたり」云々。以て博士の心境を察すべく、他山の石とし三思傾聽すべき也。

△博士の出身地は大分縣速見郡中山香村にして、明治十四年生る、當年不惑に入る五歳也。學究的溫厚の紳士にして眞面目なる臨床家として、研鑽多年、該博なる學識を有し、手腕圓熟、思慮あり識見に富む。讀書家にして書見を業餘の樂しみとし、精研猶甚だ勉むる所あり。

◇

阿部　喜市郎　△多士濟々たる帝都醫博界に於て、産婦人科の大家として嘖々たる名聲を馳せ、特に其の最も得意とする子宮癌腫のラヂウム療法に至りては他の追隨を許さず、斯科獨特の泰斗として仰がれ、大衆より多大の信望と尊敬とを受けつゝあるは阿部喜市郎博士也。博士の經營せる阿部病院は本郷區丸山福山町一に堂々の陣を張り、産科婦人科、ラヂウム科、レントゲン科を標榜して專門の旗色を鮮明にす。開業古く、既に二十數年の歴史を有し、充實せる内部の設備全く成り、牢乎として拔くべからざる地盤は、博士獨特の手腕の好評と相俟つて、年々歳々遠近に擴張して今や一流の位地を占む。

△更に博士の今日ある奮鬪の跡を顧みるに、群馬縣出身としての氏が年少笈を負ふて鄕關を出てゝより、頂天立地、獨立貫行、終に克く一家を成せる聲望と位地とを贏ち得たる今日の成功に想倒せば、感慨無量にして、轉た懦夫をして起たしむるの感なしとせず。即ち氏は明治四十一年醫術開業試驗出身より躍起して、同四十五年には既に開業醫として立ち、爾來創設經營に拮据奮迅し、時には毀譽褒貶の眞只中に岐立し、時には激烈なる競爭と鬪ひ、而かも尙向學心に燃ゆる氏は、開業の傍ら春風秋雨の研究に懸命の努力精進を續け、終に克く、學位論文『子宮癌腫ノ「ラヂウム」療法』を完成、東京帝大醫學部に提出して大正十三年一月學位を獲得せる厚志篤學に至りては、立志傳的篤學の士として範を示すに足る。而かもそれのみならず、嘗て歐洲各國を視察見學して大に其の知見を博め、該博なる學識と共に多年實地の經驗に富み、臨床に堪能にして博士獨特の手腕を有す。而かも研究心に富む博士は、今猶診療の餘暇孜々として精研に餘念なく、日進月歩の智識の吸收に努めつゝあるは敬服に値す。博士は明治十三年生にして、壯齡當に知命に入る六歳、元氣益々旺盛にして、誠意誠實を以て仁術の爲め盡し、以て吾志達せりと爲す熱誠の士也。好箇の臨床家として玆に推奬し敬意を表す。

◇

小倉　清太郎　△東京市京橋區築地一ノ五に有名なる産婦人科小倉醫院あり、院長小倉清太郎博士の經營也。開業拮据數年、既にして牢固たる地盤を有し、繁榮歳と共に堅實なる發展を遂げつゝあり。氏は松山市の出身、明治二十八年生る。熊本醫大系の産婦人科學者として錚々たるものにして、大正十年熊本醫專卒業後、慶大醫學部産婦人科教室に六ケ年間勤務の傍ら研究に從事し、昭和二年七月同大學より學位を得、同三年三月より現住所にて開業今日に至る。學位主論文は「子宮癌腫浸出液ノ毒性並ニ有毒成分ノ研究」なり。本論文に對する學問的價値は既に學界に認められ定評あり。學識豐富、臨床に堪能にして獨特の手腕を有す、其の今日の聲望を博せるも亦偶然ならざるを思ふ。

△博士はボルネオ探險家として著名なるは、世人の記憶に新なるが如く、昭和八年赤道直下南洋ボルネオ奥地のダイヤ蠻族、猛獸の中に暮らすこと五十日、生命をおびやかされ幾多の危難ををかして探險を終了、記錄あるひはカメラに多大の收獲をおさめて同年八月十五日神戸入港の郵船歐洲メール香取丸にて一行大森、林兩助手と共に歸朝せり、同地にて生捕つたる南洋の大猩々(五歳)、珍妙なる土人のたて、毒矢、巨大なるボルネオ蛇の皮、トカケ、樂器等々、幾多の珍品をお土産として携へ歸れり。博士曰く「あちらへ行つたのは土族學的な研究が第一、それから商賣柄女性

のホルモン、毒矢の研究等である、面白いことにはダイヤ族には性の概念がなく死に對する恐怖等は微塵も感じないやうだ彼等の心理狀態は我々文明人には想像も出來ない全く單純なものである」云々。爾來此の一生面に於ける博士の研究は着々として進められ、軈て發表せらるべき嶄新なる業績は大に期待せらる。研究以外の趣味としては旅行及び長唄なりと聽く。

◇

八木義一　△日赤岩手支部病院産婦人科兼病理科醫長として八木義一博士あり。金澤醫專の出身にして、內科及び産婦人科を以て立ち、病理學の造詣深く、特に産婦人科を得意とす、內科は母校の恩師山田詩郎教授に、病理學は同杉山繁輝教授に、産婦人科學は京都帝大教授岡林秀一博士に就て專攻し、學位は金澤醫大より獲得せり。名醫博の一人物として地方診療界に重きを爲し、猶春秋潑剌たる前途を囑目せらる。

△學歷よりすれば、大正十年金澤醫專を卒へ、初め母校の內科教室及産婦人科教室に於て內科學及産婦人科學を研究其後暫く日本赤十字社秋田支部病院の産婦人科に勤務、昭和四年三月再び母校金澤醫科大學病理學教室に入り、教授杉山繁輝博士の指導を受け病理學研究、昭和七年三月京都帝大産婦人科教室に入り教授岡林秀一博士の指導を受け産婦人科學を研究、同年八月金澤醫科大學より學位を授けらる、同八年八月同産婦人科教室を辭し、同時に日本赤十字社岩手支部病院産婦人科兼病理科醫長として勤務現在に至る。主論文は「周核顆粒及周核綱ニ關スル研究」にして、參考論文は『家兎「ベンツオール」中毒ニ關スル研究』外六篇あり。

△博士は福井縣坂井郡三國町元新八木謙次郎の長男にして、明治三十年生る、當年三十有九歲也。少壯氣鋭にして多量の分別を有し、今や手腕壯熟して最も得意時代に在り。趣味としては圍碁を好む。志操堅實、勵精恪勤の人にして謙抑克く已を持して人に厚く、居常又た人に對するに應答の禮を重んず、其の態度寬容にして眞摯なるは、將來ある臨床家としての特徵を具備するを喜ぶ。

◇

垂井駿　△東京市牛込區筑土八幡町に在る飯田橋病院産婦人科醫長垂井駿博士は、東京府の人、明治二十七年生る。東京帝大醫學部出身の産婦人科學者にして、大正九年卒業後母校産婦人科教室にて研究、同十一年九月同仁會漢口醫院産婦人科醫長就任、同十三年十月再び母校に入り藥理學教室にて研究、同十五年十二月同仁會濟南醫院産婦人科醫長就任、昭和三年二月東京帝大にて學位受領、同年八月より現職に就任今日に至る。學位主論文は「鹽類缺乏ノ卵巢胚細胞ニ及ボス實驗的研究」なり。當年漸く不惑に入る二歲、多年の經驗と共に手腕今や圓熟の域に入り多大の信望を博す。豐島區駒込一ノ二八に住む。

◇

釜本四郎　△奈良縣榛原町に著名なる釜本産婦人科醫院あり、院長釜本四郎博士の經營せる診療所にして、開業拮据數年以來、氏が努力奮鬪の効果空しからず、旣にして牢固たる地盤を築き、充實せる內部の設備と相俟つて、博士獨特の手腕は益々其の特技を發揮して嘖々たる好評を高め、近來著るしく遠近よりの外來患者日々激增し、今や當地方を風靡するの盛況を呈して一流に在り。

△博士は大正六年愛知醫專出身の錚々たる産婦人科學者にして、研鑽多年の後、京都帝大醫學部にて研究の結果、學位主論文「可移植物性動物腫瘍腦內移植」を完成、同醫學部に提出して、昭和六年十二月學位を獲得せる斯科界の名醫博也。先是、東京市赤坂區青山北町四丁目福井産婦人科醫院（院長福井正憑博士）勤務、同分院（京橋區京橋三丁目）主任として一般診療に從事せるが、昭和八年職を辭して歸鄕、現住所にて開業今日に至れり。

△博士は奈良縣の出身、明治二十七年生にして、當年不惑に入る漸く二歲、學究的溫厚の紳士、臨床家としては多年

の經驗を積み、臨床に堪能にして今は手腕、學識、人格共に圓熟の域に入り、最も重望せらるゝ得意時代に在り。賦性篤實溫厚、眞面目にして人に對するに同情あり、殊に患者を待つに誠意誠實を以てし、其の眞摯にして親切なる態度は好感を以て迎へられ、多大の信望を博す。春秋猶豐富なれば、向後一層努力を要するの切なるを思ふの秋、切に自重加餐を祈ると共に、爲地方診療界益々奮盡活躍あらんことを。福井正憑、中井卓次郎兩博士と親戚也。

◇

堺田博雄　△東京市世田谷區玉川田園調布一ノ三五四五に陣し、産婦人科專門を標榜して開業せる堺田博雄博士は、東京帝大派の産婦人科醫として錚々たる新人物にして、恩師磐瀨雄一博士に親炙して斯科の蘊蓄を究はめ、學識と共に多年の經驗に富み、今や玲瓏たる臨床的手腕を有し、內容の設備と相俟つて診療の評判良く、歳と共に益々向上隆盛の活氣を呈す。

△博士は第一高等學校を經て、大正十三年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部産婦人科教室に入り、磐瀨教授に就きて研鑽、越えて大正十五年山梨縣立病院産婦人科部長に就任、昭和四年再び東京帝大大學院學生として磐瀨、井上兩教授の指導の下に研究を重ね、昭和七年九月母校より學位を得たる後、帝大を辭し、現住所に於て開業今日に至る。

△學位主論文は「海猥卵巢ノ組織發生學的研究、特ニ卵子發生現象ニ就テ」にして、參考論文なし。

△出身地は大分縣佐伯町にして、明治三十一年生る。年齒未だ少壯にして新進の氣慨に富み、臨床家としての特質を具備し、天資眞摯にして溫厚なる性格と相俟つて益々聲望を博しつゝあるは、輝しき前途の發展を期待せらる。

◇

篠田秀男　△山形市旅籠町六五一にて獨立開業せる篠田秀男博士は、産婦人科篠田病院長として診療界に躍進して以來、日尙淺きも、玲瓏たる診療手術の評判良く、孜々營々として臨床に勵精し、誠實と懇切とをモットーとして獨自の地盤を開拓しつゝあり。學系は慶大の出身にて、恩師川添正道教授に産婦人科學を學び、更らに川上澌教授に病理學の指導を受けて研究の結果、母校より學位を得たる所謂慶大派の名醫博たる新人也。

△博士は大正十二年山形高等學校（理科乙類）卒業、昭和二年慶應義塾大學醫學部卒業、爾來同大學産婦人科教室に勤務中、七年九月同大學より學位受領後引續き研究に沒頭しつゝありしが、辭職以來現住地に開業今日に至れり。

△主論文は、(1)新生兒諸統計ノ正常値、特ニ顱門ノ大サニ就テ、(2)新生兒頭蓋化骨異常、特ニ顱門縫合異常ノ臨床的觀察の二篇より成り、參考論文は、(1)子宮膣部ニ原發セル肉腫ガ兩側輸尿管ヲ破壞シタル稀有ナル一剖檢例、(2)子宮癌患者ノ血液所見ノ意義（共著）、(3)甲狀腺製劑「チラーゼン」ニ依ル疼痛性脣乳ノ治療報告、(4)最近遭遇セル川添式輸尿管閉塞法ノ三例あり、以下省略。就中主論文の第二は博士の最も得意とする所にして學界に重要視せらる。

△感想に曰く「現代日本の醫學者は宜敷獨逸語の亂用を捨てゝ日本人仲間では出來るだけ平易の日本語を使用すべし又對外的に卽ち外國人に對しては中立國際語たるエスペラントを利用すべし」云々。博士は山形縣山形市宮町櫻井省三の次男として、明治三十四年山形市に生れ、その後山形市篠田甚吉の養嗣子となる。當年三十有五歳の少壯にして研究心に富み、診療の餘暇今猶切磋卓勵甚だ勉むる所あり、其の潑剌たる前途の發展は向後の活躍と相俟つて大に期待せらる。殊に特筆すべきは、博士はエスペラント語に堪能にして又た熱心なる該語の奬勵者として推奬すべき點に在り。平生人に對するに親切克く人を容るゝの寬量と、紳士的にして眞摯なる態度は、一般博士に對する人格の尊重を高調せらるゝ今日甚だ多とすべし。因に篠田義市博士は博士の義理の叔父に當ると聞く。

◇

須原耕三　△岩手縣一關町岩手縣醫療組合一關病院副院長兼産婦人科醫長たる須原耕三博士は、千葉醫專の出身にして、恩師後藤直、杉山文祐兩教授に就て産婦人科學を、恩師加賀谷勇之助教授に就て血淸學を專攻し、千葉

醫大より學位を獲得せる篤學の名醫博也。博士の感想を聽けば「特別な感想は有りませんが、患者の治療に際しては患者も醫者も共に其の疾病に對し眞面目に研究治療し、所謂診療の合理化を期し以て世俗風聞するインチキなる言葉を診療界より葬りたいと思ふ」云々と。健實なる臨床家として眞面目なる態度と、其の用意の周到さは圓熟せる手腕と相俟つて、今日の厚き信望を博する所以なるを首肯せしむ。

△博士は大正十二年千葉醫專を卒へ、直ちに鬼頭英博士經營の横濱婦人病院に勤務せるも、偶々同年九月一日彼の關東大震災に際會し、同病院閉鎖するや、神奈川縣震災救護醫員として保土ケ谷臨時救療病院に於て活躍する事半年、同十三年春、時の朝鮮總督府衞生課長關水氏の推薦により水原慈惠醫院産婦人科醫長として赴任す、在職半年にして健康勝れず辭職し、再度復興の横濱婦人病院に招聘せらる、昭和二年五月千葉醫科大學産婦人科教室に入り後藤、杉山兩教授の指導を受け同三年附屬産婆養成所委員を命ぜらる、同三年十一月産婦人科教室を辭し法醫學教室に入り加賀谷教授の指導の下に研究を續け、同七年十月學位を得て一關病院産婦人科醫長として就任す。學位論文は「溶血性補體ニ關スル研究」にして、參考論文なし。

△出身地は靜岡縣田方郡韮山村原木にして、明治三十一年須原寛一郎の六男に生る、當年三十有八歳也。氏は所謂日本精神と日本道德を讃美尊重して自ら之を高調する熱心家也。而して事を處するに眞劍、眞實に且つ誠意を以てし、公明正大にして私心をはさまざる事を戒め居れり。若し夫れ博士をして言はしむれば、「當世思想的國難に際し、殊に日本精神の發揚を痛感します。彼の五、一五事件の如き其の批判は避けますが正に國民に與へられたる一大警鐘と信じます」云々と、答ふるに躊躇する所なからん。而して又平生に處する博士の心境を聽けば……吾人は手術者がメスを以て患者の前に立た時の態度と心情を以て諸事に當らん事を切望する……云々と應へんのみ。以て博士の爲人を知ると同時に其の高潔なる人格を尊重すべき也。

◇

大塚　喜久藏　△東京市小石川區竹早町五四大塚産科婦人科醫院長大塚喜久藏博士は、山形縣の人、明治二十五年生る、東京帝大系の産科婦人科學者として錚々たるもの也。大正七年東大醫科大學卒業後、母校の産婦人科教室副手として三ケ年間勤務の後、日赤山口支部病院産婦人科部長として赴任し、大正十五年二月辭職東上小石川區同心町三二に居住、東大藥物學教室にて研究、昭和三年十月以來現住所にて開業今日に至る、同四年七月母校より學位を受領せり。學位主論文は「卵巢黄體機能ノ生物學研究」なり、其他の論著夥多あり。讀書家にして書見を唯一の趣味とす。堅實なる地盤を有し、手腕、聲望相俟つて多大の信望を博す。

◇

内野　總二郎　△最近著しく面目を一新せる佐賀市の略ぼ中央椎小路二五六に昭和九年二月より内野産婦人科病院を經營し、同病院長として躍進的に頭目を顯はし來れるは内野總二郎博士也。新裝せる病院は病室二十餘、深部治療用「レントゲン」放射裝置、及び「ラヂウム」等の設備全く整ふ。博士は長崎醫大專門部出身の一異才にして、産婦人科を專門として立ち、研鑽多年の後、長崎醫大より學位を得たる篤學の名醫博として名聲を馳せ、今や獨特の手腕を發揮して益々遠近の人望を吸收し、堅實なる發展を遂げつゝある前途は大に囑望せらる。

△博士は大正十四年長崎醫大專門部を卒へ、直ちに清水教授の産婦人科教室に入り、同年十月助手に任ぜらる、十五年一月助産婦及び看護婦養成所講師を囑託せらる、同年清水教授に代りて赴任されたる勝矢教授に就いて引續き其指導を受けたり、昭和七年十一月學位受領後、同九年二月迄同教室に在りて研究を續け、爾來現住地に於て開業今日に至る。

△學位主論文は「産科學婦人科學領域ニ於ケル網狀織内被細胞系統ノ機能ニ關スル研究」にして八篇より成り、參考

論文は八篇（合計十六篇）あり。

△出身地は長崎縣南松浦郡福江町にして、明治三十四年内野總太郎の次男に生る、當年三十有五歳也。少壯にして新進の氣慨に富み、手腕漸く壯熟して活躍の時代に入る、既に診療界に進出して以來獨特の技倆を振ひ、誠意、誠實を以て仁術の最善を盡す所に博士の熱心振を窺はる、殊に患者に對する態度の眞摯にして親切なるは好感を以て迎へられ多大の信望を博す、將來ある臨床家としての人格を尊ぶ。

◇

松田孟吉　△東京市淺草區山宿町四四に産婦人科及び内科を專門とする松田診療所あり、松田孟吉博士の私立醫院なり。氏は茨城縣の出身、明治十六年生にして、明治四十三年東京帝大醫科大學を卒へ、引續き母校の産婦人科教室にて四ケ年研究の後、大正二年より現住所にて開業せり、外に千葉縣東葛飾郡鎌ケ谷村及び綾瀬町小谷野に治療分院を設け今日に至る、斯間、學位主論文「經氣道免疫ニツイテ」を完成、千葉醫科大學へ提出して、昭和七年十二月同大學より學位を受領せり。創業既に二十數年の歴史を有し、今は悠々として成功の位地に在り。書畫を賞鑑し、乘馬、寫眞を趣味す。淺草區醫師會理事、府醫師會豫備議員、淺草區小學校父兄會理事等の公職にあり、公共の爲め盡力する所亦尠からず。

◇

中川潤一　△四日市診療界に於て産科婦人科を以て近來其の頭角を拔き、嘖々たる名聲を博せる中川潤一博士の經營せる中川醫院は、四日市市沖之島町に堂々の陣容を張り、ベツト九個を有し其他内部の設備整ふ。博士は京大系の錚々たる産科婦人科學者にして、斯界の權威高山尙平教授、及び岡林秀一教授の愛弟子として多年恩師の指導を受け、後又た愛知醫大教授林直助博士に師事して病理學を造詣する所深く、母校より學位を得たる名醫博として迎へられ、既に其の地方に著聞す。

△博士は三重縣立第二中學校、岡山第六高等學校を經て、大正八年京都帝大醫學部を卒へ、引續同大學院産婦人科教室に於て二年間研究、次で京都府宮津町宮津病院に一年、宇治山田市日赤支部病院に二年勤務の後、大正十三年より現住所に於て開業、昭和四年より同七年迄愛知醫大病理學教室にて研究、學位を受領せり。

△學位主論文は『子宮組織ノ「エオヂン」染着顆粒細胞ニ就テ』にして、參考論文は、(1)子宮後方轉變矯正ノ手術前後ニ於ケル膣腔石膏像ノ形態變化、(2)石膏像ニヨル膣腔形態ノ研究、(3)雌性生殖腺ガ家兎肉腫ノ發育ニ及ボス影響ニ就テ、(4)クルーケンベルヒ氏腫瘍ニ就テ、(5)胎囊ヲ缺除セル巨大兒ヲ得タル腹腔姙娠、(6)膣腹腔貫通外傷ノ一例、(7)遷延性化膿性子宮外姙婦ニ腹式開放療法ヲ行ヒタル二例、(8)原發性女子尿道癌ノ一例、(9)九ケ月姙婦ニ偶發セル輸卵管單獨壅捻轉ノ一例の九篇なり。

△感想の一片を述べて曰く「産婦人科の開業醫は長袖然たるを得ない。雪の深更も尙辭せず、消防手の如き意氣を以て飛び起き、往診せざるを得ない。時には七輪の下も煽がなければならぬ。下賤なる職業と笑はゞ笑へ。强國日本の優良なる第三國民が一人にても多く生れゝば幸である」云々。

△博士は三重縣三重郡保々村中野中川慶治郎長男にして、明治二十六年生る、當年不惑に入る三歳、當年の意氣益壯にして努力主義を以て立ち「醫は仁術也」をモツトーとして拮据奮鬪日も尙足らざるの概あり、殊に特筆すべきは氏が開業の傍ら獨力貫行の裡に研學の念に燃え、終に克く學位論文を完成して其の初志を貫徹せる點にあり。今や圓熟せる手腕と多年の聲望とは、兩々相俟つて益々發展の隆運にあり、博士の得意や想ふべき也。研究以外の趣味としては、柔道は初段にして弓術を能くし、身體の健康と共に心身の鍛錬に務むる風あり。學究的溫厚篤實なる紳士にして好箇の臨床家として敬意を表し玆に推奬す。

◇

澤田退藏　△東京市淺草區淺草橋一ノ二に著名なる澤田產婦人科醫院あり、院長は斯科の老大家として名聲嘖々たる澤田退藏博士也。氏は靜岡縣の出身、明治十五年生にして、明治四十二年東京帝大醫科大學卒業後、同大學產婦人科教室にて研究、一ヶ年半現役入隊、除隊後再び母校にて研究を續け、其後順天堂醫院產婦人科部長として就任、大正五年十月より現住地にて開業せり、母校へ學位論文「姙娠時ニ於ケル肝臟機能ニ關スル研究」を提出して、昭和五年四月學位を受領せり。斯間開業の傍ら春風秋雨の努力研鑽を積み、終に克く其の初志を貫徹せる篤學は特筆に値す。趣味は犬と園藝なりと聽く。

◇

阿部守　△和歌山縣新宮市に於て產科婦人科を專門として開業せる阿部守博士は、日尙淺少なるも年次獨自の地盤を開拓し、今や獨特の新手腕を發揮し、玲瓏たる診療、手術の好評と相俟つて益々人氣を博め、極めて堅實なる發展振りを示しつゝあり。博士は新潟醫大の出身にして、卒業後母校產婦人科教室助手拜命、產婦人科教授足立捨次郎博士、次で土野道故博士の指導を受け、其後一、二、地方病院產婦人科部長を勤務し、次で京都帝國大學產婦人科研究室に入り同主任教授岡林秀一博士の指導のもとに研究し、主論文は昭和七年度近畿婦人科學會懸賞論文に當選し、學位は同七年十月京都帝大より受領せり。

△主論文は「姙娠各時期ニ於ケル胎盤酵素ノ研究」にして、八篇より成り、參考論文は十二篇あり。

△博士の出身地は栃木縣河內郡城山村田下にして、明治三十年生る、當年三十有九歲也。少壯氣銳にして新進の氣慨に富み、其の臨床にのぞむや熱心にして誠意親切を以てす、厚き人望を博するも亦偶然ならざるを思ふ。賦性溫厚篤實にして、天資臨床家としての特質を具備するは、博士の德とする所也。春秋猶頗る遼遠にして、洋々前途の大成は更に大に期待せらる。診療界の前途暗澹として淨化の叫び紛々たるの秋、斯界の爲め益々健鬪盡力あらん事を祈る。

◇

樋口一成　△帝都私立病院中、產科婦人科を以て嶄然其の頭角を顯はし、押しも押されぬ牢固たる地盤を有する樋口病院（芝區田村町五）は、院長樋口一成博士の經營主管する所、結構宏壯にして內部の設備整ひ、活氣滿々として院內に盈ち門前常に賑ふ。同病院は世人周知の如く博士の亡父斯科の泰斗を以て謳はれたる故繁次博士の創設にかゝり燦爛たる歷史を有す。一成博士その遺業を繼ぐや、嚴父の衣鉢を襲ぎて經營上その運用宜しきを得、加ふるに博士の歐洲留學より歸朝して後、進取的新手腕は潑剌として延び、多年の信望と相俟つて益々向上隆盛の域に在るもの博士の躍如たる面目斯間に窺はる。殊に特筆すべき事は、博士は未だ在學中、慈大三學年春期より樋口病院手術室に見習生として出入し、引續き渡歐まで在勤せり、卽ち博士の產婦人科の恩師は亡父なることと、尙博士は現在に於ても、慈大病理學教室員なれば、卽ち日本に於ける病理學の恩師は木村哲二教授なることを見逃すべからず。

△博士は新潟縣南沼郡湯澤村の出身、亡醫學博士樋口繁次の一子にして明治三十七年を以て生る、東京高師附屬中學校を經て亡父が理事兼教授たりし關係上、東京慈惠會醫科大學に學び昭和三年卒業す、同年七月私費歐洲留學の途に上り、同年九月より五年五月迄獨國ライプチツヒ大學病理學教室に於てフツク教授指導のもとに病理學を專攻し、其の間四年八月より十一月迄渡米見學し、同五年六月より伯林大學、婦人科教室附屬病理學教室に於てロベルトマイヤー教授のもとに特に婦人科病理を專攻し、同六年十二月歸朝す、斯間同四年十二月滯獨中嚴父逝去し、樋口病院の經營は佐藤登博士、忽滑谷精一博士及び堀漸一郎學士に委囑し、歸朝以來專ら自己經營の樋口病院に於て產科婦人科一般の診療に從事し今日に至る、其間、昭和七年十一月母校より學位を授與せらる。

△學位主論文は『脾臟ノ「アミロイド」沈着ニ關スル研究』にして原著は獨逸文なり。外に參考論文として、(1)胎生